

双頭の骸、虚圏に立つ

ハンバーグ男爵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

生まれ変わったら、イカでした。

魔改造されたオストゴロアが殺伐とした虚圏に放り込まれる話。

身体はイカ、頭脳は残念系女子。

好き勝手していたら骸骨に目をつけられ、ムチムチボダイの褐色お姉さんとマヴダチになり、マツドなサイエンティストが悪友で、知らない死神とホイホイ契約して破面になる。

え？死神と戦えって？ヤダ、めんどくさい。

# 目次

一話	虚圏に光る奈落の星	1
二話	まるで月日は流星の如く	7
三話	永久を彷徨う始祖の骸	14
四話	双頭の骸、遺骸の王	21
五話	あらんかる・めたもるふおーぜ	32
六話	奈落の星は蠟螂と踊る	46
七話	始祖の着任	65
八話	雑談という名の駄文	78
九話	物語の幕は上がる	88
十話	始祖との遭遇	98
十一話	豹に罰を、骸に子を、巨悪には笑顔を	112
十二話	偽りの侵略者	122
十三話	戦争前夜	139
十四話	引鉄を我が手に	151
十五話	激震の虚圏	166
十六話	破面よ、鮮烈であれ	178
十七話	依存	190
十八話	虚圏にて、かく戦えり	206
十九話	遊び遊ばれ遊び果て 前	219
二十話	遊び遊ばれ遊び果て 後	242
二十一話	奈落の星、見上げる蝙蝠	259
二十二話	開幕、登場、蹂躪	275
二十三話	沈め掻き伏せ、虚ろの沼に	294
二十四話	奈落の女神	321

## 一話 虚圏に光る奈落の星

永遠に明けない夜、見渡す限り白い砂漠、唯一夜闇を照らすは天に輝くお月様。

私は気づけばそんな砂漠のド真ん中に放り出されていた。

……Why?

おおおおお落ち着け、状況を整理しよう、素数を数えるんだ……素数ってなんだっけ？

5秒くらい考えて数えるのは諦めた。

いやまだだ！もしかしたら夢かもしれない、頬を自分でつねって……つねって……つね……

『ぎよああああああああああああつ?!?!?』

自分の腕を見て思わず乙女らしからぬ雄叫びを上げてしまった。

ひ、左手が！左手がなんかヌメヌメする！

ついでに右手も！というか腕!?!触手!?!キモイ！まじキモイ！私の玉のようなお肌はいずこ!?!…言うほど玉でもなかったわ畜生め。

ワケわかんなくなってきた。周りは砂漠で、腕はタコ！清らかなる乙女にこの仕打ち！今なら私は神をも呪い殺す所存である！

あわ…あわわわわわわ…

くくくしばらくお待ちくださいくくく

……だんだん頭が冷えてきた。ポジティブになれ、私。動かしてみるところこの触手、思うがままに動かせる、そんなに不便なわけじゃない。よしいいぞ、このままこの身体のメリットを挙げていこう。

触手の周りにはまるで装甲のように硬い骨が散りばめられていて、指先（触手の先）には獣の様なドラゴンのような、何かの動物の頭骨がアクセントの様に付いている。まるで骨でできた首長竜みたいだ。ちよつとかっこいいと思っちゃったじゃないか。

それと周りが目視で見えてるだけじゃないっぽい。熱とか振動とかを尋常じゃない精度で感知して物体を把握してるんだ。潜水艦の

ソナーみたいな感じ。ちょっと意識を集中すると砂漠の地形や、かなーり遠くの方にある建物の形状、中の構造まで何となくだけ探知できた。

よしいい感じだ私、そのままそのまま。

最後になるけど、私の現在の姿を嫌でも確認しなきゃいけない。目線が結構高いからかなり大きい生き物みたいなんだけど、どこかに鏡とかないかなあ…

とか思いながら砂を進んでいると、小さい枯れかけたオアシスの様な水場があったので、恐る恐る淀んだ湖面から自分の姿を確認した。正直後悔した。

イカだった、紛うことなきイカだった。それも特大サイズの。

装甲バリバリの触手に加え、これまた巨大な龍の頭骨を帽子みたいに被ったイカ、という例えが一番わかりやすいかな。とにかくめっちゃ硬そうな骨の装甲に守られた巨大イカ、それが今の私。

まさかの超絶可愛いハイスペックJK（自称）から超絶硬いフルアーマーゲツソーにジョブチェンジである、正直泣きたい。いや泣く。

JK：そうか、落ち着いたら何となく自分が死んでいたって事を思い出した。多分病かなんかで惨めに死んだんだった、生前の私は。

そんで気付いたら体に穴が空いてて…

ちよッ待てよ（キムタ〇並感）。その果てがこの姿か、おお？生前明るさだけが取り柄だった私でも流星にイカに転生は神様に一言物申したいぞ？

しくしくと悲しみの余り暫く泣き、いい加減くよくよするのにも飽きたので、生まれ変わった自分の身体を少し動かしてみる事にした。以下、記述していこう。

触手の先からは赤黒いビームが出る、装甲も相まって骨龍の口からビーム吐いてるみたいで見栄えした。

イカの口からも2倍くらい太さのビーム吐けるすげえ。こつちの破壊力やばくて、空間が歪んでた。

着弾したビームはなんか重力場みたいなのを発生させるみたいだ、砂は勿論建物も余裕で貫通するしかなり遠くまで届く。どうやらビームの軌跡にそって空間ごと抉りとって消し飛ばすようだ。

私は生前に読んだ漫画を参考にしてこのビームを「超重力砲」と名付けた。色も似てるし、我ながらナイスセンス。

頭の骨からは骨の欠片をミサイルみたいに上空へ打ち出す事ができるみたい。放物線を描き、着弾した場所は爆発して大きなクレーターが出来てた。殺傷能力高し。

機動性はそんなに高くない：まあ図体が図体だからね。

以上がこの数時間で判明した今の私だ。

正直よくわかんねえ、けどかなり戦闘に特化してるなこの身体。これに加え先述したソナーに重装甲、まるで戦艦や要塞みたいだ。攻撃と防御全振り！みたいな。

色々試したおかげで地形がかなり変わってしまったけど、この辺私しかないし問題ないよね！…ね？

この姿になってから暫く経った、相変わらず私以外の存在に出会うことが無い。寂しい。

それと、とても大切な事をここで発表しよう。

お 腹 が す い た

あいあむべリーはんぐりー。

油断してた。調子乗ってビーム撃ちまくってたら私の中のスタミナゲージがギョングン減ってって、あつという間に動けなくなるくらい飢餓状態に陥っていた。これは不味いですよ。

私の身体は「空気中に落ちてる霊子をお食べよ」って促してくるんだけど、空気中？霊子？良く分からない、それに地面に落ちてるものを食べるなんて私の倫理感が許さない。

なんとかごはんを調達しないと…ああ…

あつ…だんだん意識が遠のいて…：…らめえ…第2の人生早速餓死とか…洒落にならな…：…い…

〜数時間後〜

なんか生きてた！

知らない間にお腹が膨れてて、めっちゃ元気になった。記憶はないけどどつかでご飯を調達したんだろう、さすが私。

しかも私の意思で動く謎のゲートみたいなのが開くようになってた。ワープとは違う、何処か違う世界へ続く扉…そんな気がする。

何よりゲートの開き方がカッコいい、まるで口が開くみたいにびゅわんっ！てなる。カッコいい（語彙力消失）

少しだけ覗いて見たけど怖くなったので結局頭だけ出して直ぐに引っ込んだ。ビビりなのは生まれ変わっても変わらずか…：私には悲しい。また機会があったらチャレンジしよう。

お腹が減るから不用意にビームも撃てなくなっただし、この世界、基本何も起こらない。ソナーで探知してはみるも、だーれもない、一人ぼっちだ。辛い。

なんか時間の感覚も曖昧になってきたし、相変わらずこの砂漠は殺風景だ。石のような木と無限に広がる砂しかない。

何か面白い事でも起きないかなー。

取り敢えず今日は寝ちやおう、おやすみなさーい。

☆☆☆☆

青年は、絶望を見た。

押し潰される家屋、倒壊する屋敷、穴ぼこになる田畑、そして為す術なく死に惑う人々。

始まりは突然であった、いつもと変わらぬ尸魂界に突如謎の門が開き現れたのは巨大な2本の首を持つ虚。奴は流魂街の住人達を手当り次第に喰つてまわり、瞬く間に街を廃墟に変えていった。巨体から放つ異常な霊圧を浴びた者はおしなべて恐れおののき瞠目する。ある者は恐怖で身が凍り、またある者は発狂し狂喜に堕ちた瞳で自ら餌となつていった。

あつという間に廃墟と化す流魂街を放つておくまいと立ち上がった者達も、彼らと同じ運命を辿るのに時間は掛からなかった。

硬い装甲の前に斬撃は通らず、鬼道を浴びせればお返しとばかりに虚から赤黒の光が無数に放たれ、当たった者は跡さえ残さず消滅させられる。尸魂界一番の知恵者、一番の豪傑と謳われた実力者ですら、その前では塵芥同然だった。

ひとしきり暴れたそれは再び門を開き、もう用済みとばかりにそそくさとその場を去っていく。

実に十六もの街が犠牲になった大惨事を彼は青年の身でありながら経験した。

さながらそれは生きた災害、厄災そのものだったと、生き残った者達は後に語る。



自分は役立たずだった。

鍛え上げたつもり、の剣は通じず、歩法も、白打も、鬼道も、己が力の結晶であった斬魄刀の解放ですら、まるでそれを傷付けるには至らない。

青年は弱い自分を呪う。

もっと自分が強ければ。

他の実力者達と連携し、事に当たっていれば、被害はもっと減らせたのではないか？

敗北を悔い、己が未熟を恥じ、青年は決意した。

組織を作ろう。

千年、いや万年続く、魂魄達の安寧を守る組織を。この世界を護り、大切な者達を守る為に、強くて強大な、何者にも負けぬ“力”を手に入れると。

いつかまたやってくるであろうそれに対抗する為に。奴を完全に討伐し、正義を成す為に。

後に「山本元柳斎重國」と呼ばれる、太陽の如き青年はこの時、燃え尽きる流魂街を眺めながら誓ったのだった。

## 二話 まるで月日は流星の如く

○月×日、月がきれい。

今日も砂漠は真っ白わーると、何も起きない。ただ、少しだけ周りの気配の数が増えた気がする。

いつも通りその辺の仮面被った鹿っぽいのをとっ捕まえて食べる。味気ない。料理とかして食べたいね、でもこの身体じゃ無理かな…

散歩をしていたらなんかピーピー言ってるのを見つけた。角の長い牛の頭骨が印象的な子だった。踏み潰すのも可哀想だったので手でひよいっと持ち上げて頭に乗せてあげる。最初は狼狽えてたみたいだったけど、そのうち慣れたのか大人しくなった。今では一緒にその辺の仮面鹿を捕まえて食べる仲。やっぱり味気ない、ケーキ食べたい。

○月△日、此処って雨降らないの？

おつどろいた。いつものように2人でご飯を食べてたら、牛頭くん急に成長して喋りだしたんだもん。なんか急に礼儀正しくなって、自分を「ルドボーン・チエルト」と名乗った。彼曰く、私に餌付けされてるうちに上位存在へと進化したから喋れるようになったらしい。

恩返しをしたいとしつこいものだから、「私の世話役になれ」って言ったら跪いて喜んでた。もしかしてこいつDMなのでは？今私の心に一抹の不安が過ぎる。

牛くん改めルドボーン君は「自分の劣化分身を無限に生み出す」能力を持つてるらしい。

試しに使ってみてもらうと、骸骨の分身が増えること増えること。やっといってもらって何だけど正直邪魔だったので、超重力砲で纏めて吹き飛ばした。「主の力の一端を垣間見た！」とルドボーン君は泣いて喜んでた、引くわ。

結局、再び髑髏樹の分身達を呼び出してルドボーン君に身体を磨い

てもらった。私ってば綺麗好きだからね。

×月□日、相変わらず砂漠は殺風景

ルドボーン君曰く、私のいるこの世界は《虚圏》<sup>ウエコムンド</sup>というらしい。虚圏は《虚》<sup>ホロウ</sup>と呼ばれる悪霊達の住む世界、その中でもカースト制度が出来上がっていて、私はその中でも上位の《最上級大虚》<sup>ヴァーストロデー</sup>と呼ばれる虚なんだそう。ちなみに私が超重力砲と呼んでいたあのビームも《虚閃》<sup>セロ</sup>というちゃんとした名前があるんだって、ただ、私が撃つそれは少しかだけ変質しているそう。

それはさておき…私は悪霊だったのか。説明して貰ったけどギリアンやらアジューカスやら、正直専門用語ばかりでちんぷんかんぷんなんですが。

まあいいや、ぶつちやけ強さとかどうでもいい…

「本来戦いを欲し、強さに執着する筈の最上級大虚である貴女様が『強さに興味が無い』とは…流石は虚の本能を超越した上位存在であらせられます。このルドボーン感服致しました、改めて忠誠を誓わせて頂きます。」

仮面の奥から見えるくらい目を輝かせながらルドボーン君なんか言ってる、凄まじい誤解だ。解くのも面倒だしもういいや、ご飯にしよう。

晩ご飯は大きい仮面猿の虚だった、鹿よりマシだけどやっぱり味薄い…ハンバーグ食べたい…

△月○日、砂嵐は起きるのね。砂漠だもんね。

ルドボーン君と一緒に過ごし始めてからかなりの時間が経った。ルドボーン君はあの後も進化を何度か経て、《中級大虚》<sup>アジューカス</sup>と呼ばれる段階まで成長した。ところがルドボーン君の進化はここでレベルカンストらしく、どうやってもヴァーストロデーにはなれないらしい。虚の進化には個体差があるんだってさ。すごい。

ここで彼からの疑問が一つ、私の胸に突き刺さった。

「貴女様のお名前はなんと申せばよろしいのでしょうか？」

私の名前、である。

生前の記憶ではちゃんと名前を持つていたはずだけど、もう思い出せない。なので私は考えた末に、「ジェーン・ドウ」と名乗る事にした。

ジェーン・ドウとはたしか前世では海の向こうで使われていて、「女性の身元不明遺体」の意味を示すスラングだったと思う。因みに男ならジョン・ドウだ。

死んだ私には丁度いいや。

かなり不吉だけど、もう死んでるからへーきへーき。死人は気楽なもんですわ。

今日、虚圏に身元不明遺体が誕生した瞬間である。

今日のご飯は豪勢に熊型虚のお肉にしよう！

□月○日、死体の雨が降るよ（真顔）

なんて日だ：今日は沢山の虚の群れに襲われた。いつもの有象無象と違い、相手はなんだか統率が取れていて、集団で襲い掛かってきた。まあ私のイカ装甲はそんなじよそこらの攻撃で抜けるほどヤワではないので、纏めて今日のお昼ご飯になりましたけどね。ルドボーン君に調べてもらったところ、「虚圏の神」と名乗る虚が勢力を拡大しているため、見境なく暴れ出す者が増えたんだとか。物騒な世の中になつたなあ：

思えば昔、誰も居なかったただ広い砂漠も、虚がどんどん増えていき、今となっては大小様々な魑魅魍魎が跳梁跋扈する魔境へと変わり果てたものだ。最近知つただけで虚圏の地下には森もあるんだって、いつか行ってみたいね。

それと、最近アローロニーロ・アルルエリという虚とお友達になった。彼は「喰虚<sup>グロトネリア</sup>」という能力を持っていて、捕食する事で得た相手の力を使えるんだとか。今彼は1500体程の虚を捕食し、その力を我が物としているらしい。

そんな自分の能力にコンプレックスを持ってららしく、妙に自信がなさそうなので、かけえじやんつて褒めたら呆気に取られた顔されて、ちよつと照れてた。可愛い奴め。

☆月△日、雨！雨はまだ!?雨エーツ!!

猛烈にお風呂に入りたい。

いやこんな砂漠で風呂とかコイツ何言ってるのm9（＾皿＾）プギヤーとか思われそうだが、私は真剣だ。真剣と書いてマジだ。

ルドボーン君が毎日磨いてはくれるものの、女の子たるもの水で洗ってさっぱりしたい。私はイカだけど。

ただ、この虚圏では水はかなり貴重なものである。虚は基本飲み物は飲まないし、共食いで強くなる事しか考えてないから、必要としないゆえ扱いがぞんざいだ。虚圏、生活レベルがクソザコナメクジさんなのだ。

ルドボーン君に何かいい案はないかと相談して、分身出して散策してもらったところ、なんと水を生み出す能力を持った虚がいるという情報を持って帰ってきた！

素晴らしい！なんて素敵能力なんだろう！

多分戦闘に特化した使い方するんだろうけど、水を生み出せる時点で私の願いは叶ったも同然だ。早速その人をお願いして、身体をキレイして貰おう！話がわかる人だといいなく♪

??月☆日、虚圏は…青かった…白いけど

ルドボーン君の案内に従って、たどり着いた先で出会ったのはコロニーの様な大きな施設だった。なんでもこの辺は「虚圏の王」に反発する者達が集って身を寄せているらしい。

コロニーの傍まで近付くと、虚にしてはやけに人間らしい姿をした女の人が3人のお供を連れて現れた。皆かなり険しい表情をしていて、敵意剥き出しだ。

流石にこの厳ついイカボディで話すのは相手を更に警戒させてしまう、なのでルドボーン君に代弁してもらおう事に。

…ルドボーン君、超話上手いね。物腰丁寧だし、分かりやすいし、中間管理職とか向いてるんじゃない？

納得してもらえたのか、渋々私の身体を洗ってもらえることになっ

た、やったぜ。たしか名前はティア・ハリベルと言っていた。金髪褐色爆乳ドスケベ衣装という男の子の夢を詰め込んだ様な見た目をしてる。

すごいえつちだ：この人本当に虚なの？え、ヴァストローデには人間の姿に近い女性型の虚もいるんだ、へえ：（自分の姿を見ながら）な、泣いてねえし。

ハリベルさんの異形化した腕から出る高圧水流が長年溜まった骨の隙間のしつこい汚れまで綺麗に洗い流す。虚圏に生まれて初めてのシャワーに私つてば夢心地。

ああ〜心も身体も洗われるんじやく〜

きれいさっぱり洗ってもらった御礼に、頼み事を聞いてあげることにした。そしたらハリベルさんは、このコロニーが虚圏の神率いる虚の群れに狙われていて危険だから手を貸してほしい。とのこと。

もっちり承諾した私。でもお風呂上りで余り汚れたくないので、敵が陣を構えている場所を教えて貰い、その方角に向かって超重力砲を口からおもつきりぶつぱした。

遠くに見える砂漠の山が3つほど崩れ去って、私の直線状に見えるものは何も無くなったので、ルドボーン君の分身に確認してもらったところ、しつかり敵陣を貫通して、陣を構えていた砦ごと敵を消し飛ばしたらしい。やってやったぜ。

でも発射の時に舞い上がった砂でまた汚くなっちゃった：またお願いね、ハリベルさん。

ルドボーン君、「お見事です、ジェーン・ドウ様。」だって、褒められちゃった。照れちゃうなあ：えへへ。

：ん？ハリベルさん、なんで白目剥いてるの？お供の子達もなんで泡吹いて倒れてるの？

疲れたのかな…？

☆☆☆☆

コロニーに向かって巨大な虚が接近していると、見張りの誰かが叫んだ。

探查回路ベスキスを駆使し、敵の霊圧を探る。

馬鹿でかい霊圧の塊が、このコロニーに向かってやって来ていた。噂の「神」とやらか、それともその使いの者か。どちらにせよ、この中で一番強いのは私だ、なら出向いて応戦しなければならぬ。コロニーの中には力の無い虚達も大勢居る、せめて彼等の逃げる時間位は稼ぐ事ができれば：などと、この時は愚かしくもそんな事を考えていたのだ。

一目見て絶句した。

2本の首を持つ巨大な虚、強固で刺々しい骨の鎧に全身を覆われ、常人なら一瞬で発狂する程の膨大な霊圧を惜しげも無く発するそれに面と向かった瞬間、思わず膝を突きそうになった。

私が出ると言うはずと必ず着いてくると言っていた後ろの者達も、恐怖で肩で息をしているのが分かる。これは埒外の化け物だ。「逃げろ」と、私の中の本能が耳を突き破る勢いで泣き叫んでいた。実際、こんな化物と戦闘になったら数秒と持たないだろう。否、そもそもそれは闘いではなく蹂躪だ。私達は蟻のようにあつけなく踏み潰される。それで終わりだ。

だんだんと呼吸が浅くなり、吸った息を吐けない。見える明確な死のイメージ、磔になった様に動かない私の身体、今までの出来事が走馬灯のように流れていく中、巨体から飛び降りてこちらに歩み寄る虚の姿を見た。

恐らくアジューカスなのだろう。彼が私達の様子を訝しげに観察し、怪物へと耳打ちすると、たちまち奴から発せられていた霊圧が消えていき、身体に自由が戻ってきた。

危なかった。後ろに居たスンスンなどは白目を剥いて気をやっってしまう1歩手前だったろうに…

話の通じる彼、ルドボーン曰く、このコロニーに居る「水を操る能力」を持った虚に、あの怪物は用があるとのこと。

それは私だ。何を突きつけられるのだろうか、全く身に覚えがないが、報復の為にやって来たと考えるのが妥当だろう。

ここで下手にはぐらかせば、奴はコロニーの者達に危害を及ぼしかねない。そうなる訳にはいかないのだ。

意を決して怪物の前に立ち、私はその虚だと宣言した。

「本当! いやー見つかって良かったあ!

君に頼みたいことがあってねー!」

瞬間 耳を 疑う

その巖のような姿からは似ても似つかぬほど年頃で可愛い女の子声私の耳に届く。

これが、私ことティア・ハリベルと謎の虚ジェーン・ドウの最初の出会いとなった。

この後、無造作に放たれた極大の虚閃を目撃したスンスン達は結局気絶した。



### 三話 永久を彷徨う始祖の骸

虚圏は今日も満月、ずっと続く夜の世界。

事情を説明し、お友達になったハリベルさんから滞在許可をもらって、しばらく私とルドボーン君はこのコロニーに身を寄せる事になった。といってもこの巨体では建物の中になんて入れないので、専ら門番をやってるんだけどね。

ハリベルさんの高圧水流シャワーを毎日浴びるのを条件に、このコロニーの護衛もおこなってる。大体攻めてくるのは雑魚虚なのでご飯が増えたくらいにしか思わないけど、そんな日々も長くは続かないわけ。

此処で長いこと過ごしているうちに私の姿が知れ渡ってしまったようで、いつまで経っても落とせないコロニーに業を煮やし、遂に「虚圏の王」本人がここへ向かって進軍を始めたらしい。

ちよつと反省した、私のせいだ。

ごめんねってハリベルさんに謝ったら、「気にすることは無い、ここもいずれ使い物にならなくなるのはわかっていた。それでも私がここを護っていたのは中途半端に掛けた情のせいだ。

これでいい区切りがつく。」と言ってくれた。

虚圏の王、ルドボーン君に調べてもらったところ、名前はバラガン・レイゼンバーンというらしい。いきなり現れて「俺は神だ！」なんて言ってるのでけっこう…いやかなり痛い虚なんだろう。あまり関わりたくない。

よし、逃げようか。

幸いコロニーの中の虚達はバラガンが攻めてくると聞いた途端散り散りに逃げ出してしまってる。今まで守ってもらった御礼とか言えないのかな？元々悪霊なんだし仕方ないんだろうけどさ。

残ったのは私とルドボーン君、ハリベルさんとお供の3人組だけ

だ。

5人を背中に乗せて、スタコラサツサとコロニーから脱出した。ルドボーン君の分身に確認してもらったところ、バラガン軍は無人のコロニーをあっけなく攻め落としたりしい。空っぽの陣地を落して拍子抜けしていたそう。ざまあみそづけ。

そのまま宛のない旅を続ける私達、道中で大虚が沢山住んでいるという地下の森へ観光に行ってみたり、この世界では珍しく大きな建築物のある場所を通ったり、色々な場所を回った。

そして導き出した結論は一つ、この世界なんもねえ。観光名所とか、目玉スポットとか、なんもねえのだ。

「ジェーンはどれくらい昔から虚圏にいるんだ？」

ある夜、砂を掻き分けながらのんびり砂漠を進んでいると、不意にハリベルさんからそんな質問を受けた。

んー、正直時間の感覚が曖昧で、どれくらい昔かなんて分からないなあ；でも、私が生まれた時はこんなに沢山の虚は居なかったよ。結構虚圏中を回ってたけど、居てもちっこいトカゲみたいなのばかりで、何も無い砂漠だった。

それを聞いたハリベルさんは心底驚いたようだ、目をぱちくりさせてる。

「ジェーン、君はもしかしたら、《始祖》なのかもしれない。」

なんのこっちゃ。

ハリベルさん曰く、虚圏という世界が生まれてから、今に至るまで、数多の虚が生まれては滅び、滅んでは生まれを繰り返す中、その循環に囚われない者が極わずかながら存在するらしい。

虚は強さを求める存在だ。喧嘩上等、弱肉強食、そんな連中が長生きできるはずもなく、いつか必ず自分より強い誰かに負け、食われる。故に虚は短命だ。なのに私はなまじ自我が強くてそういつた揉め事を極力避けながら今まで生きてきた結果、まだ虚圏に小さな虚しか居なかった初期から今まで生き残っている最年長の虚になってしまったそう。

そんな年長虚を後から生まれたものたちは《始祖》と呼び、珍しがっ

てる。

あー、そういえば前に遊びに行つた時アイツがそんな事を言つてた気がする。10割聞き流してたけど。

「戦いを避け続けているのに、どうしてそれ程の霊圧を放てるんだ…」  
何故と言われましても…生まれつきとしか…

疑問は尽きないけど、私が長生きしてるのは別に大したことじゃないから。やりたい事やって、やりたくない事は極力やらない。いっぱい食べていっぱい寝ていっぱい遊ぶ！それだけ。

まあ前世じゃそうやった結果虚になつて、イカちゃんボディの乙女になつちまつたんですけどね…

いいなあ…人型…そっちの方が動きやすそうで…私もなりたい…  
同じヴァストローデなのになぜ…

「…その姿の方が戦闘で有利を取れるのではないか？」

乙女心が分かってないなハリベルさんは！

なんて他愛ない話をしながら、私達は砂上を進む。

「だが、やりたくない事はやらない…そんな選択肢もあるのか…」

ちよろつとだけ、ハリベルさんがそんな事を呟いていた。

「……………そういえば、ジェーン・ドウ様は一体何処へ向かつておられるのですか？宛もなく進んでいるようには感じませんが…」

ハリベルさんのお供三人娘が1人、スンスンちゃんが急にそんな事を聞いてきた。

うん、まあね。ハリベルさん達のコロニーでお腹も膨れたし、そろそろ安心して眠れる拠点が欲しいなああって思つてさ。

場所は決まつたから、建築を知り合いのトコに頼みに行こうと思つてるの。

「ジェーン・ドウ様のお知り合い…」

「どんな虚なんだ？」

私の答えにアパッチちゃんとミラ・ローズちゃんも首を傾げている。

アイツはなあ…そうだなあ…

一言で言う…変態

「「…はあ。」」

ハリベル、sは皆キョトンとした。

行けばわかるさく

☆☆☆☆

嫌な予感がする

この僕が「予感」などという感覚的なものに頼るなんて屈辱の極みだが、こればかりは仕方ないのだ。奴はなんの前触れもなくやって来るのだから。

奴を一言で表すなら「災害」だ。異常気象など存在しない虚圏においてなおその暴威は正に暴風雨の様。

嵐のように暴れ回る。主に僕の周りでな!!

…初めは奴を利用する腹積もりで接触したんだ、その筈だった。

《始祖》の虚、その身体に蓄積された莫大な情報を得るため、果ては僕自身が完璧な存在へと至る為に奴が必要だった。その為なら奴と多少馴れ合う恥辱にも耐えて見せよう。

だがツツ!!

ドツグワアアアアンツ!!

「遊びに…来たッ!」

「せめて扉から入って来い貴様アアアアツツ!!」

ラボの壁をぶち抜いて、今日も奴が来る。

ここまで頭のネジが飛んだ奴だとは思わなかった…ッ!

奴の名前はジェーン・ドウ、この虚圏において唯一の《始祖》たる虚。虚圏創世記より生き長らえる始まりの骸。

奴の体組織を解明すれば、僕は真の意味で完成された存在になれる。完璧な存在へと昇華されるだろう。

本来ならどんな手を使っても捕え、ホルマリン漬けにでもして研究したいのだが、それが出来ない理由がある。

強過ぎるのだ。奴はとにかく強い、硬い、そしてデカイ。何度もラボごと虚閃で吹き飛ばされた。

僕の蟲を使ってもなぜだか全て無効化されてしまう。注射針なんて勿論通らない、どう足掻いてもサンプルすら採取出来なかった。

「これで3608回目だ! 貴様は何度僕のラボを破壊すれば気が済むんだ!」

「えっ壊した回数覚えてるの? キモ…」

「当たり前だ僕は天才だからな。キモイ等という矮小な言葉で片付けるんじゃない!

因みにこの会話も既に455回やっているぞジェーン・ドウ!」

そうしているうちに、出会ってから既に800年以上無駄な時間を過ごしている。耐え難い苦痛だ全く!

「ザエルアポロ様、タオルと水です。どうぞ。」

「む、ああすまないね。」

…全く、君が居てくれなければマトモにアイツと会話する余裕も無くなるよ…」

差し出された水を一気に飲み干し、汗を拭う。人の話を全く聞かないアイツに何故か従っているルドボーンが居なければ、本来なら会話すら成立しない相手だ。

奴は獣と同じだよ。

彼の分身が瓦礫の片付けを始めたところで、嫌な予感しかしないがここに来た目的を問うてみる。十中八九碌でもない事になるのは間

違いないが。

「それで？今日は何の用だ。」

大人しくサンプルを採取されに来たわけじゃないんだろう？」

「家作って。」

「……………は？」

「家よ家。ハウス、ホーム。」

近々引越して拠点を据えようと思ってね、アンタに建築して欲しいの。

天才なんだから無から家を建てるくらい楽勝でしょ？」

「いやまあ天才の僕にかかれれば家一軒くらい半刻あれば余裕で建築できるが、断る。」

「なんでよ!?!私とアンタの仲じゃない!」

「仲など無い、あるとすれば僕と君は被害者と加害者だ!」

損害賠償代わりに君の血液でも寄越し給え、それくらいししないと割に合わないだろ!」

「うつわ出たよ血液マニア、マッドサイエンティスト怖!」

2本の触腕をおどけるように揺らしながら抗議するジェーン・ドウ、それだけで更にラボが崩れるだろ止めないか!ルドボーンの仕事が増えるだろ!

君も少しくらい主人に文句を言ってやれ!

「私はジェーン・ドウ様のお力になれば本望です。」

クソウ!主が主なら従者も従者だった、揃いも揃って馬鹿ばかりだ!

「んくくまあいいよ、私の体組織が取ればいいんですよ。あげるから家、作ってよ。」

「…何？」

「この前くしゃみしたら歯が抜けちゃったからそれあげる。新しいのは生えてきたから問題ないし。」

歯でも体組織だからセーフだね？」

そう言っただ奴は背中中の虚に合図を出し、褐色の女型虚が巨大な牙を抱えて持ってきた。

「これでいいのか？」

「サンキューハリベルさん。」

ほら、あんたの欲しかった体組織。」

「私の能力でもカット出来なかった。相当に硬い素材のようだ。」

なん…だと…？

あつさりと手渡されてしまった。

しかしこのまますんなりと奴に従うのも癪だな…などと考え込んでいたら、奴が突然。

「まだ足りないのお？しよーがないなー、無事に家作り終えたら残魄玉あげるからさー頼むよー。」

「残魄玉？なんだそれは。」

「私にも良くわかんないけど、蓄積されたエネルギーの結晶が丸く固まったやつ。

くしゃみすると偶に口から出るんだよね。奈落の底みたいな深い色の宝玉で、飾ると結構綺麗なんだよ？」

なんだお前、くしゃみで口から色んな物出過ぎだろう。

それはそれとして、エネルギーの塊!?それだ!それさえ解明できれば私は…!

「何をやっている早く支度しろ、さっさと家を建築して残魄玉とやらを頂くぞ!約束だからな!忘れるなよ!」

「おおく掌クルックルう…」

「そのうち手首捻じ切れるんじゃないやね?」

うるさいぞ外野!さあ出発だ!今すぐ出発だ!

この天才に任せるがいい、豪邸の1軒や2軒、劇的に建築してやろう!フハハハハハ!!

## 四話 双頭の骸、遺骸の王

おうちが建ったよ！やったね私！

遂に念願のマイホームを手に入れました！

場所は虚圏の辺境も辺境、バラガン軍もやってこないような砂漠の果て。見上げた月が1番綺麗に見える絶好の場所に家を建てた（建てさせた）。

オプシヨンで仮想太陽と無限水源を付けてもらって、完全無欠の私の城が完成した。ザエルアポロ流石！天才すげええ！

私の図体のせいでかなり大きめのお家になってしまったけど、ここは辺境だし狙われることなんてないだろう。私にとって最高の立地だ。

仕事を終えたザエルアポロへ約束通り残魄玉を渡す。そーつとね。気を付けて扱ってね、強い刺激を加えると簡易ブラックホール化してその辺のもの全部ドンドン吸い込むナウしちゃうから。

それを聞いてちよつと笑顔が引き攣った彼を見送って、別れを告げた。

「私達もそろそろ発とう、今まで世話になったな。」

ハリベルさん達とも此処でお別れだ、4人は旅を続けるらしい。

元気でね、いつでも遊びにおいで。

「ああ、必ず行くよ。また会おう、ジエーン。」

手を振って去っていく彼女達を見送った。

あ、そうだ。アーロニーロも今度ウチに招待しよう。といつてもアイツ今何処に居るのか分からないしなあ…ま、会った時でいいか。

湧き出る無限水源を使ってルドボーン君達に身体を洗ってもらおう。湯船に浸かる。

はあく最っ高！夢の虚ライフがここに完成した。

まったりのんびり虚圏ライフ、これにて私は魂の安寧を…



得られないんだよなあ、これが。

▶バラガン軍やって来た！

なんでこんな辺境に!?

初まりはご飯を調達するために少しだけ遠出した時の事。少し大きめの虚が襲って来たから返り討ちにしてやった。そいつを生かして返したのが不味かつたらしい、少し期間が開くと続々と虚が現れて、私に襲い掛かってきた。

やって来た虚達を追っ払う内に、集団のリーダー格みたいな奴らを見つけた。

鯨みたいな虚、やたら叫ぶ鳥型虚、オカマ虚、エサクタエサクタうるさい虚、残りは影薄くて分かんないや。

それすら残党を残して追い返してしまったのが不味かつたんだろう、しまいにはバラガン本人が出張ってきた。

バラガン・ルイゼンバーン、「虚圏の神」を自称し「大帝」とも呼ばれる彼は、王冠をかぶり、ボロボロのマントに身を包む骨と髑髏のガイコツ虚だった。

絶対子供ウケしない見た目で「虚圏の神」を自称する彼には、数多の下級虚が付き従っていて、正に軍隊と呼ぶに相応しい大所帯だ。

なんでウチにちよっかい掛けるんですかー!

「虚圏は等しく儂のモノ。故に《始祖》たる貴様に問うてやろうと思つてな、《双頭の骸》よ。」

えっ何その字名。あきな

「逃げ帰ってきた儂の部下が揃ってその名を口にするのでな。」

その姿、あながち間違えという訳でも無いらしい。貴様、名は?」

ジェーン・ドウ、年齢不詳、出自不明、平穩を夢見るイカ乙女です。  
す。

「呵呵ツ：覚えたぞ、ジェーン・ドウ。」

精一杯のお茶目を華麗にスルーですか大帝様。

ぶわつとバラガンの霊圧が一気に増す、周りの部下達がガクガク震え始めた。

「儂の傘下に加われ。その力、野に離しておくには惜しい。儂と共に虚圏統一の礎となるが良い。」

なるほどなるほど、大帝様は私を戦力に加えたいご様子。

私ってばモテモテで困っちゃうな。

だ が 断 る

「…何？」

私はやりたい事やって生きていんだ、社畜は御免だよ。

「ならば貴様の『やりたい事』とは何だ、申してみよ。」

いっぱい食べていっぱい遊んでいっぱい寝る！やりたい事なんてそれで充分、領土争いとか、虚圏統一とか、そんな事は私抜きで他所でやってろバツキキャロー！

「……呵呵ッ！

滑稽ッ！余りに滑稽ッ！！

その絶大な力を有しながら、行使せんとは。『宝の持ち腐れ』とは貴様の事よ！」

いやあ照れるなあ

「褒めとらん。

じゃが困った。儂の傘下に加わらぬとなれば、貴様も我が行く手を阻む蟻一匹に他ならぬ。ならば…」

バラガンから黒い何かが溢れて地面を這うように広がっていく。慌てたバラガンの近くに居た虚達が逃げようとして、そのうち一匹が逃げ遅れて黒いのに飲み込まれ、悲鳴を上げながらグズグズに朽ちて消え去った。

「ジエーン・ドウ、双頭の骸。

大帝の前を阻む者、全て愚物に他ならぬ。せめてもの情けじゃ、儂の手で朽ちて逝け…!!」

☆☆☆☆

まず動いたのはバラガンだった。

死の息吹レスピラによつて周囲の砂漠が侵食されていき、加速度的に虚すら滅ぶ死の空間が形成されていく。それを見た双頭の骸は、頭の骨から大量の棘のように尖った塊を射出した。

なんの意図があつて奴は棘をばら蒔いたのかは知らないが、バラガンの《古い》の力からは誰も逃れられない。あの黒い波が広がつて、奴の下まで届けば勝敗は決まる。

放物線を描きながら大量の骨のトゲがバラガンに向かつて降り注ぐ。それを見たバラガンは薄ら笑い、懐から巨大な戦斧、《滅亡の斧グラシカライダー》を取り出しひと振りすれば、たちまち棘は霧散し朽ちていった。それを見た双頭の骸は尚も棘を射出し続ける。また同じ真似を…と棘の第二斉射に向かつてバラガンが斧を振つた瞬間。大爆発が巻き起こつた。奴の放つた棘が、赤黒い波動を撒き散らしながら弾けたのだ。

その衝撃に一瞬身を怯ませたバラガンだったが、直ぐに持ち直した。双頭の骸は相変わらず、棘を射出し続けている。

その凶体は遠目で見るとハリネズミの様に丸く膨らんで、発射した傍から次の棘を生やし、絶えることなくバラガンに向かつて撃ち続けていた。

どんどん自分の方へ死の息吹が寄ってくるのにも関わらず、双頭の骸はひたすら棘を空へ向けて撃ち続ける。

まだ撃つ

まだ撃つ

まだまだ撃つ

…おい待て、あいつはいつまで棘を撃ち続けるんだ？

ふと俺はさつき爆発した棘の威力を思い出した。さつきバラガンに直撃したのは二、三発の棘だったよな？

今空いっぱい広がってるあの棘が一斉に落ちて弾けるとしたら

…

背筋が凍った。俺の周りのヤツらも察しのいい者は気付いているだろう。

気づいた瞬間駆け抜ける逃れられない死のイメージ、間違いなくこの辺一帯は更地に変わる。

俺は一心不乱にその場から離れた、ここは砂漠だ、遮蔽物も何も無い場所で無数の大爆発なんてされたら、衝撃で跡形もなくなっちゃう！できるだけ遠くへ離れる…！

バラガンの側近達もこの危機に気付いたのか、顔を青くしながら後ろへ向かって走り出した。

必死に逃げたら頭の後ろで世界が弾けたような爆発音が連続して轟いて、巻き起こった砂嵐に吹かれ砂漠をバウンドしながら転がった。くそっ、砂が口に…ぺっぺっ！

衝撃が収まった頃を見計らって顔を上げる。

絶句した

虚圏の砂漠が半分以上消し飛んで、文字通り更地になった。バラガンの周りだけ深いクレーターみたいに地形が変わってる。死の息吹も侵攻が止まり、それを見越していたのか既に双頭の骸も攻撃を止めしており、じつとバラガンを見ていた。

「ヌウ嗚呼アアアアアアッツツ!!」

直後、バラガンの雄叫びが聞こえて、砂煙が一気に散る。

…周りには俺以外誰もいない、遠くの方でバラガンの側近達がひっくり返って腰から下だけ出して頭から砂に埋まってるくらいだ。

それ以外の者は避難が遅かったのか跡形もなく消し飛んだ。

「爆発する直前に棘の動き鈍くなったね、それもアンタの能力？」

「……ふん。ネメスセンシアといってな、儂の力を防御に回したのだ。並の攻撃ならこれで威力が朽ちる。

「じゃが貴様ア…手を抜いておるな？」

「あれ？ばれちった。」

てへ、と双頭の骸は触手を頭に乗せておどけるような仕草をするが、奴のような巨体がやると不気味でしかない。

…ていうか、今ので手を抜いてたのか。手を抜いてこの被害なのか。

「…理解出来ぬな、力があるなら何故振るわぬ。」

最早野望すら生まれぬほど始祖の貴様は枯れ果てたというのか？」「人を枯れたバアさんみたいに言うのは止めろオ！ぶつ殺すぞコラア！」

双頭の骸から一気に霊圧が溢れ出す、今までで一番大きい。アイツも乙女なんだな…

「ふんっ！さつきも言ったでしょ、私は極力やりたい事しかやりたくないんだよ。」

虚圏を統一するのはナイスな判断だと思うよ、無法地帯より力で無理矢理にでも誰かに統制された方が何かあった時対処しやすいから。でも、それに私を巻き込むのは止めて。私は静かに暮らしたいの。ひとまずね。

…まあ出来れば人型に進化して？素敵な旦那様と虚圏に一軒家建てて末永く一緒に暮らしたいなとか思ってるけど？」

照れるようにぐねんぐねん動く巨大イカ、怖い。

「…何故儂を殺さぬ。虚の戦いは力が全て、勝者は敗者を喰ろうて生きるのが常じゃ。」

「なんだコイツスルースキル高いな。」

要らないよ、勝負にも興味無いし。大体こんなもん殺し合いじゃないもの。

それにアンタが居なきや誰が虚圏を纏めるのさ。

傘下に入らなきや即排除なんて無茶言わなくても、「虚圏を統一するまで俺達に干渉するな。」とでも言ってくれば私は此処で大人しくしてるよ。」

「その口約束を貴様が護る保証は何処にもない。」

「その辺はホラ、信用して欲しいな。私の日頃の行いとか鑑みて。」

「我が配下を喰い散らかす貴様の何処を信じると…」

「そりゃアンタが襲わせてるからでしょーが！あー言えばこー言うよね、めんどくさいジジイだ！」

「貴様こそ、そんな性格じゃからヴァストローデの癖に無駄に図体デカいままなんじやろ。」

人型なんぞ夢のまた夢よ。」

「かつちーん！」

…自分の能力も制御しきれてない奴に言われたくないわー。何？  
老いの力ってそういう風に自分に作用すんの？使ってるってボケんの？うwけるw」

「貴様あの一瞬で僕の弱点を見抜いて…!？」

いや、まだ現役じゃや言うところが！

「ふーん！耄碌ジジイ！骨オバケ！老害！」

「んじやと貴様ア!？」

ギヤイギヤイと舌戦を繰り広げていた2人だが、やがてお互い罵倒のボキャブラリーが無くなったのか黙り込み、気まずい沈黙が走る。  
が、突然バラガンの笑いによってそれは破られた。

「呵呵ツ…呵呵呵呵ツツ!!」

愉快！いや愉快！久々に感じた感情よ。

「私を信用しろ」だと？…この虚圏でそのような台詞を本気で吐く阿呆が居るとは思わなんだわ！

僕にここまで食い下がるその気概、気に入った。気に入ったぞ貴様。

僕も成すべき事がある。良い、僕を殺さず退けた礼じゃ。その言葉、信じてやろうジエーン・ドウよ。

僕は虚圏を統一する、それまで貴様は我が軍に手を出すな。統一出来た暁には…貴様を僕の伴侶として迎えてやろう。それまで此の辺境のねぐらにて待つが良い。」

「おいちよつと待て髑髏ジジイ、アンタ今どさくさに紛れて爆弾発言しなかった!？」

「誰がジジイか！僕はまだ現役じゃと何度言わせるか阿呆！

男に二言は無い、必ず貴様を捕まえる。

呵呵ツ…クカカカカツツ!!」

「うわー勝手に俺の嫁発言された。アンタそんな俺様キャラだっけ？  
でもちよつとだけキュンときた悔しい〜〜！」

奴は悔しそうに触手を地面へ叩きつけている、それだけで地割れが  
起きて地が揺れた。

それでいいのか双頭の骸。

.....

「二度と来んなダーリン！いーだっ！」

「儂は諦めんぞマイハニー！」

背中にそんな巫山戯た台詞を吐くジェーン・ドウの声とバラガン大帝の叫び声を聞きながら、結局、俺達は生き残った配下を連れて引き上げた。

なんだかんだコイツら仲良いだろ。なんだよダーリンにマイハニーって、リア充爆発しろ。

：現世で得た偉大な言葉の一つだ。

それから数十年、バラガン軍は破竹の快進撃を続け、虚圏中の領土を征服し続けた。全ては双頭の骸との一戦から、バラガン本人の雰囲気が一気に変わった為だろう。

奴を迎えに行く決めてから、バラガンは更に王としての気質を發揮し始めた。それが配下達にも伝わり、伴って士気も高くなる。

虚となつて久しく忘れていた事だが、俺みたいな木っ端虚達もその熱に浮かされて、やりがいを感じ始めていた。

全てが順調かに思えた。

だが、終わりは唐突に訪れる。

たった三人の死神の手によって

☆☆☆☆

帰ってきましたマイハウス、いやーバラガンの攻撃がここまで及ばなくて助かった。

新築に傷でも付けられたら危うく本気ビーム撃つところだったよ。

「おかえりなさいませ、ジエーン・ドウ様。

お食事のご用意は出来ております。」

え？まじで？どっから取ってきたのさ。

「たまたま近くに野良虚が居たもので。」

わーいやつたー、いただきまーす！

気の利くルドボーン君が用意してくれたごはんをペロリと平らげて、横になった。

あ、食べたらちよつと眠くなってきた。

虚に睡眠なんて必要ないってザエルアポロは言ってたけど、私は偶に眠くなるんだよね。1度寝て起きたら数年経過してましたとかよくある事だ。

にしてもあの老害、私の事を嫁にするって…

いやいや方に一つも無いな、だって私の姿はイカだ。バラガンが海生軟体動物に求婚する変態だとは思わなかった。…なんだ私の周りには変態しか居ないのか。

??? 『イツキシツ!!…誰かがこの僕の才能に嫉妬しているな?…ふふ、天才はツライなあ。』

でも…方に一つ…いや億に一つでもいいから…私が人型になれたら…



大切な誰かと一緒に死ぬまで過ごしたい、かなあ……？  
もういいや、考えるの止めよ！

バラガンといっぱい遊んだ、ごはんも沢山食べた、ならあと寝るだけだ。惰眠を貪らせてもらおう。虚にや学校も仕事もないからね。  
おやすみなさい、虚圏。

ゴロンツ

バギイツ!!

あつ、寝返りうつたらまた壁壊しちやつた…ザエルアポロに頑丈に作ってくれて言ったのに…あの三流建築家めえ(彼は研究者です)、またラボ破壊しに行つてやる。

ごめんルドボーン君、後で修理お願いします…

やつぱこの身体、不便だよ…

それに…人型になったらやりたい事一杯ある。まずは一番にハリベルさんの褐色パイオツを驚掴みにしてやるんだ…ふへへ…

それからそれから…

あゝあ、人型になりたいなあ…

かくして彼女は眠りについた。

虚圏の始祖たる虚、始まりの骸、噂話程度しかないその存在を聞く者は数あれど、眠りにつく彼女が姿を現すことは無い。時が経つにつれ噂も風化していき、彼女の存在は徐々に忘れられていく。あの時彼女と言葉を交わせ、共に過ごした者を除いては。

そして知らぬ間に時は過ぎ、新しい風が虚圏せかいに吹き荒れた。新たな  
役者の登場は彼女にとって果たして吉報か、凶報か。

巨大な悪が、虚圏を訪れる。

## 五話 あらんかる・めたもるふおーぜ

藍染惣右介

彼は死神である。瀨霊廷に集う護廷十三隊の隊長を任される身でありながら、護廷を裏切り、かの王にまで弓引かんとする大逆者。

その恐るべき神算鬼謀を持ってして、来るべき日に備え、彼と彼に与する2人の死神は虚圏へと訪れていた。

まず彼は「虚圏の神」なる虚の集団に目を付け、これを無力化。更に各地を転々とし、力ある虚達を自らの傘下に引き込み、自らの持つ未完成の『崩玉』を使い力を試しながら、着々と虚圏を支配していった。

そんな彼はある時、とある噂を耳にする。

「《始祖の虚》？聞いたことがないね。詳しく説明してくれるかい、ハリベル。」

「はっ、《始祖》とは虚圏誕生より生き長らえると言われる程高齢なヴァストローデの事です。」

私の友人がそれに当てはまります。」

嘗て藍染一味が恩を売り、味方につけた破面、ティア・ハリベルの『友人』という単語にふむ、と少しだけ藍染惣右介は思考する。

虚はその好戦的な性格故に短命だ、それを生き長らえるという事は、相応の力があるのか、知性が優れているのか、それともただ臆病なだけなのか：真偽の程は定かではないが、もし利用価値がありそうなら仲間引き込むのもいいだろう。力が強ければそれだけ優秀な駒になる。

もし反発し、敵対しても殺してしまえば済む話だ。どちらにしろデメリットは無い。

その後も、事情を知っていそうな破面の面々から情報を得た。技術者ザエルアポロ・グランツは今まで見た事も無い程嫌そうな表情をしていたのが気にかかるが…

その《始祖》は虚圏の辺境で他との繋がりを絶ち、お供のアジューカスと2人で生活しているらしい。場所はハリベルが知っていた。アーロニーロが珍しく着いて行きたいと申し出たが、彼は光に当たるのが苦手な為渋々辞退する事になった。

「どないします隊長、なんならボクが行ってこよか？」

表情の読めない笑みを浮かべながら部下の市丸ギンは問う。

「いや、私も行こう。要も支度を。」

ハリベル、案内を頼むよ。」

「承知致しました。」

「…仰せのままに。」

盲目の死神、東仙要は静かに頷き、ハリベルもまた頭を垂れた。

一行は虚圏辺境へと向かう。

虚圏は広大な砂漠が広がり、その中でも一際目立たず、何も無い真つ平らな砂漠が続くこの地域では、虚すら1匹たりとも存在しない。い。

藍染、市丸、東仙、ハリベルの4人は、何も無い砂漠を歩いていた。

「虚圏ってなんもないとこやと思てたけど、この辺はホンマになんもないなあ。」

「無駄口は慎めギン。」

「そないなこと言つて、東仙隊長もちよつと飽きてきとるんちやう？」

「……………」

「アラ、審議拒否。」

「その知人の家は近いのかい？ハリベル。」

「はい、もうすぐ見えると思います。」

「……………あれです。」

ハリベルの指し示す先にあつたのは何も無い砂漠にポツンと佇む宮殿だった、大きさを除けばごく一般的な虚圏の建築物と変わらない

が、その大きさは他のものと比べて圧倒的に小さい。嘗てのバラガンのように、己が力と権力を象徴する為巨大な建物を建てたがる虚には有り得ない程小さな宮殿だ。

「恐らく使いのアジューカスが居ると思われます、彼と話をさせて頂けますか?」

「構わない、呼んでくれ。」

宮殿の前に立ち、名を呼ぶハリベル。

すると宮殿の影から無数のドクロ頭の虚が現れ、囲まれた。その中でも他とは違う、牛の頭骨を模したような仮面を被った虚が宮殿の玄関口から現れた。

「いらつしやいませ、テイア・ハリベル様。

お久しぶりで御座います。」

「久しいなルドボーン。壮健か?」

「お陰様で、今日もこうしてジェーン・ドウ様のお世話をさせて頂いております。」

して、其方の方々は?」

「…そうか、この辺りまでは情報が行き届いていなかったか。彼等は…」

「自己紹介は自分でやるよ。」

お初にお目にかかる、私は藍染惣右介。こちらは市丸ギンと東仙要。

僕らは死神だが訳ありでね。そう警戒しないでほしい、君達に害を成す気は無いよ。」

力でねじ伏せてもいい。

だがバラガンの時とは違い、相手は虚らしからぬ真摯な態度で接してくる、ならば礼には礼を持って返さねばと、興に乗ったのか死神時代で培ってきた対人スキルをフル活用する藍染。

「…失礼致しました、ようこそ藍染様。

分身を引かせます。」

ルドボーンが指を鳴らすと、髑髏の影達は音もなく消えていく。

「立ち話もなんですし、どうぞ中へ。」

死神の方々もどうぞ、お茶をお出しします。」

無機質にそう答え、宮殿内へと入っていくルドボーンの後ろを追って、藍染達は始祖の寢床へと招かれた。

宮殿の中は藍染の思うほど暗くなく、こぎつぱりしていた。照明の様な光の玉が所々に浮いていて、常に明るい状態を保っている。

そして何よりも、清潔だった。至る所にまで掃除が行き届いている。生活感は無外視する虚には考えられない。

藍染は内心感心していた。

「綺麗にしているんだね、これも主の命令かい？」

「はい。ジェーン・ドウ様は綺麗好きなお方で、この宮殿を手に入れてからずっと、私は殿内の掃除や身の回りのお世話を任せておりません。」

「彼処で窓拭いとるんもキミの仲間なん？」

そう言つてギンは高い位置にある窓をエプロン姿で拭いている骸骨兵を指し示した。

エプロン姿の骸骨と言うのもかなりシニールではあるが…

「はい、私の能力によって生み出されたものです。」

自身の劣化分身を複製できるもので、このチカラのお陰でいつそうジェーン・ドウ様のお役に立つことができます。」

「そのジェーン・ドウっちゅうのが《始祖》ってコトでええの？」

「はい。私の主人にして虚圏原初の虚、《双頭の骸》とも称されるお方です。」

誇らしげに語るルドボーン、その姿からは《始祖》に対する尊敬と心酔が見て取れる。

彼の案内に従つて、部屋へと通された藍染達、ルドボーンは主を起

こしてくると言って去っていった。

「なんや予想外ですねえ、虚がここまで生活感のある家を作るなんて。」

「虚の中には生前の自我を強く残す個体も居ると聞く、件の奴もその一体ではないだろうか？」

ギンと東仙がそんな話をしている中、藍染は分身の一人が持つてきた紅茶を一口含む。

「(…！美味しい。生活環境の整っていない虚圏では考えられない程質の良い紅茶だ。後で彼から入手元を聞き出さなければな…)」

虚圏に娯楽は無いに等しい。彼の計画では完成品の崩玉を手にした後、拠点はこちらへ移すつもりだった。しかし、如何なる天才も娯楽のひとつなくしてモチベーションを保つ事は出来ない。故に紅茶は趣向品の1つとして必要な物なのだ。

藍染が二口目を飲もうとカップを傾けた時、屋敷が震えた。続けざまに、凄まじい霊圧が4人を襲う。

「……ツツツ!!?!今のは……？」

「いや、おっかないなあ……」

「この霊圧も懐かしい……何年ぶりか。」

「……どうやら実力には事欠かなそうだ。是非、我々に協力してもらいたいね……」

顔色一つ変えずに紅茶を堪能する藍染だが、「通常の隊長格の霊圧の2倍はある」とまで言われた彼と同じかそれ以上の霊圧を感じている。相手はとんでもない化け物だ。

「(敵対し、戦闘になった場合。いざとなれば鏡花水月を使うか……)」

そう考え、斬魄刀の柄に手を置いておく。

「(一体どんな化け物が現れるか見物だね……)」

その時、部屋の奥にある巨大な両開きの扉が勢いよく開き、巨体が顔を出した。

「ハリベル〜！遊びに来たってホントー!?!」

体軀に似合わぬ可愛らしい声でハリベルの名を呼ぶそれに、思わず藍染達は呆気に取られる。

巨大な骨に覆われた身体、2本の骨で出来た首長竜を思わせる触腕、ギラつく眼。死神10人に聞けばおそらく全員が「凶悪な虚」だと断定するであろうその姿。そしてかなり大きいのが、その姿は紛うことなきイカだった。

しかしその凶悪な姿とはうって変わって、年頃の生娘のようなテンションと高い声を合わせ持つ。

「(なんだこの虚...)」

「久しぶりだ、ジェーン。」

「久しぶりー！ようこそ我が家へ！」

触腕を伸ばし、ハリベルを掴む。そのまま口へ放り込んでしまいうな勢いでぶんぶん振り回しながら再会を喜ぶ始祖の虚に彼等は終始反応に困った。

☆☆☆☆

ハリベルだー！久しぶりー！80年ぶりくらいかな？

三人娘も元気してる？そう、良かったねー！

私の方は大変でさ、あの後バラガンは攻めてくるわ残魄玉落つことしちやって家がブラックホールに飲み込まれそうになるわ、とにかく大変だったんだよー！

んで、この人達は誰？虚じゃないよね。

………え？死神なの!?なんだ！私は何も悪いことしてないぞ！やるなら家の外で相手してや………え？違う？そうじゃない？

ルドボーン君に起こされて、久しぶりに部屋の外へ出た私。…決して引きこもりなんかではない。なんでもハリベルがお友達を連れて



遊びに来ているらしい。行かねば（使命感）

ハリベルと一緒に居たのはいつもの三人娘ではなく、見慣れない黒い服着た男の人たちだった。彼等は死神で、とある大きな目的の為に虚圏にやって来たらしい。

おぼちゃんウケしそうな顔のハンサムお兄さん、藍染惣右介

いつもニコニコ糸目の腹黒そうなお兄さん、市丸ギン

1人だけ国籍が明らかに違うと思うんだけど名前は漢字の東仙要

話してみたけど悪い人達じゃなさそう…？少なくとも敵意はないみたい。今の所はね。

どうやら藍染君は私と友好関係を築いて、他の死神達と戦って欲しいようだ。

私は極力やりたい事しかしたくない。

死神同士の争いに加担するとか面倒くさくて正直嫌なんだけど、彼の一言で気が変わった。

「君を人型のヴァストローデに変えることが出来る」

マジか、嘘じゃないよね？

虚はヴァストローデに進化する時、もしくははするまでの過程に何らかの理由で仮面が剥がれると、《破面》<sup>アマランカル</sup>と呼ばれる存在になるらしい。

私はたまたま仮面の剥がれるタイミングが回ってこなかったんだってさ。そこで、藍染君のひみつ道具を使って破面化を引き起こし、上手くいけば私も人型になれるらしい。

話では、既にアローロニーロやハリベルさんもその『崩玉』とやらの力を使って虚でありながら死神の力を得たようだ。

どうりでハリベルさんが昔会った時よりボンキュツボンのエロ魔人になってた訳だ。

その口元かっこいいよね。

「え、エロ魔人…」

死神の力云々はどうでも良いとして、人型になれる…！この哀しきイカボディーからの脱出…

「君程の虚が仲間になってくれるのなら心強いよ。」

と、藍染くんはバックに花が咲きそうなくらいにこやかにヨン様スマイル。

要は私の人化と引き換えにこっちの陣営に来いと、そう言ってる。

んんんんんんんんよし!

ちよつとだけ考えて、承諾する事にした。

だって私も人型になりたーい!もう体動かす度に家の壁にヒビが入るのは嫌なの!毎度毎度修理してるルドボーン君が可哀想だよ!

(某マッド野郎のラボは除く)

??? 『……ツツツ?!?!?なんだ?悪寒が…』

藍染君の取り出した小さい水晶玉みたいなから淡い光が出て、私を包み込んだ。

視界がぼやけて、段々視点が小さくなっていく。そして次に目を開けた時、私の視点はハリベルさん達と変わらないくらい低くなっていた。

両手を確認する、すべすべのお肌に五本の指がちゃんと付いてた。すらつとした脚、ある程度膨らんだ胸元、さらさらの髪を掻き分ける。髪型は触った感じ、ポニーテールになったみたいだ。

そんなでもって…全裸だった。

「おわあああああああつ?!?!?

な、なんで裸!?!」

変わって二秒で慌てふためく私に藍染君は笑いながら「虚は本来服など着ないだろう?」とか言うもんだから…

ぷっちーん

「何真面目に答えてんだこっち見んなエロメガネえつつつ!!」

「何ツ!?速イイ、ツ!!?」

「いや、私は盲目デツ?!?」

「ボクも。ツ!!?」

思わず3人の頬をぶっ叩いてやった。

スパパアアんと風船の弾けるような音と共に男どもが宙を舞い、3回転半して床に叩き付けられる。

すかさずルドボーン君が何処から持ってきたのか服を手渡してくれた。ありがとね。

「こんな事もあるうかと、予め作っておきました。」

わお、お手製だ。嬉しい、でもさ…

「アンタもまじまじ見んなバカーツ!!」

「我々の業界では御褒美でグボアーツツツ?!?」

グーで殴ってやった、グーで。

くくくちよつと待ってねくくく

…ふう、ルドボーン君から渡された服を着たのでなんとか落ち着いて椅子に座った。

なんで服のサイズズびったりなんだろう…

「さっきは済まないね、女性に対して配慮が足りなかった。

兎に角おめでどう、これで君は目出度く破面となった。

これから宜しく頼むよ。ジェーン・ドウ。」

藍染くんは頬に杖を咲かせながらも実・験・大・成・功☆と言わんばかりの笑顔で微笑みかけてくる。が、こいつは突然虚を裸に剥く変態だ。私の中の変態リストの中に一人追加しておこう。

「なんだがあらぬ誤解を受けた気がするが、気のせいかな？」

気のせいっすよH A H A H A

さて、改めて。こんなこともあろうかと予めザエルアポロを脅して作らせた鏡で自分の姿を眺めてみる。

身長はハリベルよりちよつと低いくらい。それでも170はある、女子としてはちよつと高めかな。

胸は彼女と比べると小ぶりだけど、それでもメロンとリングを比べるようなもんだ。私としては充分合格ラインです。

髪の色は：ベージュか、前髪も顔にちよつとかかる、ポニテを解くと太ももまで届く長い髪、お手入れが大変だア！唸れ私の女子力！

んで、問題は目だ。少しツリ目なのと、奈落の底みたいに深い紫色の瞳。ちよつと威圧感あるなあ：理想的な悪役ヅラしてるよ。

それから目を惹くのが、ポニテを留めてる髪留め代わりの帽子みたいなアクセサリー。これ、イカ時代の頭に乗ってた竜骨じゃん。先がちよつと欠けてやんの。これが破面の仮面って訳ね。

「外見は気に入ったかな？」

次は破面としてのチカラを見せてもらいたいんだが…

あーはいはい分かりましたよヨン様

「ヨン様…？僕の事かい？」

細かい事は気にしなさんな。

じゃあ次は能力の方なんだけど…

破面は死神の力を有する虚、その本来の力は斬魄刀に収納されて、《帰刃》する事によつて解放される、らしい。なら私が斬魄刀解放するとあの巨大イカに逆戻りするの…ちよつと嫌だなあ…

ええつと、私の斬魄刀…ざんぱくとー…あれ？

「私の斬魄刀は!？」

「ふむ？普通なら破面化したと同時に付いてくるものなんだが…」

「隊長隊長、アレちやいます？」

え？アレ？

と、私がそつちを向くと、部屋の隅に転がっていたそれは勝手に起き上がり、磁石に引き寄せられるみたいに回転しながら私の手元に収

まった。

うおおびつくりした。

「これが…私の斬魄刀…」

刀…刀？

え、どう見てもハルバードなんですか。

黒に綺麗な金の装飾が入った重厚感のあるハルバード、長さも私が両手を広げても余るくらいある。穂先も斧の部分も限界まで研磨されてて凄いい切れ味良さそう。

試しに振り回してみろ。おお、思ったより馴染むね、やっぱ元々体の一部だったからかな…？

レスレクシオン  
「帰 刃には解号が必要になる。」

既に君の頭にも浮かんでいるはずだ、試してみるといい。」  
言われて外に出た。

んく良くわかんない。わかんないけど、なるようになるか！

ハルバードを両手で構えてバトントワリングみたいに軽く回しながら、柄を地面に突き立てると、勝手に霊子がハルバードにまわりついて、まるで旗のような形に変わった。

あ、なんだろこれ。前世で見た事ある。確かなんかのゲームでどっかの国の聖女が持ってた武器と似てるわ。槍と旗が一緒になってるアレ。

霊子と一緒に色んな情報が頭に流れ込んできた。

…なるほどなるほど、イカの身体はそっちに…私の能力の本質ってこんななんだったんだ。納得納得。

「(なんやジェーンちゃん、目え瞑ったままえろう頷いてますけど。なんかあったんやろか…?)」

「(今まで無自覚だった自身の力を再確認しているんだろうね。」

それにしても凄まじい力だ。ますます逃すに惜しい。」「  
ギン君と藍染君がなんか言ってる、霊圧の嵐で軽い砂嵐巻き起こってるから内容までは上手く聞き取れない。

最後に、私の本当の姿を呼び出す解合が頭に入ってきた。

胸の中にストーンと落ちる感じ、実家の様な安心感とはまさにこの

事。

静かにその名を呼ぶ。

「――阻め、《オストガロア白骸妖星》。」

あつぶね…外で解放して正解だった…

☆☆☆☆

始祖の宮殿を後にしながら、藍染は半ば上機嫌でハリベルへと話しかけた。

「とても有意義な時間を過ごせた。有難うハリベル。」

「いえ、勿体ないお言葉です。」

私としても、彼女が味方になってくれるならこれほど心強い事はありません。」

「まああの実力なら十刃入りは確定やろなあ。はて、誰が抜けるんや

ろ。」

十刃に選ばれる基準は『殺戮能力の高さ』に比例する。

ジェーン・ドウの帰刃を垣間見た4人はその圧倒的な制圧力と攻撃性に感心していた。藍染は既にその頭脳をフル回転させ、彼女をどう利用するかを思案している。

「(彼女の帰刃は強力だ。

他の破面とは一線を画す固有能力、霊圧、更には黒腔の所有権まで握ってしまえるとは…これも始祖の虚たる所以なのか、それとも…どちらにせよ、彼女は優秀な駒に他ならない。重宝させて貰うよ…)」  
そう考え内心ほくそ笑む。

実際の所、適正距離を維持した彼女1人居れば護廷十三隊など取るに足らず、あの山本元柳斎重國すら互角以上に相手取れるだろうと確信していた。

更に素の戦闘力も並ではない。油断していたとはいえ、藍染達が全く反応出来ずに頬を叩かれたのだ。その事実が彼女の力を証明している。

…正直かなり痛かった。

初めての人型に慣れていないようだったし、死神の基礎、斬拳走鬼を覚えさせて更なる成長を促しても良いかもしれない。

しかし、彼女の能力上おいそれと戦線に投入するわけにもいかない。それ程味方にとっても敵にとっても危険な力を彼女は有している。

「僕に御しきれるかどうか、腕が鳴るね…」

「藍染隊長、なんや上機嫌ですねぇ。」

「ふふ、分かるかい。ギン。」

だが彼は知らなかった。あのマッドサイエンティスト、ザエルアポロ・グランツをして「頭のネジが外れたイカレ女」と言わしめる最狂の虚、ジェーン・ドウの性格を。

後に彼女が引き起こす様々な厄介事に胃を悩ませる未来、それを知る由もないまま、藍染惣右介は予想外だった戦力強化の喜びに少しだけ酔いしれていた。

「この戦い、我々の勝利だ…！」

「なんでやるな、藍染隊長がそれ言うと良くない事が起きそうな気がするんやけど…」

「……そうかい。」

~~~~~その頃のジエーン邸~~~~~

「のああああああハリベルのおっぱい揉むの忘れてたああああああ損したアアアアアッ!!」

そこには部屋着でカーペットをのたうち回る始祖の虚がいた。



## 六話 奈落の星は蝸螂と踊る

………嫌な予感がする

もう何度目だこの感覚は。いや気のせいだ、そうに違いない。確かに藍染惣右介は奴と接触を凶ると言っていた。そして既に数年は経ったはずだ。

あの男は虚達を従え、我々は十刃と呼ばれるようになった。利害の一致したノイトラを利用する事によって十刃に対する『実験』も行うことが出来たし、藍染惣右介一行も近々虚圏へ拠点を移すそうだ。いよいよ死神との戦いが始まるのだろう。

最後に奴と話してしばらく経つ、まだ来ると決まったわけではな  
(ドカアアアアンツツツ)

な　ん　だ　今　の　爆　発　音　は

「ザエルアポロ〜ツ!!」

できれば一生聞きたくなかった声がラボに響く。oh………ラボの壁が…

「おっひさ〜！会いに来てやったぞ！」

「出来れば一生会いたくなんて無かったけどなア、ジエーン・ドウ！」  
奴が来た。

どうやら藍染惣右介のチカラでコイツも破面となったらしい。あの鬱陶しい巨体はなりを潜めて、人間の雌と同じ人型になっていた。それでも壁を壊してやって来るのは変わらないのか……イカレ女め…

…なんて霊子の密度だ、傍から見てもすぐ分かる。ノイトラなんて比較にならないレベルの超高密度霊子、それが鋼皮に現れているな…化け物め。サイズが小さくなったことによつてばら蒔いていた力が凝縮されたのか？

「ええい貴様、小さくなつても壁を破壊するのか!?そのサイズになれたのなら扉を使え馬鹿者！」

「いやー藍染クンからアンタの居場所聞いたんだけど、ラス・ノーチェス 虚夜宮広すぎて迷っちゃってさー。壁ぶち抜きまくってやっと思つけたよ！」

「人の話全く聞く気ないな？お前の耳は腐ってるのかな？」

……待て、『壁をぶち抜きまくった』だと？お前まさか…」

ハツと気付いて、慌てて奴がぶち抜いた壁の奥を覗き込む。

このラボまで一直線に道が出来ていた。

この女ここまで来るのに何枚壁を抜いたんだ!?

「28枚で御座います、ザエルアポロ様。」

いつの間にか現れたルドボーン、その分身達は石膏の入ったバケツと土木用のヘラが握られている。

「ルドボーン、君か。いつも済まないな…」

奴も此処へやって来ていたんだな。」

「左様に御座います。」

ジェーン・ドウ様と私共々、藍染様によって《破面》にして頂きました。

荷支度の途中でジェーン・ドウ様がお昼寝をして、数年経ってしまった  
いご挨拶が遅れて申し訳ございません。

因みにここまで来る為にジェーン・ドウ様が空けた穴は分身達が既に塞いでおりますので御安心を。」

ルドボーン優秀過ぎて目頭が熱くなってきた。

……そうか、僕の平穩はこれで脆くも崩れ去った訳だ。（遠い目）

「あ、これ昔あげた私の歯じゃーん。まだ持ってたんだ。」

「おい勝手に歩き回るなそこは無菌室なんだからそんな埃まみれの姿で入るんじゃない待て止めろその薬品に触るなせつかくの実験が  
パアになるだろ僕の従属官でお手玉するのを止めろ下ろしてやれ可  
哀想だろうが壁を壊すな壁を壊すな壁を壊すなというか一息にいつ  
まで喋らせる気だ貴様アアアアアツツツ!!」

ぜえ…ぜえ…

ツああもうキリがない！まだコイツがやって来て5分も経ってないぞー！

「ジェーン・ドウ様。本日はザエルアポロ様にお話があった故、ここま

で足を運ばれたのではありませんか?」

「お、そうだったそうだった。」

今日は話があつて此処まで来たんだよね、まあ座りなよ。」

「最早自分家か。ここは僕の宮だぞ：いやもういい、話すだけ無駄だ。」

ルドボーンに諭されて、やっと本来の目的を思い出したようだ。

辛うじて生き残っていた椅子に腰掛けつつ、誠に遺憾ながら馬鹿の言葉に耳を傾ける。

「数字ちようだい。」

……は?」

「数字よ数字。ザエルアポロ、アンタ8番の十刃なんでしょ?」

藍染君が言つてたんだ、『君には是非十刃の称号を手に入れて欲しいな。(声マネ)』つて。

だからザエルアポロに頼めば何とかなると思つて!」

なんだコイツ、妙に藍染惣右介の声マネが似ているのが余計腹立つ。

「馬鹿か貴様は、いや馬鹿だったな。」

馬鹿の虚圏チャンピオン、愚かの極み部門第一位。優勝おめでとう、お前がナンバーワンだ。」

「やったー褒められたー!」

褒めとらんわ

「十刃の数字が欲しいという事は、十刃を殺してそいつの持つてる数字を奪うという事だ。分かつてるのか?」

「え、マジか。」

ここに来る前にハリベルにも十刃の称号ほしーつて言つちやつたよ。なんで驚愕してるのかと思つてたけどそのせいだよ。ちよつと反省。」

今頃自分の宮でビクビク怯えているであろう哀れな第三十刃トレス・エスパルダの中で合掌。

「えーじゃあ面倒臭いなー、ザエルアポロを殺しきるの時間かかるし…」

「待て、今から殺し合いを始める気か？」

「え？だって殺さないで数字貰えないんでしょ？」

轟、と霊圧が嵐のようにラボに吹き荒れて、心臓を握りつぶされるような感覚がどんどん強くなる。ギシギシギシギシ嫌な音を立てて空間が軋み、身が張り裂けそうさ。

破面となった事で更に霊圧が跳ね上がったなこの女。いや、研ぎ澄まされたと言うべきか。興味深い実験対象だが、今はそんな事を考えている暇はない！

このイカレ女は本気で僕を殺して十刃の数字を奪おうとしている！

この女は基本的に僕に対して友好的だが、奴の行動原理は『自分のやりたい事』が最優先される。この場合は『十刃の数字が欲しい』だ。目的達成の為ならどんな障害だろうと羽虫を落とす様に排除して欲しい結果を力づくで奪い取る。

そしてもぎ取るだけの実力を有しているという余計タチが悪い女だ。

コイツは壊れているんだ。僕の事を笑顔で悪友などと呼んでいるのも只の気まぐれに過ぎない、目的達成の邪魔だと判断したらたとえ800年来の友人でも平気で潰し、殺す。まだ『敵』だと認識されていないだけラッキーだ。

コイツはそういう女だ、だから極力関わりたくないんだよ！

不味い不味い不味いぞ！過去のアレで体組織は手に入れたものの硬すぎて未だに解析できていないから、奴の底が分からない！兄と分離した為、僕の力も落ちていいるし、邪淫妃フォルニカラスの受胎能力もこの脳筋に効かない事は過去に実証済みだ！確実に死ぬ！なんとか奴の注意を別の十刃に逸らさなければ！

「お、落ち着けよ。何も十刃は僕だけじゃない。

他にも手頃な奴はいるだろ？そいつらを吟味してからでも判断を下すのは遅くないとは思わないかい？」

必死に平静を装ってはいるが発射直前の無数の虚閃を全身に突きつけられた気分だ。

「うえー探すのめんどくさいよー。」と凄く嫌そうな顔をしているが、コチラが折れるわけには行かない、命が掛かっているのだから。

「ここが正念場だ！」

「僕のラボなら虚夜宮内の全破面を監視できる、勿論十刃もな。それを使ってお前の欲しい数字を探してやろう。」

「だいたい8番なんて小さい数字、しようもないだろう？下に2人しかいない。」

「んー、それもそうだなあ。じゃあ探知宜しく！」

あれだけ吹き荒れていた霊圧の嵐が奴の笑顔とともに一瞬で消え去った。

…感覚で分かる、僕の従属官が20匹ほど死んでいるな。奴の霊圧に耐えきれなかったようだ。役立たずめ、と詰るなのは流石に気の毒か。

背に腹は替えられない、渋々ラボの電源を立ち上げて、探知を開始する。

「と言っても十刃はいつも自分の宮に居るので探す必要も無いんだが。」

さて、誰に生贄となってもらおうか…

「たしか藍染君の話だと、1番はもう予約が入ってて、0番と10番は同じ人なんだよね。名前は確かヤミーだっけ。」

「ああそうだな、というか0番を貴様にすれば良いだろう。昔の僕でも勝てなかったのなら、どうせ《始祖》に勝てる虚なんて居ないんだ。」  
「そういうわけにはいかないみたいよ？」

藍染くんも色々企んでるっぽいし。

あ、ダーリンは探知しなくていいからね。彼の数字は殺とる気無いから。」

字が物騒過ぎる。

「ダーリン？誰だそれは、そもそも何番の…」

「ダーリンはダーリンだよ。」

第2十刃、バラガン・ルイゼンバーンは除外ね。」

「……なん…だと…?」

コンソールを動かす手が思わず止まった。

☆☆☆☆☆

「…ア、ア、ア、?なんだテメエ、俺の宮に何しにきやがった。」

男は目の前の雌の虚に向かって疑問を投げ掛ける。彼が男尊女卑の激しい性格と、十刃最強と自称する事をふまえて、ジェーンは此処へとやって来た。

ザエルアポロに探知させた情報を元に、ルドボーン保とザエルアポロ名に引率され、なんとか壁を1枚も破壊せずに辿り着くことが出来た。が、保護者の1人、ザエルアポロ・グランツの額は汗に塗れ、息も上がっている。

「っ…疲れた…」

まさかここまで連れてくるだけでこれ程の時間と苦労を要するとは…」

「…心中、お察し致します。ザエルアポロ様。」

道中何があつたかは…ご想像にお任せします

「キミが第5十刃クイント・エスパルダで合ってるよね？」

私はジェーン・ドウ。最近入った新顔だよ、宜しく！

それでね、君に頼みがあるんだけど…」

「オイ、さっさとこの女を追い出せテスラ。」

雌臭くて適わねえ。

ザエルアポロ、テメエもなんで俺んトコにこんな不愉快な奴を連れて来たか？」

「キミの数字が欲しいんだけど…ダメ？」

「…聞こえねえのか、雌。」

出ていけ。」

この女、全く話を聞いていない。

しかしザエルアポロとは違い、彼はジェーン・ドウ初心者だ。多少

の会話の齟齬があるが許して欲しい。イライラするのも仕方ない。

「まあ落ち着けノイトラ、これは実験だ。」

彼女は新しく藍染様に造られた破面、そんな彼女が君の数字を欲している。だったら後は分かるだろ？」

「戦えつてか？この雌と？」

……馬鹿も休み休み言えよ。ネリエルの時でもあるまいし、なんでわざわざこんな不愉快な奴と戦わねえといけねえんだ。」

文句たらたらなノイトラに対して、彼女は天使のように晴れ晴れとした笑顔で笑いかけながら、告げる。

「聞こえなかったかな。」

『数字ちようだい』って言ったの。殺し合いしないと奪えないみたいだし、さっさとやろうよ。」

アーロニーロやダーリンの所にも顔を出さないといけないんだよね。だからばぱつと君を殺して#5の数字クイント欲しいなって。」

「……………」

風が鳴った。

気付けばノイトラの巨大な斬魄刀の刃がジエーンの首へと容赦なくふり抜かれ、周囲の壁だけが吹き飛ぶ。狂刃はその柔らかそうな首筋を切り裂いて……いなかった。

「…あ？」

「あーっ!?壁が！何すんのさ！私の部屋になった時困るでしょ!？」立つ鳥跡を濁さず』って諺知らないの!？」

「…テメエ、イラつかせんのもいい加減にしやがれ。俺に挑む？頭イツちまつて「てかここ狭いしき、場所変えよ？外出しよう！これ以上部屋壊したくない！」俺が喋ってる時に喋んなクソ雌がアアアッ!!」

激昂したノイトラが今一度凶刃を振るおうと、斬魄刀を振り上げた瞬間。

「だから壊すなって、馬鹿。」

ぐるんっ

世界は逆転する

☆☆☆☆

なん……だと……？

今ありのままに起こったことを話そう。

激昂したノイトラがジェーン・ドウに切りかかり、斬撃が彼女の身体を突き抜けた。見間違いないじゃない、ちやつかり後ろにいた僕とルドボーンも同じ様に巻き添え食らった斬撃が身体を突き抜けて、後ろの壁が吹き飛んだ。

そして次の瞬間には、僕達は虚夜宮の外へ飛ばされていた。響転ソニードでもない、死神達の使用する瞬歩でもない。

完全に空間を移動している、点と点の移動……まさか……空間跳躍クワップ……なのか!?

あいつが何をやってるのか分からない。観察が足りない、解析が足りない、分析が足りない!

……ふう、僕としたことが取り乱してしまったね。大丈夫だ、深呼吸したら落ち着いた。

ああ、ルドボーン。水をありがとう。毎回出してくれるけど、君何処からそれ出しているんだい？異空間から？ジェーン・ドウ様が出るようにしてくれた？

……ルドボーン、後でじっくり話をしようか。

おっと、話が逸れたね。

ノイトラ、狼狽えているね。安心してくれ、僕も内心すごい狼狽えている。ポーカーフェイス上手くて本当に良かった。こんなにも狼狽えたのは、奴から貰った残魄玉をうっかりぶつけてラボ(202



6代目)が異空間に飲み込まれた時以来だよ。本気で死ぬかと思っ  
た。

「デメエ…何しやがった…ッ!!」

「だってあれ以上部屋壊されると私が使う時困るし。」

「もう俺から数字奪ったつもりでいやがる…クソ雌がア!!」

すごいな、ノイトラの怒りゲージが天井知らずだ。これも記録とし  
て残しておこう。

「さつきからクソクソうっさいな…」

でもここならいくら暴れても大丈夫!

さあノリスケ君、存分に殺し合いしましょう!」

「ノイトラだ、ダボがアツ!!」

ノイトラが剣を振り下ろす。

斬魄刀の大きさは持ち主の霊力に比例するが、死神達はそれをコン  
トロールして一般サイズまで抑えているらしい。それは破面となっ  
た僕達にも受け継がれている。もつとも、ノイトラは自分の力を誇示  
するタイプだからわざと大きな得物を形成して威嚇しているのかも  
しれないが…

巨大な一太刀が砂漠を真っ二つに割った、砂煙が酷い。だが今僕は  
ハッキリと見た。奴の身体に深々と突き刺さる刃を。だが…

「なーんで学習しないかなあ…」

「なん…だと…?」

ジェーン・ドウは無傷だ。

一体何がどうなってる…

「《<sup>アスリスタ</sup>明鏡止水》っていうんだけど、自身の体表に掛かる攻撃を全部後ろ  
に流すの。斬撃も、衝撃も、虚閃も何もかも。

これを体表に隙間なく張ってるから、攻撃が私の身体を抜けたよう  
に見えるんだ。

面白いでしょ? いやあ破面化してから色んな技思いついて困っ  
ちやうね。」

あははは、奴は笑う。

冗談じゃない! 口で言うのは簡単だが、とんでもない超技術じゃな

いか…！これはまさか始祖の…

…いや、思い返せばコイツは昔からデタラメだった。

過去に1度だけ、まだ兄を切り離す前の話だが、僕はジェーン・ドウと殺し合いをした事がある。自分で言うのもなんだが僕は強者である自覚があつたし、一向に進まない研究に業を煮やして奴を本気で殺しにかかった。

結果は惨敗だ。近づくことすら困難だった。

仮に近付けたとしても、奴の装甲の前に虚閃は効かず、体内に侵入させた蟲達も強力な免疫を持っているのか一匹残らず死滅させられる。

あの両腕から絶え間なく発せられる変質した虚閃、際限なく降り注ぐ棘の雨。拳句の果てには重力バリアだの、超重力砲だの、ジェノサイドブレイバーだの訳の分からない単語を叫びながらこちらを蹂躪してくる奴と戦って、直接戦闘ではどう足掻いても奴を御せない判断したんだ。

「まあ、こんな事しなくてもカリギユラ君の攻撃くらいなら鋼皮イエロでどうにかなるんだけど…」ノイトラだって言ってるだろうがッ!!「あれ？ああそうだっけ、ゴメン名前覚えるの苦手で…」

三度ノイトラの斬撃がジェーン・ドウの胴を真つ二つにし、衝撃が後ろに抜けていく。

「でさ、数字を貰う次いでにノイシユヴァンシユタイン城君で色々試そうかなって思ったの。」

実験台、なってくれるよね？」

ニツコリと微笑むジェーン・ドウ。

…ついに文字数まで合わなくなっただか…

「てめえ絶対ワザとだろ…」

「バレちった？(てへぺろ)」

でも仕方ないじゃん、興味の無い奴の名前なんて覚える価値すらないんだし。

キミもどうせそういう質でしょ？

…十刃最強（笑）のノイトラ・ジルガ君？」  
破面となった奴の人相も相まって、悪人面の酷い笑みだ。  
悪魔、悪魔が居るぞ。誰かアイツを止めろ。

ぶちん

何かが切れる音がして

「――祈れ！・《サンタテレサ聖哭螳螂》アアアアツツツ!!!」

砂漠が、爆発した。

☆☆☆☆

「殺す！殺す！殺す！殺す！」

内臓引きずり出して、体の骨全部砕き折って、その面二度と見えなくしてやるよオオオオオオオツツツ!!」

月下の砂漠で異形が吼える。度重なるジェーン・ドウとのお話により、最早ノイトラの殺意は空間を歪ませるまでに至っていた。

だが、身を割くような殺気を浴びせられているにも関わらず、ジェーン・ドウはからころ笑って、斬魄刀を呼び出す仕草もない。

「おわー見て見てザエルアポロ。」

これが帰刃なんだねー。

すごい、君はカマキリのフレンズなんだね！」

「…絶対バカにしてるだろう。というか前を見たまえよ。」

びゆうんっ！と聖哭螳螂で増えた4本の腕から繰り出される斬撃が乱れ飛び、ジェーン・ドウの後ろに抜けていく。

「クソツツ!! 刀剣解放しても抜けやがる！」

「あ、ゴメンゴメン。」

明鏡止水切るね、このままだと理不尽だし、私も攻撃できないもんね。」

明鏡止水はあくまで防御の力、展開したままでは攻撃ができないらしい。

「何故自分の斬魄刀を持ってねえ…無手で俺と殺り合う気かアアアツ!!」

「斬魄刀? あー…うん…」

確かに、流石に無手は…時間かかっちゃうからヤだし。

でも帰刃は非常事態以外使っちゃいけないって藍染君から頼まれてるから無理なの。ごめんね。

だからさ、こうするの。」

《ガルガラ極星凶剣》

そう彼女が唱えた瞬間、目の前に生み出された黒い塊が大剣のような形を成し、地面に突き刺さった。

「……なんだい、あれは。ルドボーンは見た事が?」

「ありません。実際にジェーン・ドウ様が人型で戦闘を行う御姿を見るのはこれが初めてです。」

興味深々と言った感じで観察する2人に対し、頭に血の上り切ったノイトラは喉が張り裂けんばかりの勢いで叫ぶ。

「んだアそりやあーオモチャかア?!?!」

「当ったり〜!」

《極星凶剣》はね、私の虚閃のエネルギーを無理矢理捻じ曲げて形を作ったものなの。

でも無理やりだから維持が長く続かなくて、剣としては使えない。だから……」

大剣を引き抜き、構える。構えるは構えるでも、それは投球モーションだったが……」

「ピッチャー第一球、構えてえ〜…」

投げたっ!

音が弾ける。音速を優に超える極星凶剣は一直線にノイトラへと迫り、その身体を貫こうと襲いかかった。

「ハッ! ンなモン叩き落として…」

「避けた方がいいよー、それ防御無視だから。」



徨ってるんじゃない？うける。

と笑いながら解説するジェーン・ドウ。

ノイトラは状況を理解し、戦慄した。

たしかに自分の鋼皮は十刃の中でもっとも硬い。だが、硬いだけだ。奴の攻撃は防御力を一切無視して空間ごと身体を抉りつつくる。聖哭螳螂も的を広くするだけで近付かなければ通用しない。あの女の言う通り、相性が悪過ぎる。

完全に仕組まれた戦闘だった。

「巫山戯んな…巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んな巫山戯んなアアアアアアアアアアアツツツ!!」

「相性悪いよね、私達。だからとつとと終わらせよ？ね？」

数字ちよーだい？

ジェーン・ドウの死刑宣告にも似た台詞。

「《虚弾・極星凶剣》」

おびただしい数の虚弾バラが禍々しい大剣の形を成し、彼女の足下に突き刺さる。

新しく生えた右腕を再び剣が素通りし、消し飛ばした。今度は投球モーシヨンも一切無し、ナイフを投げるように軽々と。

当たれば即死の投擲が、連続で来る

「ウツ…ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!!」

死を回避するには近寄るしかない。

笑いながら無駄のない仕草で無数の絶剣を放るジェーン・ドウ。投げた剣の軌跡に沿って砂地が抉れて消えていく中、ノイトラは必死で走った。

距離を置かれたら負けだ、全力で近づいてこの女を一撃で切り伏せる。ただそれだけを考えて。

「お、なかなか避けるじゃん。」

笑いながら無数に生まれてくる大剣を、最早両腕が見えなくなる勢いでノイトラに向かって放るジェーン・ドウ。

マシンガンのような勢いで連射される大剣をノイトラは移動しながら必死に避け続けた。

しかし投擲される大剣はぴったりとノイトラを追尾していて、中々逃れる事ができない。

不意に、避けそこねた一撃が彼の左脚を抉りとった。

血が吹き出し、激痛が走る。だが足を止めるわけにはいかない。つるり

「あつ、やつべ。」

その時、たまたまジェーン・ドウが手を滑らせ、大剣を取り落とした。

ここしかない

片脚の力を限界まで振り絞り、ノイトラは跳んだ。そして未だ取り落とした大剣を拾おうと無防備になっているジェーン的首筋へ、残った鎌を振りかぶり、全力で叩き付けた。

自分の全力を込めた刃が彼女の首元へ吸い込まれ：

ツガアアンツ!!

鈍い音を立てた

「……は？」

意味が分からない、確かに自分は本気でこの女へ刃を斬り込んだ。刀剣解放した状態で、女はそれを無防備に受けた筈。さっきまでのように謎のバリアを張ってもいない、素の状態でだ。

なのにこれはなんだ？

ノイトラの刃は、彼女の首筋へ突き立てるも、その鋼皮を傷付ける事は叶わなかった。

「あーあ、やつちやった。」

唾然とするノイトラに、ジェーン・ドウは呟いた。

「えっとね、プライドが傷付くと思って言わなかったんだけど、全虚中最硬の鋼皮持つてるのは私だよ。」

私ってば始祖だからね。君が産まれる何千年も昔から練り上げられた身体なんだ。『硬い』の一言で片付けられていいもんじゃないんだよ、私は。」

「なん……だと……?」

「あんまり戦いとか好きじゃないし、平和で楽しい方がいいと思って

るけど、こればっかりはね。

そんな私を差し置いて十刃最強とか、ちよつと世間狭すぎて笑っちゃうよ。」

「……始祖……？テメエが……？？」

「うん、だいせいかい。」

舌をペロツと出してニツコリ笑うジェーン・ドウ。

「そんなに自覚なかったんだけどね。破面になった時ぴーんとききたんだ。」

始まりの虚、双頭の骸、虚圏を眺める奈落の妖星。《始祖》なんだよね、私。」

そつと、自身に剣を突きつけたまま固まるノイトラの左胸に人差し指を添える。

「《セロ・オスキュラス黒虚閃》」

「カツ……」

奈落より暗い、澱んだ力の激流が、ノイトラを飲み込んだ。彼のプライドも、誇りも、矜持も、奈落の底に墜しこんで。

月明かりに照らされる虚圏、その砂漠で一人、少女は笑う。嘗て5番だった男の首を握りながら。

「……うん、終わり終わり。これで私も……おん？」

ちりちりと焼けるような痛みが首筋に走る。少しすると収まったので、愛おしそうに指でそれをなぞり、にへらつと彼女は笑った。



右のうなじ付近には、『5』の数字が火傷の様に黒く刻まれている。  
「うん…うんうんうん。これで良し。」

コレどうしよっかな、頭しか残ってないし…

あ、そうだ！アールローニーロのお土産にしよっ！

腐っても元5番なんだからきつといっぱい強くなれるよ、喜んでくれるよね！」

「はい、きつとアールローニーロ様もお喜びになります。ジエーン・ドウ様。」

「でしょ!？」

ザエルアポロもそう思うよね?」

「…ああ、そうだね。」

「?なにに難しい顔してるのさ。」

…もしかして私の遊びっぷりに感動したなく?

ふっふーん、いいでしょう。今度ザエルアポロにも極星凶剣教えてあげるよ。

根性とやる気と虚閃の固定化と空間制御が出来れば余裕余裕！」

「(あれだけ暴れて只の『遊び』、か…)

後半二つはお前の固有能力だろうが…

ま、試してはみるけどね。」

「よく言った、さすが変態！」

「て…ん…さ…い…だ!!」

無邪気に笑う彼女を見ながら、ザエルアポロは1つだけ、心に決めておく事にした。

この女に付いていこう。極力反目せず、協力して、観察するのだ。

この化け物の後ろなら、自分は更なる力を得ることが出来る。

実験材料にするのはそれからだ

「そういえばノイトラも言っていたが、お前の斬魄刀はどうした。

1〜4番の連中はともかく、どうせお前も帰刃を禁止されているんだろう？

携帯くらいしておかないのか。不用心だな。」

「え？ 斬魄刀？」

ああ、あれね。藍染クンに言われたんだ。

『斬魄刀を虚夜宮内で所持する事を禁止する』って。だから私の斬魄刀は今、家に置いてきてるよ。」

「斬魄刀の所持禁止…だと…？」

☆☆☆☆☆☆

「……………」

「……………藍染様。」

「良い、予定通りだ。」

十刃を全員招集しよう。新たな仲間のお目見えだ。」

「…ええんですの？ 斬魄刀未開放どころか、未所持の状態ですコレですよ。」

「何も問題はないさ、むしろありがたい。空間跳躍…ノイトラは無事役目を果たしてくれた。」

彼女は我々以外に独自の方法で黒腔を操作出来る貴重な存在だ。引き続き観察を続けよう。」

「……………承知致しました。」

「了解です……………お、ジエーンちゃん達移動し始めたみたいやな。」

アーロニーロにさっきの首渡して…お喋りしとる。」

「コミュニケーション能力も高いのか、本当に虚らしからぬ個体だ。興味深いね。」

「あの二人どんな会話するんかちよつと興味あるなあ…お、また移動するみたいやね。」

今度はハリベルん所や。」

……………揉んだわ。」

「……………揉んだね。」

「……………揉みしだいてますね。」

映像越しにジェーンがハリベルの胸を揉みしだく映像は、茶菓子を差し入れに来たハリベルの従属官が彼女の無体を目撃し乱入するまでかれこれ30分ほど続いた。

その間、彼等は終始無言でモニターを見続けていた。

## 七話 始祖の着任

今朝、突然の十刃招集が告げられて数刻が経つ。私は一足先に虚夜宮内の会議の間へと集合し、座って時間を潰していた。

おそらく十刃関係、それも新加入と脱退の報告だろう。昨日やって来たジエーンに突然「十刃の数字が欲しい！」と言われた時は正直肝が冷えたし、いつ襲われるかと内心ビクビクしながら自分の宮で過ごしていたが。結局彼女は私の3番を奪いには来なかった。代わりに私の大事なものを持っていかれた気がするが…

そして今日、探查回路で何度探してもノイトラの霊圧が感じ取れない。という事は…

「よオ、まだテメエしか来てねえのか。」

ネリエルの後釜。」

ブーツの音を響かせて、通路からノイトラが現れた。

「……………」

おかしい、ノイトラの霊圧は無いままだ。なのに私の目の前にはノイトラ・ジルガが居る。

奴は霊圧を隠すなどという几帳面な真似はできない。いつも垂れ流し野郎だった筈だ（滅茶苦茶失礼）

いや…これは…

「…戯れが過ぎるぞ。アーロニーロ。」

「なんだ」『バレテイタノカ』

笑うノイトラの顔が潰れて、そこから瓶詰めにされたボールのような顔が2つ、浮き上がった。

アーロニーロ・アルルエリ、十刃唯一の《下級大虚》<sup>ギリアン</sup>で自身の持つ喰虚という能力で力を蓄え、十刃まで上り詰めた稀有な虚…

「ノイトラを食ったのか、十刃同士の私闘は藍染様から禁止されている筈だが…」

『マテマテ』「柄に手を掛けるな、それは」『早計トイウモノダヨ』

「貫つたのさ、」『トモダチカラネ。』

「…………ジエーンか。」

十刃ですら捕食対象としか見ていないアローニーロが言う『トモダチ』とは一人しかない。

たしかアローニーロと彼女はかなり旧知の間柄だと言っていた。なら死体を渡すのも仕方ないか。

「ジェーン、凄く良い奴だ。」『オレタチヲオソレナイ、』「嫌悪もしない。」

『オレタチノコト、』「友達だよって笑ってくれた。」「喰虚ヲ」かつこいい」ツテ、』「呼んでくれた。」

「まあ、彼女ならそうするな。争わないのはいい事だ。」

此奴がここまで感情豊かになったのも、彼女のお陰…という事になるのだろうか。

より藍染様のお力になれるのならそれに越したことはない。

「おや、二人とも早いですね。」

藍染様の為に殊勝な事です、大変宜しい。」

「あゝ…ったりい。」

「……」

続けて二人、セブティマ・エスパルダ第7十刃ゾマリ・ルルー。デイエス第10兼ゼロ・エスパルダ第0十刃ヤ

クアトロ・エスパルダミー・リヤルゴ、オクターバ・エスパルダ第4十刃ウルキオラ・シファーが入室した。

「…はアゝ。」

その後から深い溜息を吐きつつオクターバ・エスパルダ第8十刃、ザエルアポロ・グランツが付いてくる。

かなり疲労しているようだ。その理由は恐らく…

「なんだいハリベル、君の思っている通りだよ。」

一晩中奴の遊びに付き合わされたのさ…ふふっ、あれだけ試してこの僕が2割も理解出来なかったなんて屈辱だよ…！はあ…時間を無駄にした。」

い、一体何を試していたんだアイツは…

「ケツ、相変わらずシケた面子だなア。」

「お前も儂からすればシケきつとるわ若造、さっさと進め。」

最後に入ってきたのはセスタ・エスパルダ第6十刃グリムジョー・ジャガージャック。

セクンダ・エスパルダ第2十刃バラガン・ルイゼンバーン。

これで1と5を除く全ての十刃が揃った訳だ。

「やあ、諸君。良く集まってくれた。」

早速始めよう。」

声がる方を驚いて振り返る。そこに空席はなく、代わりに藍染様とお供の死神2人が立っていた。

一体いつから…

「君が入ってきた時からだよ、ハリベル。」

本題に移ろう、先日十刃の交代があった。

今日はそれのお披露目だ。そして空席になってる#1プリメーラについても話そうと思う。

入ってくれ。」

「はいはい。」

会議室に間の抜けた声が響いた。

コツコツとブーツを踏み鳴らす音がする。奥の扉を開き、入室したのは私と似た装束（私より露出度は少なく、袖は七分丈程）の上に裾の長い海賊のような黒いコートを羽織ったジエーン・ドウだ。その首筋には#5クイントの数が刻まれている。

「今日から彼女を第5クイント・エスパーダに任命する。」

「うん、新しく第5十刃になったジエーン・ドウでつす。」

前任のノルマントン号事件君があくんまりにも不甲斐ないので、ぬっころして数字譲ってもらっちゃったよ。」

「ジエーンちゃん、ノルマントン号事件ちやう。ノイトラやノイトラ。」

「あれ？そーだっけ？」

まあ前任なんてどうでもいいよね、これから宜しく！」

十刃の交代など、日常茶飯事である。

無邪気に笑顔を振りまくジエーンに対し、他の十刃の反応は様々だ。

興味なさげに眺める者

逆に興味津々といった感じの視線を送る者

もう勘弁してくれといった視線を…これはザエルアポロだけだな。

バラガンが複雑な表情で彼女を見つめているのが気になるが…

「期待しているよ。」

それから、#1についてだ。

この数字に見合うヴァストローデの搜索を：君に任せよう、ジェーン・ドウ。」

「えっ…いきなりっすか藍染君。」

つかプリメーラはもう予約済みなんじゃなかったの？」

「貴様…藍染様を君呼びなど…」

「いいんだ要。」

それ故に、だよジェーン。始祖である君の選んだ虚なら、1番の称号に相応しい強者の筈だと僕は思っている。

それに探査回路のいい練習になるだろう。一つ宜しく頼むよ。」

《始祖》。この言葉に反応した十刃が数名、目を見開いている。

無理もないな、始祖の名など今となつては都市伝説の様なもの、目の前の女破面が噂話の大本だったとしてもにわかには信じられないだろう。

様々な視線が彼女と交差する中、「はーい」と気の抜けた返事をするジェーンが5番の席へと座り、藍染様は言葉を続けた。

……………

「近々我々もこちらへ引越しをしようと思う、開戦の時は近い。では解散しようか。」

そう言った藍染様の姿が掻き消えて、十刃だけが残された。

各々解散していく中、ジェーンへと近付く影がある。案の定グリムジョーだった。

奴は#6だ、自分より上の数字を持つ者がこんなちんちくりん（失

礼)で些か不快なのだろう。

「よオ新入り。テメエ：どうやってノイトラを殺した？」

「どうやってと言われてもねー、破面を殺す方法なんて幾らでもあるでしょ？」

硬いだけの破面なんか、私に掛ければちよちよいのちよいさ。ふっふーん。」

「へえ、そうかい。」

聞けばお前、始祖なんだってな。」

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「始祖つてのは戦いもせず数千年逃げ回つてた腰抜け虚の事だろ？それがお前か、噂に違わずチョコロそうな面して「必殺！無限焼菓子地獄」ツツツ!!」ぐがっ!?てめっ：何だこの菓子の山は！どっから出した!?!」

叫ぶジェーンの後ろから、大量の：ええと：クツキー？というのか？が山のように現れグリムジョーを取り囲む。

甘ったるい匂いが部屋を包んだ。胸焼けがしそうだ：というかジェーンはあの量のクツキーを何処から出した？

「説明しよう！」

菓子折無間地獄とは、文字通り無限に呼び出したクツキーを相手の腹が爆発するまで食わせ続ける技である！という訳でドーン！」

「クソツ巫山戯やがって！」

このっ：菓子なんぞにこの俺が：

ぐわあああああっ!?クツキーに潰されるウ!!!」

「ワハハハハ！食の激流に溺れて死ねエ！」

間抜けな掛け声と共になだれ込んだクツキーがグリムジョーの口へ雪崩込む、悲鳴を上げながらグリムジョーはクツキーの海に沈んだ：なんて恐ろしい技だ！

「ふう：全く、不良の相手は面倒くさくて困っちゃうね。」

やりきった爽やかな笑顔でそう告げるジェーン。

いや、グリムジョーへの対応が雑過ぎないか？

「良いんだよ、不良少年の相手はこれくらいで。」



はははっ見てよハリベル！グリムジョーったらクッキーに頭から埋もれて気絶してるwww写真www写真撮ろwwwいっっひひひwww」

何処から取り出したのか、現世で使われているカメラなる物を取り出してクッキーに埋もれたグリムジョーを激写するジェーン。

#6の十刃をこんな巫山戯た技で伸してしまおうとは…流石彼女と言ったところか。

というかこの量のクッキー一体何処から…

「クリックで無限に増やした！」

……わけがわからないよ。

「…お、これ結構ウメな。」バリバリバリ

「床に落ちてる物を食うなヤミー、不衛生だ。」

#10と#4は何をやってるんだ…

ジェーンは次にバラガンの元へ向かう。

「へいダーリン、元気してた？久しぶりだね。」

「………破面となったか、ジェーン・ドウ。」

お気楽な性格は人の形と成っても変わらんな。」

「つれないなあ、昔みたいにマイハニーって呼んでみなよ。」

ぶっ……!!ま、マイハニー?!?!?

あのバラガンが!?ジェーンを!?

思わず吹き出してしまった、周りを見るとアールロニーロも同じリアクションをしている。ザエルアポロは養豚場の豚を見るような目でジェーンを眺めていた。

「…言わんわい。俺は負けた、そしてあの男の下で今もこうしてお前に無様を晒しておる。」

お前をそう呼ぶ資格などない。貴様を迎えに行く、その資格すらない。」

「資格なんて必要ないよ、私はやりたいからそうする。アンタもそうすればいい、気負い過ぎなんだよダーリンは。」

「それは貴様に背負う物が何も無いからだ。」

貴様の様に何も考えずに行動出来ればどれだけ幸せか……」

「おん？今私の事遠回しに馬鹿って言ったか？表出る虚夜宮の外までぶっ飛ばしてやる。」

修理費で東仙統括様の予算と胃がガリガリ削れるぞおらあ！

大体私のどこが馬鹿っぽいんだ、人型になれて尚更知的キャラに磨きがかかってんだろ。ザエルアポロとか目じやねえから！藍染君のメガネと同じくらい英知の結晶してっから！

今この瞬間も溢れる知性をナイアガラ滝の様に垂れ流してんだろが！

「英知の結晶してるってどんな動詞だ。」

バラガンの襟首挿んでガツクンガツクン揺らし、怒りを頭にするジエーン。

隠れてザエルアポロが吹き出してた。

：あ、殴られた。そういう無駄なアクションに響転使うあたりジエーンらしい。

「そういう所だ……」

「んだとこら！」

ちよっとお顔が渋くて私の好みだからって調子乗りやがってクソダーリンめ！

いいのか!?虚夜宮の壁という壁全部ぶっ飛ばすぞ!?東仙要がストレスで壊れちゃうぞ!DJ☆KANAMEとか名乗りだして、やたらでかいラジカセ担いでガンテンバイン相手に突然ラップバトルとか始め出すんだ。地獄絵図だろ！

「滑稽。」

「真顔で言うなよ！」

2人の意味不明な言い争いは何処からともなく現れた東仙要がジエーンの頭を殴って黙らせるまで続いた。

……東仙統括官、居たのか。

☆☆☆☆☆

「…要。」

「はい。」

「なるかい？DJ」

「……………」

「……………ツ!!…ツツツ!!…ツ」（腹を抱えて床を転げ回るギン）

☆☆☆☆☆

場所は変わって、虚圏の砂漠！

藍染君から頼まれた初めてのお使い、プリメーラに相応しい破面を  
探す事が私の最初のお仕事らしい。

やっぱなんもねえなこの砂漠、さっさと終わらせて戻ろつと。

よし、ここに来る前ハリベルに教えて貰った探査回路を今こそ使う  
時だ！

みみみくん…みみみくん…みみみみみみみ…

ぴこーん！

お、ヒット。

私が直談判して、数人の実力者に了承もとった。

……………よし、彼ならきつとプリメーラに相応しいはず！早速藍染  
君に報告だ！

ここからはダ・イ・ジエ・ス・トだぞ☆☆

「ただいま藍染君！めぼしい強者を連れて来たよ！」

「オヌシはニンジャか？」

「……………帰してきなさい。」

「アイエツどうして!?こんなに殺意に溢れて強そうなニンジャなのに……………」

「ニンジャは駄目だ。」

「えーそんなー。」

「ぬ？その声…ダークニンジャ…サン？」

「……………帰してきなさい。」

……………

「この人なら大丈夫！吸血鬼だし、アーロニーロみたいな能力も持つてるらしいから頼りになるよー！」

「命令を寄越せ、マイマスター。」

…私はヘルメスの鳥…自らの羽を喰らい、飼い慣らされる…」

「帰ってくれ、頼むから。…………その台詞を聞くと何故か悪寒が止まらない。」

「えーまたー？」

「とうにかさつきから虚が一体も居ないんだが、何処から連れてきているんだい？」

「…さあ？」

「…帰ってもらいなさい。」

「残念だ。ククク…」

……………

「こ、今度こそ大丈夫！」

強いし、金ぴかだし。他所の国の王様なんだって！」

「フハハハハハッ!! 久しいな道化エ!」

「元の世界へお戻りください、王よ…」

はっ!? 私はいったい何を…?

とにかく駄目だ、その御方にはお帰り願いなさい。」

「えー…」

「…ハリベル、彼女について行ってくれ。流石の僕も何度もツツコミを入れるのには疲れた。」

「はい、藍染様。」

~~~~~

苦勞して連れて来た候補は皆ダメだった…藍染君のいけず…

「全てお前の自業自得だと思っぞ。」

ハリベルまでそんなこと言う。

はーこういう時はハリベルのおっぱい揉んで落ち着くに限りませんわ。

モミモミモミモミモミモミ…

「……………(何かを諦めた表情)」

よし。ハリベルっぱいで英気も養った事だし、探査回路を再開しよう。ついでに本体のソナーも同時に使って……………よっしや発見。

今度の人はちゃんとした虚みたい、でも同じ気配が2つ…?…なんだろこれ。

移動するからハリベルも手え握ってて。

「分かった、飛ぶのだな?」

そうそう、せーのっ!

ぐるんっ

…よいしょおっ!

ほい、空間跳躍成功つと。

いやー便利だねーこれ。

破面になった私の特典の一つに、『虚圏全域の移動権限』がある。虚圏内なら行きたい場所へ一瞬で跳べるありがたい能力だ。他の十刃にもプライベートはあるからそのへんは弁えて跳ばないようにしてるけど、ここは虚夜宮の外だから大丈夫。

更に私が斬魄刀を握れば、虚圏から外へ繋がる全ての黒腔の支配権を得る事ができる。これが藍染君が私に斬魄刀を携帯させない理由だ。

どうやら私って、『虚圏で初めて自力で黒腔を開いた虚』なんだって。それが破面化の影響で概念化して、そのまま私の能力になったそう。藍染君は驚いた顔で零番隊がどうのとか言ってたけど私の理解が追いつかなかったからその後の話は覚えてない。

んで、辿り着いた先はつと…

「……死体の山だな。」

oh……

出会って5秒でデッドホロウマウンテンに遭遇した私、早くもやる気が赤ゲージまでダダ下がり。

後でアーロニーロ呼んどこう。

死体の山の向こうから声がする。そこまで近寄ってみると、裸の男と若い女型の破面が布一枚で向かい合ってた。

あつ……(察し)

お邪魔しました、ごゆっくり……

「待て、アンタは今盛大に勘違いをしてる。」

男の方が弁明してきた。

勿論、分かってる分かってる。

虚圏に法律は無いから、相手が見た目J.Cの破面とヒヤッハウしたってなんも問題ないんだ。人道的にはアレかもだけど、私達虚だし、お互い合意の上ならセーフセーフ。

「いや違うから、そんないかがわしい事してないから。そもそもアイツは俺で、俺もアイツだから。」

んまっ!? アイツと俺は一心同体!? という事は既に彼はあの子の中に熱い何某を「違うわ! ナニもしてねえって言ってるんだろ!」

お嬢ちゃん大丈夫!? この男に変な事されてない?

「……………グスツ（無言で顔を逸らす）」

よし、ギルティ。ハリベル、殺れ。

「了解だ、同じ女型の破面として狼藉は見逃せない。」（皇鮫后解放）

「だああああ待って待って待って! 誤解だ誤解! リリネット! てめえ分裂して早々何してくれてやがる!」

俺達は2人で一人の破面なんだよ!

コヨーテ・スターク・リリネット・ジンジャーバツク、それが俺達の名前だ!」

なるほど、それで同じ気配が2つあったわけね。

なっげえ名前だ。

んで、このコヨーテ・スターク・リリネット・ジンジャーバツクという虚達、仲良くなった虚が彼らの存在に耐えきれず片っ端から死んでいくという持病を抱え、あまりにもぼっちを拗らせ過ぎた結果、自力で破面化し、さらにその瞬間に2人に分裂してしまったらしい。

……なんて深い闇を抱えた破面なんだ。

大変だったね、コヨーテ・スターク・リリネット・ジンジャーバツク……

「お前も苦勞しているんだな、コヨーテ・スターク・リリネット・ジンジャーバツク。」

可哀想な虚だ、コヨーテ・スターク・リリネット・ジンジャーバツク……でも有する霊力はかなり高い、藍染君の前に出しても大丈夫かな。コヨーテ・スターク・リリネット・ジンジャーバツク君が承諾してくれればの話だけだね。

「私も賛成だ。コヨーテ・スターク・リリネット・ジンジャーバツク、君なら藍染様の期待に応えられるだろう。」

ハリベルもそう言ってるし、どうかな。私達と一緒に来る? コヨー

テ・スターク・リリネット・ジンジャーバツク君？

「いやいや、名前長いから俺がコヨーテ・スタークでいいよ。アッチがリリネット・ジンジャーバツクで。一々呼びにくいだろ。」

む、そんなことは無いぞコヨーテ・ジンジャーバツク・リリネット・スターク君。

「言ったそばから間違えてるな。今完全に順番ごっちゃになったよな？」

あ、ゴメンゴメン。

それで、どうするコヨーテ・スターバツクス君。私達と来る？

「なんか小洒落たカフェみたいだな名前になっちまったが、もう突っ込むのもめんどくせえ…」

良いよ、アンタみたいなのが他にも居るなら、俺達の近くに居ても死ななさそうだ。

リリネットもいいよな？」

「……別に構わないよ、スタバ。」

「略すな！間違ってる方を！」

いえーい、野良破面ゲツト！

彼等なら藍染君も文句ないでしょ。

今回はハリベルのお墨付きだ、これでダメって言われたらハリベルのせいだかね。

「理不尽では？」

あ、あの人達が知らぬ間に殺した虚の山は、後でアースローター口が美味しく頂きました。



## 八話 雑談という名の駄文

「よっ…ほっ…ふっ…」

「まだまだ踏み込みが甘いぞ、得物の長さに振り回されるな！」

「せいせいせい！」

「おお!? いい感じじゃねえか！」

「じゃあここいらで」『ヒトイキレヨウヨ』

「そだねー。ルドボーン君、お茶くれ〜！」

「かしこまりました、ジェーン・ドウ様。」

レプリカのハルバードを振り回す手を休めて、椅子に座り込む。向かいにアールロニーロも座り、一緒にルドボーンのお茶を待った。

此処は第5十刃の宮、最上階。

要は新しい私のお家だ。虚圏のはなれに作ったあの家から引越して、今は虚夜宮に住んでいる。

因みに私の本物の斬魄刀ハルバードは昔の家に置いてきた。まあいつでも呼び出せるしいいかなって。掃除とかは向こうに残したルドボーン君の分身がやってくれてるんだって、有能かよ。

そんなこんなで今は、アールロニーロが食べた改造虚の中に居た死神、志波海燕って人になってもらい、長い得物の使い方を彼から御教授願ってる。

記憶も経験も、斬魄刀の解放すら自分の力としてコピーできるんだね、すごいや。

ただ、太陽の下でそれ使えないのって不便だよねー。虚夜宮は天蓋の内側に擬似太陽あるからアールロニーロ不利じゃん。

「全くだ。」『アモ、藍染サマニモ才考エガアルンダヨ、キット。』

ホントかなー、死神世界が恋しくて造らせたんじゃないの? ホラ、虚圏はずっと夜だし、体内環境狂うとかで。

『藍染サマモ』『体調に気を使うもんなのか?』

「お待ちせ致しました、お茶とクツキーです。」

ありがとー、いただきまーす！

『コノ前グリムジョーガ』『食わされてた奴だな。』

そうそう。あれは必殺技用のだけど、これは私が真面目に作った自信作なんだ。

アーロニーロ、最初は恐る恐る触手で摘んで喰虚が咀嚼した。

『……オイシイ』『甘いな。』

気に入ってくれたのか、もう一つ、もう一つと喰虚の触手がホイホイクツキーを掴んでは放り込んでいく。

偶には虚以外もいいでしょ？

「ああ、そうだな……」『虚トハ違ウ、優シイ味ダ。』

よしよし、アーロニーロには色々手伝って貰ってるからね。その御礼だよ。バンバン食べちゃって！余った分は今度の十刃招集で皆に食わせるつもりだから！

グリムジョーとか食べそうにないけど無理矢理口に押し込む！

『獣ニ食ワセルニハ勿体ナイヨ。』

おう辛辣かよ。一応グリムジョーはアンタより上だぞ。

「俺にもくれよ、<sup>クイント</sup> #5の嬢ちゃん。」

と、ベランダから現れたのは私が連れてきた新しい第<sup>ブリメーラ・エスパーダ</sup>1十刃、コヨーテ・スターク君だ。後ろにくっついてるのは相方のラブリーマイエンジェル・リリネット・ジンジャーバツク。

「今すげえ名前で呼ばれた気がした。」

無事藍染君に認められて1番の数字を貰ったようで、手の甲に1の数字が刻まれてる。

自分の宮を与えられて従属官も付けることを許されてるんだけど、何故かぼっちを続ける事に、そのうち話もされなくなって彼等は結局従属官無しでやっていくことになった。不憫な子。

ぼっち極まってんなあ…

「へいスターク、入るなら玄関から入ってきてくんない？

うちのベランダはアンタの発着場じゃないんだけど。」

「仕方ねえだろ、#5より#1の宮の方が高いんだ。わざわざ下から上がるよかベランダまで飛び降りた方が早えんだよ。#9の兄さんスベリもいんのな、お邪魔してるぜ。」

「新入りの」『第1十刃力。』

殺傷能力の高さで序列が決まる十刃。

ダーリン：もといバラガンの『老い』の力を上回ってスタークが一番だと藍染君が判断した理由は、「無限に溢れ出す霊力」だ。スタークは生まれつき霊力を本人の意思とは関係なく無限に体内で生成して。それが漏れ出た結果周りの虚に害をなし、ぼっちが天元突破してしまっていた。そもそも身体を2つに分けるって芸当にどれだけ靈力割くのか：しかもリリネットの人格まで維持しないといけない量だよ？控えめに言つて人間核融合炉だよ、スタークって。あ、虚か。「始祖様のお褒めに預かり光栄ですよと：ああ、すまねえなルドボーン。」

「いえ、ようこそいらつしやいました。スターク様。

リリネット様もどうぞ、ミルクココアです。」

「マジで!?サンキューな!」

満面の笑みでルドボーン君の持ってきたココアをごくごく飲み干すスタークの半身、リリネットちゃん。

膝へおいでおいで：

はあくリリネットちゃんきやわわ、護らねばこの笑顔。

で、どうよスターク。虚夜宮の生活は？

「悪かねえさ。何より俺がそばに居ても誰も死なない：それがいい。」  
そ、良かったね。

とまあ、これで十刃は全員埋まって、戦力は整った訳なんだけど。そうなるこそろそろ始まるんだよねえ：

死神達との戦いがさ

はアーめんど、マジめんど、破面化の恩がなかったら絶対従ってないよ。

「藍染サマ曰く、もうすぐ死神達と縁切るんだってよ。そしたら戦争

だ。

あーあめんどくせえこった。」

腰据えて暮らせると思ったのになあ、とごちるスターク。

戦いなんて好きじゃない、でも死神側を裏切った藍染君が虚圏に来るなら、自ずと死神達も此処へ攻め込んで来るだろう。敵が来るなら迎え撃つしかない。

尤も、藍染君は私達破面と虚圏すら通過点としか考えてない様だけど。

この平穏な日々も終わりかあ：アールローも気を付けてね、死なないように。

時にはプライド捨ててでも命優先しなよ。

「俺達の喰虚に」『敵ハ無イヨ。』

そうどーして破面は誰も彼も自分の力を信じて疑わないのかねー。不測の事態とか、万が一の保険とかあるでしょうに。

アールローなら出来そうじゃない？万が一の為に喰虚を半分に分けてスペアの身体を残しておくとか。

『ソノ考エハ』「無かったな。たしか」『ソノナカヲ持ツタ虚ヲ昔：』

思い当たる節があるならやってみなよ、手が多いに越したことはないんだし。

『ソウダネ。』「今度色々試してみよう。他ならぬ」『友達ノアドバイスダカラ。』

うんうん

「……………」

なんだよスターク。私の顔じつと見て。

ガン飛ばしてんのか？お？

「いや、始祖サマは変わってんなって。

『生き残れ』なんて言う虚なんざ初めて見たよ。

俺達は虚の成れの果てだ。身内同士で殺し合いする事しか考えてないバカな連中なのに、アンタだけは『先』を見てる。」

急に真面目な話しだしたなこのぼっち#1「誰がボツチだ！」

前にザエルアポロにも言われたよ。私は他の虚とは違う、「壊れた

「虚」だって。あんまり真面目に聞いてなかったから半分も覚えてないけどね。

私の『普通』は虚にとって『異常』なんだってさ。生き残りを最優先に考えるのも、戦いをできるだけ避けて生きるのも、全て虚のそれとは掛け離れた行動だって。

なんか馬鹿にされてると思つてザエルアポロは殴つといたけど、やっぱ私つて変なのかな？

「…いいんじゃないの？」

「ジエーンは」「ジエーンダヨ。」

「私も、ジエーンはそれでいいと思う。」

だつてジエーンは優しいし、他の連中にはない良い所いっぱい持つてるし。

良くわかんないけどきつと、それが将来私達を助けてくれそうな気が…する…かな。」

リリネット、君が天使か

『僕たちモ』『過去にお前と出会つていなかったら』『自分ノ選択肢ヲ広ゲル事ナンテ』『出来なかつた。全てを餌としか見ない』『亡者ダツタヨ。喰虚ノ可能性ヲ見出シテ』『くれた事には感謝してる。』

「とまあ、こんな感じだ。」

周りからおかしいと思われていても、お前の行動に救われた奴だつて居る。変だ何だと言われても、結局生きてりや勝ちだ。

俺はそう思つてるよ。

アンタは俺達に『選択肢』と『可能性』を与えてくれた。それに一端いっぽうの感謝はしてるさ。」

「カツコつけんなよスタークツ!!」バツシイ!

「ゴワアツ?!急にローリングソバットは止めるオ!!!」

うん、最後なんかカツコつかなかつたけど、皆が私を励ましてくれるつて事は分かつた。べ、別に落ち込んだた訳じゃねえし!?

当時それ言つたザエルアポロにも鉄拳制裁ぶち込んでラボごと木っ端微塵にしてやったし?気にしてないから!でも…

ありがとね

誰かに認められた事なんて今まで無かったから、ちよつと嬉しい。

……それから暫くして、アローニーロとスターク、リリネットが帰った後。

友達が帰った後の妙な静けさってあるじゃん？私の宮は今そんな状態だ。

んで。

皆帰ったよ。いつまで隠れてるのさ、藍染君。

「……気付いていたのかい。」

そりやもうね、話を盗み聞きとか趣味悪いにも程があるよ。ちよつと正気を疑うんだけど。人の裸を視姦するに飽き足らず覗き見とは……私達のボスって変態だったの？

「君の裸を見た件に関しては僕にも弁明の余地はあると思うが。」

確信犯だよエロメガネ。

まあ座りなよ。ルドボーン君、彼にもお茶お願いね。

「かしこまりました。」

藍染君がさつきまでアローニーロが座ってた椅子に座り、私と向き合った。

「他の十刃達と随分仲が良いんだね。」

でしょ？私つてば頭脳明晰容姿端麗ポケモンマスターだからね、慕われ過ぎて困っちゃうよ。ふははは。

「あまり難しい言葉を使わない方がいい、馬鹿に見えるよ。」

やつかましい！いらん世話じゃ！

……んじやま、今日も悪巧みを始めちゃいますか。そつちの経過はどうなってるのさ。

「ああ、そうしよう。」

間もなく尸魂界に敷いた布石は完成する、その際は現地映像を君に

も見せよう。きっと良い見世物になると思うからね。」

お、いいね、ライブビューイングじゃん。

じゃあ私は前に言われた通り、いいタイミングで君達に反膜掛けネガシオンて拾えば良いんだよね？

「その通りだ、多少演出を付けてくれても構わないよ。私の目論見通りなら、その場には護廷十三隊隊長格全員が集結するはずだ。驚かせてやってくれ。」

それで前に言った朽木なんとかの魂魄の中に隠された崩玉を奪い取って、死神界からおさらばか…

ひつどいよね、部下を何年も騙し続けるなんて。

「信じた時間が長い程、裏切られた時の絶望は深く、動揺から生まれる隙も大きいものさ。」

それに傷もね。

あーあー悪のラスボスマっしぐらで、お姉さん罪悪感しかないわー。

「……お姉さん？」

そこを疑問形にするなエロメガネ。

藍染惣右介、死神界の裏切り者。

その頭脳と実力は並の死神の比ではなく、自身の目的の為なら長年連れ添った部下さえ駒として切り捨てる異端の死神。要するに黒幕。

『異端の死神』か。私も似た様なもんだけどね。

私は虚圏で受け入れられて、藍染君は尸魂界で受け入れられなかった。いや、自分から距離を置いたのかも。

普通と違う異端の考えは誰にも理解出来ないから、同調できる人もいない。ずっと、彼は一人ぼっちだったんだろう。

「…どうしたんだい？」

いんや、べっつにー？

あ、何度も言うけど、破面私達を使い捨てにするのは構わないよ。虚圏は強い奴に従うのがルールの世紀末縦社会だから、誰も文句は言わな

いいし、君に言わせないだけの力があるのも知ってる。けどさ…

私のやりたい事邪魔するなら、本気で殺すから、そこんどこヨロシクにやん。

力の差とか、思想の違いとか、余計なもん全部無視して心臓握り潰してあげるね。

「…ああ、分かっているよ。

同じはぐれ者同士だ、僕も君とは対等なまままでいたい。

僕と同じ目線に立ってる者は貴重だ。」

そんな大層な奴じゃねーですよ私。実際君ってば、私の事どこでもドアか何かかと思ってるでしょ。

「そのドアは何だか知らないが、僕は君の事を使い捨てようとは思っていないよ。それは本当だ。」

へーへー。

じゃ、お互い利害が一致する限り味方って事で。

「そうだね、まずはそういう事にしておこう。

我々は世界がどうなるかではなく、どうあるべきか語らなければならぬ。それが強者の責務なのだから。」

世のおば様方を虜にする甘いスマイルで微笑みかけてくるエロメガネ。ほんといい性格してるよ。

…絶対友達少ないよね。(ボソツ)

「友人の必要性を感じないだけだよ。」

ボツチはみんなそう言うよ、まあ…クッキー食べな。

☆☆☆☆

悔っていた、と言わざるを得ない。

初めて接触した時は、最古の虚というものだから、従えて融通の利く駒として扱ってやろう程度の心持ちで始祖の下へ向かった。

が、蓋を開けてみればこれだ。

私に匹敵する霊力とそれに見合った霊圧、破面化した事により新たに発現した空間跳躍能力、更には尸魂界の密なる組織『零番隊』にも



匹敵するであろう《始祖》の権能。黒腔の支配権を完全に得るなど、私やあの忌々しい浦原喜助でも不可能だ。我々は『技術』を駆使して黒腔を開くが、彼女の持つ絶対支配権には遠く及ばない。彼女がその気になれば、外から虚圏に侵入した者は永遠に夜の砂漠に囚われ続ける事になるだろう。

そして何よりも厄介なのは彼女の性格だ。

やりたい事だけやる

口にすれば簡単なそれを、行動に移すととなると話は別。彼女が目標と定めた道を阻むものがあるうなら、冷徹に、全霊を以てそれを踏み砕く：元<sup>ノイトラ</sup>＃5から数字を奪った時のように、羽虫を潰すが如く。

まるで要塞の様な彼女の帰刃と敵対すれば絶大な脅威として敵の前に立ち塞がるだろう。

だからこそ、今はジェーン・ドウと敵対してはならない。すべきではない。

仮にそうなるとしたら、私が全てを手に入れた後だ。

幸いいつもの彼女は温厚だ。まあ、持つてくる厄介事に時々胃がこう：キュツとなる事があるが：それでも協力者としては破格の存在である。

「あ、ソーダ。この前現世に黒腔繋いでこつそり盗って来たプリンあるんだけど食べる？」

盗品食べちゃうとか、私達超悪役っぽいじゃーん？」

空間跳躍を使って瞬時に我々の目の前に皿とスプーンと、そして生クリームや切られた果実で装飾されたプリンが姿を現した。

なんて無駄な権能の使い方だ：

「おっほー何コレ美味しー！」

これがあるから現世観光は止められませんなー♪」

頬を撫でながら笑顔でパクパクとプリンを咀嚼するジェーン・ドウ。

この姿だけ見れば、年頃の生娘なのだが：現実とは残酷なものだ。

：そんなに美味しいのか。そう言えば隊長になってから久しく現世に降りていない。ここは大人しくご相伴に預らせてもらおう。そ

う考え、プリンを一口含む。

ふむ、美味しい。

優しい甘みの中に感じるカラメルのはろ苦さ、果実の酸味も合わさって、舌先で幾重も味を楽しめる極上の品だ。尸魂界の羊羹やあんこ餅のような只甘いだけの菓子ばかりでは舌が馬鹿になってしまう、やはり定期的に外から刺激を得なければ。

「そんでさ、ザエルアポロに作らせる十刃専用オシオキアイテムの話なんだけど…」

「…興味深いね。だが君が主導というのが不安で堪らないよ。」

「とらすとみーとらすとみー。」

「ここまで白々しい態度は僕も初めて見た。」

この後も彼女と他愛ない会話を続けた。

久しぶりに食べる洋菓子の味は格別だ。

こういう時間を『束の間の休息』というのだろうか。何の変哲もない現状報告と世間話、なのに不思議と、彼女と過ごす時間を無駄だと感じることは無かった。

## 九話 物語の幕は上がる

機は熟した、とても言うべきか。

朽木ルキア処刑を阻もうとする旅禍達の瀨霊廷侵入。激動する瀨霊廷内で偽りの死を見せ、物語から退場したかに思えた男は、不遜に笑いながら再び決戦の舞台へと舞い戻った。

「……これが、崩玉か。」

器となる魂魄を傷付けず摘出出来るとは、流石の技術力だ。」

納得したように藍染惣右介は笑い、取り出した崩玉を懐へしまい込む。

「だが、もう君は必要無い。」

殺せ、ギン。」

「しゃあないなあ……」

——射殺せ、『神槍』

高速の刃が無防備なルキアの命を狙う。

しかし、悪意が彼女を貫くその刹那、割り込んだ何者かが己が身を挺してそれを阻んだ。

「兄……様……?」

「……………」

急所は外れている。しかし先の戦いで消耗した彼の体力はとうに限界に達しており、ルキアを抱えたまま崩れ落ち、膝を突いた。

止めを刺そうと近寄る藍染から庇うように、ルキアは兄を抱き寄せた。そうするしか手はなかった。

たとえそれが無駄だとしても。

含み笑う藍染が刀を振り上げようとしたその瞬間、一瞬にして二本の刃が彼の腰と首筋に突きつけられる。

「……………久しい顔ぶれだね。」

「動くなよ藍染、筋一つ動かせば即座に首を刎ねる。」

隠密機動元総司令官、四楓院夜一。並びに現総司令官、碎蜂。尸魂界最速といっても過言では無いこの二人に加え、更に現れる影が増えていく。

気付けば護廷十三隊隊長格がほぼ総出で藍染達を包囲していた。有り体に言えば絶対絶命である。しかし彼は尚も笑みを絶やささない。

「…何がおかしい。」

「ふ、ふふふ…いや済まない。」

こうも予定通りに隊長達が集結してくれるとは思わなかったものでね。彼女に言ったとおりになった。」

「…? 誰じゃ、彼女とは。」

ああ済まない、時間だ

「ッ?!?!? 離れる碎蜂!」

「!?!」

危機を感じた夜一と碎蜂は咄嗟に身を躲し、藍染から距離を取った。その僅か数秒後、四角く区切られた光が藍染、市丸、東仙を包む。

淡く光るその柱の名は《反膜》<sup>ネガシオン</sup>、虚が同族を助ける為に使用する、内側と外側で完全に隔絶された空間を創り出す技だ。それを彼女が行えば、安全性は絶対と断言出来るだろう。

一同が反膜の降り注ぐ光の出現を見る為、顔を上げたその時、空が裂けた。

まるで口が開くように、無数の黒腔が双極の丘をぐるりと取り囲み展開され、死神達を包囲した。

そこから現れるのは『死』だ。大量の大虚<sup>メノスグランデ</sup>、下級大虚<sup>ギリアン</sup>が黒腔から顔を出し、その暗い瞳はじっと死神達を見つめている。

「なっ?!? 大虚がこんなに…!」

「全部で500は居んぞ?!? それにまだ奥に誰か…居る…?!」

驚愕する彼等の視線の先には、メノスグランデの頭に腰掛ける少女

の姿があつた。

「やつほー藍染君、迎えに来たぞい。」

魑魅魍魎の群れに似合わぬ華奢な姿で霊子で編まれた髑髏の旗を突き立て、欠伸をしながら気の抜けた労いの言葉を藍染に向けて放つその少女の名は……

☆☆☆☆☆

あー視線が痛い、視線が超痛いよ死神の諸君。

澗靈廷に旅禍つてのが侵入してから、藍染君一世一代の死んだ死んだ詐欺を経て、朽木……ルイ13世だったか何だったかの身体の中から崩玉を取り出すまで、単行本化するなら10巻分くらい掛かるだろう長い長い事件の末に、遂に私の出番がやって来た。

攻撃される可能性もあるから明鏡<sup>アスリスダ</sup>止水張って……ああ斬魄刀持ってこなきや。

とうっ！（手をかざす）

……

……

……ドカーンッ！

ウワードコカラカトモナクハルバードガー！

ドンドンカベヲコワシテイクゾー！

カベガー！カベソノモノガー！

……ブンブンブン……

バツシイッ!!!

手元にハルバードが飛んできた。

よっしやいい子だ、今日も絶好調！

……途中所々で破面の悲鳴が聞こえたのは気のせい気のせい。

何も起きなかった、いいね？

んで、通信機越しに藍染君の様子見ながら、いいタイミングだと思つて迎えに行ったらコレですよ。せっかくギリアンいっぱい連れて、黒腔もバカスカ開いて派手に演出してあげたのにさ。

ちよつとしか驚いてないじゃん！何コレ！

もつと悲鳴上げるとかさ、あるでしょ？

よつしやまだ威圧感が足りてないと見た。

ギリアン諸君、頑張つて練習したコーラスの出番だ！

オオオオオオオオオオ……

ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”

ヴオアアアアア

ワ”ワ”ワ”ワ”ワ”ワ”ワ”ワ”ワ”ワ”

お、よしよし。流星に驚いたみたいだね。

あの巨体が突然歌い出したらそりや驚くよね、夜道に出くわしたら泣く自信ある。

あつ：なんか白い羽織着た人達がこつちめっちゃ見てる。

それにさつきからあのおじいちゃん私の事めっちゃ睨んでるんだけど、ひえ〜何あの霊圧、藍染君程じゃないにしてもこの中じやダントツでヤバイ奴だよ。殺すのに5分くらい掛かりそう。

「迎えに来てくれてありがとう、ジェーン。」

反膜の光エレベーターで上昇しながら、崩玉を手に入れてご満悦の藍染君はニツコリ笑う。

まー約束だし。もつと派手な方がよかった？

「何も問題無いよ、期待通りの働きだ。」

あそふん、よかった。

そのまま藍染君達を無事回収、反膜に包まれた時点で手なんて出せないんだけどね。

案の定、私も含めて死神達から睨まれる藍染御一行様。あ、白い髪したお兄さんがなんか言ってる。

それで藍染君余裕の返し、煽りスキル高すぎでしょ私達のボス。

「私が天に立つ。」

そいでこのオサレ決め台詞ですよ。

特に意味も無く呼び出したメノスグランデ達にバイバイしながら、黒腔を1つずつ閉じていく。そして最後に私のいる穴を閉じようとした時、藍染君が切り伏せたオレンジ髪の子と目が合った。

うわなんだあの子、死神と人間と…虚？の力が混ざりあってドえらい事になってるがな。

私達が一番近いんじゃない。

それにお腹が切られてパツクリ割れちゃってるよ、えっぐ。

あれがホントの腹筋崩壊ってか？ふひひっ

あ、やべ。自分で言ってるちよつと面白かった。

笑ってる場合じゃない、帰ろ帰ろ。

じゃあね、ばいばーい。

☆☆☆☆

ゾワリと全身を舐めるような悪寒が身体中を襲う。

藍染に斬られたせいじゃねえ、白哉と戦った時の傷が疼く訳でもねえ。

穴の向こうにいた女、その深い紫色の瞳と目が合った瞬間に、それは起こった。

奴が笑った、たったそれだけで俺の全身から力が抜けて、汗が吹き出した。

『オイオイ、お前は理解してるはずだ。』

アレは刃向かっちゃいけない存在だってよ。俺がそう思うんだ、お前が理解できない訳がねえ。』

頭の中で自分と同じひび割れた声が響く。

止めろ、出てくるな。黙ってろ。

『いいや喋るね！』

俺達は「あっち側」だ、戦いを求め、血を欲し、ただただ殺戮を繰り返す獣だ！

だからあの女のヤバさが分かる！』

違う！俺は獣なんかじゃない！

『…ハァー、馬鹿が。』

良いぜ、精々足掻いて見せな。

忘れるな、「俺」は何時でも狙ってるぞ。』

耳障りな声が段々遠くなり、遂に聞こえなくなった。ついでに俺の意識にも限界が来たのか、どんだん目の前が暗くなる。

そのまま俺は……

☆☆☆☆

かくして、旅禍達の起こした朽木ルキア救出作戦は一段落し、尸魂界は東の間の平和を取り戻す。

疑いの晴れた旅禍達は無事現世へと送り届けられ、護廷十三隊隊員達は、騒動の後片付けに追われていた。

藍染惣右介の裏切り、東仙要と市丸ギンの離反。未だに癒えぬ傷を抱えながらも、護廷十三隊は死神界の最高組織、故に一時も休まる暇は無い。

一番隊総隊長である山本元柳斎重國は、この日残った隊長格達に招集をかけた。

「皆、よく集まった。

藍染惣右介、市丸ギン、東仙要の離反で廷内が一時騒がしくなるじやろうが、じき収まるじやろう。」

火急の呼び出しにも関わらず、隊長不在の三、五、九番隊長以外の



隊長が集結するあたり、彼の人徳が伺える。

「今日集まって貰ったのは他でも無い。かの大逆者、藍染惣右介とその一味について、儂から一つ伝えておかねばならぬ事がある。」

皆は覚えておるか？藍染の開いた黒腔、その奥に佇む少女の事を。」

「あく、いたいた。あの可愛い子ね。」

「兄は女子おなごを見る目だけは立つのだな…」

隊首羽織の上から女物の派手な着物を来て、場の雰囲気全く無視でからから笑うのは八番隊隊長、京楽春水。それを呆れるように隣の朽木白哉は呟いた。

「左様、京楽の言う通り、大虚に座っておった旗持ちの娘じゃ。」

…奴を見て違和感を覚えたものはおるかの？」

「感じた、と言われましても…」

「ああ、俺も見えたのはほんの一瞬だけで、直ぐに穴の奥へ消えてしまった。元柳斎先生は何かご存知なのでしょう？」

碎蜂が首を傾げ、それに同意した浮竹も同じ様子だ。あの場に居た他の隊長達も返す言葉がないらしい。

その中で一人、十二番隊隊長、並びに技術開発局局長である涅マユリだけが鼻を鳴らす。

「フン、無能共ばかりだね。」

私は現場には居なかったから解析機越しに奴らの去り際を観察していたが、多少気になる事があった。

総隊長が言っていたその娘、霊圧が無かったんだヨ。」

「なんと!?ならば彼女は人間…」

「違うネ、人間にも微粒子レベルではあるが霊力を持ち、ごく僅かなりとも霊圧を発してる。ウチのセンサー感度はそこらのものと比べ物にならない筈だ、なのに…」

霊圧が僅かしかない、ではなく、霊圧が全く検知されなかった。

マユリの言葉に隊長達は目を見開いた。

「霊圧が、全く無い…?」

「ああそうだヨ、全く検知できなかつた。」

四番隊隊長があの時伝えた通り、藍染の斬魄刀の力なら誤魔化す事

も可能だろう。

：だが、それは我々の五感のみに働く完全催眠。霊圧検知の機械までも騙せるものかネ？」

他の者達がいやに静まり返る中で、マユリは続けた。

「では何故、あの娘は霊圧が全くなかったか。

私の仮説では、霊圧を何処か別の空間へ飛ばして隠していると考えるのが妥当だろう。

いや興味深いネ！是非研究させて欲しいものだヨ！」

つまり彼女が全く霊圧を放っていないかったのは、魂魄から漏れ出すはずの霊圧を体外へ放出される前に何処か別の場所へ吹き飛ばしていたから。以上が涅マユリの感じた少女への違和感の答えだった。

「へえ！良いじゃねえか、どつかへ逃がさねえといけねえ程の霊圧の持ち主なら弱えワケがねえ。」

「お主は相変わらずじゃのう…」

じゃが、涅隊長の言つとることは正しかろう。そして、儂は過去に恐らくあの娘に会っておる。」

「何っ!？」

「本当かい山じい。いいなあ、あんなべつぴんさんとお知り合いになれるなんてさ。」

「…兄はそろそろ黙れ。」

この後に及んでまだおちやらける京楽を無視し、総隊長は言葉を続けた。

「まだ儂が年半ばの餓鬼じゃった頃に一度だけの。

そやつは一晩で十六の街を潰し、二万にも及ぶ魂魄を平らげた。」

「なん…だと…?」一夜で二万…まさかっ!？」

「山じいそれって昔ボク達に話してくれた…」

元柳斎を師と仰ぎ、他の者よりも長く彼と時を共に過ごした浮竹と京楽はどよめいた。

門下生時代、何度も聞かされた。護廷十三隊結成より前の惨劇。

「うむ、彼方より来たる《厄災の星》。

嘗て尸魂界を絶望の淵に沈めた《始祖の虚》じゃ。」

「オイオイ待てよ、話が見えねえぞジイさん。」  
頭を掻きながら呑気にそう言う更木に、元柳斎は皆へ向け語り始めた。

護廷十三隊結成以前、まだ組織体制の盤石でなかった頃、突如現れた巨大な影に飲み込まれた街と魂魄。刃向かうものには容赦なく死を撒き散らした、双頭の虚。

元柳斎の同期もこの時多くが犠牲となり、一時は世界のバランスが傾く直前にまで魂魄が減ってしまったらしい。

「あの時の禍々しい霊圧、儼すら怯ませるような威圧感、一度でも浴びれば忘れはせん。黒腔が開いた直後、一瞬だけあの時と同じ気を感じてのう。」

杞憂であればと願ったが…

どうやら彼は既に確信を得ているらしい。

「となるとそいつは破面化したのか。」

黒腔の大量展開と無数のギリアンを従え、藍染救出の手綱を引いていたのも彼女だと…

「日番谷隊長の提した可能性は捨てきれぬ。」

現にあの時、その娘が出てきた途端、大虚が皆喚き出した。」

「確かに、あの叫びは何かを恐れ、また讚えるような声色だった…少なくとも今まで始末してきたギリアンはそんな真似はした事がない。」

刑軍として多くの虚を葬り去った過去を持つ碎蜂も、白哉の言葉に同意し頷いた。

「参ったねえ、藍染隊長は昔話の化け物まで手下に加えてたつてのかい。」

「可能性は高いのう。崩玉が奪われ、彼奴等の動きは更に活発化する事じゃろう。」

全隊に告ぐ、旅禍の侵入により各々思う所あろうが、いつそう鍛錬し、来るべき戦いの時へ備えよ！

崩玉を手に入れた藍染の目的も自ずと見えてこよう、決戦の時は遠くない。」

杖を床に突き、力強く言い放つ元柳斎に隊長達は思わず背筋が伸び

る。

各々返礼し、それぞれの持ち場へ戻って行く中、残された元柳齋は一人呟いた。

「もし相見えるならば、決着を付けねばな……」

小さいながらも覇気を感じさせるその一言を聞いたものは誰も居ない。

☆☆☆☆☆

虚夜宮

「……………」

「……………」

「……………ジエーン」

「……………」

「何故、ちよつと目を離れた隙に僕達の私室の壁に大きな穴が空いているのかな?」

「……………」

「次いでに多数の破面から『大きなハルバードが物凄い勢いで壁を何枚もぶち破りながら飛んでいった』と報告があったんだが。」

「あ、藍染君メガネ取ったんだね!」

エロメガネからメガネが無くなってただのエロに「ジエーン」あつはいゴメンナサイ。」

このあと滅茶苦茶壁直した

## 十話 始祖との遭遇

あゝつつかえ、ほんまつつかえ

前回ハルバードを持ってくるために壊してしまった壁を石膏とヘラで塗りながら大きな溜息を吐く私こと始祖娘ジェーン・ドウ。

藍染君が「これはジェーンへの罰だからルドボーンは手助けしてはいけないよ、それが彼女の為だ。」とか言っちゃうからルドボーン君ホイホイ従っちゃやし、石膏とヘラだけ渡してどっか行ってしまった。でも分身の一人が心配そうにこっちを見てるから気にはかけてくれるんだろう：髑髏だから表情わかんねえや。

ぬりぬり、ぺたぺた

私が起こした不祥事後始末は仕方ないとはいえ、壊れた壁を直していくうちになんかつまなくなつたので、残りの壁は少し趣を変えて直そうとおもう。

くく3時間後くく

これで最後つと：ふむ、最後の一枚、我ながら会心の出来だよ。

どうさこの今にも動き出しそうなこの躍動感、攻守4000は有りそうな威圧感、オマケに着色までした渾身の1作だ。

そう、名付けるなら：オベリス○の巨神へ「ここで何をしているジェーン・ドウ」おん？

ああウルキオラじゃん、おっすおっす。

「質問に答えろ、何故俺の私室の前で奇っ怪な石版を壁に埋め込んでいる。」

コイツは今日もいつも通り表情筋が死んでんな。話し掛けても素っ気ないし、何考えてんのかさっぱりだし、話に困る。ちったあヤミーやグリムジョーを見習いなさいよ。会う度に愉快なりアクシヨンで私を愉ませてくれるぞ。

いやさ、壁壊しちやっただから直してるの。

私の返事にウルキオラはチラツとオ○リスクを眺めて、言った。

「それは直しているとは言わない。」

こまけえこたあいいんだよ、カツコイイじゃーん。

「ここに来るまでに見た妙な形をしたオブジェの埋め込まれた壁は  
前の仕業か……まあいい、藍染様から御指摘されたら元に戻せ。」

へーへー。よしっ、これで壁全部終わり！

ドロドロになっちゃった、早く宮に帰ってお風呂入ろー。

あ、そういえば。

ウルキオラ、現世行くんだったっけ？あの…あまおう苺とか言う奴見に  
さ。

「奴は果実ではないが…そうだ。」

そんじやーさー、次いでにお使い頼まれてくんない？牛乳切らして  
たんだよねー。

「……何故俺が」

折角現世に行くんだよ？ならお土産の一つや二つ当然でしょう、だ  
からお願いつ！

藍染君がいつも飲んでる紅茶の茶葉も買って欲しいんだ。

「藍染様の為なら仕方あるまい、任せろ。」

藍染君の名前出すとコイツちよろいなあ…

よしよし、そんじや出発する前に私の宮来てよ。買い物リスト渡す  
からさ、宜しくう。

「分かった。」

☆☆☆☆☆☆

「では、黒崎一護を探し出し、接触致します。」

「ああ、頼むよウルキオラ。そして、私に起きた事を全て報告してく  
れ。」

「御意に。」

「それから…君の部屋の前で見た謎の石版は何か？他の場所にも赤くて口が2つに分かれた首長龍やら黄色い鳥の様な化物が掘り込まれた壁があつたんだが…」

「ジェーン・ドウが彫つたものと思われます。」

「ああ…うん、だろうね。」

やはりか…まあ…：塞がっているのなら良しとしよう。君は気にせず現世へと向かってくれ。」

「御意。」

そう答え、ウルキオラは藍染の前から消える。一瞬だけ脇腹を抱える藍染の姿が見えたのは気のせいだろう、そうに違いない。

道中でヤミーが「暇だから俺も行く」と言い張り、結局2人で約束通りジェーンの宮へと向かう。最上階、ジェーンの私室にはルドボーンと分身達がせっせと家事を行っていた。

「いらっしやいませ、ウルキオラ様、ヤミー様。」

ジェーン・ドウ様は只今入浴中ですので、私がお伝えさせて頂きま

す。

リストと資金、マイバッグはこちらに。」

「…：マイバッグ？」

「はい、現世では今『えこ』なる環境に配慮した行動が好まれるそう

で。『びにーる』を用いない、自分用の袋を設え買い物する者が真の

強者足り得るのだと、ジェーン・ドウ様は仰っていました。

ですのでこちらをお持ち下さい。」

「エコ…？なんだそりや、現世は良くわかんねえ事やってんだなア。」

「分かった、使おう。リストは…これか。」

なんの気なく、2つ折りにされた買い物リストをぺらりと開くウル

キオラ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆ウルキオラ君初めてのお使い☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………」

グツ：

おつと危ない、衝動的にリストを破り捨ててしまう所だった。

ウルキオラの死の形は『虚無』、彼に心はない。常に冷静沈着、確実に命令を遂行する十刃きつての仕事人だ。癖の強い上の数字3名や、狂った5番と比べ御しやすいが故に藍染からも全幅の信頼を得ている。

今も彼は勿論冷静だ、決して無駄に裝飾の施された買い物リストの題名にイラツと来た訳では無い。無いのだ。

気を取り直して内容を確認する。リストには地図が添付されていて、此処に必要な品を買ってこいと示唆しているようだ。

買う物は：

- ・牛乳
- ・バター
- ・生クリーム
- ・サワークリーム
- ・クリームチーズ
- ・グラニュー糖
- ・グラハムビスケット
- ・粉ゼラチン
- ・レモン果汁
- ・ドクペ
- ・オレンジペコー（藍染君の紅茶に使う茶葉）
- ・ねるねるねるね

☆☆☆☆

……………乳製品、多過ぎないか？

オレンジペコーは辛うじて分かる、以前藍染様へ差し上げる為に



ジェーン・ドウから紅茶の淹れ方を教わった。その時の会話の中にそんな単語があったはずだ。これは問題ない。

問題は残りだ、何故クリームが3種類もあるんだ。生とかサワーとか、酒なのか？というかグラハム・ビスケットとは誰だ。人か、人を買うのか。そして極めつけは最後のやつだ。

「ルドボーン、ねるねるねるねるとはなんだ？」

「ねるねるねるね、で御座います。」

現世の練り菓子の一種だそうで、3つ程買ってきて欲しいと仰っていました。」

「なんだオメー、ねるねるねるね知らねえのか？」

いやなんで「常識だろ」みたいな表情で俺を見るんだヤミー。知らないのは俺だけか、俺が悪いみたいになっちゃってるのか。

「ねるねるねるねってなあアレだ。」

3種類位の魔法の粉に水ぶっかけんだ、そんでそいつを掻き混ぜて作る菓子だよ。」

……コイツは何を言ってるんだ。今サラツと真顔で『魔法の粉』とか言ったな？

「前にアイツをウチの犬コロと遊ばせる代わりに渡してきた奴を食ったんだけどよ、これがなかなかウメエ。練れば練るほど色が変わって、あの口ん中パチパチするのが堪らねえぜ。」

刺激物なのか、ねるねるねるね。全くもって意味が分からん。

しかしリストに記載してあるなら購入するもやむなし、分からない部分はヤミーに聞きながら手に入れる事にしよう。

「それとジェーン・ドウ様から、『店に入る時は必ず霊圧抑えてから入る事！』と言伝を預かっております。」

藍染様の好む茶葉を売っている店はそこしかなく、従業員の魂に何かあつて閉店してしまった場合、入手が困難になる事が理由ですね。徹底の程をお願い致します。」

「それは……仕方ないな。分かった、そうしよう。」

藍染様の為とはいえ、多少疑問が……というか八割がた疑問しかな

いが、時間も惜しい。あとは現地で何とかするか。

……………ドクペってなんだ。

☆☆☆☆

……………

「藍染様へ伝えておく。

貴方が目を付けた死神もどきは、殺すに足りぬ塵コミでした。とな。」

黒腔が開き、2人の破面がその奥へと消えていく。

奴等が去った後、辺りは重い霧囲気に包まれた。

「……………去ったか。」

「ハイ、取り敢えずウチでお二人さんの手当をしましょう。鉄斎サンに連絡しときますんで。」

「悪いのう喜助。それで、この遺体の山じゃが…」

周りを見渡せば老若男女問わず大小様々な人間の遺体が転がっていた。恐らく破面が《魂吸ゴンスイ》を使ったせいじやろう。強制的に魂を吸われた人間が皆死んだ、誤魔化すのが大変じゃ。

しかも無差別に吸ったのか、被害は此処に見える以上じやな。

「それもウチで何とかします。隠蔽には慣れてますんで。」

へらへら笑う喜助じゃが、決して気を抜いている訳では無い。寧ろ警戒心を引き上げたように見える。

藍染惣右介の持ち去った崩玉、その影響で成体の破面が現れるのは儂も喜助も予想してはいたが、まさかここまで早いとは思わなんだ。

あのデカブツを殴った時、腕が嫌な音をたてたし、相当に硬い鋼皮を持っていた。

「……………油断か。」

疑うべくもない、儂の敗北じゃ。腕は鈍つとらんつもりじゃったが

……

「よる…いち…さ…ん……」

「喋るな織姫。薬が効いとるとはいえ、お前は重症じゃ。

……チャドはお前が治したんじやろ、今度はお前が治される。」

「くろさき…くん…は？」

「案ずるな、命に別状はない。

……もう休め、お前は充分戦った。」

「……は…い…」

宥めるようにそう言うと、織姫は薄く笑って気を失った。どつちか言うとお前の方が重症じやろうに、おアツい奴め。

成体の破面が現れた事はじきに護廷十三隊にも知れ渡る、現世へ死神が派遣されるのも時間の問題か。次なる戦いの舞台は空座町…などという冗談も有りうるかもな。

じゃがそれよりも、儂には気になって仕方がない事がある、それは……

「のう、喜助。」

「…なんででしょうか夜一サン。」

「あのウルキオラとかいう破面、なんで両手に買い物袋持ったんじや？」

「分かんないっす……」

☆☆☆☆

「戻ったぞ、リストにあつたものは全て購入した。これで文句ないか。」

おつ、おかえりウルキオラ！そこに置いていて。

で、どーだったの現世は。

「……何も。」

藍染様が目をつけられた男も、霊圧が不安定なだけの塵だった。」

その割にはヤミーの奴、霊圧が随分乱れてたみたいだけど？

あゝ…もしかしてアイツ返り討ちにあつたのかな。

ヤミー探査回路下手だし、見た目通り軽率だし、子供みたいにワガママだし。アレが0なんて、唯一の癒しはクツカプーロくらいだし。9対1でクツカプーロが#10ディエス占めてるから。

「酷いな。」

酷いよ？

じやー藍染君とこ行って報告会か、行こうぜ行こうぜー。

.....

大勢の破面達が見ている前で、ウルキオラの映像が頭を流れていく。

オレンジ髪の死神、冴えない顔のおっさんに褐色肌の女、あと一瞬でヤミーに腕握り潰された外国人。それから、面白い事する巨乳(ここ大事)の女。

これ何やってんだろ。潰された腕を治してるけど、回復とは少し違うみたいだ。

なんて考えてたらグリムジョーがウルキオラに突っかった、まあ殺す価値無しつつつても、生かしく価値もないもんね。

グリムジョー、取り巻き達に囲まれて尚更不良に見えるなあ。ヤンキー座りとか…テンプレ過ぎて逆に清々しいぞ少年。

つかヤミーの奴、本当に右腕ぶった斬られてやんの、うける。

「ジェーン、何か言いたそうだね。」

ここで私に振るう？

そうだなー、藍染君が目え着けた割には大したこと無かったね、あの…とちおとめだっけ？オレンジ髪の死神くん。

「いっち」しか合ってるないが…」

こまけえこたあいなんだよ。それで、他に面白そうなのは…この子かな、髪飾りから色々する子。あとおっぱいでかい。揉みたい。

「ふむ、そうだね。」

彼女の能力、非常に興味深い。」

後半はスルーしたな貴様。

藍染君が含み笑うその横で、グリムジョーとウルキオラはまだ喧嘩してる、グリムジョーがあのおレンジ髪が力をつけてまた挑んで来たらどうするか、と問い詰めたら、ウルキオラが始末するそうだ。藍染君がそれに賛同したからグリムジョーもそれ以上何も言わなくなつた。けど納得はしていない模様：

こりやなんかやらかすな、跳ねっ返りボーイだもんねあの子。

くくく数時間後くくく

や　ら　か　し　た　な　あ　い　つ

ウルキオラの報告の後、少しリリネットと話してから昼寝しようとする自分の宮へ戻ってベッドにダイブしたら、誰かが勝手に黒腔を開いたのを感じた。

虚圏から繋がる黒腔は全て私の管理下にある。斬魄刀を持っていないから扉の支配はできないけど、何処にしようが黒腔が開くと私にしか分からない独特の違和感がするんだ。

黒腔を十刃が使う時は必ず藍染君か私に申告しないとイケない決まりがある。藍染君はこの時間に使うとか言っただけでなかったし、私も誰からも聞いた覚えがない。という事は：

グリムジョー（不良少年）だ

あん時散々不満そうにしてたもんね。しかも探査回路使った感じ取り巻きのギリアン達も一緒だ。

あの一悶着あつてからスグじゃん、なんだよ即落ち2コマかよ。

あーあ勝手な事しちゃって：

このまま行くとD J東仙にオシオキされちゃうよ、しょうがないにやあく。

ちよつち行つてきますかー

☆☆☆☆☆

「ガツカリさせんじやねえぞ死神！

卍解になつてマトモになつたのはスピードだけか!! あア!？」

挑発するグリムジョー、先程叩き落とした土煙を晴らすように、黒い霊圧が吹き荒れる。そして…

「月牙…天衝オ……ッ!!」

一護の放つた黒い斬撃が、グリムジョー目掛けて炸裂した。

夜空に黒が弾けて、斬撃がグリムジョーの身体を斜めに切り裂く。彼は咄嗟に腕をクロスさせたが威力を殺しきれず、腕ごと半身が血で染まった。

「何だ今のは…？」

そんな技…ウルキオラからの報告にや入ってなかつたぜ死神…!」

「…ガツカリせずには済みそうかよ、破面…!」

思わぬダメージを受けたグリムジョーに、対する一護も攻撃の反動でかなり消耗しているようだ。

「ははははははははははははははははっ!

上等じゃねえか死神!これでようやく殺し甲斐が出てくるってモんだぜ!」

歓喜の叫び声を上げながら、グリムジョーが斬魄刀の柄を握ったその時。

ほん、と優しく彼の肩に手が掛けられた

「はいそこまでー、夜遊びのし過ぎだよ。」

「なっ…!? ジェーンてめえ…!」

一瞬で背後を取られ、驚愕するグリムジョー。それにも構わずへらへらにやけながらジェーンは続けた。

「はいはい、優しい優しいジェーンお姉さんですよ。」

一緒に連れてったギリアン達は…みんな死んだっぼいね。

困るよー、成体の破面も藍染君が夜なべして作ったんだからさあ。そうポンポン殺されちゃったら世話ないよ。

きつと藍染君怒ってるだろうなく。

だから帰ろう、グリムジョー。」

「…やなごつた、俺はこの死神と決着付けたよ!」

グリムジョーの視線の先に居たのはオレンジ髪の死神代行、黒崎一護。彼もまた、突然現れた新たな破面に動揺を隠せないようだ。

月明かりをバックに首筋の『5』の数字がいやに目立つ。見た目だけなら美少女と呼んでも差し支えない女性。しかし一護は違和感しか感じない。

(…なんだ? あの破面、全く霊圧を感じねえ…。人間なのか?)

『いや、違うね。』

「……ッ!」

また、頭の中で声がする。

「うっ……おおおお……」

遂に頭を抱えて呻き始めた。

そんな一護をまるで可哀想な子を見るかのような視線で一瞥し、ジェーンはまたグリムジョーに振り返る。

「ほ、ホラ。なんか敵さんも内なる自分と戦ってるっぼいし、もう帰ろ?」

ていうかあの子かなり頭ヤバイ子かもしんない…ゾマリくらいヤバイ奴かも。」

「アイツ程じゃねえだろ……」

何と言われようが嫌なモンは嫌だ、俺はアイツと決着付けなきゃ気がすまねえ。」

軽い冗談を交えながら何度も優しく諭してはみるものの、グリムジョーは依然として引く気はないようだ。

やいのやいのと言いついの末に、痺れを切らしたジェーンはついに明鏡止水を切った

ズアツ…

「！！！！！！！！！！  
！！！！！！！！！！」

空座町一带に、嵐のような霊圧が巻き起こる。

押し潰され、奈落の底へ吸い込まれるような感覚にグリムジョーは全身から汗を吹き出し釘付けになった。

ジェーンの瞳が、じっとグリムジョーを見ている。

「帰るって言うてるの、分からないかな。」

「がっ……は…!?!」

首筋をそつとなぞるように添えられたジェーンの手が、無防備なグリムジョーの首を鷲掴みにし、そのまま宙吊りになった。

「さっきから駄々ばかりこねて、子供かよお前。」

勝手に飛び出して、部下全滅させて、私に尻拭いまでやらせたって、自覚あるのかな？

死ぬのは全然構わないけど、十刃欠けると藍染君が困っちゃうからさ。いい加減責任の取り方くらい覚えろよ糞餓鬼、分かった？」

「だっ誰がクソがギツ!!?!ガ……アアツ…!!」

「お前の事だよ。」

分かったかって聞いてんだ、『はい』か『いいえ』で答えろ。な?」

「……………はい……………わ……………がっ……だ……………!」



心臓を握り潰されるような重圧と、万力の様な力で締め上げられて、息もできずもがくグリムジヨールは辛うじて言葉を絞り出す。

その答えに満足したのか、ぱつと花が咲いたようにジエーンはすぐさま笑顔に戻り、グリムジヨールから手を離れた。

「そう、いい子いい子。」

もうっ、十刃じゃ無かったら殺してるよ？向こう戻ったらお説教だからね。」

既に説教以上の事してるじゃないか、とは口が裂けても言えなかった。言ったら多分殺される。

「アンタは先に黒腔で帰ってなさい。」

「あっ…オイツー！」

グリムジヨールの背後に黒腔が開き、そのまま彼を呑み込んだ。

グリムジヨールが消えたのを確認すると、ジエーンはふと下を見下ろして、道路でうずくまる一護の下へと響転で移動した。すぐ側にはグリムジヨールによって腹を貫かれたルキアも倒れている。

「あらら、あの娘可哀想に…」

「ごめんね、ウチの糞餓鬼が迷惑掛けちゃって。」

「あ…アンタは…一体…」

「私？お答えしましょう！」

第5十刃、ジエーン・ドウ。宜しくね！」

「身元不明遺体…？」

「そうか、アンタ瀕霊廷で藍染を逃がした…」

「お、よく覚えてるね。一瞬目が合っただけなのに。」

今回は災難だったね。その調子じゃ、私達と同じになるのも時間の問題だよ。」

一護は息も絶え絶えにジエーンの瞳を見つめ、目を見開いた。

「おな…じ…？」

「そう、同じ。」

虚になったらウチにおいでよ。キミ面白そうだし、養ってあげるからや。」

「俺は…虚には…なら…ね…」

「ふーん…そう…」

まっ、頑張んなよ。

なんか複数の霊圧がうじゃうじゃコッチに近付いてきてるからそろそろお暇するね

じゃーおやすみー。」

パチンと指を鳴らし、現れた黒腔の中にジエーンは笑顔で消えていく。

彼女が消えるのと入れ違いになるように、一護の下へ現世へと派遣された護廷十三隊の面々が駆け付けた。

## 十一話 豹に罰を、骸に子を、巨悪には笑顔を

「分かった？ 藍染君に会ったらさつき言ったようにするんだよ？」

「ウツセーなあ分かってらア。」

素直に謝ってやるよー！」

虚夜宮の廊下を早足で歩く響めっ面のグリムジョー、その後ろを追いかける私。

呼び出しの理由は勿論、コイツがやらかした現世への無断侵攻、それから破面五体の敗死、その責任を取らされるんだろう。じやなきやこつちに帰ってきた途端半ギレの東仙統括官から連絡が飛んでくる筈がない。

指定された部屋に行くのと、穏やかな心を持ちながら激しい怒りによって目覚めたDJ要と、すっげえ高い位置にある玉座に座った藍染君がお出迎えしてくれた。

藍染君なんでそんな無駄に高い椅子に座ってんの？

「漸く来たかグリムジョー…」

どうした、謝罪の言葉があるだろう。」

「…別に。」

おうコラてめー、さつきあれ程言ったばっかだろがい。

「貴様…」

まーまー激昂トーセン落ち着いてー。破面は失ったけど、グリムジョーはこうして無事な訳だし？ 結果オーライなのでは？

「貴様も甘いぞジェーン・ドウ、あと誰が激昂トーセンだ！」

調和を乱す者は必ず不義となる、早々に処断せねば取り返しのない事態に「いいんだ、要。」藍染様!？」

「私は何も怒ってなどいないよ。」

グリムジョーの今回の行動は、御し難い程の忠誠心の現れだと私は思っているんだ。

…違うかい？」

「……そうです。」

白々しいにも程があるゾ

あ、我慢出来なくなつた激昂トーセンがグリムジョーの襟掴んだ。  
あーやばいやばい柄に手え掛けてるよ。いや調和を乱す者は許さないって、それだと私は何回アンタに処刑されてんのさ。

「お前自覚あつたんだな…」

大義無き正義は殺戮に過ぎない、だが大義の下の殺戮は…正義だツ  
!!

音もなく抜かれた東仙の斬魄刀がグリムジョーの左肩を捉え、綺麗に抜けてった。

「何っ…!? ジェーン貴様!」

こんなこともあろうかとね、グリムジョーに明鏡止水張つといたの。他人にも張れるって最近気付いたんだよねコレ。

「ジェーン…」

藍染君も、ちよつと悪ふざけが過ぎるんじゃない? 部下で弄ぶのも大概にしなよ。

「貴様、藍染様を愚弄するk」黙つててDJ、その髪アフロにすんぞ。  
で…DJ…」

なんかすつげえ落ち込んだ東仙はほつといて、藍染君に向き直る。  
たかがギリアンの破面が五体死んだくらいで騒ぐ必要も無いでしょ、どうせ藍染君、なんとも思つちやないんだから。

「……………」

それに、独断先行の方でグリムジョーに制裁が必要なら私がやるよ。

「…そうだね、ならグリムジョーへの罰は君に任せよう、ジェーン。  
私からはこれ以上言う事は無い。」

はい言質取った。

Hey DJ! ……は、未だに床に手え突いて落ち込んでるし、ほつといていいか。

ねえグリムジョー

「…あんだよ。」

マカロン、好きかい?

につこり笑うとグリムジョーの顔がちよつと引き吊つた。

☆☆☆☆

なんともいえない重苦しい空気が、部屋を包む。

松本が間借りした井上織姫の部屋には、弓親、一角、阿散井、一護、ルキア、そして俺と家主である井上が居た。

俺が招集を掛けたのだ。

俺達が現世に派遣されたその夜に現れた六体の破面、十二番隊の報告によると、黒崎と戦った一体を除きアイツらは全員ギリアン相当の破面だそうだ。

途中で限定解除申請が降りたから何とかなったものの、ギリアンであの強さ…藍染は想像以上にヤバイ連中を従えている。

「なあ、冬獅郎…」

「オレもお前に質問しようと思ったところだ、黒崎。

お前、何と戦ってた？」

最後に感じたあの霊圧。

心臓を握り潰されたような錯覚に陥った。身体が軋んで悲鳴をあげながら、全力で「此処から逃げろ」と叫んでいた。

一生分の絶望と恐怖が纏めて襲ってきたような、そんな圧倒的な霊圧。

そんな爆弾が一瞬でも炸裂して、周りの一般人や魂魄に被害が無かったなんて冗談みたいだ。

「俺が戦ってたのはグリムジョーって奴だ。

セスタ  
#6って言ってるやつだ…」

6番…!

あのシャウロンとかいう奴が言っていたな。1と10の数字が入った破面は『十刃』と呼ばれ、手強い破面の中でも特に殺戮能力に優れている連中だと。

暗い表情のまま、黒崎は続けた。

「途中まで斬り結んで、グリムジョーが刀を抜こうとした瞬間に、現れたんだ。」

ページユの色した長髪の女だった。前に藍染を逃がした時、虚が居た穴の向こうに居た奴だ。

「そいつがグリムジョーを止めた。」

?!?!

「黒崎、そいつはなんて名乗ってた!?!」

「……第5十刃クイントエスパーダジェーン・ドウ。」

戦慄が走る、身体中から冷や汗が止まらない。

間違いない、山本総隊長の言ってたアレだ。

《始祖の虚》、奴が空座町に現れたんだ。それで、あの霊圧を放った。

「なんだよ冬獅郎、急に目の色変えて。あの女について何か知ってるのか?」

「……ああ。黒崎、それから松本達にも話しておく。」

昔の話だが、嘗て尸魂界を半壊に追いやった虚が居た。そいつは《始祖の虚》と呼ばれていて、一晩で2万の魂魄を喰らい、16の街を破壊して、一時期世界バランスを大きく揺るがしたらしい。」

「そりゃあ物騒な話ですけど、どうしたんですか急に。」

「いいから聞け。前回の隊首会で爺さんに呼び出された時、唐突にその話をされたんだ。」

そんな馬鹿みたいな噂話をあの真面目な総隊長がわざわざ隊長全員を呼び出してするわけねえ。

オレも半信半疑だったが、昨晚感じた謎の霊圧で得心がいった。」

始祖の虚は確かに居る。

そしてそいつは破面になって藍染の下で動いている。

俺の放った一言に、松本達はキョトンとしている。コイツら話分

かってねえな…

「お前達、一護の所に来る前、異常な霊圧を感じただろ。」

「た、確かに感じました…けど。」

「ただ霊圧が強いだけなら俺がここまで話す事はねえ。だが、奴から放たれる霊圧は、強さもそうだが質が異常だ。」

そして何より、総隊長がわざわざ面と向かって気を付けろと忠告してきたんだ。

そんな相手がマトモな破面の筈がねえんだよ。

あの感覚をよく覚えとけ。黒崎の話聞く限り、今回奴はそのグリムジョーって破面を連れ戻しに来ただけで、敵意は無かった。だが…次に奴が俺達を害する目的で此処に現れたら…覚悟を決めろ。」

ごくりと皆が唾を鳴らす。

十一番隊の二人は興味深そうに頷いていた、流石戦闘集団は違うな。

取り敢えず、爺さんに報告か。それで、どうせどっかで監視してるであろう十二番隊と涅にも一報入れねえとな。

…始祖の虚、一体どれだけの化け物なんだ？

☆☆☆☆

「うおおおおおおお止めるオオオオツツ!!」

「追いついてくんなアアアアアアアアツツ」

「なんで逃げるのグリムジョー!!」

「私はただ…試作品の味見をして欲しいだけなのに!」

「両手に山盛り色とりどりのマカロン皿に乗せて追いついてくるからだ!」

「そんなに食えるか!」

「味は保証済みだよ!ちよつと作り過ぎただけ!」

「お前の作り過ぎはスケールが違うんだよ!」

「胃袋破裂するわ!」

「香料無添加、着色剤不使用、栄養満点でしかも美味しいんだよ!」

「何故無駄に健康志向!」

「つうか絵面が怖えんだよ!なんで両手にマンホールみてえなデカい大皿へ山ほどマカロン乗せたうえで響転使って追いかけてきてんの皿全く揺れてねえしマカロン1つも落とさねえんだよ、不気味過ぎるわ!」

「ええい往生際が悪い、逃げんな!」

「先生!先生お願いします!」

「任せなさい:鎮まれ、呪眼僧伽。」  
ブルヘリア

「ぐおっ!?脚が!」

「てめえゾマリ!お前も敵か!」

「全ては藍染様の御為、大人しく罰を受けなさいグリムジョー!」

「藍染の野郎、ゾマリに何を吹き込みやがったアアアア!」

「つくかくまくえくた(はあと)」

「協力ありがとうゾマリ先生、キミの働きにきつと藍染君も喜んでるよ!」

「当然です、私の響転は全十刃中最速ですから(関係無い)。」

「クソっ!巫山戯んじゃねえ!俺は絶対に『口を開けなさい』あがつ!?!」

「はーい先生そのままそのまま。」

「さあグリムジョー君、もぐもぐしましょうね。お代わりは幾らでもあるから。(漆黒微笑)」

「ひゃめろ…ひゃめ…あ…ああ…」

「アアアアアアアアアアア…」



「なんや？どつかで絹を割くようなグリムジョーの悲鳴が…」

「気のせいじゃ…ツ無いか…ツツ…ククツ…」

「えー…悪い人やなあ、藍染隊長。」

「DJ…なんとか払拭しなければ…」

「東仙隊長？早まった真似は止めよな？」

「なんで白粉片手おしろいにわなわな震えてるん？怖いよ？」

☆☆☆☆

「ジェーン、少し付き合ってくれるかい？」

前回のグリムジョー現世襲撃事件から1ヶ月ほど経ったある日、突然藍染君からお誘いを受けた。

「だ、ダメだよ藍染君。こんな昼間から逢引だなんて…私にはダーリンが…」

「ふむ、いつも通りだね。」

「実は君に頼みたい事があるんだが…」

「おい、スルーか。」

「そういう事されると泣くぞ私、虚圏虚閑が悲しみの雨で沈むぞ。」

「少し、実験に付き合って貰おうと思ってるね。他の破面達も呼んでやる、じきに皆集まるだろう。」

藍染君曰く、手に入れた崩玉を使って新しい破面を創造してみるらしい。

『願いが何でも叶う』ってのが崩玉の大雑把な内容らしいけど、まさか破面まで作れるとは…

でも、それを行う為には死神世界で言う『隊長格』の倍は霊圧を注ぎ込まないといけないらしい。本当は藍染君がそれをやって、ある死神に対するメタ破面を作ろうとしてたらしいんだけど、私が居るからって理由と、破面に崩玉を使わせたらどうなるかも実験したいみたい。それで私で実験を行うそうなの。

私やモルモットですかそうですね。

ところで『ある死神』って誰？あのおじいちゃん？あああの人…なに？どれ位で殺せそうか？んく…ちよつとは手こずるかもだけど、5分あれば殺せると思うよ？

そう答えたら藍染君は「そうかい」とにつこり笑って実験の準備を始めた。なんじゃそりや。

.....

場所は変わって、此処は実験室。

藍染君が崩玉を保管してる場所だ。今私の目の前には崩玉と、ガラスの箱に閉じ込められた人間大の人形みたいなのが置いてある。これが新しい破面を作る素体なんだって。見た目キモイなこれ。

何処から情報が漏れたのか、十刃も集まって来て、ウルキオラとヤミー以外は実験室へやって来ていた。意外なのはこういうの興味無さそうなダーリンが来てる事だね。

「珍しい物が見られると#1プリメーラの小僧に急かされてな。」

「リリネットが連れていけつてうるさかったんだよ…」

もしかしてリリネット、私の事気遣ってダーリン連れて来るようスタートクに言ったの？なんだ、今日もあの子は天使だった。帰ったらうんと甘やかしてあげよう。

つーかザエルアポロ、最近見ないと思ったら随分やつれてんね。どつたの？

「少し試したい事があってラボに籠っていてね…」

それと貴様が開発しろと言った装置を作っていたんだよ忘れたか！」

あ、そういやそんな話してたわ。ごめんグリムジョーの件で色々やったから忘れてた、H A H A H A !

「このおんなは…!!」

まっ、ザエルアポロは変態だけど腕は確かだから、そのへんは信用してる。きつと私の要望通りのオシオキ装置を作ってくれるだろう。

変態だけど。

なんて話していたらウルキオラとヤミーが入って来た、これで十刃全員集合だ。

「では始めよう、ジエーン。」

同調するタイミングは君に任せる、成功を期待しているよ。」

おいなんだその不吉な台詞、まるで失敗フラグ立ったみたいじゃないか。

確か『どんな破面にしたいかイメージしながら霊圧を込める』のがポイントだって藍染君言ってたな…好きに創れるなら、勿論私好みの可愛らしい女の子破面がいい。

なんて考えながら崩玉に手を近づけると、丸い崩玉からにゅって触手みたいなのが伸びてきて私の指にまとわりついて来た。キモイ。

えっなにこれ大丈夫？本当に大丈夫!?薄い本みたいな展開になるんじゃないの!?

ちよつと不安になって藍染君の方をチラツと見た。相変わらずいい笑顔、後で殴ろう。

「いい調子で霊圧が注ぎ込まれているね、その調子だ。」

ヤローこつちの気も知らないで…

…あ、やべ…くしゃみ出そ…は…ふあ…

ぶえつくしよいつ!

キュイイイイツ

思わずくしゃみしてしまったら、崩玉が不自然に輝き出した。

ヤバイヤバイ、力加減間違えた!?

すると音を立てながらガラスの箱がバラバラに砕け散って、中から破面が顔を出す。髪は綺麗な金髪で、頭にティアラみたいな仮面が付いていて、頬のそばかすが微かに目立つ女の子の破面、そんでもって…全裸だ。

ハリベルツ!!

「む、理解した。」

私の意図をいち早く読み取ったハリベルが素早くローブを響転で持ってきて彼女に掛けてくれた。有能。

つか全裸になるのどうにからなのかコレ、なんて藍染君に言ってもどうせ無駄なので賢い私は黙ってます、ハイ。

「……………あ…」

まだ上手く喋れないようで、ローブにくるまって呻いている。

霊圧は…私程はないけど、そこらの野良虚とは比べ物にならない量だ。流石私のチカラで生まれた子。

だんだんと息も整って来たみたいなので、改めて名前を聞いてみる。

「ワンダーワイス…」

ワンダーワイス・マルジェラ…です…」

たどたどしい口調だったけど、彼女はそう答えた。

「ふむ、成功のようだね。」

藍染君ご満悦、他の十刃達も興味津々って感じ。はいそこザエルアポロ、いやらしい目で見ないの「酷い誤解だ!!」。

なんせこの子は虚が進化して産まれた破面じゃない、私の霊圧を使ってゼロから産まれた人造破面だ。

……………ん？私の霊圧を使って産まれた…という事は、この子は間接的に私の娘になるのでは!?

ダーリン!ダーリンちよつと!

「なんじゃア。」

認知して?

「……………oh……………」

▶ダーリンは 頭を 抱えてしまった!

## 十二話 偽りの侵略者

はいワンダーワイスちゃん！今度はこっちの服を着てみましょうね〜♪

「え…あの…」

あ、こっちのフリフリもいいかなー？

今度はフリルの付いたワンピース仕立ての死縛装を手にとって、ワンダーワイスにあてがってみる。

破面の服は全て白で統一されてる、どつかのDJ統括官様のせいで厳しい規制が敷かれてるんだ。

全く、服くらい好きに選ばせて欲しいよね。DJは「調和ガー秩序ガー」とか煩く統一感のある格好にしろって言うし…私の海賊コートも散々文句言われたんだよ。

「えっと…お母様…」

あ、それからそれから、ワンダーワイス…長いからマルちゃんでもいいか！

「ジェーン、ワンダーワイスが混乱している。」

ウツキウキで話していると隣のハリベルが諭してきた。

おつとごめんねマルちゃん、なんだい？お母さんに言ってみな？

「あの…目覚めて早々着せ替え人形にされている理由を教えてくださいたいんですが…」

ああそうだったね、君にも伝えておかないと。

あの時実験室でマルちゃんを創り出してから、藍染君はウルキオラにある命令を出した。

その手助けとして、なんと産まれたてのマルちゃんに出撃命令が下されました。

私も着いていくんだけど、藍染君曰く「ワンダーワイスの保護者役」らしいので、戦闘はしないかな。

マルちゃん初めての現世です。なので素っ裸は不味いと、私の宮で衣装チェンジをする事になった。ハリベルはその手伝い。

他にも、お供3人娘の中で一番乙女心が分かってそうなスンスン。

それから未だマルちゃんの事を認知してくれないクソダーリンが超越した彼の従属官、シャルロット・クールホーンに応援を頼んでる。

……可愛い名前してるけど、シャルロットは男だ。

巖のような体付きにオカマ口調という、キャラがクレ○お婆さんのクリームシチュー並に濃厚で、最初は引いてたけど、話してみるとあの色モノ揃いの従属官の中では一番マトモな奴だった。

前ケーキ持ってダーリンの宮に突撃した時仲良くなったんだけど、砂漠しかない虚圏でお肌のケアとか、ネイルとか、一体どうやって知識仕入れてるんだ…

マルちゃんのコンプレックスだったそばかすを化粧で上手く誤魔化して見えないようにしたのも彼。すごい慣れた手つきだった。

多分この中で…いや全破面中一番女子力が高い。悔しい…

「ん〜…やつぱりワイスちゃんにはフリフリよりズボンタイプの方が似合うんじゃないかしら？」

それにこれから戦闘するのだし、動きやすい方が吉よね。」

ド正論である。

いやでも私はコッチのフリフリスカートでキラッキラしてるヤツを推すよ！

「……これでいいんじゃないか？一番動きやすそうだ。」

……ハリベルあんたこれ本気で言ってるの!?!こんなんちよつと動いただけで色んなところが諸々見えちゃうじゃん！

痴女コスハリベルだけで充分だよ！

「ち…痴女じゃないもん…」

あ、しよげた。

「き、筋肉ダルマが一番マトモな事言ってるのが恐ろしいですが、私もズボンタイプに一票です。」

死神との戦闘が控えているなら尚のこと、ですわ。」

えーSNSンもー？

可愛いと思っただのになーキラキラフリフリ〜。

「SNSン…お前も私を痴女と呼ぶのか…」

「いやいやいや一言も言ってますんわよハリベル様!?!ただ、ハリベル

様のお選びになった装束はすこーし…露出が…」

「やっぱり痴女じゃないの。」

「お黙りなさい筋肉ダルマアツツ!!」

「ずーん……」

コントやつてる連中は置いて、誠に残念だけど、断腸の思いで遺憾ながらズボンタイプの衣装にしようと思う。

はいマルちゃんこっちに着替えてねー。

「あう…お母様…ありがとうございます。」

…帰ったらキラキラフリフリの服も着ますから……」

なんだ天使は此処にも居たんだ。リリネット同様、心の癒しが身の回りに増えていってお姉さん嬉しい。

「はい…部屋着にします…」

(…(…こんなに気を使えてものが言えるだなんて、本当に生みの親がジエーンなんだろうか…?))

おいなんだその目は、言いたいことがあるなら言ってみろそこ3人コラア!

「お〜いまだ衣装選び終わらないのお〜?」

いい加減ヤミーとオセロで遊ぶの飽きたんだけどお。」

そう言いながら客間からダラダラと入って来たのは中性的な顔に袖の長い服が特徴の破面、ルピ・アンテノールだ。今回の作戦の為にシャルロツテのツテで連れてきたヴァストローデ。

本人の性格が玉に瑕だけど、多対一の戦闘なら引けを取らない影の実力者である。昔ダーリンの勧誘蹴ったんだってさ、それで何故かシャルロツテとは今でも交流があるらしい。

ああ、似てるもんね。何がとは言わないけど。

「ジエーン、今すっごい失礼な事考えたでしょ。」

ナンノコトカナ?

もうちよい待ってねー、ヤミーがうだうだ言ったらこれ渡せばしばらく大人しくなるから。

そう言つて例のアレをルピに放り投げた。

「何コレ？」

現世のお菓子だよ、あんたの分もいる？

「要らなーい。何このパッケージから滲み出る化学薬品臭、絶対身体に悪いよコレ。」

現世の子供達は皆これが大好きなんだよ？

「現世の子供つてこんなもん好んで食つてんの!?どんなデイストピアだよ…」

などつぶつぶつ言いながら出ていくルピを見送つて。さあ、マルちゃんお着替えタイムは再開しよう！

え？ピクニック気分かつて？そうだよ。

☆☆☆☆

夜虚宮、モニタールーム

夜虚宮の一角に設けられた狭く薄暗いこの一室は、ごく限られた者しか入る事を許されない秘密の部屋。

此処では虚夜宮全体の監視や天蓋に備え付けられている擬似太陽の操作、更には回廊の組み換えまで可能な便利空間だ。

何画面ものディスプレイには、それぞれの宮の映像が映し出されている。それを監視する者が3人、部屋に佇んでいた。

「新たに産まれた破面、ワンダーワイスの言語能力に異常は無いようです。」

人格も遜色ないように形成、後は実力と帰刃ですが…」

「《始祖》の霊圧を使って産まれた破面だ、それなりに期待はしているよ。」

…それにしても、あのジェーンから産まれたとは思えない程気の利く破面だ。本当に、あのジェーンから産まれたとは思えない。(大事



な事だから二回言った)」

「そうですねえ、ジエーンちゃんと違って。」

　　それで藍染隊長。

　　…なんでナチュラルに覗きしとるんです?」

「……………ギン、分かっていないね。」

　　これは…『観察』だよ、決してやましい事などない。」

「ちよつと言いついて淀みましたね?」

「そうだぞ市丸、藍染様がそんな下劣な目的の為にこの部屋を使うと思っただか。」

「DJは黙つといて。」

「お前まで私の事をツ!」

「……………いいんだ、要。」

　　正直に言おう、私はジエーンの行動によって周囲に及ぼす影響がどれ程のものか、少し…いやかなり興味がある。

　　一般の虚とは一線を画した《始祖》の骸。その影響で周りの破面は一体どんな影響を受け、変わるのか…いち研究者としてこれ程興味深いものはない。

　　無いんだよ」

　　静かに、だが力強く言い放つ藍染の背中に某海賊漫画よろしく『ドゥン!!』が浮かぶ。

「その結果が盗撮ですか。」

「盗撮じゃない、これは『観察』だ。」

　　そここのところ間違つてはいけないよ、良いね?」

「アツハイ(この人もだんだん染められてきてるなあ…)

　　つーか今完全に自分が盗撮してる自覚あるって言うた…ええわ、黙つとこ。」

　　…あ、でも。万が一ジエーンちゃんにバレでもしたら、絶対嫌われますね。間違いないわ。」

「……………ツそうだね。」

(今すつつつごい自分の中で葛藤したな…)

☆☆☆☆

「「「ツツツツツ?!?!?!」」」

青空の一角に、まるで口を開くように裂け目が展開される。無論、それは何者かが黒腔による虚圏と現世間を移動している事を表していた。

中から出てきたのは5人、どれも白い死縛装に割れた仮面を付けた虚の変異体。紛れもなく破面だ。

100%完全な人型に成る個体はヴァストローデのみ、と研究ではそう語られている。

出てきた5人の破面は皆、見た目は死神や人間達と変わらない人型だ。

それはつまり、ヴァストローデ級の破面が彼等の目の前に5体居ることになる。

「おー！いく場所に出たじゃねエか。」

「ヤミーの腕ぶっ飛ばした冴えないオジサンは居ないみたいだねー。」

「わあ…そら…あかるい。」

建物もいっぱい…これが現世なんですネ…」

「ねえ待って、ずっと言いたかったんだけどなんでグリムジョーのヤツ馬鹿でかいリュック背負ってんの？ピクニツク気分なの？馬鹿なの？」

「…俺が知るか…」

此処来る直前にアイツに持たされたんだよ…」

居合わせた死神達が刮目するなか、5体の破面は現世へと降り立った。

「おいおい、前回の襲撃から殆ど経ってねえぞ…」

「…今しがた観測班から連絡が入った。」

反応は紅色…少なくとも十刃が3人はいるらしい。」

いち早く尸魂界からの情報を受け取り、静かにそう言った日番谷。すると、大きなリュックを背負っていた青髪の破面が何か言ったと思うと、リュックを傍に居た別の破面へと投げつけ何処かへ行ってしまった。

去っていく破面を追い掛けたところだが、生憎他の四体が見逃してくれそうもない。

「やるしかねえか…『氷輪丸』！」

日番谷の斬魄刀が抜かれ、冷たい風が辺りに吹き荒れた。

その直後、響転で近付いてきた大柄な破面の拳と氷輪丸が激突し、鈍い音を立てる。

「…護廷十三隊十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ。」

「奇遇だなア、オレも10だ。」

アランカル・ティエス  
破面N010、ヤミー。

よろしく…なアツツ!!」

「くっ…!!」

鏑迫り合いの後方で押し負け、軽い日番谷の身体が宙を舞う。

ふと周りを見渡すと、松本、弓親、一角もそれぞれ破面と対峙していた。

(苦戦は必至か…ん?)

ふと先程黒腔が開いた方を見上げた日番谷の目に映ったのは、空中にランチョンマットを広げて呑気にサンドイッチを頬張るポニーテールの女破面の姿だった。

.....

「えと……あの…宜しく御願います…?」

「え? ああどうも御丁寧に…」

胸元が大きく開いた死縛装を身に纏うグラマラスな死神、護廷十三隊十番隊副隊長の松本乱菊は今、目の前の敵と距離を取り、向き合っている。

相手は金髪にティアラのような仮面が頭に乗った女破面。放たれ

る霊圧はそこそこで、副隊長には勝るとも隊長格には劣る。そんなどこか『惜しい』と感じてしまう霊圧だった。

「ワンダーワイス・マルジェラと……いいいます。」

私の相手はお姉さんみたいなので……お手柔らかに……」

遠慮気味にそう言い放ち、背にする西洋風のロングソードを模した斬魄刀を振り上げる。

(……来るっ！)

「え、ええ……い……！」

「へ!?!」

上から下へ、愚直に振り下ろされた剣を乱菊はひらりと躲し、当たらなかったワンダーワイスは振った剣の勢いに振り回されながら一回転して再び乱菊へ向き直る。

「や……やりますねえ……死神さんって素早い……」

「いや、アンタが遅いだけだと思うけど……」

「ひ、酷い……もう一回……とりやあ……！」

今度は横振り、乱菊はそれも軽く避け、勢い余ったワンダーワイスが空中をごろごろ転がった。

「ひい……避けないで下さい……」

その後も、半泣きになりながら太刀筋もへつたくれもなく剣に振り回されるワンダーワイスの攻撃を避けながら乱菊は思った。

(……コイツ、倒しちゃって良いのかしら……)

「……あ、トンボさんだあ……」

(集中力！)

☆☆☆☆☆

サンドイツチうめえ。

ヤミーはあの時藍染君に騙され斬られ散々だった子供隊長と。マルちゃんはエロい格好した乳デカ死神と、ルピはスカしたナルシスト風死神と戦い出した。グリムジョーは……あの時のオレンジ髪君の所へ行っただろう。どうせ帰る時は反膜で強制送還だし、それまで

ほっとけばいい。

「オイ女、テメエは戦わねえのか？」

なーんて呑気にサンドイツチ頬張っていると、向こうにも一人溢れた坊主頭の死神が警戒しながらこつちに話しかけてきた。

戦いは結構でーす、今日はあの子達の保護者なんで。そつちこそ、あのナルシスト君に協力しなくていいの？

ルピの奴、あれで結構強いよ？

「良いんだよ、一体<sup>サシ</sup>の勝負にや手を出さねえのが流儀だ。」

へえー難儀だねー。あ、サンドイツチ食べる？

「敵から施しなんぞ受けられるか！」

あそふん。ま、正当防衛はするけど、私は基本手を出す気は無いから。攻撃するならご自由にどうぞ。

「覇気の無え奴だなア…」

戦闘にならないのが余程残念なのか、坊主頭はガツクリと肩を落としてルピとナルシスト君（弓親って言った）の戦いを眺めた。

……遠くでグリムジョーの霊圧が大きくなってる。アイツもおっぱじめたのかな？

「グハハハハ！涼しいぜエー！」

子供隊長の仕掛けた氷の技を受けながらヤミーは笑う。ぜんぜんダメージになってないぞ子供隊長！

ルピも退屈そうに弓親って死神を跳ね飛ばして溜息を吐いてた。

「つまんなーい。ねえヤミー、マルジエラ、そつちのも譲ってよ。」

コイツらうだうだめんどいからさ、解放してさくつと殺つちやうね。」

「ああくん？しやーねえなー。」

「は…はいい…疲れました〜…」

ヤミーとマルちゃんが引き上げて、代わりに戦いを求めて坊主頭がルピの方へ飛んでった。

4対1…いや、ルピの手数なら4対8か。

「――縊れ、《トレバドローラ 葛嬢》」

ルピの解放にいち早く気付いた子供隊長がすぐさま卍解して止めに入るけどもう遅い。

ルピを中心に辺りは煙に包まれて、中から触手が一本子供隊長へ襲いかかった。

鈍い音がして、氷と触手がぶつかり合う。

「どうした、こんなもんかよ。解放状態の攻撃は。」

「やるねえー、正直止められるとは思わなかったよ。意外とやるもんだね、隊長つてのは。」

「……でも、もしその攻撃が……」

8倍になったらどうかかなア？

煙の晴れた先にいたのは、刀剣解放して背中から8本の触手をうねらせるルピだった。

そつからはもう一方的だ、子供隊長は触手八本纏めて食らって落っこちちゃったし。他の死神達も多方面から予測不能の攻撃を仕掛けるトレパドローラに対応出来てない。あつという間に捕まっちゃった。

「オイジエーン、オレにもサンドイッチ寄越せ。暇になっちゃった。」

「あ…私も頂きたいです…お母様……」

はいはい、お手拭きあるからちゃんと手を綺麗にするんだよー。

……んゝグリムジョーの霊圧、乱れてるなあ。遠くの方で虚に近い霊圧が増えたと思った矢先にこれだよ。

やばくなったら助けに行った方がいいかなー。でも前とは違ってちゃんとした藍染君の命令だから、邪魔すると超機嫌悪くなりそうだし…年頃の若者は扱いに困るね。どうしたもんか。

「お姉さん、セクシーだなー。いいなあー…その身体、穴だらけにしちやおつかなあゝ。」

調子乗ったルピが捕まえたセクシー死神を串刺しにしようとした時、どつからか赤い斬撃が飛んできてトレパドーラの触手を切り落とした。

「どおーもどおーも、真打ち登場ツスよ。」

カランコロン下駄の音を響かせ、現れたのは帽子を被った男。ウルキオラの映像で見た、黒髪褐色ボインのお姉さんと一緒に居た人だ。名前は…喜助とか言ったっけ？

「お!? アイツあ…」

手にしていた食べかけのサンドイッチを慌てて口に放り込み、ヤミーが飛び出した。

因縁あるもんね、行ってらっしゃーい。

「おお!? いきなりとは御挨拶ツスね。」

「会いたかったぜえゲタ野郎! 死ね!」

ヤミーの拳に固められた霊圧が高速で喜助さんをぶっ飛ばす。

「グハハハハ! コイツは虚弾<sup>バラ</sup>って言ってよ、固めた霊圧を拳に乗せて飛ばす技だ!

威力は虚閃にや及ばねえが…速度は虚閃の20倍だ!!」

木っ端微塵になって死ねエツ!!

ヤミーが調子に乗ってご丁寧に解説しながら虚弾を撃ちまくる。

………グミ撃ちって知ってる? それ、負けフラグなんだよ?

「ヤミーさん元気ですね…私はもう疲れましたあ…」

サンドイッチを小口でパクパク食べながらマルちゃんは呟いた。

いや、思ったよりマルちゃん戦闘能力無いよね。まだ産まれたてだからかな?

「ぐはっ…! お母様の言葉が胸に刺さります…!」

まだウルキオラの奴は任務中みたいだし、もうちよつと観戦していいよ。

と、思ったら。ルピの触手が氷漬けにされちゃった。

☆☆☆☆☆

「お喋りが過ぎたな、俺に時間を与え過ぎた時点でお前の負けだぜ破面。」

卍解、大紅蓮氷輪丸による氷の翼を翻し、ルピの凍った触手を碎き割る。

それに連鎖して、八本のうち半分が凍り付いた触手と、巻き添えて左手にビシビシと亀裂が走り、粉々に砕け散った。

「なっ…がアアアアアアアアアアアツツツツツツ?!?!?!」

「悪いな、中途半端に凍らせちゃった。」

「ッ!!…の野郎お…!!」

「今度はちゃんと痛みのねえように凍らせてやるからよ。」

片腕が無くなって悶えるルピが返事を返す暇もなく、周囲の水分が凍って柱の様に象られ、包み込む様に彼を覆い尽くす。

『千年氷牢』

あつという間に勝敗は決した。

「はあっ…はあっ…松本、斑目、綾瀬川、無事か…?」

「はい、なんとかか…ですが…」

「彼処に居座ってる破面をどうするか、だな。」

息を整えながら、日番谷は空を見上げる。

そこには相も変わらずランチョンマットに座って戦場を呑気に眺める女破面が居た。

（あの破面から靈圧を全く感じねえ…）

涅の言ってたのと同じだ、てことは…奴が…）

自分は藍染に斬られ、その場に居合わせる事が出来なかったが、彼女が藍染離反の際、逃亡の手助けをしていたらしい。

「あーあ、ルピやられちゃったよ。生きてんのかなコレ。」

!?!?!?!?



突然、渦中の女破面が日番谷達の前に現れた。

「…ツ!!」

「そう身構えないでよ、戦闘の意思はないからさ。…て、さつきそこの坊主頭の死神君にも言ったな私。」

「…その首の数字。お前、十刃か?」

「そうそういかにも!」

第5十刃、ジェーン・ドウ。お呼びとあらば即参上だよ。」

誰も呼んでねえよ、とは流石に誰も言えなかった。

外見は何らおかしい所はない、普通の女の子のようだ。破面の死縛装の上から海賊の様なコートを羽織った奇抜な格好をしていなければの話だが。

「…護廷十三隊十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ。」

「ああ知ってる知ってる、藍染君に酷い目に合わされた子供隊長だよね。」

「子供じゃねえ…」

日番谷の額に青筋が浮かぶが、そんな事虚圏いち空気の読めない女ジェーン・ドウが気にするはずもない。

「来ねえのかよ、仲間の仇取らねえのか?」

「仇いゝ? 何それパスパス。」

そーいう汗臭いの嫌いだし、それにもうすぐウルキオラが…: やつべ、コレ言っちゃ駄目な奴だった。今のナシね。」

「…:…?」

「取り敢えず、私はキミ達が此処にさえ居てくれればそれで仕事してる事になるし、このままテキトーに駄弁つてようかな。」

あ、そーだ! せっかく生の死神に会ったんだし聞いときたい事があつたんだ。

「…: 死神つてう〇こすんの?」

「「ぶっ…:…:?!」」

「だってさ、私達もそうだけど、死神つて一回死んでるんだよね? なのう〇こすんの?」

あと林檎好きってホント? 名前書いただけで人間殺せるノートと

か持ってるの?」

「持つてるわけ無えだろうが!」

あと年頃の娘がう〇ことか言うんじゃねえ!」

「あ、因みに破面はう〇ことか人の話を聞け!」

唐突に始まる緊張感の無い会話、松本と弓親が気まずい顔をしながら一角がツツコミの嵐をかます後ろで、日番谷は彼女の言葉に違和感を覚えた。

何故自分達を此処へ留まらせておく必要がある?自分は戦う気すら無いのに…

その言葉に隠された真意は…

「……ッ!!」

松本オ!今すぐ尸魂界に繋「ありや、バレた。駄目だよそんな事しちゃ」なっ……」

空間の軋む音がする。ギリギリと魂魄が締め上げられ、今にも身体が張り裂けそうだ。

あの夜一瞬感じたものと同じ、身の擦り切れるような異常な霊圧を日番谷達は全身に浴びせられた。

間違いない

「テメエが……始祖かッ!!」

「おん?言つてなかつたけ?」

まあいいや、尸魂界に連絡なんてさせないよ。此処から離れる事も許さない。」

笑顔のまま、だがその紫の瞳が全く笑っていないジェーン・ドウは言い放つ。その瞳に睨まれて、思わず身体が強ばる日番谷とその仲間達。

ちらりと松本の方を向いてみるが、彼女は首を横に振った。それは恐らく周囲の霊子が不安定になり過ぎて、伝令神機が使えなくなった事を意味しているのだろう。

これで尸魂界との連絡手段は断たれた。

「キミ達は大人しく此処に居てくれればいいの、私も手を出さずに済むからね。」

だから無駄に暴れられたら…面倒だなあって。」

日番谷も警戒していた異常な霊圧、一体何が『異常』なのか、今ひしひしと身を締め付けられている松本達も漸く理解出来た。

それは『根源的な死への恐怖』。ただ大きいだけの霊圧ならば、それに耐えきれず周囲の魂魄が死滅するだけだ。しかし、始祖の放つ霊圧からは彼女の持つ圧倒的な力量差と、それに「勝てない、負けて死ぬ」という密なる恐怖。

明確な『捕食者』と『餌』の関係が連想された。

死ぬのが分かりきっていて怖くないと感じる者など、幾度となく死線を潜り抜けた戦士でも無い限り克服する事など不可能だろう。

並の魂魄ならば即時発狂ものの霊圧を浴びながらも、幸い彼等は護廷十三隊の隊士達。相応の訓練も受けているし、命のやり取りだって何度も行っている。故にまだ目の前の化け物に抗う気力は残されていた。

「あれ…まだやる気なの？」

「しよーがないなあ、ちよつとだけよ？」

ジェーン・ドウの差し出した掌が黒く輝き出す。それを日番谷達の方へと向け、大気が震え始めた。

真つ黒なエネルギーが球状に渦を巻き、明滅を繰り返す。赤と黒の入り交る淀みきった霊圧の塊が掌から弾けるその瞬間――

「任務完了だ、ジェーン・ドウ。」

それを静止する声がして、彼女の肩に手が置かれる。振り返るとそこには、もう一人の破面の姿があった。

「あれっ、もう終わったのウルキオラ？」

「ああ、太陽は無事我等の手に堕ちた。帰投するぞ。」

…此処で貴様の虚閃など撃つたら、後に何も残らなくなるだろう。それは藍染様の意にそぐわない。」

切れかけていた茶葉のストックも購入した、もう此処に用はない。とレジ袋片手にそう言うウルキオラに、ジェーン・ドウは掌にチャージしていた虚閃のエネルギーを握り潰して霧散させ、軽くため息を吐

いた。

「ちよつとー、買い出しするんなら言つてよ。

せつかくポイント溜まってたのにさ。」

「知らん、さつさと帰るぞ。」

「へいへーい。」

あ、じゃあね子供隊長。もう何処へなりと行っていいよ。

おいマルちゃんヤミー、それから聞いているかわかんないけどルピも、帰るよー。グリムジョーは強制送還な。」

ふつと、重々しい霊圧から開放され息を荒らげる死神達を尻目に、彼女の作り出した反膜に包まれた破面達はあつという間に黒腔へと消えて行った。

日番谷達は、余裕の笑みを浮かべ手を振り消えていくジエーン・ドウを見送りながら歯噛みする。

破面達が去り、気の抜けた拍子に松本と弓親が膝から崩れ落ちた。

「はっ……はっ……はっ……はっ……ッ!!」

「間近で浴びるととんでもないですねアレ……生きた心地がしなかった……」

「尸魂界へ通信は?」

「……駄目です、靈子の乱れが激しくて伝令神機がイカレちゃいました。」

「あの総隊長が化け物扱いするのも領けるな……」

認識を改めなければならぬ。

始祖の虚は噂どおりの化け物だ。護廷十三隊総出で掛かっても相手になるのかどうか……

「いやー大変だったツスねー護廷十三隊の皆サン。」

「浦原喜助か……」

「少しお話があるんですケド、お時間大丈夫ツスカ?」

先程までヤミーの相手をしていたというのに、殆ど傷を負っていない喜助は飄々と笑う。

後に彼の出した『提案』に、半ば訝しみながらも日番谷は頷いた。

☆☆☆☆☆

尸魂界 瀨靈廷内

護廷十三隊十二番隊隊舎、通称「技術開発局」

「……ふっふっふフフハハハハツツ!!」

素晴らしいツ！素晴らしいネ！

霊圧を放つただけでアレか！未知の存在！始祖なる虚！

実に：実に実に実に研究しがいがあるヨ！」

研究室の奥、日番谷本人には黙って取り付けた監視用の菌からの情報を得ながら、技術開発局局長涅マユリは笑っていた。

実際のところ、ジェーン・ドウの放つた霊圧によって菌は軒並み死滅したため、詳細な情報は得られなかったが…

「なんとしても捕えなければ…私の探究心を満たす為にネ…」

まるで新しい玩具を見つけた子供のように、マユリは暗い研究室の中で嗤い続ける。

☆☆☆☆☆

「ただいまー！」

グリムジョー、まーた不機嫌になってるけどどしたん?」

「……別にイ。」

「ふんふん、あのオレンジ髪とは戦えたけど散々他の奴に邪魔されて消化不良だと。」

「当たり前のように心を読むな!?!」

「まー安心しなよグリムジョー。藍染君が考えて、ウルキオラが実行したなら、間違いなくオレンジ髪の子とはまた会えるさ。」

「……?」

## 十三話 戦争前夜

「くそっ……くそっ……!!」

あのちっこい隊長、今度会ったら絶対捻り切って殺してやる……ツツツ！」

「あう……ルピさん落ち着いて……」

「落ち着いてられるかよ！」

腕凍らされて斬られたんだぞ!?もう元には戻らねえんだよ！」

「無くなったものはしょうがないですし……あ、ピザ食べます……?」

「食べる（半ギレ）！」

声を荒らげながらピザを一切れマルちゃんに食べさせて貰うルピ、その隣には皿に盛られた大盛りの麻婆豆腐をガツガツ食べるヤミーもいるよ。

さつき現世から虚圏に帰ってきて、私の宮で二次会をやってる。

こんな事もあるうかと、ルドボーン君に料理を教えて私たちが出ている間に色々作って貰っておいたのだ。なお渋ったグリムジョーと、序でにその場に居たウルキオラは引っ張って連れてきた。

「……なぜ俺まで……」

「犬に噛まれたと思って諦めろ、此奴に捕まったお前が悪い。」

半ば諦め半分でそばにあったタンドリーチキンを掴み取り、豪快に齧るグリムジョーを見ながら、上品にスパゲッティを食べるウルキオラ。

他にもシャルロッテ、ハリベル、スンスン達三人娘もこの場に来てる。ダーリンにも声を掛けてみたんだけど無視された、辛い。

どうやら藍染君の企みは無事成功したらしい。ウルキオラは接触を終え、私達は囹の役を演じきった。あとは明日、彼女が自分から此処へやって来るのを待つだけだ。

心理に多重の檻ねえ、藍染君もいやらしい事を次々と思いつくもんだよ。流石エロメガネ…最近メガネ捨てたから只のエロ野郎か。

「藍染様をザエルアポロの様な扱いにするのは止めろジェーン・

ドウ。」

あつザエルアポロはいいんだ：

びんぽーん　　びんぽーん

食事を続けていたら宮のインターホンが鳴った、霊圧を探ってみる……樽をすればザエル<sup>H E N T A I</sup>アポロのお出ました。

ルドボーン君、宜しく。

「畏まりました。」

少しすると少しやつれたザエルアポロがルドボーンに連れられてやって来た。

「ザエルアポロ様、此方をどうぞ。」

「ああ濡れタオルか、すまないね……」

お前に頼まれていた代物が今しがた完成したぞ、ジエーン・ドウ。……ていうかなんだこの騒がしさは：フゴアツ!？」

呆れた表情でそう呟くザエルアポロの口に取り敢えずマカロンのぶっこんで黙らせておく。疲れた時は甘いもん食えって、ばっちやが言ってた。

「ご苦労さんザエルアポロ、取り敢えずその数日ラボに引き籠もってダンスの奥にしまい込んだ古着みたいに汚い身なりを直しておいでよ。お風呂貸したげるからさ。」

「……ングツ……誰が古着だ！」

……普段なら断るところだが、今回ばかりはアレの開発でこの天才にも少しばかり疲労が溜まっていてね、有難く使わせてもらおうよ……」  
素直じゃねえザエルアポロは渋々ルドボーン君に案内されて部屋の奥へと入っていく。

「ジエーン・ドウ。ザエルアポロに何を開発させていた？」

藍染様から報告はなかったが……」

そんな怖い顔（無表情）するなよウルキオラ。黙ってやってるわけじゃないし、藍染君からも「好きにするといい」（声真似）って言質貰っ

てるからセーフセーフ。

「……そうか、藍染様に害せぬ物ならそれでいい。

だが…何故こんな事をする、ジェーン・ドウ。

破面に食事は不要だ。風呂も、休眠も、お前が過去に催した余興の数々も、時間を浪費するだけの無駄な行為だ。

なのに何故貴様は俺達に無駄を強要するのか、俺には理解できない。」

……………ポエムかな？

「ポエムじゃない、真面目な話だ。」

あーもーそーいう心無いですアピールはいいから、今は黙って飯を食いなさいよ効率厨め。

そこに座ってパスタ食ってるってことは、『無駄』とは思っていても『嫌』じゃないんでしょ。

「元より俺に好き嫌いなどない。」

味は？美味しい？

「ミートソースの程よい酸味と塩気が麺によく馴染んでいる。」

そうじゃなくて、美味しいか不味いかで聞いてんの。

「……………分からない。」

あつそ。

まー途中で食べるのを止めないって事は、そういう事だよ。

「どういう事だ。」

さあー？自分で考えな。

少し首を傾げたウルキオラはまたつるつるパスタを啜りだす。

「おいジェーン！麻婆が切れたぞ！

新しいのくれ！」

ヤミーのデカイ声が私の所まで届いた。

あのヤローさっきお代わりで大皿注文したのにまだ食うか！アレ結構辛く作ったし、後で腹下しても知らんぞ。

ルドボーン君の分身達が厨房と客間を行ったり来たり走り回る、ホ



ント便利な能力だなカラベラス髑髏兵团。

ルピもいい加減機嫌直しなよ、腕の一本くらいトレパドーラ発動すればどうにでもなるじゃん。

「斬られたのが気に入らないんだ！」

あのクソガキ…覚えてろよ……!!」

そんな文句タラタラなルピ君にはホレ、ジエーンお姉さん特製レアチーズケーキの試作品をくれてやろう。美味しいゾ？

「私が食べさせてあげますから…はい、あーん…」

「ケーキひとつでイライラが収まるわけ(パクッ)…美味しい。何コレ。」

ルピちよろくね？

「ルピばつかズリいぞ、俺にも寄越せよ。」

まあまあ落ち着けヤミー、こいつの完成品は今度の十刃集会で皆にお披露目してやるからさ。

「ホントか!?!絶対だぞ?」

ホントだぞー美味過ぎて整プラスになっちゃっても知らないからな。

「…ヤミー、興奮し過ぎだ。はしたないぞ。皿を置け。」

完っ全にヤミーの保護者みたいになっってんなウルキオラの奴……

『…ジエーン、聞こえるかい?』

ッ!?!?!?!?

うむびっくりした!!

突然の耳を舐めるようなねっとり藍染ボイスにびくつと身体を震わせてしまった。でも周りの連中には聞こえて無いみたいだし、私にしか届いていないようだ。

あはは、ホラーかよ。頭の中に直接藍染君の声が聞こえた気がした、末期かな…

『末期では無いしホラーでもない。』

縛道の一種だ、君のみに語り掛けている。』

本当に藍染君だった。こ、こいつ直接脳内に…っ!?

縛道つてのは死神が使う便利技の1つだ。どうやらアローロニーロの認識同調みたいに特定の相手に念波的な何かを飛ばせるらしい。死神って便利な技持つてんのね。

ボスから突然の呼び出しである、カツアゲかな？

『カツアゲではないよ。』

アカンこの状態だと心読まれる、変な事考えないようにしよう…

『…覗き野郎はストレート過ぎないかい?』

ヤダナーソンナコトオモウワケナイジヤナイデスカーアハハハハ

『まあいい、本題に入ろう。』

直接会って話したい事がある、今から私の所まで来れるかい?』  
最近よく呼び出しくらうな…まあいいけど。

じゃアルドボーン君、あと宜しく。

呼び出しくらったんでちよつくら藍染君トコに顔出して来るよ。

アイツら、騒ぐだけ騒いだら大人しく帰つてくから付き合つてあげて。シャルロツテにはお土産渡したげてね。

なんかあつたらマルちゃん是最優先で保護すること。

「承知致しました、行ってらっしゃいませ。」

どうせヨン様紅茶しか飲んでないだろうから、余つてたお茶菓子幾つか見繕つて持つて行ってやるか。

私つてば気遣いの出来るいい女。

『…本気でそう思っているのだから君は面白い。』

心を読むなア!

☆☆☆☆☆

ジエーン・ドウ、という破面がいる。

背丈は女性破面にしては大柄で、ベージュの髪と深紫の瞳が印象的。特筆すべきはその身に宿した始祖の霊圧と、破面化により発現し

た空間移動能力。「虚圏内なら何処へでも一瞬で移動可能」という馬鹿げたスキルと、「虚圏で初めて黒腔を開いた虚」という事実に基づく黒腔の絶対支配権。藍染様曰く、「虚圏の番人」のような力を持つ破面。

戦力という面で奴を見るなら、たった一人で我々十刃と戦っても、条件次第ではあるが此方を一方的に捌り殺せる程度には戦闘力が高い。

近接攻撃もさる事ながら、真に恐るべきは奴の帰刃だ。レスレクシオン

ジェーン・ドウの持つ真の力の解放：詳細には明かされていないが、藍染様の厳命により虚夜宮内での斬魄刀所持すら認められていない事が奴の危険性を表している。

そして、奴を最も最大にして最恐たらしめる要素が、『性格』だ。

奴は普通の虚とは違う。俺の今まで見てきた虚は料理もしないし、現世に買い物へも行かないし、無限にクツキーを出せない。それらは全て虚にとって無駄であり、意味の無い行為だからだ。大虚という『個』を失った存在から進化した我々は、互いに喰らい合い、他を蹴落としながら成長し続けるしかない。それが虚の全てだった。

だが奴はどうだ。極力戦いを避け、無駄な余興に勤しみ、まるで人間かのように振る舞う。奴曰く、「やりたい事やって何が悪い」だそうだ。その言葉に深い意味は無い、ただ奴は自分の思うがままに振舞っているだけだった。

しかし、いつしかそれが他の十刃にも伝播したのか？

ヤミーは「寝るよりパワーが溜まる」と言っつてしよつちゆうジェーン・ドウの料理をせがむようになったし、先日的一件でグリムジョーは心做しか落ち着きを取り戻し、冷静な判断が下せるようになった。(その事を奴は「やっと中学校卒業して高校生になれたねー」と屈託のない笑顔で褒め称えていたが：褒めていたのか?)

長年の友人と呼称されるザエルアポロ、アローニーク、ハリベルは勿論の事、最近は妙に大人しいバラガン等も、奴の影響を受け、変わりつつある。

それは意識の改革、奴曰く「心に余裕を持つ」という事らしい。俺

には理解出来ない。

藍染様から「彼女の余興には極力付き合うように」との命令を受けている為、過去に奴が行った、『女破面が布の薄い服を着て衆人観衆のもとプールに浮かべられた足場でハチマキを奪い合う謎の大会』の解説と実況も務めたし、『とにかく限界まで食事を食わされる選手権』では次々出されるわんこそばをヤミーと競い合いながら平らげた。更に最近行われた『指定された24時間以内に笑う度、尻を鋼鉄のハリセンでシバかれる謎の会』では藍染様のご指名通りパーソナリティ兼進行役をジェーン・ドウと共に完遂した。

多くの破面が参加し、泣いて、笑って、時折むせかえって、表情を変えていく中、何故皆がそうなっていたのか俺には分からない。

……だが、奴の本質は掴めてきた。

『依存』

藍染様はジェーン・ドウの死の形をそう例えていた。

虚が持たざる物を与え変化を促す始祖の虚、その先にあるのは進化か、それとも墮落か……兎に角奴が及ぼす影響は計り知れん。

だが、ここで1つ疑問が浮かんでくる。アローロニーロに並ぶ知己であるザエルアポロ・グランツ曰く、「目的の為なら手段を選ばないイカれた奴」であるジェーン・ドウの本当の『目的』とは一体何なのか。見定めなければならない。

藍染様のご命令通り、これからも経過観察が望まれる。

そして何か不都合があった場合……

俺の手で、始末を付けなければ

☆☆☆☆

「やあ、ジェーン。来てくれたね。」

「なんの用さ、藍染君。」

「いつものように空間転移を使い、突然私の部屋に現れるジェーン・ドウ。」

その表情は明るくもなく、暗くもなく、『あーまためんどうい上司に仕事当てつけられるー』とでも言いたそうな複雑な面持ちだ。

「まずは陽動の指揮、御苦労だった。」

ウルキオラは予定通り井上織姫と接触、無事『楔』を打ち込んだだろう。君には現世時間の明日、ウルキオラと共に彼女を迎えに行つてほしい。」

「まあた私タクシー扱いですか、へいへい分かりましたよつと。」

「んで、崩玉サンの具合はどうよ?」

「滞り無い、とだけ言っておこう。」

「ふーん。いつも通り、結局全部藍染君の思惑通りって訳ね。」

「あ、お茶菓子持ってきたけど食べる?」

「頂こう。」

そう言つてジェーンは慣れた手つきで紅茶を淹れ、カップに注ぐ。指を鳴らせば皿に乗せられた色とりどりのマカロンが机を彩つた。

味もお墨付きだ、彼女の料理と菓子作りの腕は破面でも群を抜いている。

……本当に奇異な虚だ。

言動、生活、思考、全てに於いて通常の虚とは掛け離れ、多くの破面が抱く力への渴望や、闘争心を微塵も表に出さない。『自分のやりたい事だけ』を目標とし、障害を排除する時だけは、本来の残虐性を垣間見ることが出来るだろう。

性格はおちやらけ、しかし責任はきちんと果たす。更に戦闘しか能のない破面を争い以外で懐柔し従える統率力は素直に評価すべきだろうが、普段抱えてくるトラブルが時折頭を悩ませる。

そんな「虚らしからぬ虚」、彼女が虚圏最古の骸とは…涅マユリ等ならどんな手を使つても彼女を手に入れ解剖し、骨の髄まで調べ尽くす

事だろうな。もつとも、彼がジエーン・ドウ制御装置の無い核爆弾という虚を御しきればの話だが。

「でさー。ルピが腕無くしてイライラしてるから、なんとかしてやりたいなって。」

「破面になると再生能力失うんでしょ？」

「ふむ、それも井上織姫が此方へ来た折に対処しよう。」

彼女の力は優秀だ、瀟霊廷がわざわざ気に掛ける程度にはね。人質としても、囹としても十二分に役割を果たしてくれるだろう。」

そうすれば、彼と彼等の仲間達、それに連鎖して護廷十三隊長格数名の戦力が外界と隔離された此処虚圏へとやって来るのは容易に予想出来るからね。

「そこでこつちで死神達をO★M O★T E★N A★S Iすりやいのね、OK把握。」

「君の言うそれには不気味さしか感じないが、それでいい。殺す気でやらないと護廷十三隊は落ちないからね。」

彼女は他の十刃との関係も良好だ。

友好関係は勿論の事、破面に新たなアイデアを与え、進化を促している。これも彼女の思考の向きが虚のそれとは掛け離れているからだろう。

#9、アローニーロは彼女と出会い、自身のコンプレックスを克服し虚の多様性に気付いた。

#2、バラガンも過去に彼女に諭され、王としての気質をより一層深める事に成功し、自身の能力の弱点を自覚すると共に、過去に私、ギン、要で行った虚圏侵攻の際にはこの私に手傷を負わせるほどの実力を得ている。

彼女が探し当てた#1、コヨーテ・スターク・リリネット・ジンジャーバックは抑えきれなかった霊圧を制御しようと努力し、近日それを成し遂げ更なる進化を得た。刀剣の第二解放、とても興味深いね。

他の者達もジエーンと接触し、多くが知的に成長し、破面としてより高みへ上りつつある。

これは崩玉でもなし得なかつた事だ。

『創造』の更に上のレベル、『成長』だ。彼女は無自覚だろうが、これ程の成果を出してくれたのには感謝している。

「まあた悪い事企んでる、酷い悪人面だよ藍染君。」

「君に言われたくないね。」

「おうコラ表出る。」

他愛ない会話で致死レベルの霊圧が漏れ出すのにももう慣れた。

「計画は既に始まっている。」

死神達が此処へ来るのも時間の問題だろう、その前にお互いの意思を確認しておきたくてね。」

「確認するもなにも、最初に話した時から変わらないよ。」

私は私の為だけに、君は君の為だけに動く。お互いどうしようもなく身勝手に、我儘で、独善的な悪巧みだ。」

ニヤニヤ笑いながら皿から摘んだマカロンを手で転がして、ぱくりと頬張るジェーン。

「強いて言うなら、せめて私と君が殺し合いにならないように舞台を回すんだね。」

いや、その前に後ろから刺されるかも。藍染君敵多いし。」

「……彼がどうやって食らいについて来るのか、正直に言うに興味があつてね。」

「好奇心は猫を殺すって言葉知らない？」

「私は猫ほど大人しくはない。」

「確かに、藍染君が猫は無いわー。ヒグマとかじゃね？」

「もう少し愛嬌のある動物は居なかつたのか……」

流石にヒグマは酷いと思うんだが。

ああ、本当に、虚圏を拠点において正解だったと、今では自分の慧眼に感心しているよ。

戦略的拠点としての利点もさる事ながら、この数ヶ月は実に有意義な時間を過ごせた。

崩玉の覚醒実験もさる事ながら、彼女との出会いは、日々潤いを

与えてくれた。

こうして2人向き合って紅茶を啜り、茶菓子を摘みながら他愛もない会話を楽しむ。

そんなぬるま湯のような時間にずっと浸っていたいと、何度も思った。しかし……

「私は前に進まねばならない。」

「……そかそか。」

そこまで嫌なんだね、その『霊王』つてのが。現世の街一つ消し飛ばしても足りないくらい。」

「……まあね。」

あんなモノが世界を留めている今が許せない、私は私を制する物を打倒する。

その為の永きに渡る護廷十三隊への潜入、虚圏への転居、破面の完成、そして王鍵の創造だ。

私は私のやりたいようにする

「君の受け売りだがね。」

「いい目えしてんじやん、藍染君。」

やっぱキミは面白い死神だよ。」

満足そうにジェーンは微笑んで、また一つマカロンを口へ放り込んだ。

詰まるところ、私と彼女は似ているのだ。

「やりたいようにやる」。そしてそれだけの力が私達には有る。常人離れた霊圧、卓越した斬拳走鬼、有り余る己の力を現す斬魄刀。それら全ての要素をもって、目標達成までの足掛かりとする。

差異があるとすれば、生まれ育った環境の違い程度か。

彼女はこの虚圏で理解された、しかし私は尸魂界で終ぞ理解される事はなく、故に偽りの笑顔で仮面を作り、ほかの者を全て駒として利用した。



受け入れられた彼女が妬ましくないとさえは嘘になる、か。  
心の何処かで私はきつと、私と対等になれる存在が欲しかった。  
それが無理ならせめて……

「どうしたむつつりスケベ、じつとこっち見て。」

「……………いや、なんでもない。」

君とこうして話すのは不思議と嫌じゃない、と思っただけさ。」

「あ、デレ藍染だ珍しい。いつもはエロ藍染なのに。」

「……………」

本当にシリアスの続かない奴だ。

もはやツッコミ返す気も無くなったので黙ってマカロンを一つ摘んだ。うん、美味しい。

## 十四話 引鉄を我が手に

ねえーウルキオラ、ホントにあの子来るの？

「黙って待て、ジエーン・ドゥ。」

藍染様のお考えになった事だ、間違いなく女は現れる。」

深夜の空座町、街の片隅で、私の能力使って完全に霊圧を消した私とウルキオラは、ある女の子を待っていた。

藍染君が目を付けた井上織姫という人間の女の子、前にウルキオラの映像で出てきた子だ。あの時は仲間のもげた腕を治療してたっけ。

「……………来たか。」

予定時刻ピッタリ、井上織姫が現れた。

ウルキオラの渡した特殊なブレスレットを着けているので、霊圧は破面にしか知覚出来ないし、『現世の物質を透過する』っていう覗きし放題のチート能力持ってるんだって。

製造元はどうせザエルアポロだろう、変態はなんでも作ってくれる。

「行くぞ。」

「……………はい。」

素っ気ない返事、私と目が合ったから手とか振ってみたけど反応は薄い。

藍染君の作戦はひどいもんだ、あのやり口だと死神側裏切った様なもんだからね。

ではでは、織姫ちゃんを虚圏へご案内〜。

……………

井上織姫という女の子、アレでかなり強い子だ。あの藍染君の本気の霊圧受けても気丈に振舞ってたし、虚夜宮で完全にアウエーにも関わらずまったく物怖じしてない。

そのまま命じられて、無くなつたハズのルピの左腕を治したのは驚いた。

破面って虚だった頃の再生能力とか失ってるから、千切れた程度ならなんとか繋ぎ合わせられるけど、燃やされたり、凍らされたりして完全に消えちゃうと二度と元には戻らないんだ。なのに織姫ちゃんが手当をすると、腕が元から生えていたかのように元に戻った。

これを藍染君は『事象の拒絶』と呼び、神に近い能力なのだと言った。難しい言葉が多かったので途中から寝てたケド……

とにかく、彼女は傷を負った事実を否定して、無かったことにしてしまえるらしい。

それから、織姫ちゃんの世話はウルキオラがするようだ。

やったなウルキオラ！リアルの子と触れ合えるで！

心が無い（笑）ウルキオラ君、全く女つ気が無いからお姉さん心配してたんだよ。これであの子にも遂に春が……

「ジェーン・ドウ、貴様余計な事を考えているな？」

それにしても織姫ちゃん、うーんこの…デカイ（確信）

「ジェーン・ドウ、流石に俺でも今貴様が何を考えているのか容易に想像ができる。」

取り敢えず視線を上を上げる。」

ハツハツハ、ナンノコトカナ

「仲が良さそうで何よりだ。ウルキオラに同じく、ジェーンにも彼女の面倒を任せよう。同性にしか言えない悩みもあるだろうからね。」

新たな同志をもてなしてやってくれ。

それから…織姫、君に見せたいものがある。付いてきてくれるかい？」

笑顔でそう告げる藍染君は織姫ちゃんを奥の部屋へ案内していった。

あ、警備のロリとメノリが部屋から出てきた。

ロリったらブツブツ文句言ってる、嫉妬は見苦しいゾ。

そして暫くすると織姫ちゃんだけ帰ってきた。

多分崩玉を見せたんだろう、織姫ちゃんから冷や汗が止まらない。

「貴様の部屋はこっちだ。行くぞ、女。」

「……はい。」

相変わらず無機質無表情無愛想100%で世の女の子をドン引きさせるのが得意なウルキオラきゅん、こりやもう才能だね。女の子から嫌われる固有スキルでも持ってんのかよ。

こんな事もあるうかと現世から持ってきた恋愛ゲーム借してやったる？何やってんのさ。

「知らん、アレは一通りやり終えたが何の感慨も得なかった。」

律儀に全ルートクリアしとるんかい。

なーんて歩いている内に織姫ちゃんの為に用意された部屋に着いたので、さつさとウルキオラを追い出す。

私は織姫ちゃんと2人で話がしたいのだ。

「別に構わんが…余計な事を吹き込むなよ。」

うっせー顔面死後硬直野郎、さつさと出てけ！

「罵倒のバリエーションだけは豊富だな。」

☆☆☆☆

「じゃあお話しよつか、井上織姫ちゃん……」

長いから織姫ちゃんでもいい？」

「は、はい……」

ウルキオラという破面が部屋から出ていって、私は残った彼女と付き合って椅子に座っている。

ベージュの髪に紫色の瞳、名前は確か…ジエーンと言ってた。

「私の名前はジエーン・ドウ、現世だとちよつと不吉な名前かもだけど、気にしないでね。」

まずはようこそ、虚圏へ。歓迎するよ。

いやー虚夜宮って男世帯だからさー、女の子って貴重なのよね。

あ、生活しててなんか不便な事があつたら遠慮なく私に言ってね。ウルキオラの奴女心全くわかってないスカポントンだから。コスメとか、女の子特有のアレとか、人間って色々気を付けないといけないことが多いんですよ？雑誌に書いてあつたよ。」

「ええ!?あ…はい、ヨロシクオネガイシマス…」

あれ？あれあれ？

思ってたより随分フランクだ。もつとこう…「お前に人権は無え！」みたいなひどいことを言われるのかと思ってた！

ていうか破面って雑誌読むんだ…

「取り敢えずお腹空いてない？空いてるよね？」

「ご飯用意してあるから食べなよ。」

そう言っただけで彼女が指を鳴らすと、何処からともなく皿に盛られた大量の料理が！

「うわ…すごい…」

「丁度私もお腹空いてたからさ、一緒に食べよう。」

心配しなくても毒なんて入ってないから安心してね。キミはお客様なんだから。」

山盛りのピラフを小皿に取って差し出してくるジェーンさん。

美味しそう…はっ?!いけないいけない!

私は人質、駄目だよ簡単に心を許しちゃ…

美味しい料理なんか絶対負けない…!!

〜30分後〜

「で〜？織姫ちゃんは好きな子とかいんの？」

「やっぱりあのオレンジ髪の死神君？」

「え…いやあその…ゴニョゴニョ…」

「乙女らしい反応しちやつて可愛いなーこのー!」

「やっぱりご飯には勝てなかったよ…!!」

「お酒じゃないから大丈夫!」って飲まされたなんか口の中はちばちばする飲み物を飲みながら、気が付いたらジェーンさんと2人で恋バナに耽ってた。

ジェーンさんは現世の生活に興味津々で、目をキラキラさせながら私の話を聞いてくれる。

虚圏、ホントに娯楽少ないんだなあ…

「織姫ちゃんはその子の何処が気に入ってんの？」

「くっ…黒崎君のいい所…？」

「かっこいい所とか、優しい所とか、頼りになる所とか…それからそれから…」

「自分でもびつくりするくらい口が軽いよ!？」

「ああっ!ここ来る前に黒崎君の家に忍び込んでやらかしたアレコレが走馬灯のように蘇る!？」

「ほわんほわんほわん…」

『あーあ、人生が五回くらいあればいいのになあ…』

『そしたら私、五回とも…黒崎君を好きになる。』

「ぼっ!!!」

「オワアアアアアアアア!？」

「私はなんて恥ずかしい事を…!!!」

「ほわああああああああああああああああああ…今思い出したら死ぬほど恥ずかしいっ!？」

「何アレ!?!ふおおおおお…」

「急に茹でたタコみたく赤くなっただろうしたの織姫ちゃん!？」

「ジェーンさんに心配されてしまった…挙動不審でゴメンナサイ

…

「織姫ちゃんは面白いなあ。破面は基本戦うことしか考えてない脳筋共だから、こういう話は新鮮で楽しいよ。」

「そう言いながら笑うジェーンさんを見ると、自分が人質だって事を忘れてしまっそうになる。」

「いけないいけない!せめて私も彼女から情報を引き出さないと…」

「あの…私からも1つ、聞いてもいいですか?」

「返せることなら。」

「なんで…貴女達破面は、藍染…様に従うの?」

「……むふふ、それはね。」

単純に彼が強いからだ。虚圏は単純な縦社会だからねー、強い者が弱い者を支配する、弱肉強食の世界なんだよ。ま、それ以外にも破面にしてくれた恩返しをしたい奴とか、コテンパンにされて復讐の機会伺ってる奴とか色々居るけど、それでも虚圏が藍染君の元に纏まっている原因は彼の実力のおかげかな。」

でも…と更に彼女は付け足す。

「ひねくれ者なんだよ、藍染君は。」

自嘲気味に笑うジェーンさん。その表情には、友人を気遣う時の様な優しさが感じ取れる。

この人、たつきちゃんに似てるかも…

「私達は善か悪なら間違いなく悪だ、元は虚なんだしね。」

でも、藍染君のお陰で私達は虚の因果から外れて破面になれた。

こうして織姫ちゃんにご飯食べながら笑う事だってできる、その辺に関しちや感謝してるよ。

そんな私達のボスが死神と戦えって言うなら、私はそれにある程度は従う。

破面なりの恩返しって奴さ。」

ま、実は無理矢理力で従わされてる奴の方が多いんだけどね。ははは。

と、ジェーンさんは笑ってた。

「そう…ですか…」

でも私、たとえ悪人だとしてもジェーンさんに会えてよかったです…」

「…いやっぱり織姫ちゃんは可愛い子だね。」

頭を撫でられた!?

「その辺りで止めておけジェーン・ドウ。」

いつの間にかウルキオラがジェーンさんの側に立ってる、びっくりした…

「んだよノックくらいしろウルキオラ、レデイのお部屋だぞ。」

「知らん。」

ウルキオラとジェーンさんが言い争いを始めたその時…

ゴゴゴゴゴゴ……

「っ!？」

「……………!？」

「……………」

空間が揺れてる、無理矢理何かをこじ開けるような歪な霊子の揺れを感じた。

「…来たか。奴らの正確な位置を教えろジェーン・ドウ。」

「22号地下通路かな。」

うゝわ雑な黒腔の開き方しやがってー、穴ガツタガタじゃん。素人の仕事だよ全く。」

2人が何か話してる、その後直ぐにウルキオラは去って行って、ジェーンさんもこつちを見てニコツと笑った。

「ゴメンね織姫ちゃん。もうちよつと話してたかったんだけど、行かなきゃならなくなっちゃった。」

食事は置いておくからお腹が空いたら食べるんだよ?じゃねっ!」  
早口でそう言って、ジェーンさんはパツと消えてしまった。

「あ、言い忘れてた!」

戻ってきた!？」

「着替え、そのソファに置いてあるから。」

ドロドロの服じゃ気持ち悪いでしょ?着替えるといいよ!」  
また消えた!？」

☆☆☆☆

虚夜宮内、暗い廊下を複数の足音が響く

円卓に設置された椅子は十席。ゾロゾロとやって来た人影は、それぞれの席へと腰を下ろした。

誰かが言った



「侵入者らしいよ。」

侵入者

虚圏がある男に統一されてからは聞きなれない単語である。

上級破面の巢窟である虚夜宮に侵入しようとする野良虚などまず居ない、純粋な力で上下関係にある彼等にとって、次元の違う相手にわざわざ近付くような馬鹿な真似などする筈が無いからだ。

なら、この侵入者とは何者か？

「崩落したのは22号地底路だそうだ。」

黒人の様な出で立ちをした破面が言った。

「22号オ？また遠い所に出たもんじゃのオ。」

それに答えるのはガタイの良い老人、顔の傷跡が彼の威圧感を増している。

「全くだね、どうせなら一気に玉座の間にも現れれば面白かったのに。」

残念そうにそう言う眼鏡の優男は肩を竦めた。

「仮にそうなれば、藍染様の御手を煩わせる事になる。軽口は慎めザエルアポロ。」

彼を戒めるのは褐色金髪グラマラスな身体をした女。

「ふあああ…眠み…」

そんな彼等を見ながら、欠伸してさっさと終わらないかと考えている黒髪の男。

「……………ジェーンの姿が』『見エナイケド?』」

仮面の破面の一言に、皆がピクリと反応した。

「あの女の事だ、どっかで菓子でも作ってんだろ。」

「オイ！アイツが来なけりや約束してたケエキはどーなんだよ！」

「知らん。」

ある男は面倒臭そうに溜息を吐き

ある男は巨体を揺らして憤慨している

ある男は一切表情を変えずに答えた。

『憤怒』  
『強欲』  
『狂気』  
『陶酔』  
『破壊』  
『虚無』  
『犠牲』  
『老い』  
『孤独』

主人の命にて集まりし九つの刃達、殺戮能力の高い順に選別された彼等の総称は、《十刃》

全員が席に着き、1席を残すのみとなる。

それが埋まるより先に、奥の扉が開き3人の男達が姿を現した。

白で統一された死縛装に身を包む3人の内、先頭の男が薄く微笑み静かに告げる。

「諸君、よく来てくれた。」

まずは…紅茶でも淹れようか、お茶菓子も付けてね。」

「……皆に紅茶は行き渡ったかな？」

十刃の座る席を見渡し、紅茶が行き届いた事を確認する藍染。それを見て、アールローの仮面が僅かに動き、無機質な声を発する。

『ジェーンガ居ナイヨ、藍染サマ。』

「居るさ、君の隣に既に座っている。」

それを聞いた十刃達の視線が一斉にアールローの横の空席だった場所に注がれた。

「は〜いお待たせ、ジエーンお姉さんですよ。」

そこにはベージュのポニーテールを揺らし、首元には『5』の数字。他の者とは一風変わった海賊の様なコートを死縛装の上から羽織った破面が、いつの間にか脚を組んで椅子に座っている。

彼女こそ十刃最後の1人、始祖の虚ジエーン・ドウ。

司る死の形は、『依存』

「いやあメンゴメンゴ。」

お待たせ藍染君、頼まれてたお茶菓子だよ。」

パチンつと笑顔のジエーンが指を鳴らすと、十刃達の目の前に置かれた紅茶のカップの横へ、皿に載せられた白いケーキが現れた。

頭頂部には黄色くて四角いゼリーの様なキューブがちよこんと載せられデコレーションされている。

「私特製、レアチーズケーキ。」

デコレーションにちよつち時間かかっちゃった。さあ遠慮なく食べてよ!」

満面の笑みで促すジエーンに、十刃達の反応は様々だが、いの1番に食いついたのはヤミーだ。

自身の掌ほどにも満たない大きさのケーキを小さなフォークで器用に半分ほど切り取って、口に運ぶ。

「美味えー待たされた甲斐あったぜ!」

その声を聞いて、他の十刃達も1人、また1人とケーキと紅茶に手をつけ始めた。

『『美味しい。』』

「また腕を上げたなジエーン。」

スンスン達がお前を師と仰ぐ理由が分かる。」

「でっしょー?ふはは、もっと褒めろ褒めろ。」

レアチーズケーキ。

作るのに手間がかかるのが難点だが、完成すればこれ程美味なるスイーツもないだろう。

自称虚圏一の料理人ジェーンの手により作られ、チーズ特有の臭いやくどさも無く、しかし濃厚で後味さっぱり。

ここ最近（ほぼ強制的に）食べる彼女の手作りで舌の肥えた破面達にも好評であった。

「ジェーン・ドウ。」

頭頂部にある物体はなんだ。」

ケーキをつまみながら、ウルキオラが口を挟む。

「何って、ゼリーだよ。」

現世で買ってきた蒟蒻こんにやく何とかって歯応えのある奴をクラツシユして、形整えて載せてるの。因みにウルキオラのはブドウ味ね。」

ハリベルとグリムジョーのはリングゴで、ゾマリとアールニー口のはオレンジかなー。他にも色で味が違うゾ。

と、解説するジェーンから視線を外したウルキオラ。周りを見回してある異変に気付く。

「貴様とザエルアポロ、そして藍染様のケーキにはそれが乗っていない様だが……」

「ああそれね、思ったよりゼリーの数が少なくてさ。ザエルアポロと藍染君の分まで足りなかったの。」

藍染君には了承得てるし、ザエルアポロは拳で黙らせたから気にすんなし。」

そう言っつてジェーンは呆れた表情のザエルアポロを無視して藍染に視線を送り、彼もそれに頷いた。

「彼女の言う通りだよ、ウルキオラ。」

私はきみにこそ、これを食してほしい。」

「……………命令とあらば。」

訝しみながらも、ウルキオラはケーキとゼリーを口に運ぶ。

ゼリーはジェーンの言った通りブドウ味で、口の中でシュワシュワと炭酸が弾けた。

「……………」

「美味しい?」

「……………分からない。」

無表情で戸惑うような仕草のままケーキを食べ続けるウルキオラにニコツと笑いかけ、ジェーンも自分のケーキにフォークを伸ばす。

これ以上ないくらいほのぼのとした雰囲気の中、十刃達の集会は幕を上げ、そして幸いな事に、これ以上3人だけゼリーが載っていない理由を追求する者はいなかった。

.....

「さて諸君、空腹も満たされた事だし聞いてほしい。」

敵襲だ

ケーキを食べ終えた藍染の一言にピリリと緊張が走る。

藍染に命ぜられ、東仙が機材を操作すると、長机の中心が丸く開き、そこには虚圏の砂漠をひた走る3人組が映し出された。

「…コイツが」「敵ナノ?」

「なんじやい、侵入者というからどんな軍隊かと思うたら、まだ餓鬼じゃアないか。」

「ソソられないなあ、全然。」

「侮りは禁物だよ。彼等は嘗て『旅禍』と呼ばれ、たった4人で尸魂界へ乗り込み護廷十三隊に戦いを挑んだ人間達だ。」

たった3人、しかも長命な彼等からすれば赤子のような年齢の人間達が侵入者。その事実を鼻を鳴らすバラガンとザエルアポロに藍染は釘を刺す。

因みにもう1人の旅禍とは現在虚夜宮に在住の井上織姫の事だ。

「仲間を助けにやって来た。と、言うわけですか。藍染様の統治するこの虚夜宮へたった3人で…舐められたものですね。」

「だからと言って侮るな。藍染様はそう仰られた筈だぞ、ゾマリ。」

「22号潰れちゃったって事は、アイスリンガーとデモウラに勝ったんだ。流石に死神相手にタメ張る様な子達に下っ端じゃ相手にならないよねー。」

ま、それで死なれても興醒めだけどさ。

肩をすくめるジェーンを見て満足したように藍染は続ける。

「侵入者は3名。」

茶渡泰虎、石田雨竜、そして黒崎一護だ。」

「……!!!」

グリムジョー、ステイツツ!!!」

「俺は犬か!?心配しなくても奴の名前が出たくらいで勝手に飛び出さねえよ!」

急に両手を突き出しグリムジョーを押さえつけるようなジェスチャーをするジェーンに鋭いツツコミを入れるグリムジョー。侵入者の1人、黒崎一護とグリムジョーは因縁ある相手だが、血の気が多い彼でも時と場所は弁えているようだ。

「……大人しくなつたな、グリムジョー。」

以前の貴様ならそのまま飛び出して藍染様に叱責される所だ。」

「……ケツ!」

それがお前の『変化』なのか…と呟くウルキオラの言葉に適当な相槌をし、グリムジョーは椅子へもたれ掛かる。

…どこからかヒソヒソと話す声がグリムジョーの耳へ届いた。

十中八九碌でもない事だろうが、鋭敏な破面の聴力が嫌でも会話を拾ってくる。

「言つたらろー?グリムジョーってば大人の階段登つたよつて。」

「そうか、あの時の言葉の真意はそう言う意味だったのか。」

勉強不足だった。認識を改める必要がある。」

「でもさ、大人の階段登つたつて言つても絶対アイツ童て「聞こえてんぞジェーンコラア!!!ウルキオラ!テメエもクソ真面目な顔して頷くんじゃねえツ!」よっしゃ、今度ハリベルのおっぱい揉んどくか?」「揉まねえよ!?なんでちよつと顔赤くしてんだよ#3トレスの女ア!」

グリムジョーが爆発した(比喻)

『今夜飲みいく?』位の気軽さでハリベルの胸を指差し満面の笑みを浮かべるジェーンとは対照的に、血管破裂しそうなほどグリムジョーは怒っている。ハリベルは…満更でもないようだ。

ジェーンは知っている、最近彼女は揉まれ過ぎて感度が上がり、そ

の多幸福感がクセになりつつある事を。「正直揉まれない日の方が落ち着かない」なんて考えちやつてる事を。

始祖の魔の手からは逃れられない。

あつという間にいつものゆるーい雰囲気に戻りつつあるのを暫く堪能し、口直しに紅茶を一口含んだ藍染は柏手一つで制す。円卓の間が静まり返ったタイミングを見計らい、言った。

「十刃諸君、見ての通り敵は3名だ。

侮りは不要だが騒ぎ立てる必要も無い。各人、自宮へ戻り平時と同じく行動してくれ。

傲らず、逸らず、ただ座して敵を待てばいい。

恐れるな。たとえ何が起ころうとも、私と共に歩む限り、我等の前に敵は無い。」

静かに、しかし確信を持って宣言する藍染を、十刃達は様々な意図の籠った視線で見つめる。殆ど気にしていないのはジェーンと、小さなケーキを一口一口味わって食すヤミーだけだ。

やがて監視映像が消え、解散を促されたので次々と他の十刃達が去ってくなか、ジェーンはある男を呼び止めた。

「話あるんだけどさあ…ウチの宮、寄ってかない?」

「……良いだろう、僕も成果が気になるからね。」

☆☆☆☆☆☆

「……ジェーンちゃん、動くと思います?」

「彼女は自由に泳がせておけばいい、それが最適解だよ。それがこちらにとって有益になる様仕向けるのは我々の手綱次第だ。

……ところでギン、要、君達はジェーンのケーキを食べたのかな?」

「はい、立ち食いでしたが。」

「いやあジェーンちゃんの作るお菓子美味しいですわ、殺伐とした虚圏で数少ない癒しです。」

「ゼリーは何味が当たったんだい？」

「どちらも葡萄の味でしたが…どうかかされましたか？」

「…いや、少し羨ましいと思ったただだよ。」

私とした事が自ら損を選ぶなど、らしくなかったね。」

「??」

「彼等も君の企みの内、という事か…面白い。」



## 十五話 激震の虚圏

「うゝゝつ！なんなのよあの女！

ポット出の癖に藍染様に気に入られて…キイゝゝツ!!」

「ロリ、少し落ち着いて…」

まあまあ、落ち着き給え嫉妬に狂いし娘よ。

あ、クッキー食べる？

「たべます！」

「い、いただきます。ジェーン様。」  
侵入者。

虚圏に滅多に出来ない侵入者の知らせ。藍染君の予定通り、織姫ちゃんをこつちへ連れてきた事で黒崎一護君とその仲間たちは動き出した。

どんな方法で外から虚圏にやって来たのか知らないけど、織姫ちゃん攫つてその日の内に虚圏へ突入なんて、仕事が早いなあ…

彼らの目的は破壊じゃない。ならさっさと織姫ちゃん連れて帰ってもらうのが一番なんだけど、そうもいかないわけで。

霊圧を探る限り、22号地下通路を出た侵入者達はまだ虚夜宮に入っていない。彼処出てから結構距離あるもんね、走つてたどり着こうと思つたらかなり時間がかかる。

今私は自分の宮で女破面同盟（最近作った、名誉会長私、副会長ハリベル）の同志が1人、ロリ・アイヴァーンの愚痴吐き大会に付き合っている。

「大っ体藍染様も藍染様よ！

私の方があんな人間よりずーろろろつと前からあの御方の召使いとして働いてるのにあの女現世から呼び寄せていきなり『彼女と2人にしてくれ』とかア!?

なんだ!? やっぱ乳か!!! 男は乳しか見とらんのか!!!」

あーたしかに織姫ちゃんデカイよね、おっぱいが。

揉みたい（真顔）

「声が大きいよロリ、ちょっと落ち着け。

あと藍染様は女性を胸で判断しないと思う。」

「落ち着いてられるか！」

メノリは私より胸あるからって余裕ぶっこいていられるのよ！

私を見る！まな板か!?飛行甲板か!?72なのか!?違いよ胸だよ！

ちゃんと乳首だつて付いとるわボケエ！

あああああ破面化した時になんで大きな胸に産まれなかったの

おとおおお……」

(ひ、1人でボケて1人で突っ込んだ……)

ロリの魂の叫びを聞き流し、ポリポリクッキーを食べる私。

ロリ・アイヴアーンとメノリ・マリア。元は藍染君の身の回りの世話をする召使い破面だ。その片割れ、黒髪ツインテールのロリは藍染君に想いを寄せている。それが決して叶わぬ恋とは知らず……

……人の夢と書いて儚いと読むんだよロリ、私達虚だけどき。

「なんですかその生暖かい視線わあ!？」

ま、吐き出すだけ吐き出しちゃいなさいな。

口に出すだけならタダだよ。

さて、ロリも良い感じに壊れてきたので、後は面倒見のいいメノリに任せよう。

宮に備え付けたバーカウンターでバーテン姿をしながらグラスを磨くルドボーン君の分身に、強めの酒を割った飲みやすいカクテルをロリ達に与える様に言い、私は別室のザエルアポロの所まで向かう。実はこつちが本命だ。

そこにはザエルアポロともう1人、ロカ・パラミアという破面も一緒に居た。

「遅いぞ、ジエーン・ドウ。」

雌餓鬼をあやすのにいつまで掛かってるんだ。」

うるせー変態、女の子の気持は複雑なんだよ。

ロカ、久しぶり。ヤミーに割られた頭、もう治ったみたいだね。

「はい、ザエルアポロ様のお手を煩わせてしまいました……」

いーのいーの、こんなマッド野郎の手なんて使い過ぎて擦切れる位

が丁度いいよ。

口力は破面では珍しい回復能力を持っていて、以前千切れたヤミーの腕を治療してただけど、治った直後何の気なしにヤミーに頭を潰されてしまったらしい。

犯人に直接聞いたなら「治ったからついテンション上がって…」などと供述していたのでマウント取って怒りの拳骨を五百発くらい喰らわせておいた。

流石0番なだけあって耐久力は一丁前なんだからもう…

そんな感じで、ほんとには治療にもっと時間が掛かる予定だったんだけど、私がザエルアポロに直談判拳でOHANSTIした事により潰れた頭は予定より早く元通りになったよ。良かったね。

「…暴力的解決の間違いだろう。」

知らなーい。

さてさて、あとはマルちゃんとの子供達が帰ってくれば話を進められるんだけど…

「お母様、ただいま戻りました…」

『・「ただいまー！」・』

扉を開けて、ワイワイガヤガヤ騒ぎ立てる声。

おかえりマルちゃん、それにピカロ達も。

おどおどしながら扉を開けて入ってくるマルちゃんの後ろには、ロボロのマントを羽織り、顔の違う所に仮面の欠片を着けた十歳前後の子供達。中にはアーロニーロと同じ様な頭だけのからまんま虚の見た目の奴まで色々いる。

彼等は元#セクンダ2、ピカロ。何とこの子達、群体で1つの破面なのだ。ドルドーニやチルツチと同じで実験段階の崩玉によって産み出された破面。確か亡くなった子供達の魂が集まって出来たギリアンがヴァストローデ化して、それを藍染君がたまたま破面にしちやったらしい。

世にも珍しい『群にして個』の破面、その力を藍染君も認めてはいけるものの、案の定子供だから性格が幼い、扱い辛いという理由で今では102番の十刃落ちブリパロンにされた訳だ。

そんな子達を私が引き取って面倒見てる。そのせいかピカ口達から『おかあさん』と呼ばれる様になった。マルちゃんも『お姉ちゃん』呼びされて満更でもなさそうなのでこれもまたヨシ。

「えと…言われた通りピカ口達を皆連れてきましたけど…」

うんご苦労さま。

はい。ピカ口、良く来たね！素直にお姉ちゃんの言う事に従ってくれるいい子達にはご褒美のクッキーがあるよ！

『ほんとー!?!』     ▪ やったー!▪

「わーい!」     【??】——ツ!

あっちの部屋にあるから皆手を洗って仲良く食べるんですよー。

『▪「はーい!!」▪』

お菓子と聞いて目を輝かせながら手を洗いに洗面台へ行くピカ口達。

偶に奇声しか発せない子も居るけどそれはそれ。数の暴力を体で表したこの子達はどうやら互いに意思伝達もある程度できらしく、虚圈内の情報を得るのに一役買ってくれている。

「いい具合に躡しつたじゃないか、あの藍染惣右介も奴らには手を焼いていたというのに。」

あーわかる、藍染君子供苦手そう。

「実力も十刃に選ばれた程度はあるからね。お前が統率していなければ今頃全員纏めて地下牢にでも送られてただろうに、厄介なガキ共だ。」

流石に藍染君でもそれは……しそう。

P T A が殴りかかってきそうだな。

わーっと宮の廊下をドタバタとピカ口達が走り回って、お菓子の用意してある部屋に走って行った。

鬱陶しそうにそれを見て、ザエルアポロが突然真面目な顔をして切り出す。

「それで、先程の成果はどうだい?」

んー? 順調に取れてるよ。

遠隔操作も可能だし、接続先も私特製だ。ちゃーんと快適に作って

おいたよ。ザエルアポロも頼めばちゃんとやってくれるあたり、流石天才だね。

「フン、当たり前だ。この僕がわざわざ数日掛けて完成させた傑作だからな、正常に作動して貰わないと困る。」

で、これでお前の願いは叶ったな？」

対価を寄越せ、と言わんばかりにこつちを睨むザエルアポロにバツチリウインクして、懐から最近口を濯いだら出た残魄玉（私が人型になったせいか飴玉位の大きさになった）の入った小箱を手渡す。

ザエルアポロはそれをいやらしい笑いを浮かべながら受け取り、もう用はないとばかりにそそくさと私の宮を後にした。

もううつかり落とすんじゃないぞー

「余計なお世話だっ!!!」

ザエルアポロは帰って行った。

ロカちゃんは…

「無事復帰出来ましたし、なんなりとお申し付けください、ジエーン・ドウ様。私はもう、貴女の従属官なのですから。」

そうそう、ヤミーの一件があつた後、再発防止の為にロカちゃんは私の従属官になったんだっけ。始祖の虚 #5が後ろ盾に付いているなら下手な真似出来ないでしょ。

因みに、私の従属官は今んとこ四体。

ルドボーン君、マルちゃん、ロカちゃん、そんでノイ…ノイなんたらの従属官だったテスラ君が私に従ってってくれる。

てつきり上司を殺した私に恨みでもあるのかと思ってたけど、自分から従属官に名乗り出た時はびっくりしたなあ。

ピカロはまあ…従属官って言うほど従ってくれる訳でもないし、餌付けして飼慣らしてるカンジ。

あーあ、侵入者なのに藍染君は「平時と同じく過ごせ」とか言っちゃうからさ。一応保険は掛けたけど、やっぱ私は心配なのよ。

十刃の上3人とその従属官は現世侵攻係、その間虚夜宮の警備はひとまずは私とウルキオラが対応する事になる。

正直、不安。

だってあのウルキオラだよ!?無愛想が服着て歩いてるようなもん、  
「俺に心は無い(当社比)」とか言っちゃう奴だ、ある意味グリムジョー  
より危なっかしくて放っておけない。

藍染君、予想通り完つつ全に虚圏を囷として使い潰す気でいるし、  
後の事とか全く考えてないんだからもう…

……あ、ルヌガンガの霊圧が消えた。

それに黒腔が開いた痕跡も感じる、霊圧は…死神二人か、これで侵  
入者は5人に増えた訳だ。続々と、織姫ちゃんに釣られて死神達が虚  
圏へ誘き出されてる。これも全て藍染君の計画通りなんだろう。

それで小さいけど虚の霊圧が三体分、侵入者と一緒に動いてるのを  
ギリギリ感じ取れた。侵入者に協力する知能があるって事は破面な  
んだらうけど、虚夜宮まで付いてくる気かな？

「おかあさん…」

あれっ、ピカロの1人がこっちへ来た。

白い髪で顔に軽い切り傷のある女の子、この子とはよく話す。どう  
やらピカロ達に指揮をだす司令塔みたいな役割らしい。

「霊圧、ふえてるの。」

破面じゃない。ずっと弱いけど、あいぜんさまと同じ感じの霊圧が  
此処に来るよ?」

この子は他のピカロよりも霊圧探知が得意で、死神達の霊圧を感じ  
取ったみたいだ。

大丈夫だよ、あの人達はお客さんだから。会ったらちゃんと御挨拶  
して、いっぱい遊んでもらいなさい。

「……遊んで貰えるの?やったあー!」

ぱあっと花が咲いたように彼女は笑顔になって、他のピカロに交  
じってクツキーを貪り始めた。

よっしやマルちゃん、ロカちゃん、ルドボーン君、テスラ君。

暫く付き合っつて貰うよ。死神も現世も全部巻き込んで、邪魔する奴は皆殺し、私は私の為だけに、やりたい事を完遂させる。

「はい、ジエーン・ドウ様（お母様）」

んじやまつ、《ドキドキ!? 虚夜宮防衛大作戦！（命が）ポロリもあるよ》、始めましょうかねー。

☆☆☆☆☆

チリンチリン

呼び鈴の音が鳴る。私が返事をする、入口の扉から入って来たのは、私を此処に連れてきた破面、ウルキオラだった。

「存外、様になっているじゃないか。」

!?!?

「なんだ、その意外そうな顔は。」

…もしかしてジエーンさんに言われて着替えたこの服の事を言っているの？

てつきり私の服が変わった事なんて気にしていないと思ってた。

「貴様、今かなり失礼な事を考えているな？」

こ、心を読まれた!?

「凶星か。まあいい、報せだ。」

お前の仲間が虚圏に侵入した。」

…!黒崎君がこっちへ来てる？

「え…どうして…」

「お前を助ける為だ、それ以外に奴らには何の理由もない。」

「私を…助けるため…」

「そうだ。」

私は自分で望んでこっちへ来たのに。

覚悟を決めて、選んだのに。

それでも黒崎君は私を助けに…？

「だが最早それは意味を成さん。その服を着たということは、既にお前は身も心も我らが同胞。」

「エッ…」

え?!?!?!この服着るのにそんな意味が!?

初めて知ったんだけど…

「…まさか知らずに着ていたのか?」

「え、アツハイ。」

「ジェーン・ドウに説明させたはずだが…」

「ジェーンさんは制服がドロドロだからお風呂浴びてさっぱりしてから着替えなよって言われて…私そのまま着替えちゃって…」

そうそう、此処のお風呂凄かった。

昔テルマエ何とかって映画で見たような豪華な作りの湯船!掛け流しのお風呂!ぶっちゃけウチのバスルームより豪華な作り…

「……………チツ」

ああ!?突然天を仰ぎだした!?ていうか今絶対舌打ちした!この人無表情なのに私でもわかる!

絶対「あの野郎どう落とし前付けてやろうか」って考えてる!ジェーンさん逃げてー!

部屋の温度がガクツと下がった気がするよ!

怖い!

「……………まあ、いい。」

今すつごい間があった!絶対納得してない!

「貴様は藍染様の御命令があるまで此処で大人しくしている。」

もう何も言う必要は無い、とばかりに彼はそそくさと部屋を出て行った。

最後何か言いたそうだったけど、いいのかなあ…

ぐうぐう



我慢してたのにまたお腹が鳴っちゃった…

さつき食べたばかりなのに、虚圏ってお腹空きやすいのかな。

ジエーンさんが置いていった料理食べよう。

この料理何故か時間が経っても全然冷たくならないし、虚圏の技術なのかなあ…現世でも使えればいいのに…

あ、このハンバーグ美味しー

「……井上織姫、気丈な女だ。

これが心ある者の余裕…なのか…？」

☆☆☆☆☆

「いぢごー見つかって良かったツスー！」

「はあく…帰すタイミングを失っちゃった。」

黒崎一護一行は、道中合流した朽木ルキア、阿散井恋次2名と合流し、無事虚夜宮へ侵入を果たす。

どっかの第5十刃宜しく壁を破壊し辿り着いた先は、5つに分かれた通路だった。

話し合いの結果、それぞれ分かれて虚夜宮を搜索する事にした一護達。囚われた井上織姫を救う為、通路をひた走っていた矢先、そこへ先程別れたハズの子供破面、ネル・トウが一護を追い掛けてやって来てしまった。

「そーいや自称お前の兄貴達はどうしたんだよ。ドン…ドン何とかっ

て名前の…」

「?誰っスかそれ、ドンドチャツカとペツシエなら後ろについて来て…」

一護の背に乗ったネルが屈託のない笑みを浮かべて振り向くと、後ろにはさつきまで通ってきた暗い暗い通路が延々と続いている。

「…アレ?」

大変だア〜!?2人が迷子になっちまったあー!!!」

「イヤどっちかかってとお前の方が迷子だろっ!」

能天気な会話を続ける二人。そんな時、突然通路の奥から大きな音がここまで訝響した。

金属同士が鏝迫り合う甲高い音、壁を破壊し瓦礫が崩れ落ちる音、様々な破壊音が一護の耳に届く。

「なんだ…?破面同士が戦ってんのか?」

通路の先は明るい大広間になっているようだ。

一護達が広間の入口に辿り着いたその時…

「ガアハツツ!!」

「?!?!」

凄まじい音を立てて、誰かが吹き飛んできた。それは入口すぐ横の壁に激突し、大きなクレーターを作り上げる。

髭の渋い、男性の破面だった。身体の所々から血を流し、特に脇腹から出血が酷い。かなり危険な状態だ。

「おい、大丈夫かよオツサン!?!」

「あわわわ…酷い傷っス…」

子供に見せるには少し刺激が強過ぎたのか、ネルは彼を見ながらぶるぶると体を震わせている。

「…:はっ!?!」

オツト、吾輩とした事が…少し意識を飛ばしてしまっていたようだね…

「おやキミは…」

「気が付いたかオツサン!一体何が…ツツツ!?!」

咄嗟に斬月を抜き、ネルを後ろに下げた一護は、追い討ちの如く振り下ろされる巨大な刃を受け止める。

それは三日月を二つ合わせ八の字の様になった巨大な斬魄刀だった。一護の筋肉が悲鳴を上げ、衝撃に耐えかねた地面が沈み込む。

「ぐっ…オオ…！」

「ああ…？なんだアテムエ…！」

「そりゃこっちの台詞だ。オッサンボロボロじゃねえか、ここまでやっついて更に追い討ちは卑怯だ…ろツツツ!!!」

力任せに巨大な刃を押し返すと相手は一旦引いて距離を取り、一護へ向き直った。

「…ネル、オッサンを頼む。」

攻撃の届かねえ場所まで引つ張って行ってくれ。」

「わ…分ったっス！」

「待てぼうや…私はまだ戦え痛たたたたただだだだだッッッ!!!」

雑！キミ引つ張り方雑ウ!!!ちよつと酷過ぎやあしないかね!?

傷口が！摩擦で！拡がるから!!」

「ネルはちっちゃいんだから文句言わないで欲しいっス！」

「ぐうおおおおお削られるチーズの気持ちイイイイ…！」

雄々しい悲鳴を上げながら引き摺られていく男と引つ張るネルを見送って、一護は改めて敵を見た。

吊り上がった目に眼帯をした長髪で細身の男、だがその身体付きからは想像出来ないほど大きな斬魄刀を軽々と振り回している。

「なんだよ、邪魔しやがって…代わりにテムエが相手になってくれんのかア？」

「助けちゃまったモンは仕方ねえからな。」

「来いよ、俺が相手になってやる。」

「口だけは達者な野郎だ…」

情けねえなアドロー二！負け掛けた拳句侵入者に命救われるとはよオツ!!!それでも元十刃かアツ!!!」

「くっ…返す言葉も無い…」

アドロー二と呼ばれた彼は悔しそうに歯噛みした。

「ンな事より、なんでお前ら戦ってたんだよ。」

「同じ破面だろ?」

「同じ破面ウ? バカ言ってるじゃねえ。アイツは昔作られた出来損ないのカス、俺とは天と地ほど差があらア。」

「そうか? お前、品が無えから只の虚かと思つたぜ。」

「……ああ? 殺すぞカスが。」

「やってみろよ三下野郎。」

煽り耐性ゼロの破面と一護が火花を散らし、互いの霊圧が吹き荒れる。

暫しの静寂の後、派手な音を立てながら同時にぶつかり合った。

「……死神、てめえの名は?」

「死神代行、黒崎一護だ。」

「そうかい、俺ア第9十刃、ア・ロ・ニ・ロ・ア・ル・エ・リ。」

覚えとくぜ黒崎一護、お前が死ぬ迄の……ちつとの間だがなアツ!!!」

互いの斬魄刀が火花を散らす

開戦の火蓋は、此処に切られた

## 十六話 破面よ、鮮烈であれ

やあ諸君、僕だ。

誰かって？虚圏唯一にして至高なる大天才、科学者ザエルアポロ・グランツだ。

科学者だ。ここの所声を大にして言いたい。

今僕はとても気分が良い。理由？

こんな簡単な事も察せないのか、凡愚共め。ジェーン・ドウなら腹の立つ笑顔で的確に内容を言い当てて来るところだ。

大体あの女はいつも無駄に洗練された無駄の無い無駄な動きで僕のラボを……ハッ!?

失礼、僕の機嫌が良い理由だったね。

1つ、大きな事を成し遂げたのさ。完璧である僕の成した功績。虚圏：いや尸魂界の死神や現世の人間ですら誰も成しえないであろう偉業だ。

新たな革新に必要な物は1%の閃きと99%の才能、その砂粒の如き1%を見つけて出すのに苦労したよ。

故にこうしていつものラボではなく科学者の腕を存分に振るって作った贅沢な私室で優雅にコーヒーを飲みながら読書に耽っているのさ。机にはあの女に調達させた現世出版の本の数々が積まれている。奴と長い間付き合っただけで唯一と言っただけでいい利点だ、黒腔を好きに行き来できるのは奴だけだからね。

この本は……ふむ、外宇宙からやって来た神々が……成程。前に読んだ3種類のランクに格付けされた様々な存在が収容されている研究施設の解説本もだが、こういつた書物は天才のインスピレーションを加速させる。素晴らしいね。

さて、虚夜宮に侵入者な訳だが……ジェーン・ドウは色々手を回しているようだ。僕に作らせた装置もだが、あの化け物はどうやら行動の指針を決め、進み始めたらしい。それを邪魔するのは率直に言って自殺行為だろう。

触らぬ始祖に祟なし、さ。奴の邪魔をしないよう、僕もやりたい事を進めよう。カイールフォルトスからデータを取った死神も虚圏へ来ているようだし：フッフ、丁度正解を使える個体のサンプルが欲しかったところだ。

「ザエルアポロ様！」「ザエルアポロ様！」

「珈琲お代わり！入った！」「ちゃんとジェーン様に言われた通りに淹れた！」

おや、従属官が珈琲のお代わりを持ってきた様だ。

残念な事に、この虚圏にジェーン・ドウ以外でマトモな料理を作れる破面は居ない。それを知った奴は近頃女性破面相手に料理教室などを開いているそうだが：そんな事はどうでもいいか。本ツツツ当に癪な事だが、奴に頼み従属官に珈琲の美味くなる淹れ方を教えさせた。

産まれて初めて何かを無償で頼んだのだ、この僕がツツ！！頭まで下げてなツツツ！！

これも余裕を持ち、心身共に万全の状態に近づけ常に天才が天才足る為：グツ：ガハツ！！（突然の吐血）

ハア：ハア：おっと、あの時の屈辱的な記憶をつい思い出してしまったよH A H A H A。

…：何変な顔してるルミーナ、珈琲を置いてさっさと下がれ。

ふう：んく、いい香りだ。奴の指示通りに豆を轆くだけで以前とは断然香りが違う、味も然り。この香りが僕の脳を覚醒させるんだ。

さあ、一息吐いた所で対侵入者用の新しいトラップの内容でも考えよう。

…：黒塗りの高級車：感度三千倍：奴から教わった知識には碌なものがないが、参考までに構想だけでも練っておくか。

そんな時、僕の宮に侵入者を告げる警報音が鳴り響いた。

☆☆☆☆

「ヒヤツハア!!!」

「くっ……!」

アローロニーロの振り回す巨大な斬魄刀から生まれる攻撃の余波が、広間を抉るように破壊していく。

アローロニーロ・アルルエリと名乗った細身の破面は、「腕試し」と称してドルドーニに斬り掛かり、そのまま殺し合いにまで発展したらしい。

「妙に手慣れてんなア、長物相手は初めてじゃねえか?」

「…2度目だツ!」

「そオか…よっ!」

「何ツ!?があ…ツ!」

剣戟の隙を突き、アローロニーロの振るう斬魄刀に繋がれた鎖が鞭のようにしななって、一護の死角から脇を直撃した。

強い衝撃を受け、もんどりうって床を転がり、斬月を支えに何とか体勢を立て直す。

「どうした死神、まだ殺れンだろ?」

テメエの情報は全部知れてんだ。

卍解と虚化、だっけか?全部使って向かって来い。オレはその全てを上回って、テメエを殺してやるからよオ…」

そう嘲笑うアローロニーロに、一護は口の中の血を吐き捨て、鋒を突き付ける。

「舐めやがって。後悔すんな…いくぜツ!!」

轟、と一護を中心に霊圧の嵐が吹き荒れる。

『卍 解 !!!』

風が収まった時そこに居たのは、漆黒の死縛装に身を包み、卍の柄を持つ刀を手にした一護の姿。

放たれる霊圧も先程とは桁が違う。ネルに引き摺られ、部屋の隅まで運ばれた傷だらけのドルドーニは、霞む視界の中で一護の霊圧を感じ取っていた。

(なんとという霊圧、しかもまだ上がある。)

素晴らしい。これが君の力かぼうや…惜しむらくは、それが私に向けられていないこと。かね…

アールニーロめ、美味しい所ばかり持っていきよって。同じ第一期のよしみとかは無いのかね!?

大体あのあんちくしよう、既にジエーン嬢と親しい間柄しとるくせにまだ活躍したいか!十刃落ちにも出番を譲り給えよ!『侵入者が来たら、十刃落ちの皆も頑張って迎撃してね♪』って言われたのワガハイ達だろうか!

あーきつと奴は彼女の普段ワガハイ達に見せないあんなところやこんなところまで知つとるんだろうなア!羨ましいなア!

ワガハイだって全数字持ち破面達の密かな憧れであるジエーン嬢の従属官になって彼女の手料理食べたり朝起こして貰ったり戦闘の手解きを受けたりその後は疲れた身体を癒す為に一緒に風呂だつて入ったりあんな事やこんな事いっぱいばい夢いっぱいのは従属官生活を謳歌したかったなア!ルドボーンが羨ましいイイイツ!あのテスラとかいう若造もっ!なんつっで同じ男なのにワガハイがダメで奴がOKなんだ!これにはきつと高度な政治判断が働いているに違いない…ツ!!)ギリギリギリギリ…

「このひと、苦しみながらめちやくちや齒軋りしてるっス。

ちよつと怖いっス…あ、そうだ。」

途中話を脱線させながらも、不審がるネルをよそにドルドーニは思考の海に浸る。

そして試しに他の十刃落ちの霊圧を探ってみる事にした。案の定、案の定と言うべきか、内2人は侵入者と交戦しているようだ。

(ガンテンバインとチルツチ嬢か、それから…ピカロツ!またジエーン嬢の宮に居るなツ!

う、ら、や、ま、し、い、)

だらくくく…べちやつ

更に探査回路を拡大する。侵入者の内1人は運の悪いことに第8十刃の宮に迷い込んだらしい、他の破面の間でもジエーン以外と碌に



話さないマッドサイエンティストで知られる彼にあの程度の霊圧で挑むとは…生存は絶望的だろう。

(なににせよ、ワガハイこのまま不完全燃焼で終わる訳にはいかないなア。然らば…)

だら〜〜…べとべとべと…

「つて!!お嬢ちゃん<sup>ペ</sup>は一体何をしているッ!?!」

「ヨダレ垂らしてるッス。

ネルのヨダレには弱いけど回復効果があるから、遠慮なく治されてほしいッスよ。

ほら、のどちんこ捻るといっぱい…」

と、おもむろに口に手をつ突っ込んで喉の奥を弄ると、口から滝のように溢れたヨダレがドルドーニの頭に降り注ぐ。

「レデイがちんこことか言うんじゃない!

しかもそれはヨダレではないゲロだ!

止めろっ止めっ……ホギヤアアアアアアアアアアアアアアアッツツツ?!?!?」

元気に悲鳴を上げる彼だが身体はわりと重症なので、動けないまま為す術なく顔面からネルのヨダレ?を浴びるドルドーニ。その悲痛な叫びは一護達に届く事は無かった…

一方、一護対アロニーロの戦闘はまだ続いていた。満を持して卍解し、その圧倒的な速度で連続攻撃を仕掛ける一護だが、全十刃中2番目の硬度を持つと豪語するアロニーロの鋼皮の前になかなか攻めあぐねている様だ。

「全破面中2番か、随分謙虚なんだな。」

「そろそろよ、あいつには届かねえ。

何せいっぺん殺されてるんだからなア!」

「…どういう事だ?」

返事とばかりに横薙ぎの一撃が振るわれるが、速度で勝る一護には掠りもしない。

と、その時――

「…ぐおっ!？」

突然、アールニーロの胸が斜めに裂け、血が吹き出た。

突然の出来事に戸惑う一護、アールニーロは忌々しそうに舌打ちしている。

「お、おい！俺は何もしてねえぞ!？」

「あつたりめえだ！」

クソっ！メタスタシアの野郎、しくじりやがったな…!」

胸が裂けている事など気にする様子もなくアールニーロの攻撃が更に激しくなる。

辛うじてそれを躲しいなす一護だったが、不意に掠めた一撃が脇腹を裂いた。傷口から血が溢れ、鋭い痛みが一護を襲う。

「話が変わった、そろそろ慣れてきたからな。」

もうちよい遊んでやるつもりだったけどよオ…殺すわお前。」

何かを察した一護が反射で天鎖斬月を斜めに構えたその直後、それをなぞるようにアールニーロの斬魄刀が叩き付けられる。今まで受けた斬撃とはケタ違いのスピードとパワーに押され、一護は地面に激突した。

「ぐっ…あー!」

「そオらどうしたどうした！情けねえエぞ!」

「慣れてきたつてのは…どういう事だ…」

「この身体は借りモンでなア、今まで使ってきた身体より幾分扱いが難しくてよ。」

そんでドルドーニの野郎に肩慣らしも兼ねて殺し合い吹っかけてみたんだが…案の定相手にならねえ。

そんでお前と戦つて、漸くコイツの身体に俺達<sup>ボク達</sup>が慣れてきたつて事だア!」

「がつ…!クソツ…!」

倒れた一護を蹴りあげる。わざと脇の傷口を抉るように蹴り飛ば

された一護は激痛に身を振りながらもなんとか起き上がった。

「侵入者はボク達<sup>俺達</sup>が全員始末する。」

それでジェーンにいつぱい褒めて貰うンダ。」

興奮気味に話すアローニーロの声が二重に聞こえる。

ゴボリと顔が潰れて、上書きされる様に赤い液体の入った試験管の様な頭が形成されていき、そこには小さな虚の頭が2つ浮いていた。

「なんだよ…ソレ…」

「自己紹介からやり直すぜ。」

俺達が第9十刃、アローニーロ・アルルエリ…『アア、コノ顔ノ事ナラ気ニシナイデ。感想ナラ今マデ飽キルホド聞イテルヨ。』

アローニーロの手袋を付けた左腕が不自然にグネグネと蠢き出し、中から口のような器官が付いた触腕が姿を現す。

「俺達のチカラは《喰虚》、虚の死体を食ってその能力を我が物とする。

今まで戦ったコイツの身体も、元は5番だった十刃のものだ。」

『ソイツノ死体ヲ食ツテ、ボク達ハ更ナル力ヲ手ニ入レタ！』

「無限に進化する俺達に敵は無い。」

聞けばお前は死神でありながら虚と同じ力を使えるんだろう？」

『ダツタラ、君ヲ食ベレバボク達ハヨリ強クナレル筈ダヨ。』

『だから喰われる！喰虚に!!!』

アローニーロの下半身が膨れ上がり、どんどん肥大化していく。広間を埋め尽くす勢いで広がる喰虚の触手を一護は振り払い、逃げ回った。

(やべえ、触手の数が多い。振り切れね…なっ!?)

不意に一護は脚を止めた。いや、止められた。

壁から生えた触手があつしりと一護の脚を絡め取り、動きを封じていたのだ。

『ハハハハハハ!!!』

「これも昔喰った虚の能力でな、この広間はあらかじめ壁と床の殆どを喰虚で侵食させておいたのさ！」

『最早コノ空間ハボク達ノ体内と同ジ、自由自在ニ操作ダツテデキル

！』

「逃がさねエ、絶対にニガサネエゾ死神イイイイツ!!」

(不味いッ！)

触手の猛攻、如何に速度で勝る天鎖斬月でも払い切れない数の触手が一護に迫る。

この状況を打開する方法は有る。

だが大量の触手を振り払わなければ、アーロニーロに渾身の一撃を見舞うことも敵わない。

「やるしか…ねえのか……」

一護は虚化を行う覚悟を決め、顔に手を翳したその時――

突風が広間を薙いだ。

「ヤレヤレ…テンション上がってる所悪いが、ワガハイも交せて貰うよ。」

二対一など、まさか卑怯だとは言うまいね？」

――廻れ、暴風男爵ヒラルダ

一護の目の前には巨大な竜巻が2つ、そこから伸び出た鳥の嘴を象った風が、唸りを上げて迫る触手を切り裂いた。

二本の竜巻の中心に立つ髭の紳士は一護に振り返り、告げる。

「さあ立てぼうや、反撃の時間だ。」

危機を救い、キマった。とばかりに一護と視線が交差して。

一護は呟いた。

「……ゲロくせえ……」

☆☆☆☆

「はあっ……はあっ……はっ……」

目の前には私の斬魄刀、「袖白雪」によって生み出された氷に包まれ、息絶えた大量の虚達。そして胸を裂かれた私の恩人、志波海燕殿とそっくりの姿をした虚……メタスタシアの姿があった。

袖白雪の能力を解くと鈴の音が響き、氷が虚ごとバラバラに砕け散る。これでカタは着いただろう。

あの海燕殿は偽物だ。あの日私に殺され、虚圏で再構成されたメタスタシアがある破面に食われ、その能力で人格を与えられた駒の一部らしい。ベラベラとメタスタシアが喋ってくれた。

だが姿は真似出来ても本物の海燕殿とは程遠い、始解もままならぬ状態で、最後には自身の身体に融合された大量の虚を解き放ち私を襲わせた。確か奴は五百の虚を分けてもらったとか言っていたな。

苦労はしたが、それを袖白雪で纏めて凍らせ、今しがた最後の虚と本体を始末できた。

「彼の顔を出せば私が油断するとも思ったのか。」

海燕殿の心は既に私に託された、今更みてくれだけに騙されぬ。」

もう奴からの霊圧も感じない、どうやら本当に死んだようだ。

その後、一通り建物の中を探索したが、暗いばかりで肝心の織姫の姿は見つけられず、手掛かりもありそうにない。さっさとこの場を去ろうとしたその時、いつの間にか入り口に立つ大柄な男と目が合っ

た。肌の色はかつての九番隊、東仙隊長の様に浅黒く、独特な髪型をした男だ。

「貴様…十刃か？」

「ええ、如何にも。」

しかし、貴女の下に来て正解だった。」

「それはどういう…。」

どすっ

「…えっ？」

私の背中に軽い衝撃が走り、刃が突き出た。驚く暇も与えられぬまま、意識だけが遠のいていく。

何故だ、奴は目の前にいた筈…なのに後ろから刺され…：…：…て…

「貴女がたは藍染様、ひいてはジェーン殿の邪魔となる。」

早々に死になさい。そして、後悔しなさい。」

我々の狩場に足を踏み入れたことを、ね…：…

刃を引き抜かれ、そこから溢れる大量の血を見ながら、私は意識を手放した。」

☆☆☆☆

「おねえちゃんおねえちゃん！」

『ご本読んで〜！』

「はい、いいですよ。」

各々部屋にある玩具で遊んでるなか、数人のピカロに囲まれて音読をせがまれるマルちゃん、完全におねえちゃんが板についておる。尊い、写真撮つところ…

「えと…じゃあ今日はこれで…」

近くにあつた本棚から適当に選んだ本をぱらりと開き、音読を始めるマルちゃん。

『…董卓の敷いた悪政を見かねた刺史・太守は各地で連合を募り、反董卓連合軍を組織する。』

連合軍と董卓軍は激しく衝突するも決着は付かず、遂に董卓は自らの都に火を放ち、洛陽を焦土と……』

待ちたまえマルちゃん、いきなり三國志は英才教育過ぎない？

「え、駄目ですか？私は結構気に入ってるんですが…」

確かに面白いけどさ。赤壁の孔明無双とか大好きだけども。ここはもつとソフトなお話にしよう？

若いピカロ達は皆キョートンだよ、虚トーン。

虚だけに。

「えっ」

えっ

と、とにかく！なんか別の！別のにしよう？

「はい…そうですか。」

えーつと、じゃあこつちのに…

『聖杯戦争。それは万能の願望器、聖杯を巡る魔術師達の血塗られた宴……』

待て待てーいつ

「ふえ？…またですかあ……？」

初っ端から不穏な感じがプンプンするよ、絶対その聖杯碌なもんじゃ無いよね？この世全ての悪的な何かだよな？

ていうかなんでそんな物騒な話ばかり選ぶの!?!のつけから都を焦土にとか血塗られた宴とか、明らかにディープでダークな大人向けストーリーしかないよ！もつとこう…子供向けでやんわりとした奴はないの!?!

「や…やんわりですか？えーつと…あ！これなら…」

『ゲロゲロゲロ…地球はワガハイ達が頂くであります！』『ボクケケガくエクル〜』『ヒイ!?!夏○殿オ!?!』

遂に文庫諦めてコミックに手を出したな…

うん、確かにさつきよりはマシだけど絶対子供向けじゃない…カエル型宇宙人とかニーズ何処にあるのよ。

まあいいや、ピカロはご機嫌だし。

ギギギギ…

その時、空間が軋む。

お、また黒腔が開いたよ。今度は虚夜宮の中に4つ、藍染君が予想してたよりだいぶ早かったね。尸魂界、結構本気みたいだ。

探查回路つと…霊圧も高い、隊長格って奴だろう。

ロカちゃん、どう？

「はい、感じます。特に高い霊圧が4つ、いずれも私の『反膜の糸』範囲です。」

女の子ピカロを膝に乗せて、無表情で頭を撫でながら真面目な話するのにもアレだけどね。

あとは、アールローニーロが死んだら本格的に始めよっかな。

頑張ってね、アールローニーロ♪



## 十七話 依存

彼女はきつと『星』なのだ

地に這い蹲る自分達とは違う存在

虚圏を見下ろす奈落の星

これはきつと俺達が持っていていちゃあいけない感情だ。一度嵌ってしまつたら、二度と抜け出せない甘い甘い毒の沼。

捨て駒になつてもいい。使い捨てられても構わない。ただ彼女に褒めてもらいたい、認めて貰いたい。「ご苦労さま、頑張ったね」って言つて欲シインダ。

地を這う虚は夜空の星に手を伸ばす

☆☆☆☆

「さあ立ちたまえぼうや、反撃の時間だ。」

自らの斬魄刀を解放し、堂々たる姿でアーロニーロの攻撃を阻み、一護の前に立つ紳士、ドルドーニ・アレツサンドロ・デル・ソカッチオ。

「…………ゲロくせえ…」

自分の危機を救ってもらったにも関わらず、当の一護は塩対応だった。

「んなっ!?会つて5秒で吐く台詞がそれかね!

ピンチを救つた男に感謝の言葉とかないのか!?

「近い近い近いあんま近付くな酸っぱい臭いするから!っーかアンタ

も破面だろ、仲間割れか？

傷はどうしたんだよ。」

「彼処のお嬢ちゃん<sup>ペ</sup>が治してくれたよ、代わりに大切なものを失ってしまった気がするがね…」

明後日の方角を見ながら呟くドルドーニ、広間の入り口ではネルが一護に向かってグツ！とガツツポーズをキメていた。

「いちごーっ！そのおっちゃん、ネルのヨダレいっぱいかけたら元気になったっス！」

「ええ…（ドン引き）」

「こ、こらお嬢ちゃん！誤解を招く発言をするでない！」

必死に弁明するがもう遅い、既に一護の中でドルドーニは「幼児に涎をかけられて回復する変態」としてインプットされている事だろう。

哀れである。

「ツツツ?!」

咄嗟に2人は身を躲す、さつきまで一護達がいた場所は大量の触手によって埋め尽くされていた。

アーロニーロは表情こそ変わらないが、声のトーンが下がり、明らかに怒りを顕にしている。

『ドルドーニい…なんデボク等のじゃマをスる?』

「なに、簡単な事だよ。」

『ワガハイは好きな様にする』。ぼうやはワガハイの獲物だ、お前に喰われてしまったてはそれも叶わんだらう。

だから先ずはお前を討ち、然る後ぼうやに戦いを挑む事にするよ。」

『『ジェーンに言われた事ヲ忘れタカ!』』

「勿論覚えているとも、彼女は『侵入者が現れたら、頑張って迎撃してね』と我々を激励してくれた。

言葉通り侵入者はこうしてやって来た、が。何を『頑張って迎撃する』とは指定してはおらんよ?」

『『屁理屈ヲをヲヲツツツ!』』

怒れるアーロニーロの放つ槍のように尖った触手の束がドルドーニへ向けて殺到する、それを庇うように今度は一護が超高速の斬撃で全て撃ち落とした。

「いい腕だ、ぼうや。」

「ひとまずアンタは味方って事で良いんだな…？」

「楽観視は止めたまえ、アーロニーロが片付けば、次はぼうやに牙を剥く。」

「その時はその時だ。」

「甘いねエ、チョコラテの様だ。」

だが、彼女の甘さに私も彼も救われたのだ…

「…？」

ドルドーニの言葉に疑問を覚える一護だが、そんな悠長な時間は無い。

一護は織姫を救う為に此処へ来た、一刻も早く此処を抜けなければならない。友の為にこんな所で立ち止まっている訳にはいかないのだから。

「構えろぼうや。」

…奴の鋼皮は硬い、つい最近までは十刃最硬と言われていた者の力だ。生半可な攻撃では傷一つ負わず事は出来まい。」

「あのツリ目野郎の事か。」

「左様。元は5番の十刃、ノイトラ・ジルガという男の身体をアーロニーロは乗っ取っている。ただ格上を喰らったせいかな、少しばかり感情の制御が利いていないみたいだがネ。」

広間の中央に陣取るアーロニーロは雄叫びを上げながら部屋中の触手をうねらせ、随分ハイになっているのが傍目から見ても一目で分かる。

貫い物とはいえ、手に入れた巨大な力は良くも悪くもアーロニーロを突き動かしていた。

「……どうすればいい？」

「普段の奴なら付け入る隙もなかるうが、あの状態ならば難くあるまい。」

タイミングはぼうやが決める、ヒントは『傷』だ。」

「傷…」

見ればアールローの身体には、先程突然付いた刀傷がハッキリと残っていた。

肩から胸に掛けてバツサリと、一護と斬り結んでいた際突然開いた謎の傷だ。

「アールローは特殊な破面。喰った虚の死体の力を我が物とする能力だったが、あるとき能力の幅が広がった様でね。喰った虚に力を分けて、分身の様なものを作れるのだ。しかしあの様子だと、分身の受けたダメージは幾分か本体にも反映されるようだな。」

「じゃあ何処か別の場所にいるアイツの分身が殺られたから、アイツも傷付いた…?」

「そうだ、このチャンスが無駄にしてはならん。全力でかかりたまえ。」

「…応っ!」

「『こそこそ何を喋ッテルう!!』」

再度襲いくる触手の刃、一つ一つが鎌のような形状をしたそれを竜巻で受けたドルドーニは前へ出て、竜巻の陰に一護を隠す。

「ギア踊るぞ暴風男爵…もう無様な姿は晒すまいッ!」

竜巻から風の嘴が4つに増え、それぞれが鎌と音を立ててぶつかり会った。

突風が踊り狂い、鎌鼬が広間の壁をズタズタに裂いていく。

「『邪魔するなクソカす野郎! ジェーンに褒めて貰ウノはボレ達ダ!!』」

「やれやれ、ノイトラの口調まで移ったか。」

一途なのはいい事だが、彼女も罪作りな女だね…チイツ!?」

両者壮絶な剣戟を繰り広げる中、暴風男爵の嘴が一つ大鎌に切り裂かれ、その余波で治ったばかりのドルドーニの脇腹から血が再び滲み出した。

にも関わらず、彼は気遣う様子もなく更に暴風を纏い、触手を相手に尚も激しく踊り続ける。

(……やはりお嬢ちゃんの治癒能力だけでは十分に回復していない。

が、まだ止まらんよ……ッ!!)

更にスピードを上げ、八本に増えた嘴が次々襲い掛かる触手の鎌を両断し、両断され、破壊と再生を繰り返す。筋肉に負荷を掛けすぎたのかドルドーニの身体中がミシミシと不気味な悲鳴を上げ始め、今にも張り裂けそうだ。

「雄オオオオオオオオオオツツツ!!!」

強欲の魔物と踊る彼の脳裏を過ぎるのは十刃から外され、十刃落ちの称号である103の数字を与えられた当初の記憶。

破面は藍染殿の為に存在する消耗品、新しい物ができれば古い方が切り捨てられるのは当然の帰結。故に納得はしている。

完成形の崩玉で造られた破面はワガハイの様な未完成品とは基盤が違うのだ。無限に進化し続ける能力を持つアローローの様な者ならともかく、ワガハイの強さの天井は呆気ない程低かった。ピカロ達の様に幼子なら気にすることもなかったかもしれない、チルツチ嬢の様に踏ん切りを付け、駒に徹していれば良かったのかもしれない。だが1度でもあの高みに登ったワガハイは、心のどこかでも一度、十刃に戻りたいと願っていたのだ。

そんな悶々とした日々を過ごす内、彼女が新たな十刃として選ばれた。

ジエーン・ドウ。

今となつては御伽噺にも近い存在として語られる《始祖の虚》、その破面。

彼女は美しい女性だった、そして何より強かった。5番の十刃を

軽々と下す強さに加え、その抱擁力と、他の者達を巻き込んで包み込むような優しさに、誰もが憧れ、焦がれた。

これはきつと、虚の本能を刺激するものなのだろう。

虚は亡くした孔を埋める為に整を喰らう。

だが彼女は我々が失い、永遠に得られない筈の“ぬくもり”を持っていた。

虚の身では決して手に入れることが出来ないもの。蜜に群がる蝶のように、我々がそれに惹き付けられるのは必然だった。

彼女が3ヶタの巣にやって来た事は過去に何度かある、そして他の数字持ちの面々にも。彼女は笑顔を振り撒き、菓子を配り、我々と打ち解けようと努力していた。初めは素っ気ない態度を貫いた者達も、次第にその心を溶かされ彼女の来訪を心待ちにする様になった。そしてワガハイも、彼女と話せる事は至上の喜びだと感じている。

彼女と菓子を囲み、下らない話に興じている時だけは、密かな野望も、嫉妬も、劣等感も、自らに孔が空いていることすらも忘れ、幸福な時間を過ごせた。

憧れ、焦がれ、安らぎ、そして気付く。

満たされれば二度と、失いたくないと思ってしまう。彼女は我々を蕩かす毒なのだ。

アーロニーロよ、彼女と永く時を過ごしたお前は、もう彼女無しでは生きていけないほど依存しているのだろう。彼女の期待に応えない、その一心で自身の命など二の次にしてしまう程に。

だが此方にも譲れぬものはある、ワガハイだつて折角ジェーン嬢に『頑張つて』と言われたのだ。ぼうやには否が応でもワガハイの相手をしてもらおう。

ワガハイ、結構我儘なのだよ。

此処は3ヶタの巣、彼が此処に迷い込んで来たのなら、この戦いはワガハイのものだ！

「脇役は下がっていたまえ、アールローロオツ!!」

『「邪魔アすルナアアアアツツツ!!!」』

響く怒号、吹き荒れる鎌鼬。壁中から現れた大量の触手の鎌が、四方から暴風男爵ごとドルドーニを貫いた。

だが同時に、伸びた風の嘴はアールローロの身体に生えた6本の腕を抉り取る。

『ぐおおおあああつ!!』

「ぐツ……ふ……腕は頂いた……ぞ……」

『……ヒヒヒハハハハハ!!残念だツタなア!』

この身体は、腕なんて幾らデモ再生するンダよ!!!』

勝ち誇る様に叫ぶアールローロ、だがドルドーニの口元は緩んだままだ。

無事送り出せたのなら問題ない、と。

『「……………ハ?」』

突然目の前に現れたのは漆黒の死縛装に身を包み、黒く輝く刃を振り上げ今にも此方に斬り掛からんとするオレンジ髪の死神。

なんだこいつは、何処から現れた。

突然の出来事にフリーズするアールローロを見ながら瀕死のドル

ドーニは嗤う。

「…見えなかつただろう?」

幾重にも編んだ風の層は視界を歪め、対象を透明に見せるそうだと、昔、ジエーン嬢に貸してもらった漫画に書いてあったよ。

ノイトラの力に溺れ、隙だらけのお前を騙すには丁度いい……」  
行きたまえ、ぼうや

「月牙…天衝オツツツ!!!」

両腕を失い、無防備なアール・ニコの傷をなぞるように、黒い斬撃が広間で炸裂した。

☆☆☆☆

『貴方、アール・ニコって言うの？』

私はジェーン・ドウ、宜しくね！いやー今までちゃんと話できる虚なんて殆ど会ったこと無かったから嬉しーなー！』

初対面の彼女とは、こんな会話をしていたと思う。この日もボク達はいつもの様に虚を喰らい、消えない苦しみから逃げようと躍起になっていた。

そもそも存在自体が歪な喰虚だ。グチャグチャに混ざり合った虚の塊、動けば身体が軋むし、苦しくて息が詰まる。残ったボク達もいつなけなしの理性が消えて、物言えぬ虚に堕ちてしまうのか、不安で堪らなかった。

『あ、今日はお土産に熊っぽい虚とっ捕まえてきたから一緒に食べよう！』

それで黒○徹子ばりのお茶の間トークで花を咲かせようじゃない。此処砂漠だけど！』

この虚が何を言ってるのか分からない、偶に出てくる意味不明な固有名詞もそうだが、俺達の前で虚を差し出し話など、馬鹿げている。

なのに、何故か奴と一緒にいる間だけは、消えない筈の苦しみが、少しだけ和らいだ。

『へえー喰虚ね、死んだ虚の力使えるんだ。』



「凄いじゃん。」

何故だ、何故此奴は汚い喰虚の力を見ても尚、俺達に踏み込んでくる。

『見た目？いやまだマシでしょ、私なんてイカだよイカ！』

何故、何故この虚は醜いボク達の姿を見ても尚、話を絶やささないの？

『アールローロー』

初めてだった。

名前を呼んで貰うと、苦しみが消えていく。

彼女と言葉を交わす度、胸に空いた大きな孔がぬくもりと共に埋まっていく様な、こそばゆい気持ちになる。これを失っちゃいけないと、本能が理解した。

ジェーンが居ないと、俺達はまた苦しみに苛まれる。

ジェーンが居ないと、ボク達の孔は埋まらないまま。

ジェーンが居てくれないと、アールローローの苦しみは永遠に消えない。

だからあの子を護らなきゃ。アイツの敵は全て俺が殺し尽くしてやらなければ。

そうすればまた、名前を呼んでくれるだろう。褒めてくれるだろう。埋まらない筈の孔を、彼女が満たしてくれるだろう。

『お疲れ様、頑張ったね。アールローロー。』

彼女が笑って言葉を掛けてくれる、ただそれだけを求めて。

依存だって？そんな事、はなから分かってる。それでもボク達は

「ジェーン……」

がしゃんと、ガラスの割れる音がした。

胴体は斜めに両断されて、喰虚とも切り離された身体が宙を舞い、床に叩き付けられる。

駄目だ、死ぬ

直感でそう思った。

ガラスの向こう側だった世界が間近に迫る。襲ってくるのは昔と同じ。痛みと、苦痛と、終わってしまうという絶望。アールニーロ・アールエリという破面が消えてなくなってしまいう恐怖。

喰虚は虚を喰らう、なら喰らった虚に残った自我はどうなる？当然、本体である俺達に統合されるのだ。虚なんて基本後悔だらけで、おかしいやつばかり、そんな連中が何百万も一斉に自分の中に入ってきたらどうなるか？答は簡単、頭の中は阿鼻叫喚だ。

後悔、絶望、嫉妬、怨念、倒錯、ありとあらゆる負の感情がボク達の中で渦を巻く。

苦しみの原因はそれだった。ジエーンが教えてくれた。だって彼女と話してる時だけは、連中は息を潜めて彼女の話に没頭するんだもの。都合のいい奴らったらありやしない。

「じゃあ、その意識を全部統一して、制御できるようになれば、アールニーロはもつと強くなれるね！」

口で言うのは簡単だけどさ、あいつら、最近俺達の人格乗っ取ってお前とイチャつこうとするんだぜ？特に淫姦が原因で死んだ虚共な、勝手に俺の身体の中で催淫剤作るんじゃないやねえっての。何？触手プレイなら任せろ？うるせえ死ぬ！もう死んでるけどな！

頑張ってみたけど、制御できて分身を作るまでに成長したのはたった一匹だけ。もつと時間が欲しかったなア…

ああ、消える。消えてしまう。

あいつとの思い出が泡みたいに浮き上がっては消えていく。

楽しかった、嬉しかった、暖かかった。報われない筈だったボク達は彼女に救われた。

なのに…

ごめんな…ジエーン…負けちゃった…

期待に、応えられなかった。

「お疲れ様、アールローロ。

もう休んでいいんだよ。」

霞の掛かった視界の向こうで、彼女が笑ってそう言ってくれた気がして…

☆☆☆☆

「……………逝ったか、古き友よ。」

血を流し、地面に倒れ込むドルドーニは、赤い培養液に塗れ、既に物言わぬ2つの小さな頭を眺めて呟いた。

アールローロの固有能力の一つ、認識同調。

テレパシーの様に自身の思念を特定の相手に飛ばす事ができるものだ。恐らく彼は虚夜宮内の全破面に今の思念を飛ばしたのだろう。戦った侵入者の速度、霊圧、そして以前のデータより何倍も強力になった卍解の細かな情報を。後に控える十刃達に伝えた。情けなのか、ドルドーニが一護に加勢した事は語られていなかった。

そして、最後にジエーンに向けて感謝と謝罪を述べ、彼からの念波は途切れた。

2つの頭が崩れ落ち、泡のように消えていく。

「昔のお前は苦しみから逃げ続ける子供のようにだったのに、一丁前に背伸びしおって…」

尽きぬ筈だった強欲の魔物は今、満たされた。それを見届け、痛む身体をなんとか起こしたドルドーニは、本来の目的である一護に向け折れた刃を突き付ける。

「な、何やってんだオツサンそんな傷で!」

「何を、だと…?」

これがワガハイの本来の目的よ。これで邪魔者は消えた…存分に…ぼうやと鬨めるだろう…?」

「馬鹿な事言うなよ!?ボロボロじゃねえ…くっ!」

言い訳する一護の喉元に間髪入れずドルドーニの刃が飛び出す。それを天鎖斬月で払うと、折れた刃は更にスピードを上げ、鋭い連撃が一護を狙い始めた。

「チョコラテの様に甘いぞぼうや!」

君は侵入者!ワガハイはこの城を守る兵士!ならば始末を付けるのは当然の帰結だろう!これもジエーン嬢に任された仕事だからねエー!」

「なんで…なんでそんなに必死になるんだ!」

そのジエーンつてのは…そんなに大切な奴なのか!」

「…哀れな虚は届かぬと知りながら星に焦がれ手を伸ばす。それが如何に無為な事と知っていても、あの温もりを知ってしまったえば最早逃れる事など出来んのだよ。」

ぼうや、覚えておくがいい。これより先、姫君を救いたくば、相

手取らねばならぬのは藍染殿だけではない……我々の本拠地に攻め入るといふ事は、虚圏の頂点……奈落の妖星と相見えるという事だ。

……彼女と闘う覚悟がぼうやにあるのかね？」

「奈落の……妖星……ツツツ！」

さアワガハイを斬り給え！

そこまで言えなかった。

膨れ上がる霊圧

いつの間にかネルを抱えた一護が後ろにいる

ドルドーニの胸へ横一文字に赤い線が走った

一護が走り出す、ドルドーニは振り向けない

赤い飛沫が飛び散って、ドルドーニは床に膝を突いた。

彼の目には全てが一枚絵のように過ぎ去っていく

(全く……見えなかった……か……フフツ……)

身体は限界だったが精神はこれ以上無いほど研ぎ澄まされていた。

油断はなかった、慢心はなかった。

ただ、見えなかった。

「見事……ッ」

虚の仮面を消し、ネルを抱えたまま振り返らず一護は走り去る、血だらけになりながら仰向けに倒れ、ボロボロの天井を眺めながら、意識が遠くなっていくのを感じた。

(嗚呼、それでいいのだぼうや。

チヨコラテ

甘さを捨てろ、鬼になれ。此処より先の連中はワガハイほど甘くはない……)

……

そこかしこで軋むような、砕けるような鈍い音が聞こえてくる。

アーロニーロと融合していたこの広間は、彼が死んだ事により形を保てなくなっていた。

もうすぐ此処は崩落するだろう。

「……二様。」

ドルドーニ様……」

声がある、死にかけの身で振り返る事すら出来ないが、確かに彼を呼ぶ声が崩れかけの広間に響いていた。

☆☆☆☆☆☆

~~~~~♪~~~~~

ふふっ……ふふふふっ……

アーロニーロが死んだ。

あのどうしようもなく弱くて、臆病で、ずっとずっと苦しみから逃げ回っていたあの子が。

私の古い友達で、喰虚に振り回されながら必死に生きてきたあの子が。遂に死んだ。

私はとっても嬉しいんだ。

今まで逃げてばかりだったあの子が、自分の最期と向き合って弱音一つ吐かずに逝った。それが友達として誇らしい。

「…第9十刃、アールローニー口様の消滅を確認。

『反膜の糸』、並びに『虚繭』<sup>カトル</sup>予定通り正常に作動しています。ジェーン・ドウ様。」

ロカちゃんから報告を受けて満足した私は立ち上がり、ちょうどエンディングを眺めているピカロ達に向けて言い放つ。

よし。じゃあピカロ、お外で遊んでおいで。

不審な人影を見つけたら私かテストラ君達に報告する事！お弁当はみんな持ったかな？

「『《はー！ー！》』」

元気に返事をするピカロ達、次々と宮から飛び出して行って、残ったのは私と、ルドボーン君を除く3人の従属官だけになった。

あ、ロリはめっちゃ酔わせたら「巨乳がなんぼのもんじゃい！」とか叫びながら酒瓶担いで突然出て行って、それをメノリも追っ掛けて行ったので居ません。何処行っただら？

まあいいや（某魔術師殺し並感）

今テンション高いんだ私。このノリでザエルアポロの宮にでも突撃隣の虚夜宮してやろうかと思っただけど、霊圧探ったところ生憎侵入者とかち合ってるみたいだし、邪魔するのはよしてあげよう。

ゾマリも多分戦闘中…随分霊圧乱れてるけど大丈夫かなあいつ。

藍染君は計画の最終段階で忙しいから茶々を入れに行くのも悪い気がするし、ラブリーマイエンジェルリリネットたんは現世侵攻組だからその準備中、ハリベルは…この前揉んだばっかだしっか。

となると残るはヤミーかウルキオラ、グリムジョー…

となったら行く場所はひとつしかあるまいて。

Heyダーリン、遊びに来たぜ！

「儂らも現世侵攻の準備中なんじゃが？」



十八話 虚圏にて、かく戦えり

からりん                   ころりん

からりん                   ころりん

からころ響く下駄の音

尸魂界某所、殆ど誰も訪れない流魂街一角、その外れには、周囲の風景に似つかわしくない住宅街とビルが立ち並ぶ。

「ほう、珍妙なモンを作ったもんじやの。」

半径一霊里にも及ぶ巨大な仕掛けを小高い丘から眺める者が居た。大きな数珠を首から下げた、坊主頭の大男、口元には長く黒い髭をたっぷりと抱えている。

誰かを探すように瞳をキョロキョロと動かす彼を、後ろから呼び止める声があった。

「現世の街が珍しいか、和尚。」

「…重國か、久しいのう。」

背に立つのは杖をつき、頭に十字の傷を携えた白い髭の老人だった。重國と呼ばれるこの男こそ、護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國その人である。

「珍しい、零番隊がわざわざ下まで降りてくるとは。それ程大事か。」

「おんしこそ、総隊長が共も連れず一人で出歩きおつて。自覚が足りとらんぞ。」

「確認じゃよ、確認。」

此処で会ったのも縁じゃ、幾つか答えい。

……今回の一件、零番隊はどう動く。」

刺すような鋭い視線を向ける重國にも関わらず、飄々とした態度を崩さぬまま和尚は告げる。

「何も<sup>なん</sup>。」

霊王様からは何も無い、よってワシはおんしらの顛末を静観する

よ。」

「そうか、はなから期待なぞしておらんかったがの。」

「じゃがのう1つだけ、ある虚を『見定めよ』と告げられておる。」

「……」

「心当たりがあるう？」

笑う和尚に対して、重國は驚愕していた。

靈王に目を付けられる程の『虚』と、これから自分は刃を交えようとしているのか。

「舞台を設えたのは浦原喜助か。」

「……重國、おんしの覚悟見せてもらうぞ。」

「言われんでも分かっとなるわい。」

いざとなれば刺し違える覚悟で。その為にこの準備期間中、秘境に籠もり1人黙々と刀を振るつたのだ。愚直な鍛錬など、護廷十三隊総隊長に就任してから何百年ぶりか。

その成果か、重國の頭は澄んでいる。

隊のしがらみ、総隊長の責務、尸魂界の守り手としての責任感

それら全てを一度忘れ、純粹な気持ちでかの虚と戦う為だ。

何よりも規律を重んじ、瀟靈廷の規範となっていた男は、今この時だけ自分の為に、少々自分勝手になっていた。

「んにしても、重國をここまで奮い立たせる虚か…面白そうじゃ。」

「舐めて掛ければ足下をすくわれるのは儂らだけでは無いやもしれぬぞ？ 和尚…いや、兵主部一兵衛よ。」

「軽々しくワシの名を呼びよつて、喉が潰れても知らんぞ。」

からから笑う和尚を横目に再び偽物の空座町を眺めていると、突然重國の懐から機械的な着信音が鳴り響く。

それを聞き、動きが止まる重國。

「どうした、出ぬのか？」

「……………使い方わからんのじゃ、儂。」

どっかの「ぼたん」を押せば話が出来るのは知っとなるんじゃが、こ  
ういうのは長次郎に丸投げでう。

はて、どれじゃったかの…」

「ぼたん…牡丹餅のことか？」

餅を食いながら話が出来るとは、いやはや最近は進んどのう。」

尸魂界最初にして最古の死神2名は、今どきの機械に弱かった。

未だピロピロ煩い伝令神機を手に取り動きが止まる重國と和尚。副隊長である雀部長次郎が迎えに現れるまで終始オロオロしっぱなしだった。

☆☆☆☆☆

さて

虚夜宮の中でも特に巨大な宮がある。

そこに住むのは嘗て『大帝』と恐れられた破面。数多の部下を従えて、虚圏の王とまで呼ばれた虚。

纏うのは王の風格。額に王冠の様な仮面を持ち、がっちりとした体躯に目元の傷が威圧感を増している。ぶっちゃけヤク○の組長って言われても納得してしまう強面おじいちゃん。その面に全ピカロが泣いた。

そう、その名もマイダー…

「紹介文でこの上なく失礼なモノログを語るな。」

え〜ピカロが泣いたのは本当でしょー？

「……五月蠅い。」

ちよつと気にしてるんかい。

という訳でマイフェイバリットクソダーリンこと、第2十刃バラガン・ルイゼンバーンの宮にお邪魔しているよ。

他の皆は色々忙しいみたいだから、構って構ってー！

「儂らも現世侵攻組じゃ言うとするに…」

そんなこと言って、見た感じ暇そうにしてるのアンタだけじゃん、シャルロット達従属官は忙しなく動き回ってるけどさ。

「王が忙しなく働いとつたらイカンじゃろ。」

ま、いいや。煎餅食べる？

「玉露は有るんじゃないのオ？」

ダーリンの好きな物くらい網羅済みですわい。

適当に椅子と机を呼び出して、ダーリンを座らせる。煎餅食べながら私の仕事が終わってくるまで時間を潰させてもらおう。

「…：…なんじゃ、今日はガキ共は来ておらんのか。」

マルちゃんは予定通り例の死神の足止めには、ピカロ達には外で適当に遊んで来なって言つといた。ロカちゃん、テスラ君、ルドボーン君も指示した通りに働いてくれるから今は一緒じゃない。

皆働きの者でお姉さんラクラクですわー。

「ボスの指示…：では無さそうじゃのオ。」

また何か企んでおるか。」

そりやあもう、私の中の諸葛孔明が灰色の脳細胞をフル稼働させて神算鬼謀をバッシバシ立案してっからね。

…ほら、予定通りゾマリが死んだよ。

隊長格と対峙していたゾマリの霊圧がいつの間にか消えた。さすがロカちゃんから報告が入る。

『ロージエーン・ドウ様。

セラティマ・エスパーダ  
第7十刃ゾマリ・ルルー様が死亡しました。既に虚繭は作動して  
います、《反膜の糸》同期率は85%…：』

おっけーロカちゃん、そのままそのまま。

死んでっただ連中はしまっっちゃおうねー。

『畏まりました。』

前に藍染君がやってた通信用の鬼道をロカちゃんにコピーさせて使ってもらい、返事を返したら、ダーリンがこの上なくキリツとした真面目な表情で告げてきた。

「教えい、ジェーン・ドウ……いやマイハニーよ。何を企んでおる。」

……ん？今マイハニーって言ったよね？

「えっ」

シャルロツテ！今のちゃんと聞いた!?

「聞こえてたわよォー！」

おめでとうございます、バラガン陛下！

ホラあんた達も！」

「陛下……おめでとうございます……」

おめでとうございます……おめでとうございます……！

作業をほっぽり出してダーリンの従属官を始めとする虚達が手を叩いて祝福をあげ出した。

………計画通り

「おい待て貴様ら、一体何を言っておる。」

若干戸惑い気味のダーリンに、従属官を代表してフィンドール君が前に出た。

「御妃様が仰られていたのです、『こっち来てからバラガンが私の事全然マイハニーって呼んでないのは、きつと藍染君に負けて自信を無くしてたからなんだよ！』と。」

そして陛下が王としての自信を取り戻され、再び虚圏に覇を唱えるべく立ち上がる時、御妃様の『マイハニー』呼びを解禁召されると！

そして今がその時！この現世侵攻のタイミングで！陛下はつい先程、ジェーン・ドウ様を『マイハニー』とお呼びになりました！

そのタイミング、正に正解エサクダの極みッ！

このフィンドール、今より一層陛下と御妃様の為、粉骨砕身仕える所存！」

「おめでトござイマス、陛下ア！目出度イ！めでたいなア！」

「あんな綺麗な奥さん…羨ましいっス！」

「うおおおおおっ！」

祝ってやる祝ってやる祝ってやるぜええええええっ!!おめでどうございます陛下アツ!!」

温かな拍手と喝采、いやー皆ありがとうありがとう！

第3部く完く!!

「いや終わるな終わるな、儂は……

…まさか貴様。」

何かに気付いたダーリンは私だけに見える様に驚愕の表情を浮かべて、思わず食べていた煎餅を取り落とす。

(外堀埋めに来よったアアアアアアアツツ!!)

ふっふっふ、ふが3つ。

今更気付いてももう遅い！既に『仕込み』は終わっているのよ！

頑なにマルちゃん的事も認知してくれないし、いつまでも私を放り出すから悪いのだ。アンタの部下達にふれまわって、私とダーリンの仲を広めておいた。周りにこれだけ祝福されれば、彼等を束ねる王であるアンタは下手に否定出来まい！何より無理に否定してこの祝福ムードをぶち壊すのは……

(ムウウウウウツ…出来ぬ！

配下の手前、『実は真面目な話を切り出そうとして気持ち切り替える為にマイハニー呼びしてみただけ』等とは死んでも言えん…!!  
全ては計略通りなのか…コレが彼奴の神算鬼謀…おのれ孔明ツ!!  
誰だか知らんけど!)

ほくらくねく既成事実う!

うふふふ…皆ありがとう!じゃーそろそろ作業に戻ってねー

♪

「「ハイ!おめでとうございます、御妃様ア」」

皆元気に返事して、蜘蛛の子を散らしたように従属官達は作業に戻っていった。

「はア…もう諦めたわ。」

それで、一体何を企んでおるマイハニーよ。

当然、ボスには伝えておらんのだろう?」

藍染君には前2人で話した時にそれっぽく説明したよ、まあいつもの笑顔で「好きにするといい」って言ってたね。

「2人で、か…ふん。」

?突然何を不機嫌になつてんのよ。

それに企みつて程じゃない。

藍染君が居なくなつた後の事を考えて、保険を掛けたただけだよ?

「…はぐらかしてばかりだのう。」

答えろ、我が妻よ。

『お前の今1番やりたい事は何だ?』

…ああ、それはね

☆☆☆☆

「……………」まで、ですか。」

虚夜宮の侵入者、朽木ルキアが侵入した第9十刃の宮にて、一つの戦いが終わろうとしている。

護廷十三隊六番隊長、朽木白哉と第7十刃ゾマリ・ルルー。二人の戦いは熾烈を極めた。

止めとばかりに白哉の放った巨大な球状の刃、白哉の正解『千本桜景厳』が奥義、『吭景・千本桜景厳』が炸裂する。宮の壁は億の刃によって粉々に破壊され、天井は崩れ落ち、最早屋外と変わらない惨状の中で、刃の花卉の中に立つ白哉には傷一つ無く、逆に刀剣解放状態のゾマリはその白い姿を血に染めて、胸元に刻まれた刺傷から夥しい程の血を流していた。

「ふ…ふっふっふ…」

「何が可笑しい。」

ヌ、ン…

ゾマリの額に残されていた瞳が開かれ、白哉を見つめる直前に縛道で作られた壁が立ちほだかる。

ゾマリの帰刃、『呪眼僧伽』<sup>ブルヘリア</sup>の支配能力は鬼道系の技と同じ、ならば『断空』等で鬼道を遮断すれば彼の支配は此方へ届くことは無い。そう考えた白哉の判断は正しかった。

如何に十刃最速といえど、二人の間には実力の差が有り過ぎる。だがそれでもゾマリは不敵な笑みを絶やさない。

「『千本桜』、と言いましたか。」

貴方のその力は。」

「そうだ。」



「……美しい力だ。」

「何……？」

「美しい、そう言ったのですよ。」

桜の花弁一枚一枚が刃となる斬魄刀……なんと美麗で、残酷な技だ。」  
そう嘆息し、自身の身体を見やる。

解放状態の彼は下半身が南瓜の様に膨れ上がり、表面には無数の『愛』を与える目が存在していたが、今ではその目はすべて潰され、残る支配も防がれた。

為す術もない、とは今の状態を言うのだろう。

「驚いたな、破面が美を語るとは。」

「『驚いた』などと……」

我等とて醜美を感じる事くらい有ります。

まあ、最近知る余裕が出来たのですよ。ある女性に諭されてね。」

はつきり言つてゾマリは白哉に手も足も出なかった。文字通り『格』が違い過ぎたのだ。

しかしゾマリの表情には諦めと同時に、白哉に対する感嘆が見て取れる。

「此度は貴方の勝ちだ。だが、私如き倒した所で状況は変わらない。  
名も知らぬ隊長よ、覚えておくといい。」

藍染様は全て見ておられる、彼女は既に手を打っている。貴方がたがどう抗おうと、大局は我等が手の内にある……誰も彼も……逃れられない……！

ああ……藍染様、ばん……ぎ……い……」

言い終わらぬうちに、白いあぶくがゾマリを包み飲み込み、消えていった。

その後、遅れてきた四番隊第七席、山田花太郎がルキアを治療し、束の間の休息を得る。

破面は消滅、それを見送った白哉はちらりと出血で倒れるルキアを

見やり、ゾマリとの戦闘を思い出した。

『見つめた物の支配権を得るチカラ』。

手首を見つめれば腕が勝手に動く、頭に受ければ全身を支配される、その恐ろしい能力を遺憾なく発揮して戦うゾマリだったが、何故か倒れたルキアにだけは支配の力を使わなかったのだ。

(力を使い、動けぬルキアを人質に取るなり卑怯な手を打つてくると思っていたが…存外、見た目より矜持を重んじる破面だったな。)

卑怯な手を使われたとしても負ける気などなかったが、その正々堂々とした戦いぶりに、白哉は感心していた。

だが、同時に一つの疑問が彼の胸に生じる。

(奴が戦闘中、幾度も呼んだ『彼女』とは…)

『我等は変わった！彼女の存在が破面を変えたのだ！』

『藍染様が創り、彼女が育てた！今の虚夜宮に一片も隙は無い！』

戦闘中、ゾマリが幾度となく口にしたある女性の存在。

考えられる可能性は一つ、総隊長が『気を付けろ』と忠告し、現世から戻った日番谷隊長がその存在を報告した『始祖の虚』。

十二番隊の計測では、かの藍染惣右介に匹敵する程の実力があると見積もられているその破面を思い出す。

(…何が来ようと、今は進まねばならん。)

勿論負けるつもりは毛頭ない、が。

白哉の胸には、底知れぬ不安が張り付いていた。

その時

「おにーさん、だれ？」

無邪気な少女の声が白哉の耳に届いた。  
振り返るとそこに居るのは、目元の傷が印象的な白髪の少女の姿を  
した破面。

『もしかして、死神?』

《おかあさんが言ってた人だ!》

(あそぼっ!あそぼっ!)

その後ろからぞろぞろと、子供の姿をした破面がやって来る。先頭  
に立つ少女は、無垢な瞳を白哉に向けて言い放った。

「それじゃ皆に伝えよう!」

侵入者を見つけたよ!遊ぼう、おにーさん!」

次々と飛来する無数の影、白哉達を取り囲む様に、集結する小さな  
破面達。

悪戯小僧は遊び相手を見つけてしまった

☆☆☆☆

虚夜宮は広大な建物だ。

ダダダダダダ……

当然、道も入り組んでいて、迷いやすい。

ズダダダダダダ……

そんな中、天蓋によって真昼のように明るく照らされた白い砂漠を  
ひた走る影が1つ。

ズサアツ!!

急に立ち止まった彼は辺りを見回して、この数時間走り続けて何の成果も得られなかったことを嘆く。

「誰も居ねえじゃねエかどうなつてやがるツ!!」

十一番隊隊長、更木剣八。

護廷十三隊最強の戦闘集団、十一番隊を束ねる猛者にして、第十一代目『剣八』の名を継ぐ男。

そして、その背に乗る少女、副隊長の草鹿やちるは無邪気な笑顔で更木を励ました。

「だいじょうぶだよ!ここ見た事ない場所だし、もうすぐ敵に会うつて!」

「まああの迷路みてえな建物から出られたのは僥倖だったが…それにしても誰にも会わねえ。

虚圏つてのは虚の巣じゃなかったのかよ。」

更木剣八は他の歴代『剣八』と同様、例に漏れず戦闘狂である。虚圏へ来た理由も「自分より強えヤツに会いに行く」という某ドラゴン何某の様な思想を持っているが故。

「あつ!剣ちゃん、彼処に誰か居るよ!」

やちるが元気に叫ぶ方を見やれば、そんな彼等に近づく者がいる。

「はあつ…はあつ…ぜえぜえ…」

やつと…止まって…くれ…た…」

…随分息切れしているみたいだった。

胸を抑えながら呼吸を整え、肩で息をしている破面を更木は一瞥し、鼻を鳴らす。

「なんだお前、大した霊圧も無えみたいだが…俺に用かよ。」

「は…はいいい…」

貴方を止めるように、お母様に言われましたから…」

破面は顔を上げる。

髪は綺麗な金髪で、頭にティアラの様な仮面持つ女の破面だった。「俺を止める為だあ?」

女、テメエが俺と遊んでくれんのか。それにしちや随分頼りねえ靈圧をしてんだが…」

虚圏に来てから随分戦っていない為、焦れていたのか。どつ、と更木から容赦ない靈圧が溢れ出す。

だが、並の魂魄なら意識を保つ事すら困難な靈圧を全身に浴びて、目の前の破面は平然と向かい合い立っていた。

「…いい、いきます。」

ヨロヨロと背中のロングソードを抜き、更木に向けて鋒を向ける。

「第5十刃、ジェーン・ドウ様の従属官、ワンダーワイス・マルージェラ…と申します。」

ええつと…眼帯の人…?」

「更木剣八だ。」

抜いたつて事は、覚悟はあるみてえだな。

俺と遊んでくれんだろ?女だからつて容赦はしねエぞ。」

凶悪な笑みを浮かべながら、更木も剣を抜く。

「…更木さん。本当はこんな事したくないんです。ごめんなさい。」

でもお母様の御命令なんです…だから…」

戦闘不能に、なって下さい

「…」<sup>かえ</sup>還して、<sup>エスティンギル</sup>《滅却靈姫》

解号と共に、ワンダーワイスの斬魄刀が霧の様に霧散して

更木剣八と草鹿やちるの靈圧が、消えた

## 十九話 遊び遊ばれ遊び果て 前

そもさん、『完璧な生命』とは一体何か。

絶対的な攻撃力か、何物も通さぬ鉄壁の防御か、はたまた万人を虜にするカリスマか：候補は尽きない。

だが、天才たる僕は2つの結論を導き出した。

『再誕』と『継承』

フォルニカラス

1つは邪淫後の真の力、ガブリエール受胎告知。

対象に僕自身を孕ませ、その霊圧を吸い取ることと甦る受胎能力。この能力のお陰で僕は死を克服し、完全な生命へと進化を遂げる。

死すら自身の循環に取り込む事で永遠の生命となりうる。この身体になってから数百年に渡る永き月日の末、手に入れた僕の最高傑作だ。

もう1つは：あの忌々しい女の助言によって思い付いたものだから言いたくはない。

見せるとしたら、それは僕が本当に追い詰められていて、なりふり構ってられない時のみだ。

ま、尤も、そんな状況になるなんて事、例え虚圏が海に沈んでも有り得ないけどね。

☆☆☆☆

「では、100年後までごきげんよう。」

そうやって涅マユリは無防備なザエルアポロの心臓へ斬魄刀を突き刺し、刃先を根本からへし折った。

ザエルアポロVS涅マユリ、第8十刃の宮で行われた争いは、宮を

全壊させるまでに及ぶ。

「おい、斬魄刀折って大丈夫なのか…?」

ザエルアポロの能力によって軒並み臓物を潰され、息も絶え絶えな石田は眩くが、マユリは一笑に付した。

「ハッ、主人を攻撃する斬魄刀など、これぐらいのお仕置きが丁度いいヨ。」

これで邪魔者は消えた。ネム、探せ。」

「……………」

「おいネム…ああ、そうだった。」

全く使えん奴め…」

マユリの視線の先には、ザエルアポロの受胎告知を受け、ベーコンの様に干からびたネムの姿。

「仕方ないネ…」

くく突然ですが暫く音声のみでお送り致しますくく

ジユボツ…

「…あつ」

ジユブ…ジユブ…

「ああ…♡あつあつ♡」

ジユボボボツ…

「ああ…♡あああああつ♡」

グチュ…グチュ……ジユプンツ

「あああああああああつっ♡」

ジユルンツ…

「ああ…♡はっ…はっ…♡」

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

「…ふう。」

「有難う御座います、マユリ様。」

「おい待てエエエエツ?!?!?」

叫ぶ石田。潰れた内臓に痛みが響くのもお構い無しに彼は心からの叫びを上げた。

それをマユリは心底嫌そうな目付きで睨み付ける。

「なんだ、五月蠅い奴だネ。」

「今のは何だ!? ナニをしてた!」

「決まってるだろう、『治療行為』だよ。」

「嘘つけ! 映せないこととしてただけだろ!」

「ヤレヤレ、童貞滅却師はこれだから…」

「どどど童貞ちやうわ! ぐっは!?!」

「落ち着け石田、一応俺達内臓潰れてるんだぞ…」

同じく内臓を潰された恋次の忠告虚しく、興奮状態の雨竜はギャグ漫画よろしく再び口から血を吐いた。

そんな彼等を見るのに飽きたのか、マユリはネムに命じ、その後無事に恋次と雨竜は身体を改なほされる事となる。

マユリは崩れ去った第8宮を眺め、いくつか場所を指定しネムに掘り起こすよう命じる。

途中埋まっていたペッシェとドンドチャツカが掘り起こされて一悶着あったものの、マユリは目論見通り、無事に目的の場所を見つける事が出来た。

「なんだ…この扉。」

雨竜は不思議そうに呟く。そこにあっただのはあれだけ大規模な崩壊が起こったにも関わらず、傷一つ付いていない四角い箱の様な部屋



と、それに続く扉だった。

「やつと見つけたヨ…これで多少なりとも《始祖》の情報があればいいが…」

説明する暇もなく、マユリは扉に手を掛けたその時。

『僕の研究成果をコソドロとは感心しないね、涅マユリ。』

「?!?!?!」

聞き覚えのある声が響いた。

すぐさま恋次は蛇尾丸を構え、警戒態勢をとる。だがマユリだけは、面倒臭そうに扉に手を掛けたまま冷静な口調で応対した。

「なんだ、まだ隠し玉があつたんじやないか。ザエルアポロ・グランツ。」

ちらりと先程殺したザエルアポロの死体を見る。確かに彼はマユリの作った薬品『超人薬』を摂取し、永劫に等しい苦しみを与えられながらじわじわ死んでいった。正しくは現在進行形で死んでいる筈。

『ああ、勘違いしないでくれ。』

君達は間違いなく僕を殺した、だから僕が起きたんだ。』

「…ホウ?」

パチ…パチ…パチ…とわざとらしい拍手が聞こえてくる。音源は扉に取り付けられたスピーカーからだった。

『侵入者諸君、よくぞ僕を打倒した。』

と、褒めておいてあげよう。それが如何に無駄な事と知っていても、努力は認めないといけないねえ?』

「てめえ…またどっかに生まれ変わってやがったのか!姿を見せろ!」

恋次が吼えるも、笑うザエルアポロはそれを無視して喋り出す。

『受胎告知は邪淫妃の最高傑作、そして今の僕は…邪淫妃の最終手段、ヌメラウス双児繭によってたった今産まれた新たなザエルアポロさ。』

君達如きはこの能力は不要だと思って使わないつもりでいたんだが…なんとも事は上手く運ばないものだね。』

「コピー……だど？」

『そうだとも、滅却師。』

忌々しいあの女に作らされた研究成果さ。

記憶、戦闘経験、能力や他全てを蓄積した《繭》を 創り、本体の オリジナル 死をトリガーにして新たに生まれ変わる。』

「……何かと思えばクローン程度、下らないネ。」

『クローン……？矮小だね涅マユリ。』

これは《転生》さ。

肉体の死を超え、精神の死すら超越した僕は更なる高みへと至る。

……ああ、そう言えば忘れていた。

僕が死ぬ事によって発動するものはもう一つあるんだ。』

もったいぶって話すザエルアポロ。

その様子から、マユリはいち早く結論にたどり着いていた。

扉から手を離そうとするがもう遅い、扉から伸びた触手があつという間にマユリの腕を絡め取り、まるでコンクリートの様に凝固したのだ。

「……」

『おおっと、逃がさないよ。』

これから起こる出来事を馬鹿の君達にも分かるよう、簡潔に丁寧に説明してあげよう。

その部屋はこれから爆発する。』

「「なん……だど……!?」」

今明かされる驚愕の真実に唾然とする雨竜と恋次、ペツシエとドンドチャツカがワタワタと大げさに慌てふためいているがそんな事はどうでもいい。

『涅マユリ。』

君が扉に手を掛けるその部屋には、積み上げた僕の研究成果も、まして始祖の情報も、なに一つ存在しない。

代わりに在るのは特大の《爆弾》さ、この宮を纏めて飲み込む程の

ね。』

「……」

『……全く。散々否定しておいて、結局あの女の言う通りになっただなんて…腹立だしい限りだが…』

「ハツタリを言っているワケでは無さそうだネ。」

『僕はいつだって本気さ。』

永年溜めた始祖の研究成果を、ポツと出の死神に奪われるなんて堪らない。君だってそうするだろう？

奪われるくらいなら、諸共吹き飛ばしてしまえってね。』

では、さよなら。

スピーカーから音声が続切れると同時に、地面が大きく揺れる。震源はあの部屋からだ。

最初に異変に気付いたのは、恋次だった

「オイ…あの部屋、萎んでねえか？」

あれだけの崩落を受けてビクともしなかつた正方形の小部屋が、徐々に小さくなっていく。

更に雨竜の足元にあつた小さな小石ほどの瓦礫が、ひとりでに動き始めた。それだけではない。部屋を中心に、まるで吸い寄せられるかのように、周り全ての瓦礫がズルズルと動き出していた。

「な…なんだ…何が起こって…」

「ネムッ！ワタシの腕を切り落とせ、早くしろ！」

「……ッ!? 承知しました、マユリ様。」

ネムの手刀がすかさず触手によって固められたマユリの腕を根本から切り落とし、漸く彼は自由になるが、タツチの差で、マユリの腕ごと白い扉がへしやげ、四角い部屋が内側から押し潰された。

すぐにマユリは持参した補肉剤ほしくさいで失った腕を再生させる。

「一体何がどうなってるでヤンス!？」

「わからん！分かんらんが十中八九我々はピンチだ！それも命に関わるレベルのなあああああ!?!」

「ペペペッシエエエエッ!!」

軽いペッシエがいの一番に中心に引つ張られ始め、それに気付いた

ドンドチャツカが必死に彼の手を掴み引き寄せる。

「危なかったでヤンスウー！」

「しっ…死ぬかと思った…」

だが一瞬チラツツと見えたぞ雨竜！

なんか黒い塊があこの部屋を呑み込んでいる！」

「はあ?! 訳がわからないぞー！」

更に部屋は小さくなる、サッカーボール程の大きさまで圧縮された部屋はそのまま呑み込まれ、消えてなくなった。

中から顔を出したのは、漆黒の球体だ。光も一切反射しない真黒な塊がそこに鎮座していた。

「なん…だ…これは…?」

「つうか見るからにやべえ！」

涅隊長、逃げましょうー！」

「何を馬鹿な事を言っている阿散井恋次。」

目の前に貴重な材料があるのだ、このままサンプルも取らずに見過ごせるか。」

「こんな時まで?! マッドサイエンティスト怖い！」

球体が心臓の様に脈動を始め、それに伴い吸い込む力が更に激しくなる。段々と雨竜達の身体も引き寄せられ始めた。

黒い球体…強烈な引力…

「まさか、ブラックホール!？」

ザエルアポロが言っていた『爆弾』はこれの事だったのか!」

雨竜の推理は的確だ。

ザエルアポロは、嘗てジェーンから得た残魄玉をトラップに改造し、あの部屋に仕掛けていた。自分の死後、研究成果を荒らす者が現れると悟り、残魄玉による証拠隠滅を企てた。

然してその企みは的中し、こうして宮ごと雨竜達を飲み込もうとしている。

「おい、涅マユリ！」

逃げないと僕達も巻き込まれるぞー！」

「……………チツ！仕方ないネ。」

「うおおおおお吸い込まれるうううッ!?!」

大量の瓦礫が宙を舞い、強烈な引力が雨竜達を襲う。球体に触れたそばから瓦礫がすり潰され、砕け散る。それを見てドンドチャツカは顔を青くした。

「ひいひいひい瓦礫がぺちゃんこでヤンス!」

「まずいぞ、僕達もすり潰される前に一刻も早くここを離れないと…」

「滅却師、仕事を与えるヨ。」

「これからーーーーーをーーーーしてーーーー」

「なんだって?聞き取れないぞ!」

「もっと大きな声で…ッ!?!?」

吹き荒れる風と轟音によって世界が歪む。

雨竜がマユリに聞き返す声すらかき消しながら、一際大きく球体が震え……

黒い塊が宮の跡地を飲み込み、弾け飛んだ

☆☆☆☆

「あっはっは。」

相も変わらず、笑っちゃうくらいの威力だな。」

自身の宮が弾け飛びアルタイム映像を見ながら、珈琲を一口含んだ。

ザエルアポロ・グランツは死んだ。

新しい僕は嘗てのラボに見切りをつけ、侵入者<sup>コッドロ</sup>ごと吹き飛ばしてやったのだ。

貴重な研究成果？そんなもの、3000回以上ラボを吹き飛ばされている僕からすれば屁でもない。こちとらプロなのだ。

…自分で言っただけでちよつと悲しくなってきた。な、泣いてねえし…  
「ロカ、連中は死んだか？」

「残魄玉の霊圧が入り乱れているので、糸を使っても詳しくは調査できませんが…おそらく全滅したものと思われまます。」

「そうかい、いい気味だ。」

残魄玉の暴走に巻き込まれて生きてはいまい。アレは始祖の力だ、仕留め損ねる。という事もないだろう。正直僕もなんであの時生きていたのか不思議なくらいだからね。

「……………」

「なんだロカ、言いたいことがあるなら言え。」

そんなにまじまじと見るんじゃない。」

「いえ…その…とても可愛らしいお姿になられて…」

「ああ？」

「すいませんすいません！」

でも…とても愛らしいです。庇護欲をそそられます。」

頬を赤らめながらうつとりとした視線で僕を舐めるように見続けるロカ、鬱陶しい事この上ない。…コイツこんな性格だったか？

まあ…この身体では仕方の無い事か…

《双児繭》唯一の欠点だ。記憶と経験の完全継承は可能だが、そつちにリソースを使いすぎた。肉体の完全なコピーが生成しきれない。

僕の身体は今、十歳前後の子供と変わらない程縮んでいる。人間の成長を模倣したからか、子供の姿で生まれ変わってしまった。成長するまでしばらくはこのままだ。

「あー写真を撮らせて頂いても良いですか？」

ジェーン様と共有したいのですが…」

「止めるオ!!絶つっつ対に撮影するなよ!？」

さっさとジェーン・ドウに命令された仕事に戻れ馬鹿!」

「はい…」シヨボーン

心底残念そうにロカは隣の部屋へと去っていく。



テコでも僕はこの『ジエーン・ドウの宮の地下に作った予備のラボ』から出んからな！絶対になだ！

そう言えば、残魄玉が弾ける直前、中心付近で一筋の青い光が走ったような気がしたが、気のせいだろうか。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

深い闇の底から浮き上がるような、そんな感覚に襲われた。

…私は何をしていたんだったか、確か海燕殿の偽物と戦って…次に現れた男に…

「…はっ！此処は…（ぶっちん!!）」

「あ痛ったああ?!?!」

勢いよく起き上がると、何かとぶつかって頭に強い衝撃が走った。い、痛いではないか！

「おおお…朽木さん…おはようございます。」

「貴方は…花太郎…」

「頭の湿布を替えようとしたんですが…急に起きるから避けられなく…」

「むうう…すまぬ。」

「いいえこちらこそ…」



お互い平謝りして、とりあえず湿布を替えてもらった。

まだ頭に鈍痛が走るが…此処は一体？

私と花太郎は、逆四角錐の形をした黄色い膜に護られていた。

「これは…『倒山晶』？」

「はい、話すとき長くなるんですが…この結界は『ボクが張ったんだよ、おねえちゃん。』」

ひよこつと花太郎の後ろから現れたのは、ボロボロのローブを着込んだ子供、その頭には割れた仮面が着いている。

まさかこの子は…

「破面の子供…？」

『ウン、僕等はピカロ。宜しくね。』

彼は小さくお辞儀して、握手を求めた。

思わず手を取ってしまったが、危険ではないのか？相手は子供とはいえ破面だぞ？

落ち着いて周りを見間渡せば、真っ暗だった建物は天井が抜け落ちてかなり明るくなっていた。

部屋を中心では彼と同じローブを来た幾人もの子供達と…

「兄様…」

私の兄、朽木白哉が戦っている。

一体いつから…？

「く、朽木さん、覚えてますか？」

破面に刺されて重傷だった事…」

「…ああ、覚えている。」

私は手も足も出さずやられてしまった。この様子だと、私はまた兄様の手を煩わせてしまったな…

というか何故兄様達が此処に!?尸魂界は織姫から手を引いたのでは無かったのか？」

そうだ、織姫が私達を裏切り藍染の下へ向かったという情報を受け、瀨霊廷は織姫捜索に見切りを付けた。だから私と恋次は黙って虚圏までやって来たのだ。

…：霊圧を探れば、兄様の他にも涅隊長と卯ノ花隊長の霊圧も感じ

る。遠くにいる為か、僅かしか感じないが更木隊長の霊圧も感じ取れた。

隊長格を4名も動員するなど、総隊長が許す訳がない。

「良く分からないですけど、僕達はちゃんと総隊長の命令で虚圏こうちに来ましたよ?」

キョトンとする花太郎。

下級隊士には殆ど伝えられていないようだ。なら兄様にご質問するのが一番手っ取り早いのだが…

『今あのおにーさんはボク達と遊んでるんだから、邪魔しないでよね。』

不貞腐れるように、ピカコと名乗った少年は言った。

子供とはいえ、相手は破面。負傷した私と戦えない花太郎では少々厳しいか…ここは大人しくしておこう。

兄様は今、戦闘の真っ最中だ。

白い髪をした子供の破面が持つ二本のダガーナイフが高速で振るわれ、兄様の斬魄刀とぶつかり合う。剣戟を交わす度、周囲に金属の音が響いた。

始解もせぬ状態とはいえ、あの少女は兄様と速度で渡り合っている。凄まじい手練だ。

それに加え、周りの子供破面達が繰り出しているのは鬼道か!?

あれは破道の四、『白雷』。向こうは破道の三十二、『黄火閃』。多種多様な鬼道が兄様に向けて繰り出されていた。

「何故彼等は死神の鬼道を…」

『藍染おじさんや市丸おじさんに教えて貰ったよ?』

お、おじさツ…

『おかあさんからオススメされて皆で練習したんだ。今までこんな面白い事があるなんて知らなかったよ。』

ボンってなったりピカってなったり、楽しいよね!

それにボク達にも個性があつてさ。

破道の得意な子、縛道の得意な子、無詠唱で使える子、色々居るんだ。』

因みに僕は防御系の縛道が得意だよ。とあつけらかんと言つてのけるピカロという破面。

「あはははっ！おにいちゃん強いね！

他の十刃ふりぼろん落ちじゃここまでたくさん遊んでくれないんだ。」

「子供と戯れている暇はない、そこを退け。」

「やだもんやだもん。おかあさんから侵入者さんとは沢山遊んでもらえって言われたし、まだまだ付き合つて貰うよ！みんなー！」

はーい！

縛道の七十九、九曜縛!!

発動したのは縛道、『九曜縛』。それが兄様の動きを鈍くする。

この破面、易々と七十番台の縛道を…つてなんだあれは!?明らかに数が多いではないか！

本来なら9つの球体が相手の動きを封じる技だが、先程見えた球体の数は明らかに多かった。

『そりやそうでしょ、9×4は36だよ?』

「なん…だと…?」

まさかあの子供達は、一人一人が個別に縛道を発動させていたのか…?

鬼道の弱点は詠唱中は無防備になる事だ、更に同時に複数の鬼道を使う際には「後述詠唱」という技術が必要になる。これはかなり高等技術ゆえ、習得するのに並々ならぬ鍛錬を積みねばならない。

だがあの子供達は代わる代わる交互に鬼道を唱え、人海戦術で詠唱のデメリットを潰している。そして同じ鬼道も同時に重複させる事により威力を増していた。

たしか瀨靈廷でも鬼道を主に扱う「鬼道衆」なる者達が居て、似たような連携を取っている所を見た気がするが、この子供達には遠く及ばないだろう。

「えいっー」

「ぐツ…!?!」

九曜縛で動きが鈍った兄様へ少女のダガーナイフが肩を切り裂く。  
隊首羽織が裂け、鮮血が舞った。

「あははーもつともつとー!」

《縛道の六十三、鎖条鎖縛》

《縛道の六十一、六杖光牢》

休む間もなく、霊子で編まれた鎖が兄様を雁字搦めにし、その上から光の杭が打ち込まれた。

「やつちやえみんなー!」

君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ

蒼火の壁に双蓮を刻む

大火の淵を遠天にて待つ

まるで合唱のように、ピカ口達が同時に詠唱を始め、青い炎がそこからじゆうに灯った。

あの詠唱は…まさかツ!?

「……ッ!」

「せーのっ!」

破道の七十三、双連蒼火墜!!

次の瞬間、10人分の双連蒼火墜が兄様に向けて炸裂した。大爆発が建物を揺らし、視界が煙に包まれる。私達は結界に護られていたの  
で何ともないが…

「く、朽木隊長お!?!」

「兄様っ!」

思わず叫んでしまったその時、桜色の風が煙を切り開く。煙が晴れるとそこには、正解《千本桜景厳》の花卉を漂わせる兄様の姿が。

良かった、多少火傷は負っている様だが、直撃する寸前に正解を発動させて爆発の威力を殺いだようだ。

「すごいすごい！」

それ、きれいな技だね。おにいちゃん。」

「…今日はよく褒められる日だな。」

「おかあさんが言ってたよ、死神って《オサレ》な戦い方をするんだって。」

おにいちゃんもなの？」

「オサレはよく分からないが、私は私の掟の為、戦うだけだ。」

「おきて…？何それ、良くわかんないや。」

「童が理解するにはまだ早い。」

「も〜！子供扱いして！」

床を勢いよく蹴って、飛び出すピカロ。

千本桜の花卉が集まり、撃ち落とそうと束になって彼女を襲う。

それをピカロは全て叩き落としていた。腕が見えなくなるほどの連続攻撃が見舞われ、ギャリギャリと耳障りな音を立てながら千本桜が散り散りになっていく。

「破道の七十八、斬華輪！」

ダガーナイフの描いた軌跡が光の帯になり、そこから生まれた鬼道の刃が兄様に襲い掛かった。

距離が近い…！だが兄様ならこの程度の鬼道など…

「…ッ！」

そう思った矢先、鮮血が兄様の脇腹を染めた。何故だ、確かに距離は近かったが、防御出来ない速度ではなかった。千本桜を自分の傍まで回せば十分防ぐ事が出来たはずなのに。

「…？…どーんっ！」

「…ッ！おっふウ!?」

…聞いたことの無い声が兄様から聞こえた。

まあ、そうなるのも仕方ないか。突然ピカロが兄様のどてつぱらに飛び込んで抱きついたのだから。

兄様に抱きつくなんてちよつと羨まし（ゲフンゲフン）…いやなんでもない

「なんの真似だ…」

「えへへー、やっぱり。」

そのきれいな花びら、あんまり自分の近くに寄せられないんだ。

近づけ過ぎると自分まで斬れちゃうもんね。」

「……！」

「この距離なら斬れるかな…わッ!?」

ピカロが飛び退いた場所を一瞬遅く千本桜が通過した。

「あつぶないなーもー！」

『無傷圏』と呼んでいる。

自身の刃で手を切ったなど、笑えぬ話だからな。」

兄様の千本桜は広範囲を切り裂く斬魄刀。威力が絶大だが、使い勝手を誤れば自身を傷付けてしまう。故に刃を通さぬ範囲を設定して自傷を避けているのか…流石兄様だな！

「最終勧告だ、そこを退け。童を騷る趣味は無い。」

「やーだよつ、私達はまだ満足してないもん！」

ピカロはべえーつと舌を出してこれを拒否。

「…なら、仕方無い。」

再び無数の鬼道が兄様を狙って放たれた。

あの詠唱は赤火砲…それに大地転踊…雷吼砲まで撃てるのか!?

「…『断空』。」

凄まじい音が鳴り響き、それらは全て兄様の断空によって阻まれる。

「あー！それずるい奴だ！」

「狡くない、立派な鬼道だ。」

ピカロは姿勢を低くし、床を蹴って一足飛びに無防備な兄様へと飛

びかかった。ダガーナイフはまっすぐにその首筋へ向けられている。  
：速い！また無傷圏の中へ入る気か!?

ふと気付く、さつきまで兄様の周りを舞っていた千本桜の花弁は何処にも無かった。部屋の中央には斬魄刀も持たぬ無防備な兄様が居るだけだ。

このままでは直撃してしまう…!

『散陣・千本桜景厳』

突如、地面から千本桜の刃が吹き上がる。

「きやああああああっ?!?!」

「気付かなかったか、私の足下に千本桜の花弁が舞落ちていた事に。」

童とて破面。忠告はした、せめて一息に葬ってやろう。」

桜色の瀑布がピカロを襲い、そのまま周りの子供達を巻き込んで渦を巻き始めた。

一通り暴れ回った花卉が再び兄様の下へ戻ってきた時、周りには身体を切り刻まれ、血にまみれた子供達が床に転がっているのが見える。

子供の姿をした破面だから余計惨いな…兄様と戦っていた少女は特に傷が酷く、消えてしまっそうなのか、身体から赤い霞の様なものが滲み出していた。

「あう…痛い…痛いよお…」

「…済まない。苦しませずに逝かせてやるつもりだったが、加減を間違えた。」

お前達は鋼皮を纏っていたのだったな。」

「まだ…まだだよ…」

ピカロはまだ遊び足りないって言ってる…

まだ…おにいちゃんと遊ばなきゃ…わたしは満足しないもん…」

「喋るな、苦しみが増すだけだ。」

血を滲ませながら少女が起き上がり、兄様に向けてダガーナイフを

突き付ける。が、限界が訪れたのか、刃が届くことはなく、糸が切れた人形の様に膝から崩れ落ち、彼女の霊圧は完全に消えてしまった。それにつられるように他のピカロ達が血霞の様に消えていく。

終わりか、後味の悪い戦いだったが、これで先に『そんなわけないじゃーん』

なん…だと…？

そう言えば此処にピカロが一人残っていた！

今まで結界の中から静観を決め込んでいた少年は立ち上がり、兄様に向けて言い放つ。

『ボク達はまだ遊び足りないよ。』

もつと遊ぼう、死ぬまで遊ぼう、遊び疲れて眠くなるまで、おにいちゃんに構ってもらうのは止めないよ。』

それがボク達わたしたちのやりたい事だから

なんだ？今、この子の声が二重に聞こえて…

結界が解除されていく。少年は、あの少女と同じ小さなダガーナイフを腰から抜いて、呟いた。

――遊べ、ランゴスタ・ミズフラトリア《戯擬軍翔》

そこかしこから霊圧が溢れ出し、さつきまで倒れていた子供達が一斉に起き上がる。その背中には虫の羽を模した4枚の翼が付いていて、超音波の様な耳障りな音が鳴り響いた。

勿論、兄様がボロボロにしたあの少女も元気に起き上がり…

「おにいちゃん、あ・そ・ぼ♪」



満面の笑みで、兄様の背を刃が貫いた。

☆☆☆☆

子供つてのは純粹だ

あらゆるものに興味を持ち、スポンジみたいに経験を吸収して、自分の力に変えてしまう。

その行動は予測不可能回避不可、目を付けられたら最後、満足するまで付き合わされる。

『無邪氣』って言葉があるでしょ？

邪よこしまな心が無いと書いて無邪氣。あの子達に悪意は一切無い、あの子達はただ遊んでほしいだけなんだ。

鬼おにごっこでもいい、かくれんぼでもいい、おままごとでもなんでもいいから構って、遊び相手になって欲しい。

なんなら戦闘ですら、あの子達にとっては『遊び』になるだろう。その為に最適なピカロ自分をあの子達は作り出した。

死神達はピカロとの遊び方に気付くかな？

それとも気付かないまま死ぬまでピカロにせつつかれるのかな？

まあ、連中が死のうがどうでもいい話だけどさ。

第2宮を追い出されて、私は織姫ちゃんの所にでも顔を出そうかと虚夜宮の中をとぼとぼ歩いてた。たまには瞬間移動だけじゃなくて徒歩で移動しないとね。

……ダーリンったら。私は『今一番やりたい事』を言っただけなのに、それ聞いた途端目の色変えて私を追い出すんだもん。やんなっ

ちやうね。

妙なやる気に満ち溢れて、変なのー。

どーすっかなー、藍染君トコにでも冷やかしに行つてやろうか。どーせ私は呼ばれるまで暇人だし…いや暇破面か。

「ジエーン・ドウ。」

廊下を歩いてると唐突に声がしたので振り返る。そこにはウルキオラがいつもの仏頂面で立っていた。

なんだよミスター無表情。

「お前が予見した通り、グリムジョーが黒崎一護と交戦した。」

あつそ、良かったじゃん。

あの通路の先にアイツ置いて正解だったね。きっと負けると思うけど、相手が黒崎君なら殺されはしないかな。

「何故そう言いきれぬ。」

織姫ちゃんから話を聞いたからね。

正義感の強いザ・一般人みたいな子だよ黒崎一護君。

彼の目的は『襲撃』じゃなくて『潜入』だ。無用な戦いは避けるだろうし、グリムジョーを殺してまで私達の警戒を引き上げるメリットが無いもの。

「…そうか。」

…で？なんで私は喉元にアンタの斬魄刀を突きつけられてるのか教えてくれない？

「いつもの無駄に派手なりアクションはしないんだな。」

えっ期待してた？ゴメンもう一回やり直そ、出川○朗も裸足で逃げ出す脅威のリアクション芸見せてあげるよ。

「却下だ、そして誰だ。」

貴様の行動が理解出来ん。何故俺達を誑かす、何の意味がある。虚圏に侵略を許した今においても尚、貴様の行いには何かが欠けてい

る。

それを問い質すまで刃は引かないぞ。」

『藍染様の不利になるのなら俺が貴様を殺す』でしょ

「…ッ!？」

声が被った。

そう言うと思つたよ、ウルキオラ。

アンタは一番藍染君にご執心だもんね。

刃を掴む。ウルキオラは力を込めている様だけど、こんな程度で私は切れないし、私のパウワの前では無力なのだよふはははは。

……フフ、怖いか？

「何を言っている。」

隠さなくてもいいよ。藍染君が現れて、私と話して、変わっていく他の連中を見て、最近だと織姫ちゃんに会った。

虚圏は今どんどん環境が変化してる。それに付いていけないんだ、ウルキオラは。

戸惑ってるんですよ。

「感情の無い俺に戸惑いなど…」

自覚が無いだけだよ、そのうち嫌でも理解するさ。

目先しか見えない愚直な虚でも、立ち止まって、一步下がって顔を上げれば、夜空が見えるし星も見える。その余裕さえあれば、生き方だって少しは変わるってもんさ。私はきっかけを与えただけだよ。

勿論、アンタにもね。

「……俺は……」

だんまりを決め込むウルキオラ。

はいっ、おねーさんの超親切なアドバイスはここまで！……ここからは別途料金になります。

まあ、なるようになるさ。今は余所者を排除しようね。

私たちの為にさ。

あーそれと、私は藍染君と敵対してもないし、懐柔されてる訳でもないよ。私つてば仏のように優しいからね、困ってる友達見ると助

けずにはいられない夕子なのさ。

「それは無いだろう、お前に限って。」

急に辛辣になるなクソあ！

## 二十話 遊び遊ばれ遊び果て 後

第9十刃の宮は最早原型を留めておらず、朽木白哉とピカロ達の戦闘は激しさを増していく。

実力は白哉の方が上である。だが、物量に任せた鬼道の嵐と、帰刃によつて更に速度が増したピカロの猛攻を受け、徐々に疲弊していった。


「あはははっ！」

「っ……！」

左側から迫る赤火砲を千本桜で払い除けると、爆煙を突き破って少女の刃が眼前に迫る。咄嗟に破道の一『衝』を無詠唱で放ち、直撃した衝撃が彼女を大きく後ろへ突き飛ばした。

「あれえ〜」

大袈裟に空中を転がって、四枚の翼を翻し体勢を立て直す。大した怪我もなく、相変わらず満面の笑みで鋭い刃を向けるピカロに対し、白哉の方は先程刺された胸の傷から血が溢れ、出血で目がかすみ視界もままならない状態だ。回道で応急処置はできるとはいえ、長くは持たないだろう。

破道の五十八、嵐

破道の七十八、斬華輪

破道の十一、綴雷電

多様な鬼道が白夜に向けて放たれる。

反鬼相殺も限界に達し、何れも千本桜で払いきれぬものではないが、これでは堂々巡りだ。

(もう一度『散陣』を使うか……?)

いや、それこそが奴の狙い……奴はこの戦いで私の技を学習し、成長している。無傷圏への侵入を赦せば今度こそ……)

子供の成長速度とは恐ろしいものだ、と白哉は内心嘆息し、かかる

鬼道を千本桜で防御した。

その時

「後ろの正面だ・あ・れっ♪」

「ツツツ!?!」

ピカロの音が後ろから響く、正面に居たはずのピカロが残像の様に消えた。これは…

(ヘメロス・ソニード  
双児響転…!)

先程自分と戦った十刃、ゾマリ・ルルーの使用していた響転の応用技。本人はあれを「遊び」と称していたが…成程、「遊び」なら悪戯小僧が習得できない筈が無い。

反射で千本桜を刃に変えてつかみ取り、振り向きざまに後ろを薙ぐ。刃同士がぶつかり合う音がして、霞む視界の端で少女が転がった。

その直後、白哉の背中から血飛沫が上がる。

「…ツ!?!」

「すごいすごい!今のも反応できるんだ!」

ぱちぱち手を叩きながら喜ぶピカロ。

「……」

「でもちよつと遅かったね、背中斬れちゃった。

わたしと遊んでまだこれだけ動けるなんて凄いよ、おにいちゃん。」

「童にとつては…これも『遊び』か…」

「うんっ!殺し合いつていう名前の『遊び』、おかあさんに教わったんだ。だから戦闘が一番得意なわたしが生まれたの。」

それがピカロわたしたちに必要なことだったから。」

殺し合いつて楽しいよね!

頬に返り血を滴らせて無邪気に笑う少女の心に偽りは無い、彼女は本心から命の殺り合いを『遊び』だと思っているようだった。加えて、彼女は死なない。幾ら致命の一撃を加えても、何故か身体が霞がかつた次の瞬間に傷は癒えて元通りになっているのだ。

何かカラクリがあるに違いないと思っではいても、それを暴くほど

白哉の体力は残されていない。延々と、彼女の遊び相手に付き合われる。

(遊び、か…)

彼にとつては聞き慣れぬ、縁のない言葉だった。

白哉は由緒ある四大貴族、朽木家に連なる現当主である。規律と掟を重んじる家系故に幼少から武芸と勉学に励み、息を抜いて誰かと遊ぶ事など殆ど…いや全くと言っていいほど機会が無かった。

強いて言うなら唯一歳が近く、白哉をからかいによく朽木邸を訪れていた四楓院夜一と瞬歩を競い合ったりはしたものの、白哉本人からすれば「いい迷惑」程度である。

初めて好いた女性は自分を残して早くに逝ってしまった。産まれるはずの自分の子は生まれず、白哉はまた幼子とふれあう機会を失った。

瀨靈廷では子供の魂魄など、草鹿やちるがせいぜいで、菓子を渡せば大人しくなるアレもかなり特殊な部類だ。

白哉は子供の扱いを知らない、子供との接し方など分からない。

(…ままならぬものだな。)

尽きかけの意識で黙々と刃を振るう。

出血が酷い、脚がふらつき目が霞む。永年の研鑽と実戦で培った経験から、ほぼ勘と反射でピカロの攻撃を紙一重で受けきる白哉だが、それでも小さな傷は更に増えていく。

そんな状態が続き、ふらつきながらも刃を交えるうち、遂に卍解を維持出来なくなったのか、千本桜が消え始めた。

「あれれ？もう終わりかなー！。

うーん…まだちよつと遊び足りないけど、まだ侵入者はいっぱいいるしいつか！

楽しかったよ、おにいちゃん！」

少女が合図を送ると、周りのピカロ達が白哉を囲むよう一斉に飛び上がり、止めを刺す為一斉に詠唱を開始する。

「終わったあとは綺麗に片付けないとね！」

滲み出す混濁の紋章

不遜なる狂気の器

湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる…

「なっ…不味いぞー！この詠唱は…」

焦るルキア。それもその筈、このオサレ詠唱から繰り出される鬼道は使用出来る者も一握りしか居ないとされる九十番台の大技。

黒き檻に閉じ込め、重力の奔流が敵を引き裂き押し潰すその能力を彼女が知っているのは、その技を間近で見た事があるからだ。

嘗ての尸魂界。双極の丘にて、裏切った藍染惣右介が激昂する狛村左陣に使用し、瀕死の重傷を負わせた技。あの時は詠唱破棄にも関わらず、同じ隊長格を一瞬で地に伏した鬼道を忘れるはずも無い。

詠唱が進むにつれて、白哉の周りに幾重にも黒い壁が積み上がり、覆い尽くしていく。唱えているのはあの少女も含めた50人以上のピカロ達による大合唱だ、50人分の黒棺を受けてしまえばどうなるか…きつと跡形も残らないだろう。

爬行する鉄の王女

絶えず自壊する泥の人形

結合せよ

反発せよ

地に満ち己の無力を知れ…

「くっ…兄様…っ！」

白哉は立っているのもやっとの状態、最早一刻の猶予も無いと、ルキアが飛び出そうとしたその時。

「破道の九十、くろひ…」

あくそびくましょくツツ!!



ッ  
!!!!

ピタリと、時が止まったようにピカロ達の動きが止まる。それに伴い不完全な状態で放置された黒棺も力の行き場を失い崩れ去っていった。

驚いたのはピカロだけではない、ルキアも自分の後ろから聞こえた叫び声に驚き、啞然として声の主の方へと振り返った。

四番隊第七席、山田花太郎

負傷した隊員の治療を主とする医療部隊。戦闘とは無縁の回復要員、その末席に就く青年が、あろう事かピカロを呼び止めた。

「花太郎!? 一体何を…」

我に返ったルキアが叫ぶももう遅い、待ち望んだ言葉を聞いて、目の前のピカロ全員が一斉に花太郎の方へと振り返る。正直かなりホラーだ。

びゅうんつと風をきつて、少女が花太郎の目の前へ現れた。両手には先程まで白哉を甚振り弄んだダガーナイフが握られている。ひと振りすれば、戦えない花太郎の首など一瞬で床に落ちるだろう。

「いいよ、おにいちゃん。何して遊ぶ?」

小さな声なのに、その台詞は死刑宣告のようにルキアの耳に冷たく突き刺さった。

「…………お、鬼ごっことか…」

完全に気圧され、おどおどと答える花太郎。

少女が俯き、気まずい沈黙が場を支配した次の瞬間…

「鬼ごっこだああああああああっ!!!」

少女達の怒号のような歓声が第9宮に鳴り響く。

「鬼ごっこー!鬼ごっこするの!」

ヤッター!じゃあおにいちゃんが鬼ね、わたしたち皆捕まえるまで遊ぼう!

みんなー逃げろー！」

わーわーい！

瞳を輝かせながら早口でまくしたて、翼を翻し四方八方にそれぞれ飛んで行くピカロ達。

後には呆然と立ち尽くす花太郎とルキア、そして血に塗れながらも辛うじて立つ白哉が残された。

困ったように、花太郎がルキアに苦笑いする。

「えつと…」

「私に振らないでくれ…」

程なくして、出血多量で白哉は倒れた。

☆☆☆☆☆

虚夜宮、第5の塔。

歩きながら考えた結果、結局藍染君の所へ冷やかに行った私。第5の塔なんて虚夜宮の端っこに集まるなんてろくなこと考えてないだろうと思つたら、やっぱり碌でもない事考えてた。

織姫ちゃんをここまで連れてきて、自分達は予定より早く現世侵攻を開始するらしい。スターク #1、ダーリン #2、ハリベル #3の準備は完了したって連絡が入ったんだってさ。

そして私が虚圏で展開してる黒腔を全部閉じる、これで侵入者は完全に閉じ込められる訳だ。

「要。」

「はい…縛道の七十七、『天挺空羅』。」

「聞こえるかい、侵入者諸君。」

何もかも予定通りでご満悦な藍染君が虚圏こっちに閉じ込めた侵入者達に別れを告げて、真の目的を明かす。

これから空座町を消滅させて、なんかよく分からない鍵を作るらしい。

「じゃあ行ってくる。ウルキオラ、ジエーン、留守を頼んだよ。」

「はい、藍染様。」

はい行つてらっしゃい。ギン君もDJも頑張つてねー。

「んー、ほなね。」

「…ああ。」

お、遂にDJを受け入れ始めた。

「受け入れてなどいないツ!!」

ほら、デカいラジカセも買ったし、ヒップでホップなCDも一通り揃えたからいつでもいいんだよ？あ、音感とか大丈夫？『鈴虫』でズルしちゃだめよ？

『鈴虫』はそんな事をする為の斬魄刀では無い！というかやる前提で話を進めるなア！」

やっぱおもしれーなこいつ。

じゃー私は織姫ちゃんとイチヤイチャしながら合図来るまで待つてるからヨロシクう。

「ああ、君もしっかりね。」

(……藍染隊長、絶対録画してはるんやろな。)

…？なんかギン君が物憂げな視線で見つめる中、藍染君は黒腔へ入り、後ろの2人もそれに続く。完全に向こうに渡った頃、案の定向こうにも死神達が控えていたらしく、ずっと黒腔の中でスタンバってたダーリン達を投入した。

……藍染君の黒腔閉じる直前、なんか周りがすげー燃えてた気がするんだけど気のせいかな？

「あの…私、ロリちゃんの介抱してあげないと…」

ん？ああ、時間取らせちゃってごめんね織姫ちゃん。そういやロリがそつちで二次会始めたんだったね。

酔いどれ状態で私の宮を出たロリはそのまま織姫ちゃんに絡み酒しに行ったらしい、そこでまた酒をたらふく飲んで今はソファで寝てるそう。途中からメノリの目が死んでたそうなの。

「め…めちやくちや揉まれました…」

胸元を抑えながら頬を赤くする織姫ちゃん。

何っ!?私だってまだ我慢してるのに！ロリの奴抜け駆けか！

「ジェーンさんも揉む気だったんですかあ!?!」

当たり前でしょう！そこに乳があるなら揉む。登山家に何故山に登るのか理由を聞くなんて無粋でしょ!?!

「お前は全国の登山家に土下座した方がいい。」

シヤラップ顔面蒼白マン！

ほら、藍染君も織姫ちゃんの居場所ばらしちゃったし、そろそろグリムジョーを倒した黒崎君がここまで辿り着くよ！なんか戦闘後なのに霊圧更にながってるとつぽいし、油断していると負けちゃうんだからね！

私は織姫ちゃんの胸を堪能……もとい織姫ちゃんとロリを介抱してくるからあとヨロシク！

「本音が出ているぞ。」

まあ…あの死神には少し興味が湧いた。

貴様は藍染様からお呼びが掛かるまで井上織姫の守りをしていろ。」

言われなくてもそうしますう。

行こつ織姫ちゃん！

「わわわ、押さないで押さないで！

それにもう驚掴みにしてる！手つきがいやらしいよお〜！」

この後めちやくちや織姫ちゃんの胸揉んだ

「……こういった催しは、現世では『キマシタワー』と言うらしいね。ふむ、良い。」

「十刃に戦闘任せて暇やからって何言うтонですか。いっぺんその炎で頭冷やします?」

(……帰刃しようかな。) ソワソワ

「DJ、下心が骨まで透けて見えるで。」

☆☆☆☆☆

「来たか、黒崎一護。」

グリムジョーと戦ったにしては傷が浅いな。」

「ああ、此処へ来る途中卯ノ花さんに治して貰ったからな。」

井上は何処だ!」

「貴様の知る必要は無い、最早あの女は用済みだ。人質としての価値はもう無い。」

「なん……だと……?」

てめえ……井上は無事なのか!?(人質的な意味で)」

「価値のない人質の末路など、俺の知ったことではない。(主に貞操的な意味で)」

「……ッ!! 月牙天衝オツ!!」

「…来い、黒崎一護。」

二人の刃が交差するが二人の会話はすれ違っていた

☆☆☆☆

「……………詳しい話を伺っても良いですか？ 山田七席。」

「…アツハイ。」

呆れ顔で腕を組む虎徹副隊長の前に正座させられ、涙目で俯く花太郎。その姿は身長差もあって、さながら『姉に叱られる弟』といった様子だ。

「おにいちゃんは悪くないです。」

『ボク達と遊んでるだけでーす。』

そんな悲しき花太郎の周りをぐるぐる回りながら、抱き着いたり頬を引つ張つたりを繰り返す2人の子供。なにを隠そうこの2人、先程まで兄様を殺しかけた破面なのだ。

兄様を瀕死に追いやった破面の子供達は、突如花太郎の提案した『鬼ごっこ』に歓喜し、兄様との戦闘など放り投げて脇目も振らず飛んで逃げていった。

…本当に子供なのだな。

そして何故か、この2人だけ先程から花太郎にくっ付いている。『ボク達が付いてあげないと、おにいちゃん絶対他の子達に追いつけないでしょ。』

「うんうん、見るからにトロそうだし。」

「ぐっは…ッ!!」

言葉の刃が花太郎の心を抉る！  
子供って残酷だ：

なおも子供2人に顔を弄られる花太郎を見かねたのか、虎徹副隊長は深い深いため息を吐いた。

「話は朽木さんから一通り聞きました。」

処置の終わった朽木隊長も、重傷ですが命に別状はないでしょう。

そ・れ・で？何故貴方は急に『鬼ごっこ』などと言い出したの？」

「はい…あの子達は子供なので、ああいつて誘えば食いついて来るかな、と。」

朽木隊長も危なかったですし…」

は、半分思いつきではないか！

「よく流魂街の子供とこうやって遊んでましたから…あはは…」

「貴方…まさか流魂街の駐在任務から帰って来る度に何故か泥だらけになっている理由はこれだったの!？」

そ、それは遊んでるって言うか…遊ばれてないか……？

「おにいちゃんと遊ぶの楽しかったよ!」

仮にも兄様を殺しかけた破面なのだが、この屈託のない少女の笑みにどう返したのか…

「聞こえるかい？侵入者の諸君。」

っ!?

「この声は…」

「天挺空羅か!？」

突然頭の中に声が響く、これは見知った霊圧の相手のみに連絡を送る鬼道、天挺空羅だ。声は件の黒幕、藍染惣右介で、私達が織姫を助

けに予定通り虚圏へ乗り込んだこと、隊長格4名を誘き出し、且つ幽閉する事に成功したと告げられた。

それを聞いた虎徹副隊長が慌てて位置を探ると、彼女達の通ってきた黒腔は本当に何らかの力で強制的に閉じられてしまったのだとか。破面側の技術なのだろうか：

非常に不味い事態だ。虎徹副隊長曰く、空座町にも既に部隊は配置されていて、消滅を防ぐ為に大規模な仕掛けが施されている為、隊長達が藍染を相手に暴れても平気になっているらしい。

現世はきつと総隊長達が何とかしてくれる。そう信じるしかない。しかし目下の問題は私達だ。

虚圏に幽閉されるとなると、孤立無援の中、敵を相手取らなければならなくなる。厳しい戦闘が予想されるが：

『おかあさん、もう黒腔閉じちゃったんだ。』

「あいぜんさまの予定が早まったんだってさ。」

相変わらず能天気だなこの子供達は！

もつと緊張感とかないのか!?

いやとにかく、織姫は第5の塔という場所に囚われているようだ。

居場所が割れたならすぐに向かわなければ！

……第5の塔…第5の…塔？

「第5の塔とは何処だ…?」

根本的な話である。

そもそも虚圏の地理なんて私達には分からない、普段なら霊圧を探れば織姫の場所が分かるはずなのに、何故か此処に来てから彼女の霊圧を全く感じなくなったのだ。

ぐぬぬ…どうすれば…

「あのー…君達は第5の塔って何処か知りませんか？」

いやいや、その子供達に聞いてどうなるというのだ。そもそも敵である破面が私達に情報を流す訳が「知ってるよ。」知ってるんかい！

「第5の塔っていつもおかあさんと遊んでる所だもん。」

『そういえば空き部屋を掃除するって前に言ってたね。』

「言ってた言ってた、新しく来るおねえちゃんが暮らすからって。」



「ほ、本当か!?子供達、良ければそこまで案内して欲しいのだが…」  
その時、しまったと後悔した。

2人が顔を見合わせて、その表情がいやらしくニヤリと笑う。

…凄く嫌な予感がしたがもう遅い。すると勿体ぶってこう告げてきたのだ。

『えくどうしよつかなく。』

「あのおにいちゃんは遊んでくれたけど、ぺたんこのおねえちゃんにはまだ遊んでもらってないし。」

だっ…誰がぺたんこだ誰が!

「このおにいちゃんと一緒にわたしたちピカロを皆捕まえられたら、教えてあげる!」

「私も『鬼ごっこ』に付き合えと…?」

笑顔で頷く子供達。

兄様は重傷、虎徹副隊長はその看病で動けない。今は一刻も早くピカロ達を全員捕まえて『鬼ごっこ』を終わらせ、織姫の下へ向かわなければ。

やるしか…ないのか…

「わかった、私も探そう。」

「わーいやったあ、鬼が増えた。じゃー宜しくね、ぺたんこのおねえちゃん。」

「その渾名は止めてくれぬか!」

「そつちのおつきなおねえちゃんは?」

「わっ、私は朽木隊長の容態を診ないといけないから…ごめんね。」

虎徹副隊長、慌てて視線を逸らす。

…逃げたな。

素直に頷いた少女のピカロが私の肩によじ登り、あらぬ方向にびしっと指を指す。…思ったより軽いな。

同様に、花太郎の傍にいた少年ピカロも肩車をして貰っていた。

「よーし、まずはあっち!」

どうやらこの状態で他のピカロ達を捕まえるようだ…本当に彼女

達は遊んでいるのだな。

殺し合いすら『遊び』の一環とし、楽しむことのみを考える子供の破面：虚にも色々な種がいるのだな。

考えていても仕方が無い、待っている織姫！今助けにゆくぞ！

☆☆☆☆

私は戦いが嫌いです

どうして他人を傷付けないといけないんですか  
どうして自分が傷つかなきゃいけないんですか

虚の本能がどうか、破面の矜持とか、どうでもいいんです

私は私の思うがままに

そうしても良いと、お母様は仰った

実は私は、とある死神さんの為だけに作られる予定だった使い捨ての改造破面らしいです。感情を捨て、理性も無くし、『炎を体内に留める』事を徹底して突き詰めた泥の人形。

我ながら酷いと思います。藍染様、ちよっぴり恨みますよ。

そして私の『型』が作られ、崩玉の力を使い実体化する直前に、お母様が現れました。

藍染様の気まぐれで突然予定変更となり、藍染様の代わりにお母様

の霊圧が注がれることになりました。

異常な程の霊圧が私の中に注ぎ込まれます。それは暖かいような、こそばゆいような、ふわふわの毛布に全身を包まれるような心地良い感覚でした。

同時にお母様の気持ちも伝わってきます。崩玉は霊圧を注ぐ者の意思によってその効果を変える、万能の力を秘めたこの宝に不可能など無いのです。

さあ、彼女の思うままに新しい私を作り出して下さい。

『可愛い女の子がいい』

…マジですか。藍染様の用意した身体は男性のもので、初っ端から基盤ごと取り替えねばならないとは…ですが万能の力に不可能はありません。その願い叶えて差し上げます。

えーっと…下を引っ込めて胸を出して、骨格も作り替えてと…

『身長は150cm程で金髪、肩までかかるくらいの長さで瞳の色は明るいパープル。タレ目がいいな。ドジっ子属性が付いてて且つ面倒見がよく若干舌足らずで周囲に流されやすいところがありながらも通すべき芯はしっかり持っていて、ルピみみたいな気難しい子が相手でもお友達になれて運動はそれほど出来なくてもいいからそつない程度にあとスリーサイズだけど…』

ちよちよちよちよつと待って下さい思ったより注文多いです！そして細かい！黙って聞いてればなんで手癖とか性癖までちゃんと設定してるんですか!?!キャラクリに慣れすぎてませんかこのご主人様！

因みにこの間、僅か数秒程なのですが、顔の構成から性格まで崩玉がオーバーヒートを起こすレベルの情報量が素体に雪崩込みました。そして優しい声音で、お母様は最後にこう付け足します。

『それから…この子には『平穏』を。人造でも改造でも、産まれてくる貴女がいつまでも健やかでいられますように。』

この先どんな争いに立ち会っても、戦わなくてもいい。そんな能力

を付けるよ。』

…はい、受諾致しました。お母様。

そうして産まれた私は虚圏『最弱の破面』。

上手く剣は振れません、強い虚閃も速い虚弾も撃てません。響転も中途半端、鋼皮もさして硬度はない、強いて言うなら探查回路が少し出来る程度。ヤミーさんに言わせるなら、破面としては出来損ないの『カス』なのでしよう。（これをお母様の目の前で言ってしまったヤミーさんは顔面凹まされてましたが…）

でも、それでいいのです。

「ー還して、《滅却霊姫》。」

お母様の霊圧で象られたせいとか、無駄に大きな私の斬魄刀が霧のように霧散して、辺りに広がっていきます。

「なんだこりやア、霧が…」

辺りはもう深い霧に包まれて、私と更木さんが辛うじて見える距離。ここら一带は既に私の術中なのです。

さあ、剣を置いて。一緒に座ってサンドイッチ食べましょう。お菓子もありますよ。

「…ああ、分かった。」

「お菓子もあるのー!？」

はい、沢山用意しましたから。

それで、貴方達のお話を聞かせてください。  
お付き合いしますよ、お母様が全てを終わらせるまで。  
いつまでも：ね

闘争心が無ければ争いは生まれない、争いがなければ誰も傷つかない。

そうだ、それでいい。

初めから戦う気すらなければ争いは生まれず、初めから刃を持たなければ誰も傷つかぬ。

ならそうすればいい、そうさせる。

彼女はそういうふうには作られた。

彼女の能力は『ありとあらゆる戦闘、不和を起こさせない』。

彼女の前で刃は振れず、銃は不発し、放つ霊圧は宙に霧散する。やがて心まで霧に浸され、猛る強者は心穏やかな紳士に、狂う獣は飼いや慣らされた犬のように従順なペットへと豹変してしまう。争いの火種を片端から仮初の『平穏』で塗り潰す破面いち『平和』な力。

それが始祖の虚によって生み出された最弱の破面、ワンダーワイズ・マルジェラであった。

誰も傷つかない優しい虚圏せかいを

それが彼女の望みで、始祖の企みだ。

## 二十一話 奈落の星、見上げる蝙蝠

激戦に次ぐ激戦。

『転界結柱』によって移し替えられた偽物の空座町で死神と破面が互いに血を流し、戦いを繰り広げている。

総隊長、山本元柳齋重國の放つ炎によって隔離された藍染達を背に、セクンダ・エスパード #2 バラガン・ルイゼンバーンは設えさせた骨の椅子に腰掛けながら、配下が負けて逝くのを見届けていた。

4本の柱を破壊する為放った刺客は全て死神達に葬られ、連れてきた6人の従属官も皆倒された。

深く溜息を吐く

ちらりと周りを見渡せば、#1の小僧と#3の小娘も隊長を相手取り戦っている。此方に加勢する余裕などないだろう。

目の前には小柄だが、先程配下の1人ジオルヴェガを始末した娘と、その腰巾着の様なブ男の2人。好戦的な目付きで此方を睨み付けていた。

「……帰ったら披露宴だとアレだけ騒いでおったのに、馬鹿共が。」

配下は王の為に在る、故に彼は散っていった者達への同情など欠片も浮かばない。だが、この事を彼女が知ったらどう思うのだろうか。死んだ部下の1人、シャルロットは彼女と特に仲が良かった。奴が死んだと知ったら、どんな顔をするのだろうか。

そして何よりも、自分の婚礼を我が事のように喜び、祝った者達だ。

あの子達にも式に並んで欲しかった

彼女はそう言うだろう。それを考えると、少しだけ申し訳なくなる。

「王として、夫として……か……」

「考え事をしている暇があるのか？」

考え事に浸っていたその刹那、背に回り込んだ碎蜂の回し蹴りが飛

んでくる。

「先ずは一撃」、その程度の気概で攻撃を見舞うが、次の瞬間碎蜂は目を見開いた。

(なん…だ…う…これは…ッ)

碎蜂の放った蹴りは、バラガンに当たる直前に威力が減衰し始め、目に見えて動きが鈍くなっていく。

「ふん。」

ノロノロと動く脚など容易く掴み取られ、逆に碎蜂はビルの壁まで投げつけられて激突の衝撃でコンクリートを破壊した。

何が起こったのか分からないのは彼女だけでは無い、一連の流れを眺めていた大前田も目をぱちくりさせている。

碎蜂は白打の達人だ。実戦を重ね、経験を積んだ彼女は、戦闘の先を読む事にも長けている。涅マユリなどが薬で再現しようとするそれを、彼女はある程度感覚で感じ取る事が出来た。それでも、何故蹴りが止まったのか理解が追い付かない。

明らかに瞠目する碎蜂を眺めながら、バラガンは嘲るように笑い、その重い腰を上げたのだった。

「…仕方あるまい。

儂自ら殺してやろう。来い、蟻共。」

☆☆☆☆☆☆

はい始まりました。

チキチキ虚夜宮防衛戦最終章、ウルキオラ・シフアーVS黒崎一護

！  
場所は虚夜宮天蓋の真上、実況は毎度おなじみ皆のお姉さんジェーン・ドウと！

「えっ!? えっ!? いい、井上織姫の提供でお送りします…?」  
「いえーいどんどんぱふぱふー！」

「わ、わく…」

えーテンション低い。

織姫ちゃんが一護君の戦ってるところ見たいって言うからわざわざ天蓋の外まで連れてきてあげたんでしょー。

さあ侵入者黒崎一護君の戦いもいよいよ大詰め、死神代行は果たして囚われのお姫様を助ける事ができるのか!?

コンデイションは両者共に良好に見えますが…どうですか織姫さん。

「え…良く分からないですけど…取り敢えず黒崎君が勝つと思います！」

おおーつと此処で黒崎一護君の勝利を確信し大胆にも愛の告白！  
因みに私も彼女の恋路を応援しちゃうのでお前は完っ全にアウエーだぞウルキオラ！

…二人とも戦いに夢中で聞こえてないようですね、実況を続けましょう。

「愛の告白だなんてそんな…」

っ黒崎君危ない！

ウルキオラ選手、天蓋の外なのをいい事に帰刃だアー！大人気ないぞー！

知ってる織姫ちゃん？十刃にはそれぞれ死の形があつてね、アイツは『虚無』なんだよつてこの子全く話聞いてませんね！ボコられる黒崎選手に首つただけですわ！ていうかこの子実況向いてないな！

「これが破面の第二解放だ…この姿は藍染様にもお見せしていない。」



ウルキオラ選手、ダメ押しとばかりに第二解放を発動。ただでさえ辛気臭い姿が更に暗くなり、悪魔っぽい見た目に変貌した。

虚化の仮面も限界に達した黒崎君は為す術もなくボツコボコにやられて殺される直前、

飛び出そうとした織姫ちゃんより先に翠色の槍がウルキオラの身体を射貫く。

「…ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクか。」

「彼をこれ以上傷付けないで、ウルキオラ。」

「その霊圧、まさか…ネルか…？」

ネリエル…？ああ確かハリベルより前の#3トレスだった破面ね。

彼女が言うにはノイトラに不意打ちで殺されかけて、霊圧が歪んで幼児退行してしまっていたらしい。そのまま行方不明扱いで十刃からも外されてたんだけど、虚圏の濃い霊子を少しずつ吸収して、漸く元の身体に戻れたんだってさ。

突如乱入したネリエル、そのまま黒崎君を守りながら戦闘を始めた。

流石元#3、型落ちの破面とはいえ第二解放したウルキオラと互角に張り合ってる。

つか重奏虚閃セロ・トープルだっけ？強いなアレ。ウルキオラの黒虚閃オスキュラス呑み込んで打ち返しちやったよ。

お互い解放状態で、力は拮抗していると思っただけどネリエルの方は必死だ、少しづつ削られるみたいに霊圧が段々不安定になってきている。多分解放状態が長続きしないんだろう。織姫ちゃんどう思うってわあお何だこの子すっげえネリエル睨みつけてる。

「誰、あの女…」

お、おう…嫉妬も程々にね？

「はっ!?…嫉妬じゃないです!」

目がやばかったよ？瞳孔開いてたし、今にも暗黒面ダークサイドに堕ちそうな顔してた。

そんな事話してる間にウルキオラの雷ランサ・デル・レランバードの槍がネリエルの翠槍と衝突して大爆発が巻き起こる。取り敢えず織姫ちゃん飛ばされ

ないように抱き寄せる振りをしながら胸を揉んどいて、さーあの二人はどうなってるかなーつと。もみもみもみ…

……あ、これは織姫ちゃんにお見せできないやつだ。

「…何故奴を庇った、黒崎一護。」

「いち…ぎ…う？」

ウルキオラの問いに答える者は居ない、そこにはウルキオラと、霊圧使い果たして子供に戻ったネルと

胸に風穴が空いた一護君の姿があった

多分あの爆発の後、ウルキオラの不意打ちを対応しようとしたネリエルがネルに戻ったのを見て、咄嗟に二人の間へ割って入ったんだろう。結果、ウルキオラの一撃は一護君の身体を貫いた。

べしやり、と力無く一護君が地面に落ちてきた。尋常じゃない出血量、それを見ちやった織姫ちゃん、叫びながら駆け寄ってく。事象を拒絶する能力を使ってるけど、あの傷は間違いなく心臓を抉り抜いてるし、ウルキオラの撃ち込んだ霊圧が邪魔をして、中々傷が治らない。程なくして、彼の霊圧が消滅した。

…あーあ、一護君死んじやった。

「黒崎君っ!!黒崎くんッ！」

そんな…そんな…いやあああああああつ!!」

泣き叫ぶ織姫ちゃん、ちよっ…煩くない？

死んだくらいで大袈裟だなあ。

あ、そつか。そう言えば人間ってこんなもんだったね、忘れてたわ。ほらほらウルキオラ、これがお前に足りないものだよ。織姫ちゃんを見習いたまえ。

「知らん、奴が勝手に割り込んで…」

瞬間、虚圏が揺れた。

吹っ飛ばされるウルキオラ

代わりに私の前に立つ影

なにこいつ、虚？

殴りかかって来たので腕を掴む、そこそこに力強いな。足場の天蓋割れそうじゃん。

あ、ちよつと待って。その手に持つてる刀、もしかしてこいつ一護君？あく言われてみれば霊圧似てるわー。死んだから虚になっちゃったのね。

死神の格好残したまま仮面と虚化なんて随分思い切ったイメチェンですこと、それがイマドキのファッションなんだね（ガリガリガリツ!!）ええええええツツツ!?

ちよつと何すんの、思っきり食らったわ！私じゃなかったら身体が斜めに真つ二つじゃない！首傾げんな白々しい！

おい！その頭の光はなんだ！虚閃か!?虚閃なのか!?そんな濃い虚閃天蓋に向けて撃つたら下の虚夜宮が滅茶苦茶になるだろがい！

咄嗟に虚閃の光球を空いてる手で掴んで発射直前に私の虚閃を零距离からぶち込んで握り潰した。結局指の間から漏れた虚閃が天蓋を傷付けてしまったよ。

吼えるイメチェン一護君、どんどん霊圧が上昇し始めたと思ったら姿が消えて、背中に強い衝撃が走る。気付いたら視界がぶれて天蓋の上をゴロゴロ転がってた。

どうやら一瞬で背後に回られて蹴られたらしい。

「ジエーンさんー！」

我に返った織姫ちゃんが叫んだのが聞こえたので顔を上げると黒い斬撃が私を何度も斬り付けてくる。

速すぎて避けられない、このくらいじゃ傷なんて付かないけどいい加減鬱陶しい…なっ！

刀身を掴んで動きを止めた。一発蹴られたからね、お返しだよっ！  
腹を思いつきりヤクザキックで蹴飛ばして、今度は一護君が宙を舞う。抉れた腹が高速で再生していくのがチラツと見えた、あの子超速再生まで使えるのか。

再び吼える一護君、コレ完全に暴走状態ですね！

こまったなあ、ウルキオラは吹っ飛んだまま帰ってこないし。このまま一護君ほっとくと織姫ちゃん達はともかく下の虚夜宮にまで被害が出そう。んく…

なんかもうめんどくさいなあ…

こいつ殺すか

☆☆☆☆☆

「……ツツ?!?!」

思わず身を震わせる。

なんだ、これは。霊圧なのか？

本気の更木隊長の放つ、暴風のような激しい霊圧では無い

嘗て総隊長の見せた、研ぎ澄まされた焰の如き霊圧でも無い

心臓を握り潰される様な重圧と、全身に突き刺さる悪寒。間近に迫

る抗いようのない『死』。そう錯覚してまう程凶悪で、絶望的なナニ

カ。

ピカロを探し追いかける脚も止めて、その場に思わず蹲る。隣を走っていたはずの花太郎は後方で私と同じく蹲り、耐え切れず吐いているようだった。

蹲ったまま身体力が抜けていく。意識が、身体が、生きる事を諦めているかのようだ。

「……ひゅっ……う……あッ……」

呼吸が私の意思に反してどんどん浅くなっていく。吸った息が吐けない、身体が言うことを聞いてくれないのだ。

「ひっ………っ……っ………ひっ……」

からだがうごかない

あ………わた……し………死………

…ちゃん

お……ちゃん……

「おねーちゃん！」

「………ツ?!?!ぶはあッツ!!」

薄れ掛けた意識が少女の声によって覚醒し、飛び起きた。私は……

「もー！おかあさんの霊圧浴びたぐらいで死なないですよー、まだわたしたちと遊んでる途中なんだから！」

先程まで感じていた霊圧はもう影も形も無い。頬を膨らませてぶーたれる彼女をみていたら、だんだん呼吸も整ってきた。

「い、今のは一体…？」

「上の方でおかあさんが怒ったのかなあ…でも一瞬だったから本気じゃないと思うよ。」

ピカロ達の母が怒った…？怒っただけでこれだけの霊圧を放てるものなのか!?

まるで瀑布の様な霊圧の奔流。間違いなく並の死神など超え、隊長格すら凌駕している。もしかしたら総隊長と同格…いやそれ以上の…

『起きてよーおにーちゃん！』

ビシビシビシビシツ…!!

気を失っている花太郎が少年ピカロに往復ビンタされている。みるみるうちに真っ赤になる花太郎の頬。ちよちよちよつとやり過ぎではないか!?

「……はっ…ここは…」

『やっど起きたー！』

ほら、あつちにピカロボク達の気配がするよ。行こ行こ！』

その小さな身体の何処からそんな力が出ているのか、少年ピカロは花太郎の襟首を引き摺って動き出す。

「ぐえええええ首！首があ…」

『じゃあ早く歩いてよー。』

「おねえちゃんももう歩ける？」

「あ、ああ。もう大丈夫だ、だから花太郎みたいに引き摺るのは止めてくれ…」

先程の霊圧の件もそうだが、虚圏の様子がおかしい。藍染が現世へと消えた後からなのだが、なんと…虚圏全体を取り巻く雰囲気

が一変した気がするのだ。

何が原因なのかは分からない。

言いようのない不安に駆られながらも、私は少女につられ歩き出した。

☆☆☆☆☆☆

真つ黒な塊が弾けて、野球ボール大の虚弾が幾つも音を越えて襲い掛かる。それは嘗て一護だった虚の身体に無数の風穴を空け、痛みを感じた彼は声にならない雄叫びを天蓋に響かせた。

「うわ、超速再生ってそんな状態でも発動すんの？身体蜂の巣みたいになってんのにさあ…」

ぐじゅぐじゅと生々しい音を立てながら、空いた穴が塞がっていくその姿を見ながら呆れ返って呟くジエーン。

「お願いジエーンさん、黒崎くんを殺さないで！」

「えくんな事言っても、こうも暴れられちゃコツチも困っちゃうよ。

因みに彼、もう死んでるから。だからあんな姿になったんで…しよ！」

必死で頼む織姫に返事を返す片手間に、振りかかる斬魄刀を腕で受け止めた。足下のめり込んだ天蓋がその威力を物語っている。

腕と刀がぶつかり合ってギリギリと火花を散らす様子は一周回ってシユールだ。ジエーンの鋼皮だからこそ無傷でいられるが、並の破面なら今の一撃で腕を失ってもおかしくない。

ウルキオラに殺害され、胸に大きな風穴の空いた黒崎一護は、理由は不明だが虚となり、こうしてジエーンに牙を剥いている。

斬魄刀『天鎖斬月』を片手に、顔を完全に覆う虚の仮面と角を持つ一護の虚は、彼女からしてみれば中途半端で、どう対応したものか半ば扱いに困っていた。初めは速攻で殺すつもりだったのだが、必死に懇願する織姫が子犬みたいで可哀想だった為、やむなく殺害以外で拘束を試みてはいるが：

「この子、ヤミーなんて比じゃないくらい強いんだよなあっ！」

天鎖斬月を防御する腕を振り払い、再び虚弾を広範囲にばら撒く。一瞬で何百もの虚弾が飛び交う中、虚は大きく後ろに飛び退いて、残像を残しながら1発ずつ丁寧に躲しきった。

「へえ、当たると死ぬって分かるんだ。力強いただけじゃなくて頭も良いんだね。」

うーん…一護君、せっかく虚になったんなら虚夜宮ウチに来ない？

今なら3食オヤツに昼寝付き、もれなく第0十刃の称号が付いてくるよ！」

多分彼女なりの妥協点なのだろう。

へらへら笑うジェーンの問いに、これが答えとばかりに黒い柱が虚から立ち上る。

放たれたのは大質量の黒い斬撃。解放状態の十刃が放つ『黒虚閃』と同じエネルギーの塊が、刃に乗せて放たれた。

「あれーお気に召さないー!？」

何が不満…あ、分かった。オヤツはクッキーじゃなくてショートケーキがいいの？

贅沢だなーもー。」

そんなもの始祖の前では屁でも無い、とばかりに黒い月牙天衝を片手で受け止め振り払うジェーン。だが更に斬撃の数が増えていく、どうやらこれもお気に召さなかった様だ。

「おお?!明らかに!!機嫌斜めだ…」

こつちも譲歩に限界があるんだけど…分かった!

織姫ちゃん!織姫ちゃんて童貞捨てさせてあげる!これでどうだ!」

「ちよつとー!?!」



全く関係ない所でとぼつちりを食った織姫が悲痛な叫び声を上げた。

途端に虚の霊圧が膨れ上がり、黒い風が周囲に乱れ飛ぶ。

また斬撃が飛んでくると、ジエーンが構え「織姫ちゃんには悪いけど、これでダメならもう本気で殺しちゃうしか無いかなー。」とか思っていた。

が

「……………」

「……………あれ？」

虚が止まった

「く、くくく黒崎くんのエッチいッ!!」

顔を真っ赤にした織姫の悲鳴を機に、雑念を振り払うかのような仕草でかぶりを振った虚が再び激しく暴れ出す。その一瞬の隙を突き、何処からともなく飛んで来た雷の槍が虚の角を直撃した。

欠けた角の先から霊圧が虚閃となって漏れ出して、天蓋を更に傷付けていく。

「おっせーよウルキオラー！何処ほつつき歩いてたの!？」

「天蓋に沿って下まで転げ落ちていた。」

なんとなしに言つてのけるウルキオラだが、その身体はボロボロに欠け、以前の姿は見る影もない。

虚が呻き、霊圧による暴風が周囲を破壊していく。

一際大きく咆哮した後、仰向けに倒れた虚はその姿を崩し始め、殻の様に剥がれたその中から本来の姿をした黒崎一護が気を失った状

態で現れた。ウルキオラの空けた胸の穴は超速再生によって完治され、ほぼ無傷の状態だ。

「黒崎くん！黒崎くん！」

「い、ち、ん、ぐ、ー！」

駆け寄る織姫。彼女に抱かれていたネルも、一護の無事を泣いて喜び涙と鼻水がダラダラ垂れて、かなり残念な感じになっている。

ああ、一護の死縛装が鼻水と涙と涎でぐちゃぐちゃに…

そんな彼女達を眺めながら、ジェーンはしたり顔で呟くのだった。

「決まり手は童貞、か…」

「お前は何を言ってるんだ。」

「いや間違ってるじゃないじゃん。」

それで、見たところ随分ボロボロだけどアンタの方はどうなのよ？」

「…動くだけなら問題無い。」

ウルキオラは破面が本来失っているはずの超速再生能力を唯一持つ十刃。脳と臓器以外の部位を一瞬で復元できるが、虚に吹き飛ばされた衝撃で内蔵を酷く損傷してしまっただけ。身体の一部が灰になり消えかかっていた。

そんな彼を見ながらジェーンは微笑み、自身の傍に黒腔を開く。

「いやあ助かったよ、あのままだと織姫ちゃん泣いちゃう所だったし。」

虚圏マニユアル通りにしか動けない破面部門第1位のウルキオラ・

シファー君もやる時はやるんだね。」

「なんだそのこの上なく不名誉な称号は。」

「お、いいねいいね。」

その調子で感情出してく。やっぱり一護君と戦って正解だったでしよ？

ところで、一護君と戦い始めてからずっと、藍染君から通信入ってて煩いんだよ。

だから私もそろそろ現世行ってくるね。」

「……そうか。」

「私が居ない間の事はルドボーン君に任せてあるから、彼から段取りとか色々聞くように。」

じゃ、あと宜しく。」

フリーアの奴連れてこないとなー、等と面倒臭そうに無駄口を叩きながら、ジェーンは穴の奥へと消えていった。

(……先を読め、奴のやろうとしてしている事はなんだ？ 藍染様の計画に加担し、何故意図的に侵入者達を誘導する？ その指し示す先は……)

残されたウルキオラは思考を巡らせながら、倒れた一護とそれを介抱する織姫、ネルを遠巻きに眺める。

一護はかなり消耗しているようだ、これでは起きるまで暫くかかるだろう。

「…成程。奴は初めから、虚圏の事しか考えていない。」

ある結論に至った彼は未だ騒ぐ織姫達から背を向けて、ジェーンが示したある男の下へ歩み出した。

俺に足りないもの、不要と判断し切り捨てたもの。

黒崎一護との剣戟の最中に漸くその端くれを掴むことが出来た。あの女は初めから、これを気付かせるために黒崎一護を差し向けたのか……？

それは、奴らの胸を割けばその中に有ると思っていた。

頭蓋を砕けばその中に有ると思っていた。

あの女も、人間達も、容易くそれを口にする。

ネリエルに有って、ジェーン・ドウに有って、井上織姫、黒崎一護に有って、俺に無いそれ

そうか、これが

心

なのか

空を見上げれば、明けぬ夜空に煌々と輝く欠けた月と、その隣で瞬く妖星が虚圏を照らしている。

壊れかけの我が身だが、その位の余裕はあったのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「……やあ、漸くお出ましかい。」

燃え盛る業火で囲われた檻の中、藍染惣右介はそう呟いた。

側仕えの市丸ギンは感情の読めない薄ら笑いを深め、東仙要は疲れたように溜め息を吐く。

恩人の為

友人の為

妻の為

決して口には出さないが、彼女の登場する意味を知る者達は皆静かに奮起し、同時に安堵した。

対して、異常な霊圧と共に突如として開かれた穴に死神達は瞠目する事になる。

巨大な扉が開く  
数多の大虚と、謎の巨躯を引き連れて  
場に似合わぬ鼻歌を歌い、緊張感の無い微笑みを浮かべながら  
奈落の星が、やって来る

## 二十二話 開幕、登場、蹂躪

「あれ…なんだ…?」

ボソリと、誰が言ったかは分からない。

空座町の空が裂ける

青空を引き裂いて、口を開く様にぽっかり空いた空間から、巨大な影が現れた。

それを見て、炎の牢獄に囚われた黒幕、藍染惣右介は静かに口元を吊り上げた。

「…やあ、待っていたよ。」

シルエツトしか見えなかった影が晴れ、その姿が顕になる。

まるで平たい団子を幾つも重ね合わせたような、ぶくぶくと太った異質な虚。崩玉により創られた際、「鏡餅みたいやね。」とは市丸の言だ。

だが、藍染はそちらに声を掛けた訳では無い。

その横、1匹佇む大虚の頭に腰掛ける友人が、ベージュの髪を揺らしながら微笑んだ。

「お・ま・た・せ、藍染君。」

いやあごめんね連絡無視してて。ちよーつと準備運動に熱中し過ぎたよ。」

「構わないよ、これから存分に働いて貰うんだからね。」

「わーい私つてば社畜ウ。」

「早速で悪いんやけど、この炎どーにかしてくれん?熱うてのぼせてまうよ。」

「はいはい、フーラーやっちゃって。」

ジェーンの意図を汲み取ったフーラーは大きく息を吸い、藍染を囲む炎に向けて息を吹き掛けた。煉獄の檻はいとも簡単に吹き消され、死神達は驚愕している。

理由は簡単だ。『総隊長の技を無力化した。』これだけで彼らの警戒心は最大レベルまで引き上がる。

「いやあ助かったわ、ありがとなージエーンちゃん。」

「出ようと思えば何時でも出られたでしょうに。」

なんか出発した時より人数減ってんだけど、もしかして皆殺られちゃった？もうちよい早く来れば良かったかな。それにしても…」

なんの気なしにそう言いながら、ジエーンは空座町を見回し、最後に一言呟いた。

「ちよつと遊び過ぎじゃない?」

死神達の背中にぞわりと冷たいものが走る。

その呼び掛けに呼応するように氷の華が砕き割れ、No. 3の褐色美女は解き放たれた。

大質量兵器の爆発が巻き起こす戦塵を吹払い、正解が直撃したはずのNo. 2が髑髏の頭を覗かせた。

帰刃したはいいが、殆どマトモに戦闘を行う気になかったNo. 1はギクツと身を震わせ溜息を吐き、漸く手に持った銃を強く握り直す。

明らかに先程とは違う雰囲気を纏う3人の十刃達に対面する各隊長に緊張が走った。まだ終わりではない、ここからが本番だと。

「いい鼓舞だ、流石だね。」

「この調子なら私要らないよね、帰って寝てていい？」

「いやいや、仕事してえな。」

「えー。」

相変わらず表情の読めない笑い方をする市丸と無駄話を続けるジエーン。そんな2人を見つめながら、藍染は余裕たつぷりの笑みで死神達を見下ろす。

「役者は揃った。さあ、始めよう。」

宣言と共に、フーラーが口を開き、真っ黒な液体が空を汚す。広がった黒い泥は蠢いて、やがて大量の大虚となった。

ベチャベチャと汚い音を立てながら、空いっぱい大虚の耳障りな呻き声が響き大気を揺らす。

「純度100%、虚圏から新鮮な大虚を貴方にお届け♪」

「嫌な宅急便やね…」

その数ざっと50体ほど、それぞれ支柱と死神達に向かって猛然と襲い掛かる大虚達。

最早万事休すかと思われたその時現れたのは、現代服に身を包んだ謎の集団だった。

「悪いね死神サン。ジエーンの嬢ちゃんが来ちまったから、手抜きが出来なくなっちゃった。」

ポリポリ頭を掻きながら第一十刃<sup>プリメーラ・エスパーダ</sup>、コヨーテ・スタークは向き合う死神達に呟いた。

隊長二人相手にのらりくらりと戦ってきた彼だったが、漸く真面目



に戦闘を行う気になったようだ。

「あらあらそりゃあ残念だ、手を抜かれたままの方が色々都合が良かったんだがねえ。」

隊長羽織の上から女物の着物を羽織る八番隊隊長、京楽春水は戦いが始まってから相も変わらず飄々としているが、スタークの雰囲気が変わったのを見逃さない。

(アレは覚悟を決めた漢の顔だ。浮竹、構えなよ。)

(お前が言うなら尚更気を張らないといけないな……！)

京楽と同期にして長年の友人であり、今も刃を共にする十三番隊長、浮竹十四郎は稀に見る真面目な京楽の忠告に身が引き締まる。

轟、と霊圧がスタークから吹き荒れた。

先程までの緩みきったものではない、獲物を見つけた獣が狩りを始める直前に放つ様な、研ぎ澄まされたもの。

霊圧のうねりは勢いを増し、逆巻くようにスタークを取り囲む。どこかに隙は無いものかと京楽は何っていたが、どうもそのようなものは何処にもなさそうだ。

誰に言うでもなく、『孤独』を死に刻む破面は嵐の中で呟いた。

「リリネット。」

『…スターク。』

『あいつら、やっちゃまおう。』

ロス・ロボス  
群狼

レスレクシオン・セグンダ・エターバ  
刀剣解放第二階層

嵐が晴れ、解き放たれた人影は二つ。

1人は先程も見た、帰刃し2丁の銃を手にするスタークと。

まるでカウガールを彷彿とさせる格好をした、大人になったリリ

ネットだった。背丈もスタークと変わらないほど伸びており、その手には彼女の身長に対し不釣り合いなほど長大なガトリング砲が握られている。

「やっぱ第二解放はいいなー♪？これで私も全力で戦える！」

「あんまハシヤギ過ぎて物壊すと後で嬢ちゃんに怒られるから、ぶつ放すのもホドホドにな。」

「こ、壊さねーし！余計な事言うなよスターク！」

「といつても、此処は偽物の街だったっけか？じゃあいいや。」

…隊長サン達、待たせたな。これが真正正銘、本気の俺達だ。

十刃の第二解放を見るのは初めてかい？」

「まあね、多分死神僕らで言う卍解みたいなものだろう？」

量の同じ霊圧が二つ…その姿を作る為にお嬢ちゃんに自分の分を譲渡したって訳じゃ無さそうだな。」

「…察しが良くて助かるよ。」

俺達の第二解放は、本来薄いリリネットの魂を確立させて、さらに器を与えて呼び出す。まあ、期間限定の召喚術みてえなものだ。」

「簡単に言ってくれるねえ…」

京楽が警戒心を顕にしたのは、帰刃した際のスタークと全く同じ量の霊圧をリリネットが持っている。という点だ。

リリネットへの力の譲渡ではない。

リリネットの霊圧がスタークと同じ分だけ増えた。

譲渡ではなく増幅

この破面、さらつととんでもない事やっつてのけている。

「まあ…俺達なりに色々試行錯誤した結果だよ。」

「どーだ白髪野郎、私だって戦えるぞ！」

子供じゃねーぞオラア!？」

(体は大きくなっても精神はそのままなのか…)

ガトリング砲を振り回しながらぎゃんぎゃん吠えるリリネットを、浮竹はそんな感想で眺めている。そんなリリネットを静かに窘めたスタークは第二解放により一回り程大きくなった魔銃の筒先を京楽へと向け…

「《黒虚閃》」

「……ツツ!？」

容赦なく放たれた黒い虚閃を2人はすんでのところで反応し、左右へ大きく身を翻した。

銃口から伸びた1本の線が瞬く間に膨れ上がり、掻き巻るように周囲の空間を飲み込みながら、轟音と共に眼下の街を抉り取る。

黒い波動の通った後には瓦礫すら残っていない。

「……ツツ!?破壊力が段違いだな!」

「あつぶないねえ!?!そんな威力有るなんて聞いてないよ!」

「悪いな、俺達にも返したい『義理』が有るし、報いたい『恩』も有るんだ。今回ばかりはダルいななんて言ってるからねーの。

リリネット!」

「あいさー!」バラ・オスキュラス・メトラジエッタ《無 限 黒 虚 弾》アツ!」

リリネットの持つガトリング砲から轟音と共にばら撒かれる数え切れないほどの黒い虚弾が享楽達の視界を覆い尽くし、第二ラウンド開始のゴングを告げた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

さて

藍染君の計画は最終段階に突入した。

虚圏を陽動に使い、釣られてきた死神を幽閉した上で現世へ侵攻。

NO.1スターク、NO.2バラガン、NO.3ハリベルの札を切れば、残りの隊長達を全員倒せると踏んだんだろう。

だがしかし、誤算が1つ。彼が思っているよりも破面は弱かった。いや、隊長達が強かったのかな？あの三人で藍染君の合格ラインに達しているのは…多分スタークくらいのもんだろう。あの変態の強さ尺度はm単位だからcmは計れないし、計る気もない。

虚圏も破面も藍染君にとっては只の通過点なのだから。

子供隊長と戦ってるハリベルの所にはさつき現れて死神達に加勢した人達がやって来てる。黒髪メガネに金髪ジャージの女二人。特に金髪の方、声が五月蠅い。もつとお淑やかにできんもんかね。

ダーリンの方にはなんか…饅頭みたいな丸い人が敵に加わったよ。うだ。見た感じ鬼道が得意らしい。『老い』が相手じゃ意味無いだろうけど。

藍染君は藍染君で、おかつば野郎が突然斬りかかって来て、DJがその対応に追われてる。

おーい、私も手え貸そつかー？

「問題無い、ジェーンはそのまま自由にしてくれていいよ。」  
アツハイ。

我らがボスは相変わらず腹立つくらい余裕の表情だぜ。フオローしなきゃいけない私の身にもなれ。短剣で背中刺される(ボソツ)。

命令通り追加の大虚をデリバリーした私だが、さっきの仮面集団に殆どやられちゃったので暇。じゃあお言葉に甘えて、大虚ちゃんの頭の上で昼寝でもしようかな。この子の頭、ぶによぶによしてて落ち着くからお気に入りのだ。

あゝ、破面をダメにするクッションなんじゃ〜。

「うりゃーッ!!」

なんて掛け声が響いた直後、私の隣に居たフーラーの身体が水風船みたいに弾け飛んで、残骸の中から仮面付けたヒーロースーツみたいなを着てる女の子が飛び出してきた。

なんだよう、私の安眠を邪魔するなよう。

「わっ、きれーなおねーさんだ!」

けんせー！この人が破面ー？」

「1回戻って来い馬鹿！そいつが敵だよ！」

タンクトップのお兄さんが叫んで、フーラーを殺した女の子が飛び去っていく。

どうも私も敵に目をつけられてしまったらしい。しようがないから大事な大虚クッシュンを黒腔で送り返し、彼らに向き合う事にした。

星型頭のグラサン、不健康そうな肌した金髪、それからタンクトップとヒーロースーツの計四人。

：すつげえキャラが濃い。

初めまして、知らない誰か。

私は第5十刃、ジエーン・ドウ。宜しくね。

「あたしは久南白！こつちがバカのけんせーで、グラサンはラブ。顔色悪いのはローズだよ！」

へえそうなんだ、宜しくね白ちゃん。

ちゃんと挨拶が出来て偉いね、飴ちゃんあげよう。

「わーいやったー！」

「秒で懐柔されてない？」

「アイツにファーストコンタクト任せた拳西が悪いだろ。」

「デカブツ蹴り飛ばすつった白が勝手に接触したんだろ。俺は悪くねエ。」

なんだこの色物集団、面白過ぎるだろ。DJ東仙が霞んでしまうな

：  
『ヴァイザード』  
仮面の軍勢だっけか。前に藍染君が言ってたな。

虚化の実験に使われた可哀想な死神達。死んだって藍染君は言ってたけど、現世に身を潜めてたんだね。

ともあれ。仕事を任された以上、流れる的に彼等が私の相手という事になる。

余裕綽々の我らが藍染サマは「指名した奴以外は半殺しでOK」と仰ってましたのでそれに従って、虚になりかけの半端者達だから乗り気でないけど仕方ない。

『明鏡止水』を解除、警戒されないよう霊圧を極力抑えながら彼らと同

じ高さまで降りて空中に立つ。

「随分とのんびり屋さんな破面だな。

仕掛けて来ねえのか。」

私をそこらの野良虚と一緒にしないでよね、星型アフロマン。

品性が服を着て歩いてる様な私ですよ？突然襲い掛かるとか獣ですかってーの。

そもそも、子供相手に問答無用なんてド畜生じゃん？

「子供ね…」

え、違うの？

たかだか数百年、虚化してから百年ちよつとの死神なんて子供と同じじゃん。

「子供扱いとかひどっ！」

「お前は黙ってる馬鹿。」

「不思議な破面だ。」

彼女は歪ながら調和のリズムを刻んでいるよ。」

おっおう、そうだね…

「ローズの言い回しは破面でも困惑するんだな…」

まあ、ちよつと良く分らないお兄さんは置いといて。

本命が出てくるまで、君達で時間潰そっか！

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「打ち砕け、《天狗丸》ッ!!」

解号と共に、身の丈5倍はある程の大きさをした金棒を担ぎ飛び出してきたのは『仮面の軍勢』の1人、愛川羅武だ。ジェーンへ力いっ

ばい金棒を叩きつける。重い音が響き、手応えを確認したラブが舌打ちを一つ吐いた。

巨大で鈍重な刺付きの金棒、並の破面なら掠っただけで即死ものの一撃。

ジェーンはそれを片手で受け止めている。

当然ながらその腕に傷一つ付いていない。彼女の鋼皮強度はそこらの破面とは一線を画しているのだから。

「見た目の割に結構軽いね、その金棒。」

「そりゃ悪かった、じゃあもつと強く打つよ。ちつと熱いかもだがなアツ!!」

不敵に笑うラブの顔を鬼の面を思わせる仮面が覆い隠す。途端、彼の霊圧が膨れ上がり、天狗丸の刀身が炎に包まれた。

「《火吹きの小槌》ツ!!」

まるでジェットエンジンでも取り付けられたかのように急加速し、熱せられた鉄の塊が受け止めたジェーンごと押し飛ばし、声を上げる暇もなく直線状にあったビルまで叩き付ける。

激突の衝撃でビルの壁はクレーターの様な凹みが生まれ、ガラスは全て粉々に割れ散った。

「ローズ、立て直す隙を与えるな!」

「オール、ライツ!!」

奏でろ、《金沙羅》

ラブの叫びに呼応する様に、金髪の指揮者じみた格好をした男、鳳橋楼十郎の抜いた刃がムチのようになり、そのまま伸びてジェーンをビルごと縛り付けた。

「金沙羅奏曲第十一番、『十六夜薔薇』。」

金沙羅から伝わる振動ががんにがらめにされたジェーンまで届き、続く大爆発が大気を揺らす。虚化したローズの虚閃は金沙羅を伝い、蓮の葉状に開いた先端部分より至近距離から円形に炸裂させ、爆発でビルは半ばからポツキリと折れそのまま倒壊しジェーンごと下敷きにしてしまった。

激しい土煙が舞い上がり、視界が悪くなる。崩れていく建物を仮面

越しに眺めながら、ラブは溜息を吐いた。

「なあ拳西。あの破面、五番だったよな。」

他の連中が戦ってる奴らより数字は下のハズだ。なんでそいつが今更現れた？」

「浦原が言ってたろ、昔噂になつてた『始祖』の事。」

藍染がこのタイミングで現世こっちに投入したって事は、あの五番が隠し球だったんだろ。」

「その割には彼女、随分と簡単に吹き飛んでくれたね。…だが、リズムは途切れていないようだ。」

轟ッ

音を突き破って、コンクリート塊が土煙の中から飛んできた。車一台分はゆうに超えている、鉄筋モロ見えのコンクリートの塊。当たればただでは済まされぬそれを、拳西は自らの斬魄刀で叩き落とす。

「吹っ飛ばせ、《断地風》！」

サバイバルナイフほどの小さな斬魄刀に触れたコンクリート塊は、まるでバターを切るように二つに両断され、断地風の効果により粉々に爆散した。爆風に煽られながらも、3人（白は明後日の方へ口笛を吹いている）は未だ晴れぬ土煙を睨み付けている。

弾かれる様な音が数回、何処かで笄響いた後に大量の瓦礫が四人へ下から降り注いだ。

尖ったものから平たいものまで、速度は当然音を超え、大小様々なコンクリート塊が大量に。

マシンガンの様に撃ち出されるそれは、的確に四人を狙って飛んできている。

「うおおお何だこりゃあああッ!?!」

「もしかして瓦礫投げてるのお!?すごい!」

「もしかしなくてもそうだろうよ! つーか白、テメーも見てないで手伝え!」



次々飛んでくる瓦礫の雨を斬魄刀で打ち払いながら告げる拳西に、白は「ふうーっ」と嫌そうな顔をした後、仮面を被って飛び出した。蹴りで、拳で、次々と飛んでくる瓦礫をまるで格闘ゲームのように大仰なモーションで打ち落としていく。

「白、スーパーアクロバットお！」

「俺達が戦ってるのは破面じゃなくてピッチングマシンか何かだったのかア!？」

「さつきから変化球も飛ばして来てるよ！」

瓦礫でナツクルボールとか軽くトラウマになりそうだし！」

「いつまで遊んでる気だあの破面は！」

焦れた拳西が叫んだ直後、不意に瓦礫の雨が止む。不気味なほど静まり返った土煙に四人が息を飲んでいると、程なくして再び飛んできた。

「オイオイオイ嘘だろ!？」

「でっつかーい！」

ラブが唾を撒き散らすのも構わず叫び、白は純粹に驚いている。

現在彼等が戦闘しているのは、尸魂界がこしらえたコピーの街とはいえ、精巧に作られた街並みは本物と変わらない。

ジエーンが激突し、ローズによって破壊されたビルは、空座町の中でも有数の大企業の本社ビルであった。空座町の安い土地いっぱい積み上げられた30階立てのオフィスビルだ。

それを投げた。

倒壊したビル、その形を保っていた屋上部分から5階分の欠片を丸ごと。

「うおおおおおっ!!天狗丸ウー！」

迫る大質量。

ラブの掛け声と共に更に肥大化した金棒をバツターの様に振りかぶり、力の限り振り抜いた。勢いのまま金棒と正面衝突したビルは破片をぶちまけながら派手に砕け、四人を避けて散り散りになってい

く。

「ハアツ…ハアツ…あの破面、ビルを丸ごと放り投げるとか無茶苦茶しやがる！」

「それにアイツ、手を抜いてやがるな。」

「気付いてるか？あの破面、斬魄刀を抜くどころか帯刀してすらいねえ。」

その通り、ジエーンは仮面の軍勢と出会ってからこれまで1度も抜いていない、それどころか本来腰に差しているはずの斬魄刀は影も形もなかった。

「舐められてる、となるといい気はしないね…」

ローズがそう呟き、土煙の中からキラリと光るものを見つけ報告しようとして口を開いたその刹那。

「ぐっ……ツ？」

「「ツツ?!?!」」

弾丸の様に飛んできたジエーンの膝蹴りが、ローズの腹に突き刺さる。肋骨が折れる音とパンつと弾ける音が共に響き、くの字に曲がった彼は民家を破壊しながら一瞬で数百メートルほど吹き飛ばされた。

「いやん、やり過ぎちゃった？」

「ローズッ！テメエ…!!」

見えなくなったローズに、はっと我に返ったラブが天狗丸を振り上げるが、振り下ろす前にジエーンの腕が伸びてきて手首をがしりと掴み、至近距離で彼女の深淵の様な瞳がラブを覗き込んだ。

蠱惑的な笑み、というのが最も適切な表現だろうか。破面の荒々しさも、彼女から一切感じられない。悪戯する子供のように無垢な笑顔。

ジエーンの顔が間近に迫る、平時であれば俗っぽく『ガチ恋距離』なんて言われるかもしれない。呼吸の音まで聞こえてきそうだ。

だがこの時、ラブは全身が粟立つ様な悪寒を味わう事となる。

「おイタする手はこうしちゃおう。」

なんとなしに、掴まれたラブの腕が握り潰された。

肉の引き千切れる音と骨の砕ける生々しい異音が同時に響き、ラブが雄叫びにも似た悲鳴を上げるまでそう長くは掛からなかった。

潰れへしゃげ、捻じ切られた右腕は肩から離れ、天狗丸と共に落下していく。おびただしい血が流れ痛みにもがくラブの眼前にジェーンは人差し指を向けた。

「《ゼロ・コンプレッション圧縮黒虚閃》」

指先からぼつんと生まれた黒い塊は、あぶくのように膨れ上がり、あつという間に野球ボール大にまで成長し妖しい輝きを放つ。

指先から放たれようとしているそれが何なのか、1番早く気付いた拳西の行動は速かった。

「卍解、《鐵拳断風》エッツ!!」

伸ばしたジェーンの腕に拳が叩き込まれ、爆音と共に僅かだが手が左に逸れる。

次の瞬間、黒が瞬き拳西の視界を埋め尽くした。

黒い光が空を割り、悲鳴のように耳触りな異音が響き渡る。圧縮された黒虚閃が指先から解放たれ、空を削り取ったのだ。虚閃の軌跡に沿って街は抉り取られ、衝撃で僅かに逸れたので、幸いにもラブの首から上は無事だったが、星型だった髪の毛の左半分がなくなってしまう。

「ありや?逸らされちゃった。」

「白、ラブ連れて下がれエツ!!」

「う、うんっ!」

拳西は白に息も絶え絶えのラブを連れて下がらせた。

「あれ、君が残るの?」

「えくつと…バカのけんせー君。」

「六車拳西だ、白の紹介真に受けんな破面。」

「そつちこそ、私の事は親しみを込めてジェーンお姉さんと呼ぶといよ。もしくはお姉ちゃんでも可。」

「…絶対え呼ばねえ。」

呆れる拳西。なんだかこの女は白と同じ雰囲気がある、絶対めんどくさい奴だと確信していた。

だが、ラブの腕を笑顔で潰し、顔面に容赦なく虚閃を撃ち込むあたり、やはり彼女も破面だ。気を抜いてはいられない。

「だあいじょーぶ、さっきの2人みたいにさくつと半殺しにしてその辺に放るだけだから。」

身体中穴だらけがいい？それとも抵抗できないように腕も足も全部もぎ取って達磨にしてあげようか？藍染君からは生かしたまま戦闘不能にしろって言われたんだけど、案外難しくてさ……」

「…狂ってやがる。」

「ちよつと、心外なんだけど。勘違いしないで欲しいな。」

私だつてえ？死神に喧嘩ふっかけるとかしたくないし。あの変態は背中刺されればいいと思ってるけどさ。

虚圏の為だからねえ。」

だらだらと呟いたジェーンが差し向けた手から今度は虚弾が弾け、すんでの所で拳西はそれを躲し無防備な懐へと潜り込んだ。大きく右腕を引き、拳を引き絞る。

「悪いが、女だからって容赦しねえぞ。」

「お好きにどうぞ。」

そして力いっぱい無防備な彼女の腹を殴りつけた。

拳西の卍解、『鐵拳断風』。

両手に持つナックルダスター状の刃が触れている間、始解で用いたのと同じ炸裂を無尽蔵に与え続ける超攻撃的な効果を持つ。

空気が震え、ジェーンの腹部が弾けるのを合図に、そこから拳西による無慈悲なラッシュが始まった。

身体中に鐵拳断風の撃剣が食い込み、触れた部分から爆発が巻き起こる。速度も増して、正に無間地獄とも呼べる爆砕の嵐がジェーンを襲った。

傍から見れば拳西のガラの悪さも相まって、女性を殴り付けるかなり酷い絵面の光景だが、当の本人は拳を打ち付けるうちに、奇妙な違和感に襲われていた。

（何故だ…何で血が一滴も出ねえ？）

俺は手加減してねえぞ！鐵拳断風もずっとヒットし続けてる、これだけ打ち込みや塵も残らねえ筈だ！なのに何故…)

「手応えはあった？」

「ッ!？」

ラツシユの締め放たれたストレートを顔面に受け、勢いのあまり仰け反ったままのジェーンは、何の気なしに呟いた。

「女の子をこんな殴って、悪い奴だなあもう。遠慮無さすぎじゃない？」

そう言いながら顔を上げた彼女は…無傷だった。全くと言っていいほど身体に外傷は無く、顔面ですら痣ひとつない。

拳西は理解した、全て無駄だったと。

「…無傷だとッ!？」

「無傷だよ。」

にっこり笑って、徐に拳西の両肩を掴みそのままトンっと押し出した。

「じゃ、お返しね。」

「なっ…」

霊圧の足場を崩され、重力に従うまま空座町へと落ちていく。

「仮面出しときなよ、死ぬ程痛いから。」

その忠告は悪寒と共に拳西の耳にすんなり届き、咄嗟に仮面を出現させたその刹那、ジェーンの右腕が小さな黒腔に呑み込まれ、更に彼女の背後から大きな黒腔が開き…

「ばっしーん。」

飛び出した巨大な何かが無数の様にうねり、高速で拳西を地面へ叩き付けた。

地割れでも起こったかと錯覚するような揺れと大気が震え、街が大きく歪む。ずるりとそれが動き出し、街を破壊しながらジェーンは自分の手足を操作する。

黒腔から伸びているのは、骨だけの首長竜。もといジェーン・ドウ本体の触腕だった。硬い外殻に覆われた触腕の先端には、竜の頭骨らしき部位が着いている。

人の姿となる前の、奈落の星の原初の姿。

「ガッ…」

音速をゆうに超える叩き付けによって地面と触腕にプレスされた拳西は仮面が砕け散り、衝撃で手脚があらぬ方向に歪んだ状態で気絶し地面に横たわっている。忠告通り仮面を出して防御力を上げていなければ、車に轢かれた蛙のようにぺしゃんこになって命は無かつただろう。全身骨折だけでラッキーだ。

「ん、おしまい。お勤めゴクローサマ。」

ジェーンの手が黒腔から引き抜かれると共に触腕も黒腔へ戻っていく。完全に抜かれたジェーンの右手には、黒く輝くハルバードが握られていた。

「さてと。」

ハルバードを肩に担ぎ、そのまま白と片腕を失い横たわるラブのいる民家の屋根まで降り立った。

「あとは君だけだよ、白ちゃん。

そつちのアフロマンは…」

「生きてらア…よっ…」

止血を施されたとはいえ、未だ激痛の走る半身を押ししてラブは立ち上がる。

自覚が有るのか無いのか、じわじわとジェーンは始祖の霊圧を解き放っていた。間近で受けた白の肩が震え始め、恐怖でカチカチと歯が鳴り出して止まらない。そんな白を庇うようにラブは前へ出た。

「やっぱ半殺しって何処までやりやいいのかわかんないや。破面と違つて君達脆いし。」

「言うじゃねえか…化け物が…ッ!!」

「てゆうかさつきから君達辛辣過ぎない!?

その程度の怪我、虚圏じゃ日常茶飯事だよ? 悪意も敵意も無いのにこれ以上どうやって加減すればいいのよき。はあく憂鬱…」

ああもうめんどくさい、ダメだったら後で藍染君にごめんねしよう

!

暫く悩んで、吹っ切れたように叫んだジェーンはハルバードを構え

大きく振りかぶる。

：正直な話、別に死神全員を必ず生かして戦闘不能にする必要はない。藍染は「半殺し」とは言ったものの、殺してしまったのならそれはそれで構わないと思っっているのだが。

（律儀な子だ。）

もつと適当に「死にそうな奴は放っておけ」くらいに言っておけば良かったかな…）

ジェーンが遠くで悩む姿を当たり前の様に盗聴しつつ、平子と戦う東仙を眺める藍染は少し申し訳なく思っていた。

「よし、取り敢えず2人には真つ二つになってもらうよ。上と下が離れて生きてりやラッキー。死んじやったらまあ…虚圏<sup>ウチ</sup>で面倒見てあげるから！サヨナラ！」

黒金の刃が迫る。

怯えて動けない白と片腕を失い昏倒寸前のラブ。最早抵抗は許されない。

始祖の力を無駄に駆使して繰り出される一撃、万物を断ち斬る一閃は反応など許さぬ速度でラブの脇腹に迫り…

「……ッッ!!うそっ!!」

なにかに反応したジェーンがハッと顔を上げ、ある一点だけを凝視し驚いた。

刃はすんでの所でラブの腹に僅かに食い込むだけに留まって、切り口から血が溢れる程度で済んだ。

「あの馬鹿…ッ！」

それは帰ってこられなくなるでしょ!」

柄にもなく焦り、そう吐き捨てたジェーンはラブと白の事などどこかへ放り出し、響転を使いどこかへ消えてしまう。

悪夢の様な霊圧は遠くへ消え去って、張り詰めた緊張感が緩みだした頃、ラブは肺の中の空気を漸く吐き出した。震えの収まった白はまだ注意深く辺りを見回し、彼女が帰ってこないか確認している。普段陽気で何を考えているか分からない白がこれ程警戒するのだ、間違い

なくジェーンは破格の存在なのだろう。

（あのバケモンみてえな霊圧以外、本当に何も感じなかった。もし奴が敵意を向けて俺達を殺しに掛かっていたらきつと…クソツ!!）

自分の不甲斐なさに悪態を吐く。

「鈍ってるつもりは無かったんだけどなア。これが始祖…か。」

圧倒的な力の差を痛感し、一人絞り出す言葉に応えるものは誰もいない。

（浦原の野郎、「始祖に閔しちや彼処あちらさんがどうにかしてくれると思うんで大丈夫っス。」って言ってたが、どこの誰があんな化け物どうにかできるんだよ…）

余談ではあるが、ジェーンがハルバードを振りかぶったのと同じタイミングで、ある破面が敗北しようとしていた。超弩級の爆発を至近距離から浴びせられたうえに、更に自身の力を体内に移され、自己崩壊を起こしている虚の王が。



## 二十三話 沈め掻き伏せ、虚ろの沼に

死神と破面の戦争、造られた空座町の一角にて。

幾つも笈響する空気の弾けるような音と共に響く剣戟の火花、時折走った黒い線が建物を抉りとつていく。

霊子の足場で空を翔け、常人の目では追いつく事さえ不可能な超高速戦闘を繰り広げているのは護廷十三隊八番隊隊長、京楽春水と、プリメーラ・エスパーダ第1十刃コヨーテ・スターク、リリネット・ジンジャーバックの2名だった。

「…ッ参ったねえ、こんなに速いなんて聞いてないよ!!」

「その割にはのらりくらりと躲してるじゃねえか…」

薄ら笑う京楽の眼前に一瞬で突き付けられたスタークの銃口が火を吹く。ほぼ反射で手にする斬魄刀『花天狂骨』で銃身を薙ぎ、鈍い音と共に射線を僅かにずらされた黒い弾丸は京楽の被る藁笠に穴を開けた。

銃口から吐き出される虚弾は何らかの加工が施してあるらしく、死神である京楽でも捉えられない程速い。幸い直線にしか飛ばないため射線を見極め紙一重で避け続ける事は可能だ。

距離を置いた途端、京楽の動いた後を追うように建物に穴が空いていく。背中にあつた二階建ての家屋は随分と風通しが良くなり、程なくして倒壊した。

「つたく。遠間ならちつたあ殺りやすいかと思つたが、全然避けるじゃねえの。」

やりにくい。」

「いやいや…ソレほんとなんなのさ。」

超濃度に圧縮した霊子の塊を飛ばしてるのかい？現世にある銃弾みたいだよ。」

「前にリリネットと一緒に現世へ連れ出された事があってな、色々参考にさせて貰つた。」

ゲーセン、結構面白いんだぜ？特にタイム…何とかつていうガンシューティングが気に入つた。」

「キミら結構俗っぽいね!」

「ぼかア：インベーダーゲームやったのが最後だよ。現世の駐在任務も暫くやってないからねえ…」

「隊長サンは多忙なんだな。偶には息抜きしないと持たねえぞ?」

「耳の痛い話だ：よッ!」

弾丸と剣戟が交差する。

殺し合いの最中に相手と会話など正気の沙汰では無いのだが、それは互いの実力がまだ拮抗している証に他ならない。

いつも飄々とし、どんな時でもマイペースを心がける京楽であったが、この時ばかりは内心焦りを浮かべていた。

(隙の大きい虚閃ばかりかと思っただけ、あの黒い弾丸…)

恐らく圧縮させた虚弾か何かなんだろうけど、兎に角速いのが厄介だ。)

第二解放し一回り大きくなったスタークの銃から放たれるのは町を軽く抉り取る程の黒い虚閃、そして恐ろしく弾速の速い黒い虚弾。当たる面積は狭いが圧縮された分その貫通力は並では無い。防御系の鬼道でも容易く防ぐ事は出来ないだろう。

現に開戦時、リリネットの放った虚弾に対して浮竹は縛道の八十一『断空』を使い防御を行おうとしたが、無数に降り注ぐ虚弾の質量を前に隊長格の霊圧をもってして生成した壁も呆気なく崩れ去ってしまった。

(それに：花天狂骨この子の機嫌、悪いんだよねえ。いつもはもつと『遊ぶ』たがるんだけど、今じゃ何かに怯えるみたいに大人しく引っ込んでしまってる。)

奴さん、あの姿になってから霊子の増幅も自由自在らしいし、ボクが卍解して道連れなんてのも通用しなさそうだ。)

尸魂界に二振りしかない二刃一対の斬魄刀、『花天狂骨』特殊な始解、卍解を有する稀有な力を持っている。

総隊長や十番隊長の様な圧倒的な面制圧力は無いが、一度術中に嵌めてしまえば自分も相手も逃れる事が困難。所謂、搦め手が得意なテクニカルタイプだ。故にほぼ無限に増え続ける霊圧でゴリ押しす

るスタークとは相性が悪い。

多対一で不意が突けるような状況ならまだしも、<sup>サ</sup>一体一の勝負となると圧倒的に不利。

それ以外にも彼が卍解を使わないのには諸々の事情がある訳だが、此処で語る必要はない。

ちらり…ともう一方の破<sup>リリネット</sup>面と戦う相棒、浮竹十四郎の方へ視線を動かしてみる。

.....

「わ、わ…わッ！」

「うらあ逃げんなオッサン！」

チュガガガガガガッ!!

(リリネットのガトリング砲が毎分4000発の勢いで浮竹に向かって黒<sup>バラ・オスキュラス</sup>虚弾を撃ち出す音)

「その物量は反則だろう!うわわわわッ!」

「ええいまどろっこしい！」

その斬魄刀鬱陶しいんだよ吸ったり出したりチヨロチヨロ避けやがって!こうなったら…

フォルム、チエーンジッ!!」

ジャコン!ガキンツ!!ガシャガシャ…:ガツシャーンツツ!!

「い、今どうなったんだ!?明らかに質量保存の法則無視した変形しなかつたかい!?!」

「うるせえー!」

第1十刃、超弩級砲塔魔銃リリネット様舐めんな!」

「銃じゃない!絶対に其れは銃じゃないぞ!!

列車砲的な何かだ!」

「食らえエ、メテオラ・ゼロ・オスキュラス《流星黒虚閃》!!」

「うおおおお空から光が落ちてくるううううッ?!?!?」

.....

(ええ〜〜…)

なんだアレは。リリネットの持つガトリング砲が物理法則を超越した変形をしたと思ったら空から大量の虚閃が降ってきた。何を言ってるのか分からないだろうが京楽も訳が分からない。これには魔女量産機でお馴染みの白い害獣も苦笑いである。

流星にこれは予想外なのか浮竹も双魚理を振り回しながら何とか逃げ続けていた。

ただ一つ、言える事は…

(浮竹には悪いけど、アツチ担当じゃなくて良かったなあ…)

京楽は割と心の底から思ったそうなの

「はあく参った参った。」

先程までとは違う、明らかな殺意をもって飛来するスタークの魔弾を紙一重で躲し続けながら京楽は一人ごちた。

その時

『

』

「ツツツ?!?!」

突如京楽を襲う背中に突然氷柱を突っ込まれたような悪寒と、心臓が縮む感覚。

永きに渡って死神としてやってきたが、これ程ハッキリと『恐怖』だと実感したのは何時ぶりだろうか。

ハツと我に返り、敵であるスタークを見るも彼も同じ様に動きを止め、戦闘中なのにも関わらずある一点を凝視している。

こことは離れた空座町の一角で、異変は既に起こっていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『私の…やりたい事?』

ああ、そうじゃ。

始祖の骸よ、何故貴様は死神と手を組む。

今までの我儘は全て自分で完結させていただろうに、何故今になって藍染に手を貸すか。

貴様がその気になれば一瞬で死神を壊滅させる事も可能であろう

貴様が腕を一振りすれば、その悉くを塵に還す事も容易なのは刃を交えた儂が一番知っておる

一人でどうとでもできると言うに、何故他者を巻き込むのか。何故誰も彼もを関わらせようとするのか。

『そんなもん決まってるでしょ。』

虚圏とダーリンの為だよ?』

……………何て？

『わーお初めて見たよそのマヌケ顔、皺だらけでもちやんと表情筋つて動くんだね。』

机から身を乗り出し両手で頬を摘んでくる馬鹿を掴んで席に戻し、再度疑問を投げ掛けた。

儂と、虚圏じゃと？

『そうっ！

破面この姿になつてから色々考えさせられることが多くてね。

虚圏、このまま放置するの不味いし。ダーリンは藍染君に負けて意気消沈してるし。どーすっかなーって考えてた。』

腕を組みながら思案する仕草をするジェーン。

おい、ボソツと『バラガンは時代の敗北者じゃけえ…』とか呟くのやめろ。無性に腹が立つ。

『藍染君は虚圏の事なんて通過点としか考えてないみたいだし、死神が攻めて来たら色々引つ掻き回されそうだしさ。』

十刃は相変わらず自分勝手に、もーみんな後先考えずに行動するからお姉さん困っちゃうよ。』

要するにこの女は藍染惣右介が現世侵攻した後、支配者の居なくなつた虚圏をどうするか憂いていたらしい。

『だからあ。身体は虚、心は整プラスな私が一肌脱ぎましようつてね。』

…ぶっ、お前が整とか。

『あつ、絶対いま心で笑つたなー!?』

ぶんすかと分かりやすく怒りながらも、ジェーンは茶菓子を頬張つた。

『藍染君は例のれーおーとかいうのに首つたけだしね。近いうちにここから居なくなるにしても、虚圏にこれだけの施設を作っておいて放置するの勿体ないじゃん。』

だから連中が消えた後、私たちが全部貰う。

都合のいい事に藍染君によって虚圏は殆ど統一されて、組織化もできて、オマケに虚夜宮なんてどデカイ城までくれたんだもの。使わな

「手はないっしょ？」

『死神達が消えた後、虚圏は懲りずにまた荒れるでしょうね。』

なんせ私達は悪霊の群れなんだし、イキった馬鹿が現れるのは目に見えてる。そこでダーリンの出番ですよ！

どデカい城虚夜宮にドーンと構えて！

十刃に協力させながら！

ワシが王やぞって我が物顔で統治すれば！

虚圏は楽々再統一完了！なんせ私達は虚圏で殺傷能力の高い上から10人だからね、戦闘になっても余裕余裕。虚の虚による虚の為の大帝国は向こう千年は安泰だ！Q・E・D!!

どうよ？パーフェクトでエクセレントなプランでしょう？がはははは、我ながら才能が恐ろしいな！

大丈夫！既に8番の変態と1番のボツチには了承取ってあるし、他の連中も説得（物理）して従わせるから！』

貴様：まさか虚圏にもう一度“国”を作る気か？

儂が聞くと、こつちを向いたまま一瞬間まってキョトンとしたジェーンが頷いてくる。

『そうだよ？』

虚圏に秩序を敷いて、統治する王を立てて、虚を統率する。勝手な奴には罰を与えて、賢い子には褒美を上げて、いつまでも続く大帝国を築く。

人間なら1000年持たないけど、寿命の無い私達なら未来永劫この世界を治めていられるよ。

もう布石は打っておいたから。

私のしたい事はこの身体になってから1ミリだってブレてない。

“大切な人と死ぬまで一緒に居る事”

その為ならどんな手段も選ばないしどんな妥協も許さない。不都合も悶着も困難も厄介事も、すべからず徹底的に排除して私はバラガン・ルイゼンバーンを虚圏の王にする。

貴方にはその器があるんだもの。』

『そうすれば死ぬまで一緒に居られるよね？』

デーブル越しにずっと身を寄せて、ジェーンの顔が視界いっぱい映る。

思わず喉が鳴った、何時も暗いと思っていた奈落の瞳はいつそう底の無い沼の様に澱んでいた。

『あ、勘違いしないで欲しいんだけど死神や十刃の皆と仲良くなったのは将来使い捨てにしてやろうとか打算的な理由じゃないよ？』

仲良くした方が楽しいし、私のコミュ力は53万だから自然と友達が増えていくだけ。これも人徳…いや虚徳？のなせる技かな。』

ぬへへ…と、得意顔で喋り続ける奴の表情から邪気は一切感じられない。

…こやつは何なのだ。

童の様に自由奔放を貫き、時にあの藍染ですら頭を抱える様な沙汰を起こしておきながら、『儂の為』じゃと？

他者を気遣う虚など居らん。いや、それ以外の残滓が積み重なったモノの果てがヴァストローデなのだ。

怨嗟の只中にて尚己を見失わず、あまつさえ他者への気配りまでこなししてみせる奴は…

本当に虚なのか？

…いや、此奴は、この娘は、違いなくこの世界の“神”なのだ。

世界の維持と己の願望が入り交じり、歪んだ価値観と欲望がジェーン・ドウの原動力。

それが奈落の星の『やりたい事』

理解した瞬間、思わず身が震えた。

神に選ばれたという悦びが儂の中を満たし、奴の為ならなんだってしてやろうという強い決意が芽生えてしまう。

ああ、理解した。これが“依存”か。

虚しき我々には決して得られぬ満足感を与えられ、沼に嵌るが如く堕ちていく。そうなってしまうばもう以前の状態になど戻れるはず



もない。

棄てられぬように、喪われぬように、無意識の内に女神の為に全てを捧げる信奉者へと変えられるのだ。

そして儂も、そう成ってしまった

暗い瞳で無垢な笑顔を向ける此奴と向き合って

成っても良いと、思ってしまったのだ

『……と、言うわけで。』

ダーリンにはぜひぜひ頑張って貰いたい訳ですよ。分かった？』

『……………』

『あ、あれ？』

ダーリン？バラガンさーん？ご機嫌如何？もしかして寝てる？い

や痴呆がもう…』

『まだボケるか、阿呆が。』

『なーんだ起きてんじやんか紛らわしい！』

その髭抜くぞ！』

『ええい止めんか、儂のチャームポイントに手を出すな！』

髭を掴もうと迫る馬鹿女神を必死に引き剥がしながら、儂は悦びに打ち震える。

ジェーン・ドウは儂のものだ。虚圏で最も強く、最も偉大な女神は今、儂だけを見ている。

他の連中になど振り向かせるものか。

女神から直々の寵愛を受けたのならば是非も無し、バラガン・ルイゼンバーンは“王”として虚圏を治めねばならぬ。

其れが、其れこそが王たる儂に告げられた神託なのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

空座町、上空

碎蜂の放つ卍解、《雀蜂雷公鞭》がハッチの拵えた結界の中で炸裂し、重い爆発音が大気を揺らす。

中に閉じ込められ、至近距離から大質量弾を受けながらもバラガンは自身の能力によりその威力を削ぎ、辛くも生還を果たしていた。

「おのれ…赦さん…赦さんぞ蟻共が…ツ！」

呻くバラガン。鬪髑の頭蓋は欠け、自慢の大斧も衝撃で粉々に砕け散った。しかしまだ瞳の炎は消えてはいない。

彼を中心に広がる死の息吹が瞬く間に周囲を飲み込み老い朽ちていく。

「ツ!?まだ戦えるのか!」

「アイツ不死身かよお!?!」

崩れ去っていく町から必死に離れる死神2人を見ながら、バラガンは嗤う。

「小さい小さい小さい小さい小さいイツ！」

死の息吹がハッチに狙いを定め、猛スピードで襲い掛かる。ハッチは咄嗟に仮面を出し強化された鬼道で防いだ。

「小賢しいわ！」

が、荒れ狂う死の波が容易に障壁を削り取る。

「儂に向かつて虚の真似事とは、身の程を知るがいい！我こそは〃大帝〃バラガン・ルイゼンバーン！」

唯一にして絶対の、虚圏の王だ！」

遂に障壁が穿たれ、空いた穴から漏れ出た死の息吹がハッチの右手を掠めた。

老いの力はじわじわと侵食し始め、指先からどんどん朽ちていく。

「有昭田鉢玄！」

「フハハハハハッ！」

この世界の中で儂の力は絶対、それ以外の事柄は全て等しく小さき

事。

至上の力を持つこの儂の支配の下に有る事こそがこの世界の有るべき姿なのだ!

拮抗する力の中に、平等は生まれぬ。

儂には貴様らの命も蟻の命も、等しく同じに映っているぞ……ッ!?

勝ち誇ったように笑うバラガンは息も絶え絶えに額から脂汗を流すハッチを一瞥し、気付いてしまった。

「貴様……右腕をどうした」

ハッチの右腕、第二関節から下がごっさり消えて無くなっている事に。切断面は止血の為なのか結界で覆われていた。

「……差し上げマシタ。」

「何……をッ!?!」

ハッチの指す先はバラガンの腹部、その直後彼のローブがボロリと剥がれ中から無くなった筈のハッチの右腕が覗く。

死の息吹によってボロボロと崩れ去る一歩手前の、腕が。

「『匣遺』……どうやら成功したみたいデスネ。」

「ぎっ……貴様……ッ!」

自分の腕を結界で切断して儂の腹の中に転送したのか!?!」

「……アナタの力が唯一絶対なラ、アナタ自身もその力には敵わないハズ……」

なんの確証もない賭けでしたガ……その読みが外れなくて良かったデス。」

『老いの力は鬼道すら侵食する。』

戦闘中バラガンが豪語したとおり、右腕を枯らし尽くした死の息吹は次の獲物を求め、近場にあったバラガンの身体を内側から侵食し始めた。

「ずつと不思議に思っていますタ。」

アナタの能力に触れた者は皆老い朽ち果て塵となる、ならば何故骨の姿である彼は塵にならないのでショウ。

そこで仮説を立てまシタ、彼は自らの体表に老いの力を退ける何

らかの別の力を張り巡らせている」と。

それならば、普段触れることの無い身体の内部に力を送り込めばあるいは…と。

「而して、読みは当たっていたようですね。」

たとえ本人であつても容赦無く老いは侵攻し、どんどん腹の穴が大きくなっていく。

ハッチの機転が功を奏し、このままバラガンの全身が朽ち果ててこの戦いは終わる。

しかしバラガンは諦めなかった

「雄々オオオオツ!!」

徐にバラガンは残っていた左手で腹の結界を掴み取り、握り潰す。そしてあらん限りの霊圧を腹の周りに込め、無理やり老いを封じ込めようとしていた。

「認めぬ…認めぬ認めぬぞツ!!」

儂は女神に選ばれし虚圏の大帝!このような所で終わっていいハズが無い…否ツ!」

「終わって堪るものかアアアツツ!!」

その身を削り、更に溢れ出す霊圧。ビリビリと大気が揺れ、その顔は髑髏であるというのに、バラガンの鬼気迫る気迫は勝利を確信していたハッチ達すら呑みこんだ。

「なっ…」

「なんつー霊圧だ!隊長格すら超えてねえか!」

「なんとという執念…ツ碎蜂サン!構えてくだサイ!

彼はまだ……………」

ガオンツ!!

「ニツツ?!?!?」

瞬間、三人は呆気にとられる。

腹が穿たれたとはいえ、まだバラガンの身体は半分程度は残ってい

たはずだ。

なのに、無い。

瞬きをした一瞬のうちに、バラガンの首から下が消し飛んでいた。それに一番驚いたのは他でもない、バラガンだ。

「……これ……は……」

「頑張り過ぎだよ、馬鹿ダーリン。」

もはや欠けた髑髏の頭だけになり、落ちていくバラガンを抱き留めたのは他でもない。

始祖の骸だった

.....

「……貴様か、ジェーン・ドウ。」

「……………」

「おい、なんで無視する。コラこつち見ろジェーン・ドウ。」

「……………っーん。」

「おーい、聞いたるかー？もしや儂より早く痴呆が来たかー？」

「あく聞こえない聞こえない！」

「チツ……………助かったぞ、マイハニー。」

「……………!!はあい♡よく言えましたあく♡」

よく喋るしやれこうべ……もとい死にかけのマイダーリンを愛おしそうに胸に抱えて始祖は朗らかに笑う。

というかあの状態でも喋れるのか……と死神達は破面の底知れぬ体力に驚いていた。

まあ流石に首だけになっても元気に喋れるのは虚圏広しといえどバラガンくらいのもだろう。

「先の虚閃は貴様の仕業か。」

老いに蝕まれる儂の身体のみを消し飛ばしたのだな…」

「ミスって胴体全部ふっ飛ばしちゃった、焦ってたんだから許してよ。いやむしろこんな可愛いしやれこうべが生まれて結果オーライなのでは？商品化して現世で売る？商品名は『おしやべりルイくん』で…」

「貴様、この状況でよくそんな悠長な事が言えるな…」

夫婦漫才を繰り広げる2人を他所に、大前田は首を捻っていた。

目の前の、首元に『5』の数字が刻印された破面はどうやらバラガンを助けに来たらしい。だがお互いが「ダーリン」「マイハニー」と呼び合うように、どうやら2人は夫婦のようだ。

（でもあのジジイは2番で女の方は5番だろ？数字は下なんだから碎蜂隊長なら楽勝なんじゃね？）

護廷十三隊二番隊副隊長大前田希千代、安定の舐めプ思考である。

十刃は数字の早い順に強くなっていく、という情報を事前に聞いていたからこそその楽観視であったが、前回のラブ達のように少しは怪しんで欲しいものだ。

未だに戦場に居るとは思えないほど悠長なおしやべりを繰り広げる二体の十刃を眺めながら、大前田はちらつと上司である碎蜂を見る。視線に気付いた碎蜂はふんつと鼻を鳴らした。

「首の数字…成程な、アレが日番谷の報告にあつた始祖の虚というやつか。」

バラガンによって朽ちるのを避ける為、自ら切り落した左腕は簡単な止血は施したもののまだ痛む。が、新たな敵が現れたのなら是非も無い。

「ん…でえ？」

そこの饅頭みたいな子がダーリンを負かした訳だ。」

「いや儂にトドメ刺したのお前じゃろ。」

「ハイ黙る！」

「フゴッ!？」

髑髏の顎を無理やり閉じる。

……閉じた時なんか妙な音が聞こえた気がしたが気にしたら負けだ。

「えくつと、確か鬼道めっちゃ上手いんだよね。藍染君が言ってたよ。そっちの小さい子は隠密機動……? って部隊の隊長で、隣の子は副隊長かな?」

「……」

案の定、死神達の情報は筒抜けである。

まああの隊長格が3人も離反していれば漏洩は免れないか。

「あ、君の斬魄刀じゃ私を殺せないから止めといた方がいいよ?」

雀蜂を発動させ、隙を伺う碎蜂にジエーンは笑顔で釘を刺す。

「……ッ!」

一瞬のうちに後ろへ回り込み、バラガンの口を塞いでいるため武器も持たず無防備なジエーンの首へと鋒を押し込んだ。

ガリガリと耳障りな音が響き、雀蜂の刃がジエーンの肌を虚しく滑る。

「なっ……刺さらないだっ!」

雀蜂の《二撃決殺》は対象に傷を負わせる事によって発動する能力、傷が入らなければそもそも能力が発動しないのだ。

始解状態の雀蜂、小太刀にも満たない小柄な刃ではジエーンの鋼皮に傷を負わず事すら敵わなかった。

「さ、刺さんねえって……」

碎蜂隊長の斬魄刀だぞ? 始解とはいえ隊長格の技だぞ?! なんて傷すら入らねえんだよ!

「それだけ碎蜂サンと5番の彼女の霊圧に差が有る、という事デスネ……」

「チイツ……!!」

流星に分が悪いと悟ったのか碎蜂は瞬歩で再び跳躍し、大前田達の下へと舞い戻る。

「お、速いねー。」

掴もうと思ってたのに逃げられちゃった。

じゃ、あとは私がやるからダーリンは先に帰ってて。

ロカちゃんの方に送ってあげるから、早く治して貰ってよね。事後処理がまだ残ってたんだから。」

「……ああ、分かっておる。」

「……あー！」

「……」

言い終えたジェーンは最後に髑髏のみとなったバラガンをもう一度抱き締め、恋人に愛を囁くように優しく耳元で呟いた。

「敗北者じゃけえ……♡」

「やめやめろオッ！」

どうもシリアスなムードが続かない。

突如開かれた黒腔がバラガンを呑み込み、碎蜂達の前にはジェーンだけが残される。

ちらつと目が合ったハッチは思わず身構えた。

「いやー焦った焦った。」

まさか自分の力に消されかけるとはねえ、この私の目をもってしても見抜けなかったよ。

「つか鬼道ってなんでもありかよ！狡猾くない!？」

「……昔は良く卑怯者と言われましたヨ。」

自嘲気味に笑う。

ハッチこと、有昭田鉢玄は元『鬼道衆』。

斬魄刀を使用せず、鬼道と縛道のみに特化した特殊部隊の副隊長だった。斬り合いが華の死神の戦いとしては邪道である。そのため、尸魂界在籍中是一部の部隊（主に喧嘩馬鹿しかない所）からは「マトモに戦えない卑怯者」と陰口を叩かれた事もある。

実際、武闘派の碎蜂とは過去の件もあって今もギクシャクとした関係のままだ。

……碎蜂は無言で目を逸らした。

「先程の会話で察せたのですが、貴女はかの大帝の妻なのデスカ？」

「そうだよ（迫真）。」

ま、外堀は埋めたけど式は上げてないしたった今日那は頭だけに



なっちやったから、正式な籍を入れるのはこの戦いが終わった後かなー。」

「それは…おめでとうございマス。」

「それ旦那殺しかけた張本人が言っちゃやう?」

「何を無駄話に興じてんだオッサン!?!」

大前田のツツコミが冴える。

素直な祝辞は嬉しかったのか、少し照れながら笑うジエーンはぐりりと街を見渡した。

死神と破面の戦闘は未だ継続中だ。空では第二解放したりリネットの虚弾が街に向かって降り注ぎ、京楽とスタークの高速戦闘によって幾つも家が穴だらけになっている。ハリベルは三対一の状況でも善戦しているし、首領である藍染達もそれぞれ仮面の軍勢をあしらっていた。あの程度の相手なら方が一にも負ける事はないだろう。

ふと、地上に転がっている破面三人娘が目にと留まった。

火傷して気絶してはいるものの、命に別状は無さそうだ。全員腕が片方無くなっているのを見るに、<sup>アヨン</sup>ペットを出したのだろう。

「ん…生きてて形が残ってるのはズッコケ三人娘だけかあ、もうちよっと残ると思ってたんだけどなあ。」

「今更戦力差の確認か、呑気な事だな。」

「藍染君の無茶ぶりに命張るのはいつも通りだとして、ダーリンまでやられちゃうのは予想外だったよ?」

ん、さっきのは思わず倒しちゃったけど、君らは藍染君から何も言われてないし放つといていいかな。どうせ最後は藍染君にぶつかるとだし。」

じゃーね、と再び響転で掻き消えたジエーンに碎蜂達は反応できなかった。

追おうともしたが、自分達の惨状を改めて思い直し脚を止める。

(なんだあの破面は…)

仮にも伴侶が死にかけたというのに敵意すら見せないとはどういう事だ?)

破面は曲がりなりにも感情を持つ虚の上位個体だ。

仲間：ましてや親しい旦那が死にかければ怒るのは当然、何らかの感情の変化が起きてもおかしくはない筈なのだが、大前田はともかく碎蜂とハッチすら彼女が去る最後まで敵意の『て』の字も感じる事は無かった。

(所詮破面と言われればそこまでだが…何かおかしい。あまりにも『事務的』過ぎる。)

「「ツツツツ?!?!」

碎蜂は思わず思考を中断してしまった  
顔を上げる

感じ慣れた、とは言いがたいが見知った霊圧が爆発的に膨らむのを感じる。これは紛れもなく…

「総隊長殿…?」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

んもー!

ダーリンつたらうっかり負けてんじやないよ!

私がガオンしなかったら帰って来れなくなる所だったじゃんか!  
慢心帝に改名しろ!

いやほんと危なかった、「老い」は唯一『繭』に戻ってこれなくなる能力だからね。まさかピンポイントで弱点突かれる相手と戦っちゃうとは…何が起るかわかんないもんだ。

まあ完全に消滅しなくて良かったよ、もしなっていたらこの街ごと塵にするところだった。

おーい、藍染く〜ん。

「やあジェーン。彼の見送りは終わったかい？」

藍染君はオカツパ関西弁と斬り合いながらもこっちの呼び掛けに  
応えてくれた。

てめーコノヤロー、もつと詳しく敵の情報寄越せよな。

「ちゃんとやったろう、鬼道系に特化した者が控えていると。」

つつても空間ごと転移させるとは思わなかったじゃん、卑怯だろあ  
れ！おかげで大事なダーリンがヴァルハラに旅立つ一歩手前だった  
んだけど!?

「……君に特大のブーメランが刺さったように思えるが、気の所為か  
な？」

あーあー聞こえない聞こえない！

破面もこんなに数減らしてくれちゃってさあ、消耗品って割り切る  
にしたってもうちょっと丁寧に扱いなさいよ。回収するこっちの身  
にもなれっての。

まーハナつから期待してなかったけどさ、どうせ君に付いてこられ  
る奴なんて私くらいのもんだし。

「…フフ、そうだね。」

市丸君は暇そうにしてるけどDJ。Kanameは他の相手にご  
執心みたい。ていうかなんだあのでっかいワンコの死神は、モフリた  
い。

「君も結構遊んでるじゃないか、視線で丸わかりだよ。」

遊んでません〜好奇心に負けそうなだけです〜。

「戦闘中に無駄話かいな……ッ?!」

「友との語らいを邪魔しないで貰えるかい？」

オカツパがなんか言って再び斬りかかって来たけど藍染君はどこ  
吹く風、あっさり反応して弾き返しちやった。頑張るねオカツパ君、  
精進したまえよ。

「いやオマエはどの立場からモノ言うてるんや!？」

お、戦闘中もツツコミを欠かさない関西弁キャラの鏡。

その時、下の方から凄まじい霊圧が噴き出して街中を覆い尽くした。街のあちこちで火の手が上がる。

炎の奥に佇む影はじつと此方を睨み付けてた。

ねー藍染君さあ、たしかあの人だよ。私に相手して欲しい死神。「そうだね。」

炎の中に居たのは杖持った和製ダンブルド○みたいなおじいちゃん。

けどなんだろう、他とは違うらしい。主に殺意とかその辺が。

傍に焦げて真つ二つになったアヨンっぽい残骸があつたし、おじいちゃんがズツコケ三人娘を倒したのかな？

…ん？これって私に向けられてるカンジ？

そんなもつてまた、炎

街を四角く囲う炎の檻がどんどん広がって、猛烈な熱波が私達を襲う。ちよつと喉が乾いた。

「さあ、本命だよ。」

彼の打倒をもつて私の計画も最終段階に入る、存分に始祖の力を振るうといい」

あいあいさー、ボス。

せいぜいアンタも死に目に遭えよ、死んで虚になったら従属官に変えてコキ使つてやる。

「それは…楽しみだね。」

え…マゾヒストだったの藍染君…引くわ。

「…早く行きなさい。」

へいへーい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

護廷十三隊『総隊長』山本元柳斎重國。

護廷内全ての強者共を統べ、尸魂界に千年以上君臨し続ける間違いなく最強の死神である。

彼は手にする斬魄刀『流刃若火』を振るい、他の隊士が戦闘を続ける中、ある行動を起こしていた。

そしてその仕込みが終わった頃、ふと顔を上げると彼女と目が合った。

脱退したとはいえ隊長格の平子を軽くあしらう藍染惣右介の隣、戦場の只中だというのに楽しそうにお喋りに興じている女破面の姿を。

彼女との：正確にはあの虚との因縁は数千年前、護廷十三隊創立以前にまで遡る。

突然現れ数多の魂魄を蹂躪し、喰らい、滅ぼした『始祖の骸』。重國の決意の切っ掛けとなった因縁ある相手。

姿は変わっても、その圧倒的な霊圧を忘れる筈もない。今は器用に隠しているが、ひとたび解き放てば並の魂魄なら浴びただけで魂をすり潰され、消滅を免れぬだろう。

故に滾る

総隊長の仕事の傍ら、山深くに籠り自らを鍛え直した。

無心で只ひたすらに剣を振り、昂った身体を滝に打たれ冷やしながら己の斬魄刀『流刃若火』と向き合う事で、過去の自分を見つめ直す。

惨劇の後、創り上げた護廷で起こった初めての大規模戦闘。種の生き残りを賭けた戦争とも呼ぶべきその戦いで、重國は『鬼』となった。

自分達に利するものは全て使い、必要なら部下の命すら灰と同義と切り捨てるその姿は正に修羅。それが創立より尸魂界を支え続ける山本重國という名の漢<sup>わたくし</sup>である。

自分が鬼となる根源を創った虚。

敗北を知り、無力を知り、報復を誓った相手。

平穏を取り戻す尸魂界につられて、自分も嘗ての烈火の如き激情も消えかけていたらしい。それが長としての責務であった故に。

ならば…

「…あの時とは違う。」

此度の立ち合いでもって、彼奴あやつに引導を渡す。」

眼を開き、刃禪じんぜんを終えた重國は静かにゆっくりと刃を掲げ、流刃若火を解放した。

鋒から線のように伸びた焰が一直線に滝を裂きながら駆け上がり、2つに割れる。頂上へ達した焰がすぐさま上流の水を蒸発させ、それ以降滝から水が降ってくる事は無い。一瞬にして滝を崖へと豹変させた重國は山を降りた。

この時をもって、山本重國は人から嘗ての鬼へと在り方を変えたのだ。

……因みにこの後尸魂界へ戻った時、目敏く察したのかそうでないのか、更木剣八に絡まれ滅茶苦茶勝負を挑まれた。その最中建物の陰からは4番隊の卯ノ花やちるが物憂げな表情ですつと此方を見つめてくるし、内心気が気で無かったそうなの。

……………

「んんん…」

「……………」

「んんんん？」

「……………」

「藍染君から直々のご指名で降りて来たのは良いけど、何この状況。」  
ジエーンはそんな感想を漏らした。

焰の如き巨大な霊圧、それが護廷十三隊総隊長のものと知り、藍染上  
司

の命令で渋々やって来た訳だが、当の重國は此方を見留めたまま視線を外さない。

相変わらず刺すような靈圧はそのままなので自分に敵意を持っている事は分かるのだけど、それ以上何もしてこないのだ。

「久方ぶり、と言った方が良いかのう。」

暫くして、突如発された重國の言葉にジェーンはどぎまぎしながらも答えた。

「え、うん…：久しぶり…？」

「あんた誰？」と即座に言わなかった彼女に花丸をあげたい。雰囲気とかなーんも考えてないのかこの始祖は。

重國も察したのかそれ以上は言わなかった。このお爺ちゃん優しい。

「覚えておらんかも知れぬが、儂とお主は一度見えておる。」

その時の儂は小さく、そして弱かった。

お主にとつては塵芥の様な存在じゃ…：が、塵も集めて燃やせば大火となろう。」

灼熱の死神は構え、焰の如き靈圧が吹き荒れる。

「我が生涯に掛けた刃の重み…：その身でしかと受けよ。始祖の骸よ。」  
散っていた焰が集束しながら渦を巻く、流刃若火の周りが焰で満たされ、その刀身を踵にした。

「万象一切灰燼と為せ、『流刃若火』…：逝くぞツ!!」  
「ツツツ!!」

一閃

猛る焰を纏う刃が紅き閃となりて、ジェーンに襲い掛かる。

感じた事の無い悪寒を覚え、咄嗟に鋼皮で刃を弾いた。

ギヤリギヤリと耳障りな音が響き、痛みを覚え右腕を凝視するジェーン。ほんの僅かだが彼女の腕に赤く跡を付けた。

紛れもない、重國の一閃が始祖の鋼皮に傷を入れた証拠である。

「まだ足らぬか…：ツ!!」

嘆息する重國の眼前に黒が迫る。振り払った方とは逆の、突き出された掌からジェーンの虚閃が臨界状態で突き付けられた。

だが重國は臆さない

「呵アツ…!!」

ズシンと重い音が響き、重國の拳がジェーンの脇腹に突き刺さる。拍打の極地、自身の全体重を乗せ放たれた『一骨』の衝撃で吹っ飛ばされるジェーン。一瞬遅れて構えられていた黒虚閃が解き放たれ、重國の顔の真横を破壊の奔流が駆け抜けた。

轟音と共に歪んでいく空間をバツクに、バウンドしながら直線上の民家を何軒も倒壊させたジェーンは何度目かの着地の折、地面に腕を突き刺して勢いを無理矢理殺し何事も無かったかのように立ち上がった。

一瞬きよとん、と惚<sup>とほ</sup>け顔をしてみせて、僅かに痛む右腕を眺める。斬られたが血は出ていないし、赤い跡が腕に少し残っただけ。

だが、初めて感じた明確な痛みだった

どくん、どくと胸が高鳴る

感じた事のない衝動が胸の内から込み上げてきて、自然と頬が緩んでしまう。

正直な話、油断していた。

鋼皮もゆるゆるで、俗に言う『舐めプ』ってやつだった。もろに食らった件については言い訳次第もございません。

が、生まれて初めて傷付けられたのだ。愛する旦那でもない、友人のエロメガネ（過去形）でもない、何処の誰とも知らぬ死神が、只の力のみで。

傷物にされた…

なんで？なんで？

どうしてこんな気持ちになるの？

こんな感情、エレガントでパーフェクトな私には必要ないと思っていたのに

痛かったのに、嬉しいなんて

今まで抑えこんでいたナニかが



少しツツ、痛みと一緒にあつれでて来ル  
ちやんと皆の事を考えなきやいけない筈なのに  
どんだん気持ちイイ方へ上書きされていく  
ぴかぴか ちかちか ほしガ光ツて  
ああ…ああ…こんなにも…  
タ ノ シ イ

あはっ

ジェーンの口元が妖しく歪む

途端、街中に『死』が満ちた。

空座町で争っていた全ての死神と破面が皆一斉に縫い留められた  
かの様にその動きを止め、一様にジェーンを凝視した。

重國もまた、唯ならぬ気に思わず身を強ばらせる。老体となり枯れた  
肌が粟立つのは何時ぶりだろうか、いやもしかしたら初めてかもしれない。

気付けば額から冷や汗が垂れていた。

今しがた自分が殴り飛ばした相手、ジェーンから目が離せない、もし一瞬でも離してしまえば即座に首根を筆り殺られると、脳内で大音量の警報が鳴っている。

信じられない、いや覚悟はしていたはずだ。

ただ、その覚悟より現実が勝っていただけの事。

惚けた表情で立つ、決して小柄とは言えないが麗しい女性の姿をした破面を鮮明に恐怖しているなどと。

可視化できるほど濃密な霊圧が放たれる度、周囲の建物が勝手にビリビリと震え始め、地が軋む。窓ガラスが一瞬で塵になり、建ち並ぶビルや家屋もその形を保てなくなっていく。運悪くその場に居た野良虚の身体が泡の様に弾け飛び、残骸が地面に落ちてまた弾け、それを繰り返すうちに完全に消滅してしまった。

勿論死神達も例外ではない。戦闘中の隊長格はともかく、傷を負い弱った隊士は呼吸が困難になるほど激しい動悸に襲われていた。

生き残り、今も戦闘中だったスターク、リリネット、ハリベルは迷わず戦闘を中断し、霊圧に耐える事のみ注力している。こればかりはジェーンと共に過ごしてきた時間がモノを言うようで、対応は手慣れたものだった。

差異はあれど、死神達が悪魔の如き霊圧の奔流に苦しむ中でただ一人、藍染惣右介だけはその笑みをいつそう深め、平子との斬り合いもそつちのけで眼下の友人を眺めていた。

「妖星の目覚めだ。

おはよう、ジェーン。」

愉しそうな藍染の呟きは誰にも聞かれることなく、瀑布の如き霊圧の波に溶けて消える。

混沌とする戦場に妖しき骸<sup>ほし</sup>が1つ  
呼ぶのは悲劇か惨劇か、それとも…

瞬<sup>はな</sup>く。

二十四話 奈落の女神

.....

.....

.....

.....

《これで終わり、か》

.....？

《いやア終わりじゃねえさ、外はまだドンパチ賑やかだよ》

.....誰だ

《虚圏だからかなア、今日はいつもより意識も存在もハッキリしてんだ》

俺と同じ声で喋るお前等は誰だ

《.....俺は奴に何も期待しない》

《そりゃーいい、ならオレが貰う！

此処はカミサマのお膝元だ、3食オヤツにあの女の操まで付いてくるとなりや断る理由も無エ》

《勝手にしろ、俗物が》

止めろ...止めろ...ツ!!

《そうと決まりや話は早え、さっそくオレが目覚めてなんかいい感じの雰囲気にしてから織姫と〇〇〇ビーをホニギラして□□□□□パキュンパキュンパキュン!》  
× × × × × × × × × × ×

いやマジで止めろやアっ!!!

「……………ぶはあツツ?!?!」

魂の叫びと共に視界が一気に開けて覚醒した。

う：思い出せねえけど…夢の中で虚の俺がとんでもない事を言っていた様な……

ツ痛ウ……!

感覚がハッキリしてくると同時に自分が今どうなっているかも把握した。

知らない天井に知らないベッド、腕には点滴の針が刺さっているが包帯は巻かれていない。

天井も壁も真っ白な部屋に俺は寝かせられていた。

「此処は…何処だ?」

俺は今まで何をしていた?

確かウルキオラと戦って…姿の変わったネルが割って入ってきてそれから……

思い出した、俺は小さくなっちゃったネルを庇ってウルキオラの攻撃を受けたんだった。

それがなんでこんな部屋に寝かされて…

「いぢぢ(おおおおおおおッ!!」

「おっふウツツ!!?!?!」

その時、奥の壁が開いて小さい何かが俺の腹に突き刺さる。もしか  
しなくてもこれは…

「ね、ネル?!?!」

「お前無事だったのか!!」

「そればこつちのぜりぶつずううういぎででえがったああいぢごお  
おおお!!」

「わあかった!分かったから服に鼻水擦り付けるの止めろお前コラッ  
!」

「びゃあああああああああああ!!」

「黒崎くん!」

「い、井上…無事だったんだな。」

腹の上で泣きじやくるネル、続けて入ってきた井上も半泣きになり  
ながら俺の手を強く握ってきた。

「黒崎くん、目が覚めて本当に良かった…」

「悪い、助けに来たハズなのに逆に心配掛けちゃったな」

「そんな事ないよ!」

それより、色々説明しないといけない事が沢山あって…」

あのねあのねと一生懸命説明してくれてるんだが、何を興奮してん  
のかしどろもどろで何も頭に入ってこねえ。

そうしていたらまた1人、知らない奴が部屋に入ってきた。

中学生位の身長で灰色の長い髪をした女の子だった。服装も他の  
破面達が着てるのとは少し違う、白いセーラー服みたいな死縛装。髑  
髏の髪留め、左の顫(こめかみ)には小さいが仮面の欠片が付いてい  
て、小脇にカルテらしい紙束を挟んだバインダーを持っている。

「あ、コマさん!黒崎くん良くなりました!」

「見れば分かりますよ。」

「おはようございませす、黒崎一護様。」

「あ、あんたは…?」

「私達の名前はピカロ。」

個体名は《コマンドメンテ統率係》ですが…まあ、好きに呼んで頂いて構いません。

ええ」

「……達？」

軽くお辞儀をした《統率係》を名乗る女の子は、まだ腹の上でベソかいてるネルを無表情のまま引き剥がして放り投げ、そのまま俺の触診を始めた。

「おおおいネルウ?!」

「邪魔です」

放物線を描きながら鼻水が舞って、べしやつと床に叩き付けられたネル。特に痛がる素振りも見せていないが、まだちよつと泣いてる。

「……傷跡も無し、魂魄の損傷も完治、と」

触診を終え、カルテに何かを書き留めた後離れていく統率官を俺は慌てて呼び止めた。

「ち、ちよつと待つてくれ！」

此処は何処だ?虚圏なのか?あの戦いの後一体何が……」

「質問に回答します。」

此処は虚夜宮、第5十刃ジェーン・ドウ様の宮内に設置された治療室です。

貴方は第4十刃、ウルキオラ・シファア様<sup>シファア</sup>に勝利した後虚化の反動で魂魄が危険な状態になっていました。

お母様のご友人である井上織姫様の願いで貴方を此処へ運び込んだ次第です。ええ」

「勝利……ウルキオラに勝ったのか!?俺は……」

「恐らく貴方に意識は無かったでしょう。」

胸を穿たれ、瀕死の身で虚化した状態でしたし」

どうやら俺は、あの後瀕死になって虚化し、知らないうちにウルキオラを倒してしまったらしい。

虚化って事は白斬月<sup>アイツ</sup>が俺の身体を乗っ取ったって事か…!!

《あの女と<sup>ワーオ</sup>〇〇〇して<sup>チヨメチヨメ</sup>××からの<sup>卑猥な単語の羅列</sup>□□□□□□□□》

ええい黙れ!消えろ雑念!

「……? なにか?」

「あ、いや何でもねえよ!」

「そうですか…」

身体は既に回復している反面、魂魄なかみが虚化の影響で少々不安定でしたので此方で治療を施しましたが…その様子ですともう点滴は必要ありませんね」

そう言つて俺に繋がれていた点滴の針が抜かれていく。

「ワリイ、とにかく助かった」

「……此方へ。」

ロカ様の所へご案内します。詳しい説明もそちらで致しますので」

「説…明?」

また知らない名前だ…

つうか敵陣のど真ん中でこんな悠長な事をやってていいのか? 井上が見付かったなら恋次やルキア達とも合流しなきゃならねえし、尸魂界の隊長達も虚圏へやって来てた。まだ戦ってんならそっちへ加勢しないと…

「釘を刺すようですが、此処は虚圏の中心部。」

下手な反抗は貴方の立場を危うくするだけです、大人しく我々に従う事を推奨します。ええ」

表情の無い深い紫色の瞳がこつちをじっと見つめる、どうやら俺が逃げ出そうとしてる事はお見通しらしい。

俺一人なら何とかなるかもしれないねえが、戦えない井上とネルが居る。敵の戦力が分からない上に2人を守りながら脱出するのはかなり難しい。

従うしかねえか…

「……ああ、分かってる」

「素直で宜しい。」

《暗殺係アッサシ》も貴方くらい聞き分けが良ければ苦勞しないのですが…」

よく分からない事を言いながら「はあ…」と溜め息を吐く少女に案内されて、俺と井上は歩き出した。



おいネル、いつまで泣いてんだ行くぞ。

「ぢいぢいー！」

鼻水が汚いッ!!

.....

「なあ、コマさん…でよかったか？」

「好きに呼んで頂いて構いません」

「あんたさつき自分を『私達』って言ってたけど、どういう事なんだ？」  
「…他の皆様と違い、私達は破面化の際に身体が分裂してしまいまし  
て。」

なまじ幼い魂魄ばかりが寄り集まった虚でしたので、分裂した個体  
ごとにそれぞれ人格が芽生えた結果、数にして100体を超える「わ  
たし」が生まれました。

《統率係》と呼ばれるこの個体わたしもその中から進化した一体です。

虚圏でも珍しい『群』にして『個』の破面、それが私達、元第20  
刃悪戯小僧ビカなのです。ええ」

「だ、第20刃…!？」

じゃあコマさんはウルキオラやグリムジョーよりも強いのか？」

「いえ、破面の数字は殺傷能力の高い順に決まりますが、元十刃と現十  
刃では破面化の精度が異なります。数字が若ければ強いと決まった  
訳ではありません。」

私が生まれたのは藍染おじさまが行った破面化実験の初期段階で  
すので未完成で粗あらが多く、より崩玉が完成に近づく後期に生まれたウ  
ルキオラ様やグリムジョー様の方が破面として完成されています。  
殺傷能力も私達と比べるべくもありません。ええ」

「殺傷能力……」

「まあ、この個体と一部のピカロは少し特異な変化を遂げているので、一概に劣っているとも言えませんね。ええ。

お義母さまのお力は計り知れません。

因みに、十刃落ちの破面は番号が3桁になりますので」

お義母さま？

いや子供の魂魄って言ってたし母親くらいいるか……でも虚に母親なんているのか？

なんつーか、コイツからはグリムジョー達とは少し違う霊圧を感じるな。

「って事はドルドーニのおっさんも……」

「あの糞髭……もといドルドーニ・アレツサンドロ・デル・ソカツチオもピカロと同じく初期型の破面です。後に藍染おじさまに不要と判断され、十刃落ちに降格されました」

ドルドーニのオツサンも元十刃だったのか。そういや共闘した時チラツと《103》って数字が見えたもんな。コマさんの首にも《102》の数字が入ってる、さしずめオツサンの上司ってところなんだろうか？

つか、今クソヒゲって言わなかった？なんか言い方に棘がねえか？

仲悪いのかな。

「ていうか良いのかよ、ペラペラ喋っちまって。俺たち一応侵入者なんだぜ」

「侵入者のおもてなしも《統率係》の仕事です。」

別段聞かれて困る話でもありませんし、混ざりものの貴方は知っていて損はないでしょう。

お義母さまからも許可を頂いていますので」

「さつきから言ってる『お義母さま』ってのは、その……」

「ええ、ジエーン・ドウ様です。」

虚圏の女神、奈落にて輝く妖星、私達を変えたお義母さまですよ」

「さ、着きましたよ。此方です」

辿り着いた白い壁に切れ込みが入り、扉のように開く。

中は生活感のあるリビングみたいな部屋になっていて高そうなソファやクッション、壁掛けの薄型テレビなんかもあった。ていうか良い暮らししてんな!? バーカウンターの奥の戸棚には色んな種類の酒瓶が立ててあるし、エアコンはもちろん空気清浄機に各種ゲーム機：床にルン○走ってんぞ?! 現世のモン持ち込み過ぎだろオ!

「なんかこう、もつと殺風景な部屋を想像してた…」

「お義母さまの宮が特殊なだけです。他の十刃：例えばウルキオラ様などは必要最低限のものしかない簡素な部屋ですし。」

そうですね、あるとすれば先日お義母さまから借りていた《ときめ○メモリア○》くらいでしょうか」

「ゲームじゃねえか!」

意外だわ! 無愛想な顔してゲームするんだなアイツ：しかもギャルゲーて!

「ロカ様は奥で作業中だそうですので、此方で暫くお待ちください」  
ウルキオラの意外な趣味に驚きながらも部屋を見回すとバーカウンターの隅でグラスの酒を呷ってる人影が目に残る。

「お、オツサン! 生きてたのか!?!」

「オヤ、<sup>ニート</sup>ぼうやではないか。

「こんなところで奇遇だねエ」

あんな濃い顔、一度見たら忘れるハズが無い。

アーロニーロ戦で共闘したドルドーニのオツサンだった。身体のところ々に包帯で治療された跡があるが元気そうだ。

「ん〜…程よい苦味と甘み、流石はロマネコンティだ。

「この芳醇な香りはまさに一級品…」

「……………」

椅子から立ち上がり、片手に持つワイングラスを揺らしながら舌鼓をうつオッサンはなんつーか、優雅ってより格好つけてるだけってカシジだ。そんなオッサンに無言でコマさんが近づいて行く。

「オヤ、統率係。」

ワインが羨ましいのかい？子供にはまだはや（ゴツスウ!!）ギユ  
イエツツツツ?!?」

「「ええくくッ?!?」」

こ、コマさん!?!何故唐突にオッサンにストレートパンチを!?!

「カツハ……………な、なじえ……………」

身長差で丁度みぞおちあたりに拳が突き刺さったオッサン、破面でも人体の弱点は変わらんらしい。痛みで蹲り産まれたての小鹿みたいに膝がプルプル震えながらも手に持つグラスは必死に支えているあたり謎の根性を感じる。

それを見下すコマさんは…

「治療室から抜け出して一体何をしていますかドルドーニ」

ぐ、ゴミを見るような目だ…!

養豚場の豚とか生温いもんじゃねえ、この世の闇を寄せ集めたような…相手を蔑みきって澱んだ瞳だッ!

「無様に負けて瀕死の所をルドボーン君に連れてこられた貴方には医務室にて監き…静養を命じておいた筈ですが、何故勝手に抜け出してお義母さまの部屋で寛いでやがりますか糞髭。いえ汚物」

今汚物って言っちゃった!

「わっ…ガハイもう傷は治ったから…ロカ殿に戻っても良いって言われたのだよ……………」ビクンビクン

「嘘だッツ!」

「嘘じゃないよオ!?!」

間髪入れずに否定するコマさんの気迫がヤバイ。

「コマさん待つって待つてーおじさんが可哀想だよ!?!」

「下がっていきください織姫様、この男は危険です。」

度重なるお義母さまへのストーリーカー行為、幼いピカ<sup>わたしたち</sup>口達への誘拐未

遂、顔面の厚かましき、言動全てが不快要素の塊、唾棄すべきこの世全ての悪なのです。

純心無垢な織姫様など見つめられただけで孕まされてしまうやもしれません。ええ」

「はっ…はらむ?!」

「いやワガハイも流石にそんな離れ技出来ないヨ?!?!?!

ていうかピカロ誘拐はキミ達の誤解だから!

決してジェーン殿に会う口実作りの為にお菓子で餌付けしようとした訳じゃないから!」

オツサンそれはヤベエ奴だぞ…

「オツサンそれはヤベエ奴だぞ…」

「ぼうや!心の声をそのまま口に出すのは止めたまえ、ワガハイが死ぬ!

《統率係》、第2解放になって成長してから君ってば辛辣過ぎやしないか?昔は他のピカロみたいにしやれてくる無邪気な破面だったのに、ワガハイ悲し(ボグオツ!!)オツツグウウツフ!?同じところに…2発もオ…」

「む か し の は な し は す る  
な」

い、今の見えなかったぞ…ドンだけ速い手刀だよ。

なんかこの2人、上司と部下っつーよりオヤジと夏梨かりんを見てるようだ。

暫く悶絶して、やっと復活したオツサン曰く、あの後崩れ落ちる部屋から間一髪仲間に助けられて今まで此処で治療されていたらしい。しかし回復したてに酒は駄目なんじゃなからうか(医者の子息子並感)。破面だから大丈夫なのか?

「おつちゃん元気になって良かったツス!

ネルのヨダレのおかげだスね!」

「お嬢ちゃん!その話は止めなさい、ワガハイに効く!」

そういやオツサンはネルに涎かけられて回復したんだったな。世の中にはそういう事で回復できる特殊な奴もいるんだ…大丈夫かよ

破面界限。

「ほらア！ぼうやと統率係が勘違いしてる！

違うからネ？あの涎には弱いが回復作用があつてだね…」

「……あの、近づかないで貰えますか？」

「止めてエー！そんな目で見ないでえ!!」

統率係に至っては物理的に距離置かれてるし、マジな拒絶だねコレ  
!？」

「いえ、拒絶なんてしてませんよドルドーニ・アレツサンドロ・デル・ソ大ゴミツチオさん。取り敢えず手足を縛ってその窓から飛び降りてくださいいますか？」

「何故急にフルネーム!？」

せめて目を合わせて会話しよう!？」

てか今ゴミって言わなかった?!？」

「言ってますよ粗大ゴミさん。」

ささ、テラスはこつちです。ええ」

「スツゴイいい顔してるなキミ!？」

いつも無表情なのにそんな笑顔作れたんだね!

待ちたまえなんだねその縄は!？」

いや、ごく自然な流れで投身自殺させようとするんじゃないよ…

因みにこの会話をしている間、部屋のル〇バが延々とおっさんの踵にぶつかり続けていた。

……機械からもゴミ扱いされてるのか（驚愕）

☆☆☆☆☆☆☆☆

「……あれ?」

ドルドーニと統率係の痴話喧嘩の最中、いつの間にかやって来てソファでぽいんぽいんと楽しそうに跳ねてる小さな虚に気がついた。

人の形はしておらず、髑髏の仮面に手足が直接生え、デフォルメさ

れたマスコットキャラクターのような外見をしている。

ちよつと可愛いかも、と思つた織姫さん。安心して下さい、着々と虚圏に毒されていますよ。

「あの、コマさん。彼処に居るのも貴女の仲間の子?」

「ん…? おや、暗殺係と一緒に出て行つたピカロわたしですね。

侵入者を見つけてから連絡が途絶えていましたが何かありましたか?」

「■■■■■■■■■■!■■■■■■■■■■!……」

喋る言葉は一護達には分からない、奇声ともとれるかん高い声だつた。それでも同じ「自分」だから分かるのか、統率係はふむふむと頷き「お疲れ様でしたね、冷蔵庫にドクター○ツパーがあるので飲んで良いですよ。ええ」と告げる。

(因みにドルドーニは数秒前に金的を喰らつてノックダウンした、掃除の邪魔だと言わんばかりに何度も頭にぶつかるとルン○がなんとも虚しい。)

小さなピカロは喜び勇んでキッチンへ飛んで行つた。

「なんて言つてたの?」

「大した事ではありません。

「鬼ゴっッこ」に誘われただけですのぞ」

「お、鬼ゴっッこ!」

「貴女方のお仲間誘われたと言つてました。

暗殺係も一緒になって虚夜宮の中を走り回っているようですね。

…既に参加した八割ほどの私達を確保しています」

統率係にはピカロ同士の位置を捕捉する固有の能力があるらしい。

「他の死神も…!」

「アイツら無事なのか!」

心配して叫ぶ一護を一瞥し、統率係は空中を指で叩き探査回路ベスキスを発動。大小様々なホログラムのウィンドウが彼女の周りにいくつも展開される。画面にはピカロ一体ずつの写真と座標が記されており、中には映像も映し出されていた。

「おおくすげ〜ツス〜…」

「なんか近代的だな…」

ランゴスタ・ミグラトリア  
「戯擬軍翹第2解放。」

《統率係》の特権です、戦闘能力が殆ど無い代わりに全ピカロの位置把握と情報伝達が私の能力なのです。ええ。

……現在暗殺係2人に1人ずつ、死神が付いていますね。

なんとも頼りなさそうな男性の死神と…古風な喋り方をする女性の死神。」

(戦闘力がほとんど…?)

ならばドルドーニへ見舞ったあの流れるような手刀はいったい…

すい〜と流れるように統率係から一護達の目の前にやってきた画面には、子供を肩車して白い砂漠を駆ける2人の死神の姿があった。

「ルキアと花太郎!」

「よかった、無事だったんだ…」

「他の死神の位置は分からねえのか?」

「注文が多いですね。」

周囲にピカロがいれば映像を出せますが…

ああ、言い忘れていました。

貴方がたのお仲間の…茶渡泰虎様。彼は現在階下のトレーニングルームでテスト様と修行をしております。」

「……………何て?」

更に流れてきたウインドウ、そこには…

『雄オオオオオツ!!』

『まだまだ…こんなものでは足りないぞ茶渡泰虎!』

お前の拳に乗せる思いはそんなものか!』

『違うツ…!』

もつと、もつとだ。俺には…一護達と共に歩む実力が足りないんだ

…!だから力を貸してくれ…アブウエロ…ツ!』

『ははっ…そうだ!』

お前の能力はもつと高みへ行ける。それを俺に証明してみせろ!



茶渡泰虎アア!!」

『《<sup>ラム</sup>魔人<sup>エルテ</sup>の一撃》エツ!!』

まるで発泡スチロールのように割られた瓦礫の欠片が飛び散り戦塵を巻き上げ、コロシウムに似た円形の闘技場で互いに熱い戦闘を繰り広げる二人。茶渡の一撃を帰刃し猪の頭をした巨人と化したテスラが拳で受け止め、映像越しでも分かるほどビリビリと空気が震える。

お互い本気の闘いをしているようだが、いい汗かきながら文字通り拳と拳で語り合っていた。

なんだこの王道青春バトル漫画みたいな熱い展開は…

「いやチャド何やってんだよ!?!」

思わず吼える一護、まあ気持ちは分からんでもない。

「テスラ様が彼を気に入って此処へ連れて来たようですね。

治療の後少し分析してみた結果、茶渡泰虎様の両腕は虚<sup>われわれ</sup>と似た力<sup>もの</sup>である事が分かりました。それを当人に伝えたところ、稽古を付けて欲しいと」

「井上の搜索はどうした搜索はア!」

「茶渡くんなら此処へ来てから一番に会ったよ?」

「……はい?」

「えつとね、最初は第五の塔って所にジエーンさんといただけど、すぐにジエーンさん飽きちゃって「やっぱ私の部屋の方が便利で良いわ、行こ!」って言われて此処へ連れてこられたの。

その後テスラっていうジエーンさんの部下の人と一緒にボロボロになった茶渡くんが運ばれてきて、それを治して…」

一護から表情が抜け落ちる。

つまりこうだ。

あの三叉路を別れて抜け、ガンテンバインを撃破した茶渡は通路の先に居たテスラと交戦。実力差はあれど食い下がる茶渡、その実力と負けん気を気に入ったテスラは茶渡を撃破後もトドメを刺さずにジエーンの宮へ連行し、そこでばったり織姫と合流してしまう。

傷を治されるも、自分の力不足を痛感し自信を失いかけている茶渡

に対しジェーンは笑顔で「じゃあ修行パート、行くしかないな!」と高らかに宣言。

以降彼女の宮の下階層に存在するトレーニングルーム、通称『100戦しないと出られない部屋』にテスラと共に閉じ込められ現在進行形で青春熱血バトルを繰り広げている。という訳だ。

「因みに現在の勝率は茶渡泰虎様42のテスラ様69です。後半になってからはスタミナの差で茶渡泰虎様が有利に立ち回り勝ち数を取り戻しているようですね」

破面にスタミナで勝る人間も大概ですが、と締めくくる統率係に一護は開いた口が塞がらなかった。

(俺の頑張りっていったい…)

まあ：一護は進むルートが悪かった(ハードラックとダンスつまった)と言うべきか。

ノイトラ(inアローニール)と戦い、グリムジョーと戦い、更にウルキオラとも戦闘した。途中で卯ノ花隊長に遭遇し傷を癒されたにも関わらず1桁十刃との3連戦だ。そりゃキツイだろう(最後の戦闘では半分負けたようなものだし)

静かに肩を落とす一護をよそに、統率係の探查回路は次々と虚圏内のピカロを映し出していく。

「……目標捕捉」

差し出された画面は霧が掛かっており、殆ど何も見えないが…

「なんだコレ、映像悪いのか?」

「極わずかですがこの霧の中に死神の霊圧を2つ感知しました。

近くに居るのは…《強襲係》インクルシオーネですか。」

「いんくるしおーね?何ダスカそれ?」

「私達わたしの一員、突撃と強襲に特化した個体です。顔の良く似た双子ですよ」

「顔の良く似た双子お…うえッ!?それってばもしかしてえ…」

「なんだネル、知り合いか?」

「知り合いなんで生易しいモンじゃねえッス!

その双子つつたらちよくちよく虚夜宮の外までやって来てネルた

つにちよつかいかけてくるヤカラだあ。バワバワが何回穴だらけにされたか！

ネルはドMだから問題ねえけどペツシエやドンドチャツカまで巻き込んでドンパチするのは勘弁して欲しいっスー！」

「実力はあるのですが…融通の利かない個体でして。私達の中でも結構な問題児なのです、ええ」

ぶんすか怒るネルと呆れたように溜息を吐く統率係。最早ネルがドMな事には誰も突っ込まなかった。多分ツツコンだら負けだ。

と、思っていたら、突然アラート音が画面から鳴り始めた。

「わっ、ビックリした…」

「…？虚夜宮内で飛翔体？着弾予測地点は…ああ、不味いですね。

《強襲係》、聞こえますか？」

『なんだい、《統率係》。』

ボクたちは今お嬢様とお客様を交えてお茶会してるんだ、邪魔しないですよ。

ねえ、姉様？』

『そうだわそうだわ。』

この人の話、すっごく面白いの。

特に前任を決闘で鬨り殺したくだりなんて最高だったわ。

そうよね兄様。』

統率係の仮面がマイクのような役割を果たしているのか、気取った口調で幼い男女の声が一護達の耳にも届く。不穏な単語も言葉の端々に混じってはいるが…

「お互いを兄姉って呼んでるのか？」という一護の疑問は無視された。「数秒後にそこへ正体不明の飛翔体が着弾します。霧が掛かっているという事は傍にお嬢様が居ますね？大至急お嬢様を爆心地より遠ざけなさい。」

万が一彼女のお身体に障った場合、お義母さまに叱られますよ」

『それはとっても困るね（わ）！』』

『あ、あれ？2人ともどうして私を担ぐんですかあ？』

あゝれえ〜〜！？』

通信越しでもなんとなく、2人が「お嬢様」を抱えて走り去る姿が想像できた。

「いやちよつとまって！そこに居た2人の死神はどうなるんだよ。取り残されたままだろ!？」

「知りません」

「扱い雑ウ!？」

一護が叫ぶも統率係は何処吹く風。そうこう言っているうちに空の一角が青白く輝き、一筋の光が霧の中へと吸い込まれた後大爆発を巻き起こした。

「ああああ死神いいい!？」

映像越しにも関わらず思わず画面に向かって手を伸ばしてしまう一護。この男随分ノリが良くなった、織姫と会えて緊張が解けたのだろうか。

もうもうと巻き起こる砂煙。それが晴れ、中から現れた人影は常人の倍ほど大きく、ウニのようにとんがった髪型、特徴的な眼帯…

「って剣八かよオオオオオオツ!？」

銀〇みたいなノリで一護が叫んだ。

一体、画面の向こうで何が起こっているのだろうか？

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

たのしい

たのしい

タノシイ

むくろのうみのそこのそこ

ひかりもとどかぬはてのはて

きらきらと らんらんと

ならくにかがやくほしひとつ

そらもかげもまたにかけ

わたしのおみあし どこまでも

だんすほーるのまんなかで

こわれたおもちゃのてをとって

わたしがリーどしてあげる

さあ

ゆかい　　に　　すてき　　に

おどりましたよ？

~~~~~:~:~♪

「.:~:~」

崩壊寸前の街並みの中、始祖と相對する重國は首を傾げた。

先程殴り飛ばした、並の虚なら一撃で欠片も残さず粉碎する己の拳を受けなおも平然としている始祖の骸は今、彼の目の前で俯き、反撃してくる様子もない。

まるで酔っ払いのようにふらふらと身体を揺らし、時折掌を握ったり開いたりを繰り返す。

そして耳を澄ますと聞こえてくる、一定の感覚でリズムを取るような彼女の声。

どれも戦場において明らかに異常、大前田なら余所見するなり大口叩いて相手を煽るなり油断する所であるが今彼女と相對しているのは死神の頂点に立つ男、山本元柳斎重國だ。そんな心配は無いだろう。

それが彼の命運を分けた。

たあ

一瞬の煌めき、反射で背を思い切り反り返らせる。

音が後からやって来て、重國は反動で舞い上がった自慢の顎髭が顎下5センチ程まで消失している事に気付き年甲斐もなく小さな舌打ちを吐いた。

某映画のワンシーンの様なエビ反り体勢のまま今しがた後ろに飛んで行った「何か」の痕跡を辿る。重國の背後に佇む一軒家には向こう側まで抜けた「穴」がぽっかりと空いていた。

落ちた瓦礫の痕跡はどこにも無い。斬られた訳でも、挟まれた訳でもない、文字通り消えて無くなった。

(防ぐのは悪手ッ!!)

そう直感した重國はバネのように身体をしならせ、老齡とはとても思えぬ柔軟な体捌きにて続けざまに飛来する「何か」を紙一重で避け続ける。

いつの間にか主武装だったハルバードは突き刺し地面に固定して、彼女の周りに漂うのは身の丈程もある巨大な大剣のような黒い塊。嘗て虚圏最硬度を誇るノイトラを一方的に葬った絶死の極剣。

《ガルガ極星凶剣》

始祖の周囲に漂う固定化された虚閃が形を歪め形成された、ありとあらゆる物体を物理法則を無視して貫通、重なった部分を強制的に押しつけて暗黒空間に吹き飛ばすという狂気の代物だ。

一本でも掠れば致命傷、空気抵抗など当たり前のように無視して音速を超える速度で迫る死の塊に対し初見でその危険性を見抜いた重國は防御を捨て、全身を駆使し回避に専念する。

その最中一瞬だけ、顔を上げた始祖の骸と目が合った。

ぞつとするほど美しく、魂すら捕らえ優しく貶めるような奈落の瞳と目が合った。

肌が粟立つ、筋肉が萎縮し呼吸すら億劫になる程の狂気に吞まられ、危機を感じ直ぐに視線を切る重國。

完全に目を付けられた、彼はそう確信した。

途端、可視出来るほどの霊圧が黒い波動の柱となって始祖の骸から吹き上がる。部下の安否も一瞬間をよぎったが、そんな心配をずっと続けられるほど脳のリソースを回せない。音速を優に超える速度で飛来する凶剣はびったりと重國を狙い撃ち、マシンガンも真つ青の連射速度で今も建物を消し飛ばしているのだから。

白打の極限に至った重國の歩法でなければ今頃跡形もなく消失していた事だろう。

彼の通った後には文字通りなにも無くなり、時折曲射、偏差射撃まで織り交ぜた凶剣の雨あられが絶え間なく降り注ぐ。射線上の街並みはあつという間に瓦礫の山と化し、残った瓦礫もまた往復射撃で暗黒空間へボツシュートされていく。

どんだん更地になる空座の街を尻目に死と隣り合わせの回避劇を繰り広げる重國の頭は澄み切っていた。

(射撃の間隔は短いがある。如何に疾くとも両の手で剣を射出する以上隙が生じるハズじやろう。)

あつ

つるり

間抜けな眩きと共にジェーンが極星凶剣を取り落とした。

この始祖、ノイトラの時からまるで成長していない。

その一瞬で足裏へ力を込めた重國は一足飛びに始祖の胸元へと跳躍し、全霊の一撃を放つ。

「《双骨》…ッ!!」

先程の一骨の強化版、両の拳で放つ山すら粉微塵に砕くそれは始祖の土手っ腹に直撃した。

「……ふっはー!」

「なんとという強度ッ…!」

だというのに、吹き飛ぶ素振りすらないどころか笑い声すら上げる



始祖、まるで何ともある鋼鉄の塊を思い切り…いやそれ以上の強度を持つナニかをぶん殴った気分だ。

殴ったこちらの腕に重い痛みが走るとは。

駆け抜ける空気の波紋が地面すら抉るなか、振動と衝撃で内と外から爆砕させる双骨を受けても尚よろけもしない鋼皮の頑強さに思わず驚嘆する。

だが手応えは確かに有った、そう捉えた刹那さつきまで周囲に点在していた星の大剣が宙に浮いたまま動きを止めて、またガクガクと小刻みに震えているのを目撃する。

『極星憤刃』<sup>ギリガロア</sup>

惚けた顔の始祖の呟きと共に全ての大剣が弾け、細かな欠片となってふわふわと漂うさまを重國は悠長に眺める暇などない。

これは次の攻撃の前兆だ。

太陽光すら反射しないほど深い闇の奥にキラキラと輝く星が見えるような、一枚一枚が星屑を思わせる剣の破片が猛烈なスピードで始祖の周りを乱れ飛ぶ。

例えるならば六番隊隊長、朽木白哉の操る斬魄刀『千本桜』の正解に近いだろうか。桜の花弁を彷彿とさせるあの優美な斬魄刀と似て、歪に集まった破片はまるで壮大な銀河を思わせる程雄大で、危険であつた。

「ムウツ!？」

そんな欠片達が動き出すより一足早く、大きく飛び退いた重國。次いで始祖の周囲が綺麗な網目状に細切れた。周囲にかりうじて形を残していた電柱や建物の残骸がこれを受け、小さな賽の目状にカットされていく。

極星凶剣が『点』を射貫く技なら極星憤刃は『線』を刻む技。

大きく跳躍し着地した重國はそこで初めて自らの左脚が切り裂かれ、負傷している事に気づく。幸運にも傷は浅く筋は無事で戦闘に支障はない。

「見えなんだか…」

死神最強と謳われたあの重國ですら目で負えぬ速度、彼女こそ理を

超えた存在なのだと改めて悟り、そして悔いる。

思考を止めればそこで終わりだと。

重國が離れた事で動きを止めた『極星憤刃』は始祖の上空に位置しはるか上に漂う殺意の天の川から綺羅星の如く赤と黒の光が溢れ出す。

「グラァーガロァ極星嘆弩》：ツ♡」

身震いと共に自分を抱き、恍惚の表情を浮かべる始祖はそう呟いた。

『雨』

真つ先に重國の脳裏に浮かび上がった単語だ。

仮初の宇宙から飛来する数千、数万、ともすれば数億もの暗い輝き、空を覆い尽くすあの光一つ一つが黒虚閃である、細いながらも一本一本が馬鹿げた出力を持つ破壊の塊に始祖の狂喜が感じ取れた。

諸君等は雨を避ける事は可能だろうか？

答えは否。どれだけ速く動こうと、どれだけ巧みな剣技を持っていようと、如何なる死神隊士問わず、たとえ隊長でさえ必ず一雫は雨に濡れるものだ。

なおこの状況下では濡れる＝死、であるとする。有り体に言うとかソゲーだ。やってられるか、と匙を投げるだろう。

そう、並の死神ならば。

すらりと、徐に重國は腰の得物を抜いた。

「万象一切灰燼と為せ」

流刃若火

死の雨で周囲が穴ぼこだらけになる中、一箇所だけ無事な地面がある。太陽の如き炎を纏う太刀が目に見えぬほどの速度で立ち回り、降り注ぐ虚閃をたたき落としている。

重國がその巧みな剣技でもって自身に降り掛かる虚閃のみを切り伏せているからだ。

幸運な事にこの虚閃には先の凶剣のようなインチキ効果は付与されていらないようで、物理的に対処が可能らしい。それでも並の魂魄なら消滅必至、隊長格でも一筋一筋が致命傷になり得るほどの濃密な虚閃なのだが…

（極限まで霊圧を込め、流刃若火に乗せてもまだ完全に焼き切れぬとはッ!!）

みるみるうちに地面が消えていく、これで現世には何のダメージもないのだから結界を拵えた涅マユリの技術力には重國も感嘆を禁じ得ない。

それ以上にトラブルメーカーだから差し引きゼロなのだが。

絶え間ない雨を捌く腕は止めない、その隙間を縫うように流刃若火の鋒を後ろへやった重國は刀身より吹き出した焰の勢いと歩法を掛け合わせ、ジェット噴射の要領で稲妻の如くジェーンへ肉薄する。

「…撫切」

《火々大焼》  
かかたいしょう

始解状態で至近距離から放つ爆炎の一刀、刀身に纏う焰が勢いと共にジェーンの身体を袈裟懸けにしようと振り下ろされる。

鋼皮でそれを受け止めたジェーンの腕には僅かに切れた様な跡が。

「あつはははあ!!」

叫んだジェーンが両手を広げ重國へ掴みかかるが、瞬歩によって一瞬で距離を置く。

強度ではとても敵わないが速さでは圧倒的に重國が上だ。

「始解状態でもその程度か、こりゃ骨が折れるのう」

並の虚なら灰も残らない、十刃でも一部の強者を除き全焼してしまうであろう火力を真正面から受け止めても、始祖の鋼皮にはペーパー

ナイフ以下の斬れ味しか影響を及ぼさない。

だが確実に傷は負わせた、その事実は重國の脳裏に勝機を抱かせた。

「はて、お前さんを燼滅せしめるには幾太刀打ち込めばよいか…」

「その火力じゃ無理なんじゃないかなあ〜?」

急な返答に噎れた眉を顰める。

戦闘開始後、ここに来て初めて重國と始祖の会話が成立した。

「あ〜〜いぜ〜〜んく〜〜ん!!!」

突如として偽物の空座町に響き渡る大声。

始祖の骸が放つ、元気いっぱいで緊張感のない呼び掛けに思わず他の戦闘も全て止まってしまっていた。

「ふふ、何かなジェーン」

平子との戦闘中にも関わらずいつもの調子で、どこか愉快そうに応える藍染が返事したのを知ってか知らずか、ジェーンはその声量のまま言葉を続けた。

「本気、出すわ!」

ばちこーん☆と星が出んばかりの軽快なウインクにさしもの藍染も目を丸くした後、その明晰な頭脳を如何なく発揮し意図を察した彼

は斬魄刀の柄に手をかけて、密かに彼女の友人たちへお節介を掛ける。

その他、呆ける者共が言葉の意味を理解するより先に、ジエーンガルガンタの横に広がる黒腔。

そこから取り出すのは黒と金に彩られた彼女の斬魄刀ハルバード。

瞬間、何かを察した重國は炎と共に斬り掛かる。

空座決戦が始まった当初より撒いていた《炎熱地獄》。

護廷十三隊諸共に宿敵藍染惣右介を焼き殺す為準備しておいた秘策を急遽寄せ集め、その極熱をひとつに束ねた一撃は受け止めたハルバードごと真つ二つに焼き斬る……ことはなく。

尸魂界最強の死神による炎熱系最強たる斬魄刀によって放たれた渾身の一撃を片腕で受け止めた始祖の骸は、煮溶けて真つ赤になったコンクリートの海で尚も笑い続けていた。

「ぬうううッ!!」

「何を焦っているのかなあ〜？」

もしかして、私が何しようとしてるのか分かつちやった？」

「焦るとも……！」

成れば必然、隊士ともどもこの仮初の街は瞬時に崩れ去るとな！」

「部下想いなおじいちゃん、ステキだね！」

ぶつちやけ私も2回目だから、何が起こるかわかんないや！」

でもお…藍染くんはきつとこうなるって狙ってるだろうし、今やりたいのはコレだから。

藍染くんの計画がご破算になったとしても、この脆い偽物の街が消し飛んで現世が滅茶苦茶になっても、スターク達もろとも君達が死のうとなんだらうと！」

ヤつたらきつときつと、超気持ちいいよねえ♡

蕩けている、狂っている、酔い痴れている。

生まれて初めての斬つた叩つたに高揚しこの始祖は、このとき一切の我慢と忍耐を捨てていた。

鏢迫り合いの後、押し返され距離を取らざるを得なくなった重國に追撃とばかりに宙から黒虚閃の砲撃を浴びせかける。

それら全てを紙一重で躲し、捌き、受け切った重國へひとつ。

仮初の宙に拡がる絶望の天の川からひとときわキラリと光る一筋の煌めきが目に留まった。

それはみるみるうちに距離を詰め、大気圏突入と共に摩擦熱で更に眩く輝きを増す。

それを目撃した意識のある護廷十三隊も、生き残った仮面の軍勢ヴァアイザードも、破面でさえ瞠目した空を見上げていた。

地球の重力に導かれ自由落下する

質量約10万t、直径70m程の極小惑星

それは、紛うことなき

隕石である

「頑張ったおじいちゃんにプ・レ・ゼ・ン・ト♡」

眼前に迫る巨大隕石。

当たれば即死、避けられる訳もなく即死、仮に避けても地表に直撃するだけで偽物の町を守る支柱は全壊し本物が剥き出しになった直後に衝撃で辺り一帯は更地と化すだろう。

もちろん、死神、虚問わず大量に死ぬ。死に絶える。

太古の支配者であった恐竜を屠ったのと同じ要領で、空座の人と町は地図から跡形もなく消滅する。

もはや戦っている余裕などどこにもなかった。

現実には頭が追いつかず棒立ちする者達を捨ておき、いの一番に飛び出した重國にもはや躊躇など存在しない。

「呆けるな阿呆共ッ！

支柱を死守せよッ!!」

一喝したのち炎を纏い飛び上がるその姿、昇り龍のよう。

被害の規模を予想し、一刻の猶予もないと判断した彼の決断は早

い。  
己の自罰など此度の戦いにおいて勘定に入れる余裕など無くなつた。

「卍解」

《残火の太刀 東》

業火を纏っていた筈の重國の刃から一切の炎が消え、鋒が<sup>けぶ</sup>煙るだけの焦げ付いた太刀だけが残る。

落下地点の軌道上に辿り着き、上段の構えをとる。

「剣は両手で振った方が強い」と嘗て何度も剣術指南で門下生達に叩き込んだ、身体が覚えている作法で焦げた刀を振り下ろせばその鋒が隕石と触れ合った時、一瞬だけ火花が弾け。

巨大な落下物は縦に分かたれた。

『旭日刃』

残火の太刀、奥義のひとつにして鋒にのみ炎を集約させ触れたものを跡形もなく消し飛ばす焦熱の刃。

いや本来なら消し飛ばすはずなのだが、超質量かつ驚異的な速度を誇る隕石を完全に消滅させるには些か火力に不足した。

悟った重國の対応はまさに電光石火の如く。

猿叫と共に2つに裂けた隕石へと躍りかかる、続けざまに走る僅かな火花と共に瞬く間に細切れにされていく隕石は殆どの形を留めなくなつた所で一万五千度の熱波に焼き尽くされた。

残火の太刀 西

『残日獄衣』

重國の体表より吹き出す超高密度の霊圧は炎となり、一千五百万度もの焦熱で近づくもの全てを焼き殺す太陽の如き鎧。

長時間使用すれば現世、尸魂界問わず致命的なダメージを与える事になるこの技を隕石の内側、遙か上空で炸裂させることで被害を最小

限に留めたものの、溶けた隕石の欠片が町へと降り注ぐ結果は変えられない。

地表付近にいる隊士にはたまったものじゃないが知ったことか、こちらが消し飛ぶより余程良いのだから。

だが間一髪、甚大な被害を及ぼしかねない隕石を退けた重國の胸中にあるのは喜びでも達成感でもない。

(間に合わぬか)

してやられた。

それは眼下に、灼熱のシャワーもものともせずはこちらを笑顔で見上げる女。

奈落の瞳を爛々と輝かせ、心底面白くて堪らないと言わんばかりの表情で重國と視線を交わす。

これがかの大悪、藍染惣右介であるなら二の句を告げず殺しにかかろう。

だがかの始祖の骸はあまりにも未知が過ぎ、尸魂界でも指折りの長寿であり知恵者である山本元柳斎重國をしてなお底知れぬ。

だってこいつはまだぜんぜん、これっぽっちも、僅かばかりも、その実力の一端すら垣間見せていない。

ハルバードの柄が溶けた瓦礫へ突き立てられ、溶岩の海が裂けるように丸くぽっかりと穴が空いた。

刃先の根本からたなびくように霊子の旗が翻る。

まるで此処こそ己が領域だと言わんばかりに。

今から全速力で阻止しようとしても到底間に合わないだろう。

たった一言で準備は完了してしまうのだ。

重國に出来ることはその後、己の卍解でこの結界が溶け落ちる前にどうにか勝負を付けることのみ。

その瞬間



音も、空気も、何もかもが止まる  
死神も、破面も、この戦いを影から眺める者達も、藍染惣右介です  
ら

皆すべからく、同じ感想を抱いた

まるで世界が凍ったよう

奈落の底から誘うように

宙の果てから誘うように

人差し指を艶のある唇に添えて

まるで恋人の耳元で愛を言祝ぐかのような

優しく、甘く、囁くようなたった一言は焦熱と瓦礫佇む地獄の中で

どんなに大きく爆ぜる焰よりもよく響いた

完璧で究極なカノジヨの真名解放

「――阻め」

《オストガロア  
白骸妖星》